

# 箭弓稻荷神社社殿に関する建築史的研究

Architectural-historical study on the main building of the Yakyu Inari Shrine

横浜国立大学 都市イノベーション学府

建築史・建築芸術研究室

11WA005 横山晋一



# 目 次

目次	1
序説	3
<b>第一部 箭弓稲荷神社社殿の建築史研究</b>	<b>9</b>
<b>第1章 研究背景と目的</b>	<b>10</b>
<b>第2章 箭弓稲荷神社社殿の史料研究</b>	<b>15</b>
1. 箭弓稲荷神社社殿の現状	15
1-1. 箭弓稲荷神社が位置する東松山市	15
1-2. 稲荷社の創始と稲荷信仰	17
1-3. 箭弓稲荷神社社殿の略歴と社殿概要	18
2. 箭弓稲荷神社社殿の史資料調査	31
2-1. 松山やきう稲荷の図	31
2-2. 川越松山巡覧誌	33
2-3. 白川家門人帳	36
2-4. 箭弓稲荷神社造替基本設計図	37
2-5. 上棟遷宮棟札	38
2-6. 口上狂言箭弓稲荷	41
2-7. 幣殿神饌所・祭器庫出入口板戸に残る墨書	42
2-8. 箭弓稲荷日護摩由来	43
2-9. 箭弓稲荷大明神略縁起	46
2-10. 箭弓神社再建普請諸入用帳	49
2-11. 拝殿屋根改修棟札	53
2-12. 明治23年境内絵図	55
2-13. 箭弓神社銅瓦寄附金連名簿	56
2-14. 明治29年境内絵図（箭弓神社郷社昇格祝）	58
2-15. 明治34年県立川越高等学校記念写真	59
2-16. 大正12年縣社昇格申請公文書	60
2-17. 近世の近江商人と箭弓稲荷神社との関係性	61
3. 史料研究小結	64
<b>第3章 箭弓稲荷神社社殿の建築実態調査</b>	<b>65</b>
1. 社殿屋根復原調査	65
2. 拝殿内部復原調査	69
3. 社殿構成部材に残される墨書調査	72
4. 社殿床下の発掘調査	75
5. 建築実態研究小結	79
<b>第4章 権現造形式社殿の建築様式調査</b>	<b>80</b>
1. 権現造の系譜考察	80

2.	権現造社殿の建築規模比較検討	87
2-1.	本殿間口寸法に対する幣殿・拝殿の間口寸法比較	88
2-2.	本殿奥行寸法に対する幣殿・拝殿の奥行寸法比較	89
2-3.	本殿・幣殿・拝殿の間口に対する奥行寸法比較	90
2-4.	本殿床面積に対する幣殿・拝殿床面積比較	91
2-5.	平面的検討小結	92
2-6.	本殿棟高寸法に対する幣殿・拝殿の棟高寸法比較	93
2-7.	箭弓稲荷神社社殿棟高寸法に対する各社殿棟高寸法比較	94
2-8.	箭弓稲荷神社本殿棟高寸法に対する各社殿棟高寸法比較	95
2-9.	立面的検討小結	96
3.	建築彫刻の考察	97
3-1.	上州彫物師集団の系譜考察	99
3-2.	社殿外装彫刻指標の検討	101
4.	外装彫刻指標検討小結	115
第5章	第一部箭弓稲荷神社社殿の建築史研究のまとめ	117
第二部	箭弓稲荷神社社殿の瓦屋根修理に関する技術史的な研究	119
第1章	研究背景と目的	120
第2章	瓦粘土原料定量分析による着想	122
1.	瓦の伝来と屋根漆喰の課題	122
2.	瓦製造産地の選定と粘土原料の分析	124
3.	木節粘土の調合	128
第3章	瓦焼成に伴う燻化手法の開発	129
1.	燻化手法の検討	129
2.	瓦白地への塗布方法と配合設定	130
3.	代用瓦（白色紐付き燻し和瓦）制作小結	134
第4章	経過観察	136
第5章	第二部社殿瓦屋根修理に伴う建造物保存技術研究のまとめ	138
結論		139
	第一部・第二部のまとめと結論	140
	参考文献一覧	144
付録資料		147
1.	箭弓稲荷神社社殿と主要社殿の形状比較検討	148
2.	権現造形式主要社殿の外装彫刻種別と配置	171
3.	権現造形式主要社殿の外装彫刻全数と配置	258
4.	箭弓稲荷神社社殿写真・図面資料	336

# 序 說

本論文は埼玉県東松山市に所在する埼玉県指定有形文化財箭弓稲荷神社社殿の保存修理を主導した際の調査研究を通じ、当該社殿の創建履歴や建築の特質を明らかにすると共に、文化財である社殿を維持継承するための新たな試みについて考究することを目的とする。

明治20年代に伊東忠太・関野貞両氏によって開始された日本建築史研究は、文献史料調査に基づく「史料研究」と建築の実態や様式を調査研究する「遺構研究」を両輪として学問体系を築いてきた。特に、文化財建造物修理は「遺構研究」における千載一遇の好機であり、そこで得られた精緻な調査研究成果は、日本建築史の学問体系構築に多大の貢献をしてきた。このなかで古代建築の形式や技法を解明する糸口となったのが、昭和9年(1934)から始まった法隆寺国宝保存工事であった。解体修理に伴う建築実態調査によって浅野清氏は古代建築の形式や技法を解明され、その成果は法隆寺国宝保存修理工事報告書や昭和修理を通じて見た法隆寺建築の研究<sup>注1</sup>などの研究図書を通じて、成果が社会に還元された。また、この他にも大岡實氏の南都七大寺の研究<sup>注2</sup>、岡田英男氏の日本建築の構造と技法<sup>注3</sup>、大森健二氏の社寺建築の技法(中世を主とした歴史・技法・意匠)<sup>注4</sup>など、遺構研究によって解明された成果は多数存在する。このように、現場の第一線で行われる建築実態調査は日本建築史の学問体系構築にとっていかに重要であることを示しているが、それを記録する文化財建造物修理工事報告書の刊行は大きな意味を持っている。この刊行に多大なる尽力を行ったのが大岡實氏である。元々、昭和初期までの文化財建造物修理は直接的な建造物の維持継承を第一義としていたため、解体修理の際に判明する新たな知見や次の修理機会のために役立つ記録作成は殆ど行われていなかった。この改善に大岡實氏は乗り出し、ついに昭和10年(1935)から実施される建造物保存修理工事からは、修理工事報告書の刊行が原則的に義務付けられ、その結果、今日の成果をもたらす基盤が構築されていった。

一方、文化財建造物を将来に渡って維持継承するためには、破損部の手当だけではなく、史料研究と遺構研究で得た成果を基に復原年代を決定し、工事を実施する必要がある。その際の修理技術は伝統技法の踏襲を基本とし、現代技術の利点も参照しながら「文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすか」を考究することが重要である。文化財建造物修理は指定される現状形式での修理を基本方針とするが、修理期間中に実施される史料研究や遺構研究によって、創建や現建物の建立に至る経緯、また、当初形式や改修変遷などの全貌、或いはその断片的な範囲が解明されることになる。これらの根拠が学術的視点からも総合的に明らかと判断された場合に限り、審議を経て現状を変更し、復元的整備を実施することが可能となる。しかし、当初形式が変更され、現状形式に至る過程には何かしらの問題がそこに内在することも多く、伝統技法の踏襲だけでは安全上の課題や加速的な劣化進行の課題などに対応できないことも多い。このため、伝統技法の踏襲を第一義としながらも、特に安全上の問題では現行基準に満たない構造耐力の改善を図るために、文化財指定される内外観の様相を著しく変更しない手法を検討のうえ、耐震補強が現代技術を駆使して行われている。ただ、このことは個々の文化財建造物によって課題や条件が

---

注1 (浅野清「昭和修理を通じて見た法隆寺建築の研究」1983年)

注2 (大岡實「南都七大寺の研究」1966年)

注3 (岡田英男「日本建築の構造と技法」2007年)

注4 (大森健二「社寺建築の技術(中世を主とした歴史・技法・意匠)」1998年)

異なるため、状況によっては仮設的位置付けで構造補強付加物を露として建物に取付け、建築技術革新が成される将来まで期間限定で現状を変更するケースもある。いずれにしても建築実態調査を通じて建物の最新状況を把握し、建物所有者を中心とした関係者の合意のもとに、最適な修理手法を導くことが肝要である。すなわち、このプロセスが「文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすか」という文化財建造物保存修理の永久課題に対して、それぞれに合致した答えを導く手立てとなり、それが結果的に文化財建造物保存技術研究の蓄積にもなってくる。

今回、調査研究の対象とした箭弓稲荷神社社殿は、江戸時代後期に建立された比較的規模が大きい権現造形式の社殿である。本殿・幣殿・拝殿を大屋根で連結するこの複合社殿形式が本格的に採用され始めるのは、近世初頭の慶長期からとなるが、豪華絢爛な寛永度の日光東照宮社殿を嚆矢に、見る者に強い印象を与える建築形式と言える。福山敏男氏は史料研究を通じて、北野天満宮に見られる権現造形式が平安時代の天徳期まで遡る可能性を明らかとされ、この形態が古式な神社建築様式であることが判明した。しかし、それ以後はこの形式は殆ど採用されておらず、これが開花するのは600年以上経った近世に入ってからのことである。権現造形式の社殿は祭祀を執り行ううえでの利便性や多様な展開を可能とする意匠性からも、その完成度は極めて高く合理的である。箭弓稲荷神社社殿が何故、前社殿の形式を踏襲せずに権現造形式の社殿で造替を成したかは詳らかではないが、近世神社建築の最も著しい特色となった権現造形式の社殿検討が必要である。

さらに、同じく近世に完成形に到達する建物装飾彫刻についても検討が必要となる。建物を装飾する手法は古代建築から見受けられるが、彫刻・金具・漆塗装・彩色塗装・染色がそれに該当する。このうち、中世の終りから近世に掛けて飛躍的な発展を遂げたのが彫刻であり、立体的で実物を思わせる技法を修練の末に編出し、見る者を圧倒させると共に彫刻を通してメッセージを送っている。その彫刻も江戸時代初期と中期以降ではモチーフに変化が生じ、初期は菊や牡丹、霊獣や霊鳥など守護獣と武家好みの内容となり、これが均一的な基準に基づいて配置されている。それが中期以降では中国故事の名場面や唐子たちが遊ぶ様など、一般庶民を対象とした宗教思想や大衆受けする直截的なモチーフが加わる傾向が見られる。また、彫刻配置は一定基準を踏襲しながらも、左右相称を強く意識しない自由な形態に移り変わっている。すなわち、彫刻大工が奥絵師の管理下から外れ、表現の自由が行使できる立場となったことを表すが、この系統立てた検討も必要である。

また、調査研究と併行して行う文化財建造物保存技術研究では、社殿の現状修理に伴う新たな試みとなる代用瓦制作を行うため、これを試行するに当たっての成果と課題を明らかとし、一つの仮設的な手法として保存技術の蓄積に加える検討も必要となる。

以上の視点により、本論文は史料研究・遺構研究・文化財建造物保存技術研究を統合した研究内容とし、二部構成での編集とする。

第一部では史料研究と遺構研究から、社殿造替に至る背景や建立に関する経緯、および現社殿の当初形式・改修変遷を解明することによって、建築史研究の成果を論じる。

第二部では建造物保存の視点から社殿屋根改修履歴に注目し、外観と耐久性の観点から検討・試行した代用瓦の開発経緯に関して、その成果と課題を論じる。

そして結論では、全体を通して当研究で明らかとなった諸事項を纏めるものとするが、

---

以下に第一部・第二部の研究目的とその成果に関する要旨を列記しておきたい。

#### 第一部：箭弓稲荷神社社殿の建築史研究

第1章「研究背景と目的」では、まず箭弓稲荷神社の課題にふれる。すなわち、創建が8世紀初頭に遡る古社ながら、これまで本格的な建築史研究は実施されていなかった。しかし、創建千三百年記念事業において社殿の大規模修理を行うに当たり、社殿建築に関する根本的かつ精緻な調査研究が企画された。そのため、文化財建造物修理技術者の経験を持ち、地元で日本建築史研究者として活動する筆者が、修理と調査研究を主導することになり、平成25年(2013)5月から着手した。現社殿は、箭弓稲荷参詣が盛行した19世紀前半(文政～天保年間)にかけて造替されたと考えられているが、詳細な社殿造営史は不明であった。また、社殿の建築形式は本殿・幣殿・拝殿が連結した権現造形式で、この起源は天徳4年(960)の北野天満宮が初見と推測され、本格的にこの形式が開花するのは近世初頭の慶長期からとされる。しかし、箭弓稲荷神社社殿の形式が創建時にどのような形式を持ち、どのような経緯で現在にいたったのかは明らかにされていない。さらに、社殿は規模の大きさと優れた建築彫刻がよく知られているが、その特徴が全国的な権現造形式の中でどのような位置付けかの把握もされていない。

本論第一部では上記諸点の解明を目的とし、新たな史料調査方法の検討、修理機会における徹底的な建築実態調査、権現造形式の類例調査を統合して研究を進める。

第2章「箭弓稲荷神社社殿の史料研究」では、まず社殿造営史を探るための重要な手掛かりとなる史料収集を行い、それに年代別整理と解説を加え、以下に示す変遷を明らかとした。①「川越松山巡覧図誌」の発見より、造替事業着工は文化15年(1818)から文政元年初頭頃であったと推測される。②歌舞伎興行用浮世絵「口上狂言箭弓稲荷」の発見と「本殿上棟棟札」から、上棟・遷宮之儀が天保6年(1835)8月21日に行われ、翌年3月には御開帳が催されたことが判った。③「箭弓稲荷日護摩由来」の発見より、天保11年(1840)9月に現社殿が完成したことが明らかとなった。④「箭弓稲荷社再建普請諸入用帳」の発見より、天保14年(1843)10月に附帯工事を含む全造替事業完了が明らかとなった。⑤「屋根改修棟札」の発見より、安政5年(1858)4月に拝殿・幣殿屋根が現在の棧瓦葺へ改修されたことが判った。⑥「箭弓神社銅瓦寄附金連名簿」〔明治25年(1892)10月〕・「箭弓神社郷社昇格祝図」〔明治29年(1896)10月〕の発見より、本殿屋根も明治29年(1896)3月頃に現在の銅瓦型葺屋根へ改修されたことが判った。

第3章「箭弓稲荷神社社殿の建築実態調査」では、屋根解体修理に伴う実態調査により、以下を明らかとした。①本殿小屋裏などから発見された屋根古材より、創建当初の社殿屋根は「柿葺」であったことが明らかとなった。②拝殿および幣殿化粧裏板上の竹釘痕跡より、当初の屋根軒先形式は柿平葺板を積層する「檜皮葺様式」であったことが判った。この稀少な施工方法は、大山祇神社本殿(南丹市)にその類例が見られる。③昭和32年(1957)11月の拝殿内部改修で、内拝と外拝に二分した室内空間を一室に統合したことが判明した。

第4章「権現造形式社殿の建築様式調査」では、稲垣栄三氏の既往研究でも示唆される幣殿の平面形状変化など、権現造形式の形状検討や外装彫刻の種別検討を行い、以下を明らかとした。①平面形状変化は幣殿に見られ、慶長13年(1636)建立の六所神社社殿(岡崎市)を境に、間口より奥行寸法が延びる傾向が確認された。②立面形状変化も幣殿に見ら

れ、同じく六所神社社殿を境に、幣殿棟高が拝殿より下がる傾向が確認された。③江戸初期の外装彫刻は武家好みの菊や牡丹などの草花類、龍や唐獅子などの守護獣を中心としたが、中期以降は宗教思想や大衆受けする直截的な彫刻が加わる傾向が確認された。④箭弓稲荷神社社殿は何れの傾向にも符号することが明らかとなった。

## 第二部：社殿瓦屋根修理に伴う建造物保存技術研究

第1章「研究背景と目的」では、「文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすか」という課題に対して、箭弓稲荷神社社殿の場合は、屋根葺材の復原可否議論があった。すなわち、遺構研究で判明した稀少な軒付形式を持つ柿葺屋根へ復原するか、瓦屋根修理による現状維持かである。

我国の文化財建造物修理は、現状を変更することに厳しい制限を加えているが、調査研究によって本来の形式が判明した場合は、復元的修理を行うことを認めている。その復原形式を示すことが、学術的価値を社会に還元できるからである。箭弓稲荷神社社殿が柿葺であった期間は安政大地震の影響もあるが、20年足らずと短く、瓦葺時代の方が長い。この理由は防火対策や屋根の長寿命化と推測される。今回は屋根改修の経緯、当面の維持管理、耐震補強によって現状の瓦屋根維持が可能であったことなどを考慮し、所有者は屋根復原整備を将来的な課題に留め、現状修理の方針を採択した。ただし、現状の安政瓦は焼きが甘く、特に棟積み目地を覆う屋根漆喰は脆弱で、従前の瓦と伝統技法の継承は、耐久性に大きな問題があった。そのため、箭弓稲荷神社社殿の修理においては、外観と耐久性に適した代用瓦開発を試行するに至った。

第2章「瓦粘土原料の定量分析による着想」では、屋根瓦調達先となった三州瓦（高浜市）で使用される配合粘土と木節粘土の定量分析調査を行い、以下を明らかとした。①瓦表面塗布用の木節粘土は瓦素地となる配合粘土と同様、二酸化ケイ素・酸化アルミニウムが主たる含有物質となるが、配合粘土とは異なり、次ぐ酸化鉄（1.01%）と酸化チタン（0.92%）の比率が低いことで、酸化焼成・還元焼成共に白色に粗近い発色結果が得られた。②木節粘土（90%）を母材とし、チタン（4%）・マンガン（1%）・硝子粉（5%）を配合した改良粘土を紐部に塗布することで、漆喰に近似した白色誘発を可能とした。

第3章「瓦焼成に伴う燻化手法の開発」では、燻し瓦の焼成方法を検討するための実験を行い、以下を明らかとした。①容積9 m<sup>3</sup>の単窯ではガス総流量は凡そ7.5 m<sup>3</sup>/hを必要とするが、今回は0.35 m<sup>3</sup>/hが最適であることが確認された。②焼成温度を900度まで加熱冷却した直後の燻化は一般的に40分ほどの時間を要するが、今回は5分30秒が最適であることが確認された。以上の焼成手法により、紐部を白色とする代用瓦開発を可能とした。

第4章「経過観察」では、竣工2年目点検により、代用瓦の色具合などに異変が生じていないことを確認した。これにて、耐久面に問題が無いことを証明できたが、今回の事例はあくまで目地漆喰瓦の代用法を試行したものであり、同様な手法の採用に当たっては、対象物件における保存継承に対する十分な検討が必要である。このため、この代用瓦が全て目地漆喰に取って代わるのではなく、第一義は伝統技法の踏襲がこの前提に存在しなければならない。そのうえで技術的検討を重ね、オーセンティシティの側面からも議論を深めて、個々の文化財建造物にとって最適な修理手法を選択すべきが確認された。

---



## 第一部 箭弓稻荷神社社殿の建築史研究

## 第1章 研究背景と目的

埼玉県の粗中央部に位置する東松山市は古代からの歴史遺産の宝庫<sup>注5</sup>でもあるが、和銅5年（712）の創建と伝えられる県内屈指の古社、「箭弓稲荷神社」もこの地に所在する。江戸期には川越熊谷道・秩父道・日光道並びに三本の脇街道が整備されたことで物資や人々の往来も盛んとなり、松山町は宿場町としての整備も成された。このような環境においてこの地の総鎮守とも言える箭弓稲荷神社は、招福除災の神として土着の民など多くの人々に崇められてきた。

社記によれば、「長元元年（1028）に下総国千葉城主であった平忠常が謀反を起こし、瞬く間に安房・上総・下総の三か国を制圧し、大軍で武蔵国まで押し寄せてきた。朝廷は清和源氏棟梁多田満仲の三男で甲斐国主であった源頼信に忠常追討を命じ、頼信は出陣して当地「野久が原」に本陣を張ったとされる。その際、本陣近くにある古い祠を見つけ、この地に古くから鎮座する『野久稲荷大明神』であることを知った。頼信は、野久は即ち箭弓（弓矢）を指すもの、つまりそれは武門の守護神であるものと解釈し、戦勝祈願と共に太刀一振・駿馬一頭を奉納し、一晚中祈願したと言う。次の日の明け方、白雲にわかになり白羽の矢（箭）の如き雲が一陣の風に送られて敵方の方へ飛んだのを目の当たりとした頼信は、これこそ神のお告げと確信して敵陣に攻め込み、三日三晩に渡る激戦の末、ついに戦に勝利したのである。帰陣した頼信は早速、大明神に戦勝報告を行い、神恩に報いるために新たな社殿建立を図り、その際に『箭弓稲荷大明神』と賞賛した<sup>注6</sup>ことが社名由来と伝えられている。その後、中世・近世と歴代領主による手厚い庇護を受けてきたが、宝徳3年（1451）には川越城主太田道灌によって社殿の造替が成されている。また、文明年間（1469～1487）の祭礼は道灌によって執り行われたとされ、これより初午祭が慣例化したと伝わる。永禄6年（1563）、北条氏康の攻略によって松山城は太田家から北条家のものとなり、家臣であった上田氏が城主を務めることになったが、上田能登守朝直<sup>注7</sup>は箭弓稲荷神社を崇敬し、城の守護神に位置付けて社殿の建替えまでを行ったとの伝承がある。しかし、戦火によってその社殿は天正10年（1582）に焼失し、また、天正18年（1590）の豊臣秀吉による小田原攻めによって松山城までも落城し、その後に廃城となる運命を辿った。このように、戦国兵火による影響を多大に受けたことで箭弓稲荷神社は衰微し、再び野中の小さな祠にそのなりを潜め、近くの庵主が神前に一灯を供すのみとなったと伝わる。なお、この庵が後の別当となる天台宗寺院福聚寺であった。戦国の世が終り、徳川家が政権支配する江戸時代となったが、庵主が家康の側近でもあった喜多院第二七世住職天海大僧正との出会いに恵まれ、これによって別当寺となった福聚寺が箭弓稲荷神社の再興を果たすために尽力したが、幸いにも武蔵国入間郡・比企郡五千石を領していた旗本島田利正の社地免除など格別なる支援を受けたことによって、江戸時代初期に社殿再建を成すことが適った。

江戸時代を通して代々川越藩主の尊信厚く、特に四代藩主であった松平大和守齊典<sup>注8</sup>は

注5 都心から約50kmの位置にあり、岩殿丘陵葛袋地区からは約1500万年前の礫岩と砂岩からなる神戸層が見つかり、それよりサメの歯や貝殻などが発見される。（東松山市史編さん課「東松山市の歴史・上巻」1985年・p28）

注6 （埼玉県東松山市文化財保護委員会「東松山市の文化財（その2）」1957年・p34）

注7 扇谷上杉家の家臣でその後、北条家に仕えた武将である。（埼玉県立歴史資料館「中世武蔵人物列伝」2006年・p185）

注8 川越藩主として財政再建や異国船渡来江戸湾警備を担う。（松平大和守研究会「松平大和守家の研究」2004年・p62）

社地免租の他、親筆の献額を箭弓稻荷神社に行い、城内には分霊を祀ったとされる。箭弓稻荷神社御祭神には宇迦魂神と保食神の二柱が祀られているが、共に同一の稻荷神であり、稲作を生業とする人々の神である。近在の將軍塚古墳が備わる東松山市野本地区は肥沃な沖積平野の水田であり、八世紀頃に施行されたとされる条里制の遺構も確認されている。この地から高台に位置する野久が原に、村人たちが豊穰の神として野久稻荷大明神を祀った行為は極自然のことであったと考えられる。

新編武蔵風土記稿<sup>注9</sup>には、「享保年中ヨリ殊ニ感応者ク諸人信仰スルモノ多シ。今ノ如ク市店・旅宿前ニ並ベルハ彼頃ヨリトコナリト」と記されており、江戸時代中期以降は五穀豊穰・商売繁盛・家内安全の神として広く信仰を集めたことが判る。また、十辺舎一九(1765~1831)が著した松山稻荷御利生新話は、「舞台となる秩父郡関戸宿に住むお古舞という人物を巡る男女の愛想劇にて、最後は箭弓稻荷神社大神に救われて幸せになると言う霊験譚」であるが、この書物発刊の影響は大きく、松山稻荷詣でに更なる拍車が掛かり、江戸市中を始めとし、遠方からも多くの参詣者が詣でるようになったことを伝えている。

以上のように、社記などから創建の経緯やその後の経過は推測されるが、実際には残される史料が乏しいため、詳細な社殿造営史は不明であった。このため、本格的な建築史研究は殆ど実施されておらず、昭和59年(1984)に行われた埼玉県近世社寺建築緊急調査でも、概括的な社殿の紹介が成される程度に留められていた。

この度の創建千三百年記念事業では社殿の大規模修理を行うに当たり、社殿建築に関する根本的かつ精緻な調査研究が企画された。そのため、文化財建造物修理技術者の経験を持ち、地元で日本建築史研究者として活動する筆者が、修理と調査研究を主導することになり、平成25年(2013)5月から着手することになった。まずは社殿の建物概要を把握するため、建築実態研究として社殿の実測調査と図面制作を行い、併行して構造形式も調べて行った。この過程で社殿の外装部材の破損・腐朽が確認されると共に、拝殿と幣殿の屋根瓦が著しく破損しており、今にも落下寸前の状態にあることが確認された。この現状を関係者と協議し、今回の大規模修理は屋根替えと耐震補強を主とした現状維持の修理方針とすることが確認された。文化財建造物保存の先達でもある浅野清氏は、特に類例が豊富な近世建築では変遷を系統的に理解する必要性があり、復原調査はこれに欠かせないと提言されている。すなわち、「史料研究」の他に、「遺構研究」による解体痕跡調査を実施することで、建築実態調査の精度がより確かなものになることを指摘している。なお、箭弓稻荷神社当局から出された要望として、平成26年(2014)9月21日の例大祭では創建千三百記念祭を兼ねるため、保存修理工事はこれまでに完成させて欲しいとの意向が伝えられた。さらに社殿が埼玉県指定有形文化財であるため、補助事業としてこれを運営することになったが、箭弓稻荷神社社殿は国指定文化財建造物ではないため、建築基準法第3条第1項第3号の規定に基づき、修理を含む現状変更は予め建築審査会の同意と保存建築物の認定を受ける必要が生じた。このことを建築主事との協議により、この社殿は埼玉県内規による建築基準法第6条の4に該当するとの判断がされ、4号特例建築物として建築審査会での同意は不要となり、修理計画を進めることが許可された。この結果、修理工事は平成25年10月1日から着工し、翌年9月7日を完了とする凡そ11ヶ月の工期で実施が成された。

---

注9 江戸幕府によって編集された武蔵国地誌であり、全265巻で構成。文政十一年に稿本が完成した。  
(再編集校訂者 蘆田伊人「新編武蔵風土記稿(再編纂)」1996年・p38)

現在の社殿はそのような箭弓稲荷詣でが特に盛んであった、文政年間から天保年間にかけて造替が成されたもので、権現造形式の社殿となる。福山敏男氏の既往研究<sup>注10</sup>並びに稲垣栄三氏の既往研究<sup>注11</sup>によれば、本殿と拝殿を土間の「石の間」で繋ぐこの形式の起源は天徳4年(960)の北野天満宮が初見と推測され、その後、慶長4年(1599)の豊国廟までは神社建築での類例は無かったとされる。また、福山敏男氏はその根拠ともなる北野天満宮「石の間」に關係する文書の発見に基づき、以下の見解を明らかとされている。

1) 明月記 建仁3年(1203)12月22日北野社御幸の条より

「殿下先<sub>レ</sub>是自<sub>レ</sub>拝殿東西廻廊と拝殿の間の戸<sub>レ</sub>ヨリ南に出て拝殿異角程仁令<sub>レ</sub>蹲居<sub>レ</sub>給、上皇自<sub>レ</sub>南階<sub>レ</sub>入御之後、昇<sub>レ</sub>東階<sub>レ</sub>暫御<sub>レ</sub>異角面簀子<sub>レ</sub>、右府以下被<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>廻廊座<sub>レ</sub>、卯酉廻廊南面に懸<sub>レ</sub>御簾<sub>レ</sub>敷<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>、又拝殿上に同儲<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub> 兩所如何 新大納言自<sub>レ</sub>拝殿上<sub>レ</sub>融天<sub>レ</sub>落板敷<sub>レ</sub>に下天取<sub>レ</sub>金銀幣<sub>レ</sub>親実入<sub>レ</sub>落板敷西戸<sub>レ</sub>儲<sub>レ</sub>之、持参予此間入<sub>レ</sub>殿御休幕<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>他事<sub>レ</sub>、」

※この文書下線部に「新大納言自らが拝殿から落板敷に下りて幣を取る」とあるため、本殿と拝殿の間には何かしら低い敷板部の空間が存在していたと推測される。

2) 台記 天養2年(1145)3月16日の条より

「詣<sub>レ</sub>北野<sub>レ</sub>、申<sub>レ</sub>請夢作文可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>重告<sub>レ</sub>之由<sub>レ</sub>、於<sub>レ</sub>宝前板敷上<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>、使<sub>レ</sub>上座応義<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>祝<sub>レ</sub>、」

※この文書下線部に「本殿前の板敷に幣帛を奉る」とあり、先の明月記と同様に本殿と拝殿間には何かしら敷板がある空間が存在していたと推測される。

3) 正安4年(1302)2月20日の後宇多上皇御幸之記より

「案ヲ内ノ正面ノ刻階ノキハニ居テ白妙ノ御幣三本ヲ並テ置タテマツル、御所ハ拝殿西口次ノ間ヨリ東ヘ三間御簾シツラヒ……………拝殿ノ正面ニ御座一畳ヲ敷、……………子尅ニ御幸、御幣役ハ洞院大納言家也、金銀ノ御幣、御拝之間着<sub>レ</sub>束帯<sub>レ</sub>ノ俗三人西<sub>レ</sub>ノ土戸<sub>レ</sub>ヨリ参テ以前ニ案ニ置白妙ノ御幣ヲ取テ各一本ツヽ得テ正面ニ立テ、御拝以後彼ノ御幣ヲ如<sub>レ</sub>本案ニ置テ退出、其後金銀ノ御幣ヲ洞院大納言家被<sub>レ</sub>賜テナカトコヘヲリテ片膝突テ賜<sub>レ</sub>之アヒタ親禪モ給<sub>レ</sub>之 □ 白妙ノ御幣ヲ小預取テ正面ノ東ノ御簾ニ寄懸テ立置、案モ東<sub>レ</sub>ノ土戸<sub>レ</sub>ノ辺ニ □ (置カ)テ後、御祝ハ申畢、」

※この文書下線部に「東西土戸の存在」が示されるが、これは本殿と拝殿の間にある空間の東西にある出入口を示し、神官が祭祀を執り行う際に入出入りを行う部位となる。すなわち、これが今日の石の間に当たり、低い土間から出入りするという事で土戸という名称になったと考えられる。

注10 (福山敏男「日本建築史研究 続編」1971年・p357～p362)

注11 (稲垣栄三「神社建築史研究Ⅱ」2008年・p338, p357)

なお、現状の北野天満宮石の間東西にも出入口が配されており、また、両端内側 9 尺余りは石敷きとなり、その間の五間部分が低い板敷間となるが、明月記でいう落板敷部は恐らくこれに相当するものと推測される。

この他、嘗て三条家が所有していた室町時代末期頃（1573 年頃）の作となる洛中洛外図屏風に描かれる北野天満宮社殿は明らかに本殿と拝殿とを南北に繋ぐ棟が描かれた八棟造（権現造）となっており、中世では粗現状と同一形状の社殿があったことを裏付けている。また、前述の文書に記される通り、鎌倉時代初期となる建仁 3 年（1203）の明月記からは石の間の存在が明らかであり、長徳 2 年（996）11 月の社殿火災後の建替えと見れば、少なくとも平安時代末期には現社殿の祖形となる同形式の社殿が存在していたことを窺わせる。

このように権現造の成立は北野天満宮社殿にあると考えられるが、それ以後、同社以外で八棟造（権現造）の様相となる社殿が建立された記録は確認されておらず、漸く近世に入って北野天満宮社殿を模したとされる慶長 4 年（1599）建立の豊国廟が現れ、引き続き、慶長 12 年（1607）再建の北野天満宮や新たに建立された大崎八幡宮、また、徳川家康の霊を祀る各地の東照宮などに徐々に採用された。また、本殿・幣殿（石の間）・拝殿と本来別棟となる社殿を一つの大屋根で繋ぐことで一棟の建築形態とするこの社殿の最大の利点として、天候などに祭祀が左右されない利便性があるが、このことも影響してか地方神社でもこの建築様式が採用され始め、神社建築様式の一つとして定着することになった。

このようなことから、権現造社殿の最大の特徴は屋根にあると言え、別名が八棟造と称されることから多くの棟が屋根の頂部や隅部に配される特徴を持っている。基本的な屋根形状は本殿と拝殿を入母屋造とし、幣殿（石の間）が両下造となって本殿と拝殿の屋根を連結したものとなる。なお、寛永 13 年（1636）建立となる六所神社社殿と伊賀八幡宮社殿が初見となるが、本殿部を流造とする形態も出始める。このような形態を「権現造社殿の簡略形」と分類することもあり、それは本殿と拝殿の建立時期に違いがあることが多く、寧ろ結果的にこのような複合社殿の形態で整備されるに至ったのではないだろうか。しかし、箭弓稲荷神社社殿は設計図が示す通り当初計画から権現造形式の建物とし、さらに、本殿は入母屋造で計画されていたことが明らかであるが、実際には流造の本殿に変更されている点では、他の簡略形とは意味合いが異なってくる。ただ、拝殿は本殿・幣殿に遅れて造営される点では、興味深い共通点も見出せる。また、屋根仕様は本殿・幣殿（石の間）・拝殿は連結することから同一の屋根材となるのが通常であるが、箭弓稲荷神社社殿屋根は後世の改修によって本殿を銅瓦型葺屋根とし、幣殿・拝殿は棧瓦葺に改修されている。本殿が流造となるためか、目視でのアンバランス感は然程感じない。なお、この社殿の規模の大きさと優れた建築彫刻はよく知られるところであるが、その特徴が全国的な権現造形式の中でどのような位置付けであるかは把握されていないが現状である。

このようなことから、本論第一部では上記の諸点の解明を目的とし、新たな史料調査方法の検討、修理機会における徹底的な建築実態調査および権現造形式の類例調査を統合して研究を進める。

## 研究の範囲

第一部ではまず、明らかとなっていない社殿造替に至る背景や建立に関する経緯を明らかとし、創建当初の社殿の復原検討とその後の改修変遷を解明する。このため、歴史研究として箭弓稲荷神社に関する史資料を収集のうえ整理し、これを分析して造替に関する歴史を明らかとする。そのうえで社殿の実態調査によって得られた根拠と整合させ、複合的な検討を行うものとする。また、創建当初の社殿屋根の特質を確認するため、類例調査研究を実施してその希少性を特定すると共に、社殿のその後の屋根改修変遷についても明らかとする。このように各種調査によって知り得た知見を論文としてまとめるに当たり、この社殿が近世神社建築のなかでどのような位置付けにあるのかも確認するため、権現造形式で文化財に指定される主要社殿の調査報告資料を元に検討を行い、建物規模の形状比較や外装彫刻の指標変化などを確認し、箭弓稲荷神社社殿の建築様式史視点での見解もまとめるものとする。

## 第一部論文構成

第一部：箭弓稲荷神社社殿の建築史研究

第1章「研究背景と目的」では、社殿造替に至る背景や建立に関する経緯、および現社殿の当初形式・改修変遷など諸点の解明と、新たな史料調査方法の検討、修理機会における徹底した建築実態調査および権現造形式の類例調査などの研究目的を明らかとする。

第2章「箭弓稲荷神社社殿の史料研究」では、散逸する史資料収集と年代別整理を実施し、それから明らかとなる社殿造替に至る背景や建立に関する経緯を述べる。また、社殿に残存する年代を記した墨書も検討を加え、本殿上棟や御祭神遷宮の年月を明らかにすると共に、ご開帳実施に関する時期も解明する。更に工事が先送りとなった拝殿の完成時期や、全造替事業完了時期に関しても明らかとし、その後の社殿の改修変遷についても解明し、現在に至る経緯を述べる。

第3章「箭弓稲荷神社社殿の建築実態調査」では、解体復原調査によって判明した創建当初の社殿外観の復原考察を行う。そのうち、特に希少性のある屋根軒先の檜皮葺様式（柿葺）の特質に関しては類例調査を実施してその価値を特定する。また、拝殿内部の解体復原調査によって明らかとなった室内状況に関して、痕跡を元に創建当初の復原考察を行う。

第4章「権現造形式社殿の建築様式調査」では、稲垣栄三氏が既往研究で示唆した幣殿の平面形状変化について権現造主要社殿の調査報告資料を元に比較検討を行い、時代と共に変化する平面形状の変化の傾向を確認する。また、新たに立面形状の変化も検討事項に加え、同じく幣殿の棟高形状の変化の傾向を確認する。更に装飾建築として外装を装う彫刻に関しても検討を行い、分類指標にて彫刻題材のモチーフが時代と共に如何に変化するかの傾向を確認し、これらの傾向が箭弓稲荷神社社殿に符号するかを確認する。

第5章「第一部まとめ」では、史料研究・遺構研究（建築実態調査・権現造形式社殿の建築様式調査）から得られた調査研究成果を整理のうえ列記する。

---

## 第 2 章 箭弓稲荷神社社殿の史料研究

### 1. 箭弓稲荷神社社殿の現状

#### 1-1. 箭弓稲荷神社が位置する東松山市

東松山市は図 1 にも示す通り、埼玉県の粗中央部に位置しており、地形的にも外秩父山地から東方に突き出すなだらかな比企丘陵、岩殿丘陵、扇状地性の台地である東松山台地、高坂台地、都幾川・越辺川が形成した広大な沖積地と変化に富んだ土地である。

岩殿丘陵の北東縁の葛袋地区は、「埼玉県の地質鉱物・天然記念物緊急調査（地質鉱物）報告書」注<sup>12</sup>によりランクⅣ（地球科学上の学術的な重要度で全国的に重要）に位置付けられる化石の産地であり、神戸礫岩部層と根岸砂岩部層よりシロワニザメ、シロシユモクザメ、アオザメ、ヨロイザメなどサメの歯を始め、デスマスチルスやパレオパラドキシアなどの束柱目の絶滅哺乳類、鯨類や鰭脚類、貝類、珊瑚など多種多様の化石が大量に産出している。これらの遺物の発見により、今から 2300 万年前から 500 万年前、現状では日本の内陸部となる東松山の地は海の底であったという証拠とも言える。



図 1 埼玉県市町村区分図

平成 23 年（2011）十月に実施された高坂古墳群内における発掘調査によって、西暦 250 年～260 年頃の製造と考えられる「三角縁陳氏作四神二獣鏡」注<sup>13</sup>が発見されたが、埼玉県内では唯一であり、畿内地方に拠点を置いた大和政権が地方の首長に配布した神獣鏡と考えられており、この地の権力者が中央勢力との強い繋がりを持っていたことを示している。

注 12 （埼玉県教育委員会編「埼玉県の地質鉱物・天然記念物調査報告書」2001 年）

注 13 直径 22cm の神獣鏡であり、その銘文訳より「陳氏の作りし鏡は甚だ大いに好らしい。鏡の上に奇獣及び龍・虎が有り。身には紋章が有り、口には巨を衝える。聖人・東王父・西王母が有り、滷けば玉泉を飲み、糞を食らう」と記されている。（東松山市教育委員会「三角縁神獣鏡と復元鏡」2013 年）

平安時代末期、武蔵国のあちこちを根城とする武蔵武士が台頭し始め、この地は比企家の所領となったが、この一族の比企禪尼は源頼朝の乳母であり、頼朝が伊豆に流されていた間、食物を供するなどの扶養を行っていた。征夷大將軍となった頼朝はその比企禪尼の恩義に報いるため、比企禪尼の猶子であった比企能員を取り立て、能員はその後、源平合戦や奥州合戦で軍功を挙げるなど鎌倉幕府内で力を持つことになるが、北条家の策略に嵌り、比企氏の乱を企てたとして北条時政らの手に掛かり鎌倉で滅亡した。その後、この地に台頭するのは、御家人であった小代家、野本家、押垂家、高坂家となる。

戦国時代、15世紀末頃から16世紀末までの比企地方は、前期が扇谷上杉家、後期が小田原北条家の所領となった。扇谷上杉家は相模を中心に戦国大名として大きな力を持つようになり、享徳の乱で川越に拠点を移したが、これによって比企・松山の地域は扇谷上杉勢力の興亡をかけた激戦の最前線となって行った。上杉朝定(扇谷上杉家)が天文15年(1546)に川越夜戦で戦死したことで扇谷家は滅亡し、扇谷家の名跡を継いだ上杉憲勝は永禄4年(1561)に武蔵松山城主となったが、永禄6年(1563)に後北条家に降伏したことで前期が終わった。その後、北条氏康と岩付城主太田資正との間で松山城の争奪戦が繰り返されるのが後期となるが、永禄6年(1563)に氏康の攻略によって松山城は奪われ、北条家家臣であった上田氏が城主となり、漸く安定した領国期を迎えることになったが、それも30年足らずのことで、天正18年(1590)、豊臣勢の攻撃を受けて松山城は落城することになり、この戦火は箭弓稲荷神社社殿にも及ぶ惨劇となった。

豊臣秀吉による小田原攻めの後、徳川家康は関東に転封となり、旧北条氏の所領であった相模・武蔵・上総・伊豆の四カ国と上野・下総の大部分、下野の一部が徳川家の所領となったが、東松山市域の村々は、松山城主となった松平家広のもと、徳川の将士たちに知行分けされた。高坂の高済寺には高坂・正代・早俣村が与えられた加賀爪氏墨代の墓があり、大谷の宗悟寺には大谷村を与えられた森川氏墨代の墓、また、上唐子の浄空院には唐子村を与えられた菅沼氏一族の墓が残されている。このようにして、市域の村々は旗本領として、あるいは天領として統治されることになった。その後、関ヶ原戦後に家広の跡を継いだ忠頼が浜松藩に転封となったことで松山城は廃城となり、この地は幕領となった。寛永18年(1641)に旗本島田利正の知行地となったが、箭弓稲荷神社は社地免除などの恩恵を受けたことで前社殿の再建が成し遂げられた。その後、文化8年(1811)には川越藩領となるが、幕末になって第11代川越藩主松平直克は凡そ100年前まで松平氏が城主であった前橋へ帰城することを希望したところ幕府より許可が下りた。慶応2年(1866)に川越から前橋に転封する際、武蔵国における前橋藩領支配が定められ、比企郡を中心に六万二千石の領地が飛び地として残されることになったことから、それを管理するために松山町に前橋藩松山陣屋が設置され、258名の藩士が妻子と共に集住することになった。この地は再び城下町として位置付けられるようになったが、明治4年(1871)に廃藩置県を迎えたことで、僅か五年で再び城下町としての役目を終えることになった。<sup>注14</sup>

東松山市域の明治初年の形態は、松山町の他に26ヶ村から成っており、入間県・熊谷県を経て現在の埼玉県に編成された。昭和29年(1954)7月1日、松山町、大岡村、唐子村、高坂村、野本村の一町四村が合併し、現在の東松山市が誕生して現在に至っている。

---

注14 (東松山市市史編さん課「東松山市の歴史・中巻」1985年・p322)

## 1-2. 稲荷社の創始と稲荷信仰

箭弓稲荷神社は東松山市箭弓町2丁目5番14号に位置し、稲荷神である宇迦魂神と保食神の二柱が祀られているが、地域住民や多くの人々から「やきゅうさま」と称されている。そもそも稲荷社の創始に関しては、「山城国風土記」にて秦中家忌寸等の遠祖である秦公伊呂具が富に誇り、餅を的に用いたところ、それが化して白鳥となり、飛び去りとまった山の峰に稲が生えたことで、農耕神として伊奈利を社名としたとする所伝が最も多い。

福山敏男氏の創始説によれば、江戸時代の考照学の大家であった伴信友は、この風土記は延長期（923～930）頃の新撰と見ているようで、奈良時代の古風土記とは別物と考えている。その理由として、この社の祭神と白鳥・稲との関係が不明であることなどを挙げている。なお、「延喜式神名帳」・「諸社根元記」・「諸神記」・「二十二社註式」と室町後期の諸書にも、「山城国風土記」での伊奈利の一条が記されるため、創始は少なくとも鎌倉時代末期は下らないもの既往研究で述べている。更に鎌倉時代初期の「年中行事秘抄」にある稲荷社称宜・祝などの申状には、「此神和銅中、始顯<sub>レ</sub>坐伊奈利山三箇峰平処<sub>レ</sub>、是秦氏祖中家等、拔<sub>レ</sub>木殖蘇也、即彼秦氏人等、為<sub>レ</sub>称宜・祝<sub>レ</sub>、供<sub>レ</sub>仕春秋祭等<sub>レ</sub>、依<sub>レ</sub>其靈驗有<sub>レ</sub>、被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>臨時御幣<sub>レ</sub>」と記される。ここでは稲荷三社の起源を和銅年間としており、秦中家もこの文面から推測すれば和銅時代の人物ということになるが、この称宜・祝などの申文は諸神記では「天曆勘文」と呼ばれていることから、恐らく天曆年間（947～956）に作成された稲荷社解状の文と推測している。その後、中世・近世の諸書では和銅4年（711）2月7日或いは9日と記されるようだが、福山敏男氏は確実性を備えた資料は今までのところ確認されなかったと既往研究で述べている。<sup>注15</sup>なお、「古事記」・「日本書紀」・「新撰姓氏録」などの伝えでは、秦氏は秦の始皇帝の子孫であり、長く朝鮮に留まっていたが、応神天皇時代に迎えられて我国に集団移住してきたとされる。はじめは大和国の葛城地方に住んだが、やがて四方に分散して山城国などに入った。山城国では古くより田の神の信仰を根幹とする伊奈利の山の信仰があり、弥生時代の紀元前二百年頃には既に稲作が始まっていたことを、深草遺跡（京都市伏見区）から発見された耕具類の出土が裏付けている。また、古墳時代になるとこの地には大和政権直轄領を示す屯倉も設けられることになるが、渡来系氏族である秦氏が政権との強い繋がりを培っていく一方、土着化して根強い田の神の信仰に同化して行ったことは帰化を揺ぎ無いものとし、地域における権力を築く要素となった。なお、伊奈利の原義については稲生とする説もある。

田の神である稲荷神は年毎または季節毎に訪れる来訪神として、古代人はまれびと信仰として位置付けた。それが中世になって商工業の発展展開と共に民衆の富に対する願いが増大し始め、やがて七福神信仰が出現した。その信仰は15世紀頃から次第に明確な形を採るようになり、稲荷神も何時しか福神となって行った。本来、中国系の布袋和尚・寿老人・福老寿が印度系の弁才天・大黒天・毘沙門天と我国の神である恵比寿と共に宝船に乗り、福神を仰ぐ思想は飛躍した面もあるが、民衆の切実な思いがそのような形を生んだと言える。このような背景のもと、農耕神であった稲荷神が福德の神の本流としても崇められるようになり、安寧な近世において稲荷信仰が大きな発展を遂げていく要素となった。

注15 （福山敏男「稲荷信仰辞典・稲荷大社の社殿の問題」1999年・p216～p220）

### 1-3. 箭弓稲荷神社の略歴と社殿概要

箭弓稲荷神社現社殿の造替に関して川越藩からの直接的な資金援助は無く、自己資金と浄財などを頼りとする事業計画であったため、資金調達は容易では無かったものと推測される。その証拠に上棟・遷宮式の前年となる天保5年（1834）10月には、松山町旅籠の吉見屋吉兵衛と箭弓茶屋の平野屋直八・枅屋・田嶋屋の四名が、資金繰りの厳しい別当福聚寺の借金証文に関して、万が一にも福聚寺が借金返済できない場合には連帯責任とする誓約証文までも交わしており、神社関係者の苦慮が読み取れる。なお、造替事業は天保7年（1836）3月に本殿・幣殿までを完成させた後はお開帳のため一旦工事を休止させ、工事再開後の天保11年（1840）9月に拝殿を完成させたものと考えられる。全造替事業が完了するのは再建立普請諸入帳（事業精算書）が作成された天保14年（1843）10月のことで、推定着工年となる文政元年（1818）から数えれば、事業完了までに四半世紀となる25年の月日を要したことになる。その後、安政大地震（安政2年）の影響によって社殿の屋根仕様は段階的に改変されているが、創建から現在に至るまでの略歴は表1に示す通りとなる。

	和 暦	西 暦	諸 事 項
1	和銅5年	712年	野弓稲荷神社 創建
2	長元3年	1030年	源頼信 社殿寄進のうえ箭弓稲荷に社名改める
3	宝徳3年	1451年	川越城主太田道灌による社殿の造替
4	元亀元年頃	1570年頃	松山城主上田朝直による社殿の造替
5	天正10年	1582年	戦火によって社殿焼失
6	寛永7年	1630年	徳川家旗本島田利正によって社殿造営（先の社殿）
7	文政元年	1818年	現社殿への造替事業着工
8	天保6年	1835年	本殿・幣殿上棟、御神体遷宮
9	天保7年	1836年	本殿・幣殿完成、御開帳開始（一時工事中断）
10	天保11年	1840年	拝殿完成、その他付帯工事などは引き続き継続
11	天保14年	1843年	造替事業完了、再建立普請諸入用帳を中本寺へ提出
12	嘉永5年	1852年	本殿大棟銅板包み改修工事実施
13	安政5年	1858年	拝殿・幣殿屋根改修工事実施（柿葺→棧瓦葺）
14	明治29年	1896年	本殿屋根改修工事実施（柿葺→銅瓦型葺）
15	〃	〃	郷社に昇格（明治二九年六月九日） <sup>注16</sup>
16	大正12年	1923年	本殿屋根改修工事実施（正面に千鳥破風増設）
17	〃	〃	県社に昇格（大正十二年五月一日）
18	昭和32年	1957年	拝殿下拝廻り柱間装置等改修工事実施
19	平成元年	1989年	社殿が埼玉県有形文化財指定（平成元年三月十七日）
20	平成16年	2004年	本殿銅瓦型葺屋根葺替修理工事実施
21	平成25年	2013年	拝殿・幣殿屋根替え、社殿耐震補強等保存修理工事実施

表1 箭弓稲荷神社 略歴表

注16 （岡田潔「さきたま文庫・箭弓稲荷神社」2003年・p9）

造替された現在の社殿は権現造形式である。これは神社建築様式の一つであり、本殿と拝殿を幣殿（石の間）にて連結するが、福山敏男氏はその祖形を北野天満宮社殿（京都市上京区）にあるとし、また、その起源は平安時代まで遡ると推測している。なお、箭弓稲荷神社社殿の建物規模については、向拝も含めた社殿全長が 27.739m (91 尺 5 寸 5 分) で、最大幅は拝殿桁行間の 11.939m (39 尺 4 寸) となる。また、社殿を構成する本殿・幣殿・拝殿及び祭器庫・神饌所を含む全体床面積は 189.264 m<sup>2</sup>となる。なお、本殿・幣殿・拝殿の柱間寸法は図 2 に、個別規模は表 2 に示す通りである。

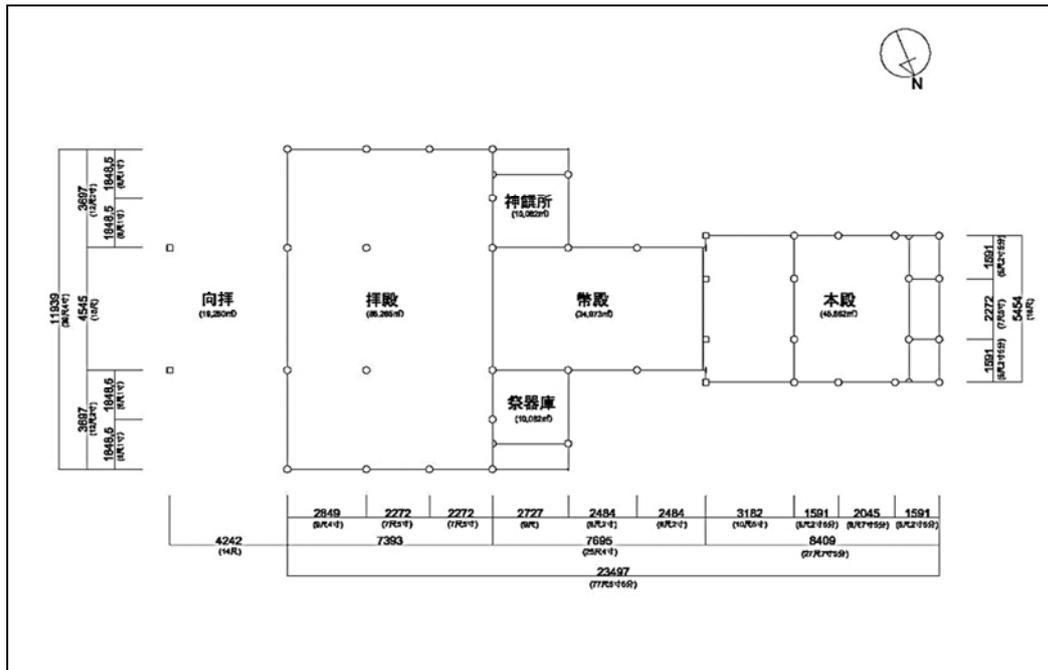


図 2 社殿柱間寸法

区分	摘要	本殿	幣殿	拝殿(身舎)	拝殿(向拝)
桁行	桁行両端柱間真々	5.454mm	7.695mm	11.939mm	4.545mm
梁間	梁間両端柱間真々	8.409mm	4.545mm	7.393mm	4.242mm
軒の出	側柱芯より茅負外下角まで	2.765mm	1.728mm	2.069mm	2.030mm
軒高	基礎上端より茅負外下角まで	5.940mm	4.758mm	5.212mm	4.904mm
棟高	基礎上端より棟頂上まで	10.908mm	8.333mm	10.757mm	6.995mm
平面積	側柱内側面積	189.264 m <sup>2</sup>			
軒面積	茅負外下角面積	402.297 m <sup>2</sup>			
屋根面積	屋根平葺面積	576.810 m <sup>2</sup>			

表 2 社殿各寸法・面積表

本殿・幣殿・拝殿の構造形式は以下に記す通りである。

#### I) 本殿

桁行三間、梁間三間、流造、正面千鳥破風付、背面軒唐破風付、屋根銅瓦型葺。四周跳高欄付切目縁、脇障子付、正面登高欄擬宝珠付木階外部登七級、内部登三級、向拝一間、浜床付。

##### ① 平面

身舎は正面（桁行）三間、奥行（梁間）三間の規模にて、手前（梁間）に一間の張出し向拝が付く。本殿外周には跳高欄付の切目縁を廻し、背面側柱間通りには獅子と牡丹の透かし彫り彫刻の脇障子を設える。跳高欄に繋がる正面両端には登七級木階が登高欄・擬宝珠親柱・浜縁が備わる。身舎正面側柱より奥行二間を「内陣」とし、後方奥行一間を「内々陣」とするが、祭壇は上床となるため中央間に登五級の木階を配し、下段は地袋を配する。祭壇は左手より「左室」・「中室」・「右室」として内壁で間仕切り、祭神を祀る。内陣は畳敷（十四畳）とし、両端手前二間の柱間装置には舞良戸を配す。正面内陣境の柱間には装置を配さず、全ての間には御簾が備わる。向拝は柱間三間とし、拭板の向拝床を設け、登三級の木階が配される。

##### ② 基礎

側廻りは切石加工の布基礎石上に亀腹石を配して巡らす。床下は三和土叩きとし、床束通りは根石を据えた切石を要所に配している。雨落ち葛石は成型コンクリート下地豆砂利洗出し仕上げで擬似石とする。葛石外面と玉垣石積間には化粧玉石を敷込む。

##### ③ 軸部

側通り筋並びに内々陣筋通りに土台を廻して丸柱を建て、柱下部に足固貫を縦横に挿し通して大引で足元を固め、側柱と固定する。柱頭部は頭貫で繋ぎ、足元長押・切目長押・腰長押・内法長押にて側柱外面を緊結する。柱頭部外側にあつては獅子頭の掛鼻彫刻を付ける。向拝柱は桁行方向を水引虹梁で繋ぎ、梁間方向を内陣本屋柱と海老虹梁で繋ぐ。柱中段部は本屋より足元長押・切目長押を延ばして固める。向拝柱頭部には獅子頭の掛鼻彫刻が付く。

##### ④ 組物

外部は和様三手先、内部は出組とする。三手先の一手目上段は連三ツ斗で通肘木を受ける。三手目上部秤肘木外面には鳳凰頭彫刻と牡丹頭彫刻の拳鼻が備わる。尾垂木は二段構えとして尻をそれぞれ小屋裏内に延ばして二手先・三手先部を支える。先端部は二手目を漢頭、三手目を龍頭彫刻とし、隅尾垂木先端部は一手目を漢頭、二手目を龍頭、三手目を蟹頭彫刻とする。組物間の頭貫上には琵琶板を嵌め、中備えに背面・側面共に臺股が配されている。内陣及び内々陣境柱頭は平三斗組とし、面側に獅子頭並びに鳳凰頭の拳鼻を付ける。組物間の頭貫上には琵琶板を嵌め、中備えには臺股を配しているが、内々陣側面のみ鶴と波の薄肉彫り彫刻が配される。向拝柱頭部には三重出三ツ斗組が配され、桁行方向は丸桁を実肘木が受け、梁間方向は牡丹と孔雀の籠彫り彫刻となる手挟下部を実肘木が受けている。梁間方向二重目・三重目肘木小口には正背面に獅子頭彫刻が付される。

⑤ 軒回り

二軒の繁垂木（背返し）形式とする。背面・側面共にS字型軒支輪を付け、軒支輪受け通肘木は三手先一手目上の二重秤肘木にて受ける。三手先二手目の秤肘木では板支輪桁を受けている。板支輪は波と千鳥の彫刻が施され、背面は丸桁・側面は初重虹梁間に渡される。背面側三手先三手目の実肘木は丸桁を受け、軒唐破風柱通り二間は矩手に菖蒲桁を受ける。背面軒唐破風は丸桁筋の菖蒲桁間に虹梁を渡す。地垂木は丸桁に天載せ釘留め固定し、その先端には木負を載せる。木負は飛檐垂木を下駄欠きに嵌め込んで釘留め固定し、飛檐垂木先端には茅負を載せる。地垂木・飛檐垂木共に棒垂木とし、茅負は眉決を付け、その上部に布裏甲・二重裏甲を載せる。化粧裏板は羽重ねに横板張りとする。

⑥ 軒唐破風

指棟木及び菖蒲桁二本を前方に延ばして茨垂木を疎らに六本配し、先端部を唐破風板で納める。丸桁通りで菖蒲桁と虹梁を組込み、指棟木間に丸彫り太鼓嵌め彫刻を配する。唐破風板眉決は三段とし、唐破風板中央茨下端には波と二頭の蚪龍透かし彫刻の兎の毛通しが配される。唐破風板上には布裏甲・二重裏甲・蛇腹軒付が載る。化粧裏板は羽重ねに縦板張りとする。

⑦ 妻飾り（南北切妻壁）

三重に虹梁を渡し、最上段を虹梁大瓶束形式とする。初重虹梁は丸桁間に渡して三手先三手目の実肘木が受け、虹梁上の組物間には薄肉彫りの波と龍の彫刻が配される。二重虹梁は指母屋間に渡され、二手先二手目の実肘木が受ける。二重虹梁下の板支輪は波と牡丹の薄肉彫り彫刻が施されるが、二手先一手目の秤肘木で受ける板支輪桁に載る。二手先二手目先端部は両端を龍頭彫刻・中央を漢頭彫刻とし、方斗上秤肘木面には牡丹頭の拳鼻が付く。虹梁上の組物間には薄肉彫りの波と龍の彫刻が配される。最上段の三重虹梁は指母屋間に渡され、二手先一手目の秤肘木上の実肘木が受ける。三重虹梁下の板支輪は波と亀の薄肉彫り彫刻が施されるが、二手先一手目の秤肘木で受ける通肘木に載る。大瓶束には結綿が付され、両端の笈形は波と鶴の彫刻が配されている。枝外垂木は十三枝とし、化粧裏板は羽重ねに縦板張りとする。破風板に眉決は三段を付け、表面に唐草文様の彫刻が施される。破風板拌み下端には蕪懸魚を飾り、登裏甲・二重裏甲が載る。桁隠し降懸魚には牡丹模様の彫刻が施される。

⑧ 屋根

流造・銅瓦型葺で、正面に千鳥破風が設けられ、背面には軒唐破風が付される。軒付は背面を二重銅板包みとするが、側面は三重として螻羽箕甲落ち落差を調整する。大棟箱棟は煽板上に両下勾配付甲板を頂に載せ、棟両端には先端縦切の千木二組を据え、その間に勝男木五本を配する。千鳥破風箱棟は煽板上に両下勾配付甲板を頂に載せ、前面側に先端縦切の千木一組を据え、その内側に勝男木二本を配する。軒唐波風箱棟は煽板上に両下勾配付甲板を頂に載せ、背面側に先端縦切の千木一組を据え、その内側に勝男木一本を配する。全ての箱棟は銅板包みとする。

⑨ 縁回り

外周を跳高欄形式とし、背面側柱通りには透かし丸彫り彫刻（獅子と牡丹）を配した脇障子を建て、腰組は足元長押上の持送りに載る二手先でこれを支える。持送りは籠彫り彫刻とし、波と水犀・波と山椒魚・波と鯉・波と亀・波と海馬・波と蚪龍を中柱外面に配し、龍頭彫刻を側柱より真隅に配している。持送り頭部には皿斗・斗を据え、一手目指肘木を延ばして斗真で杵肘木を組む。二手目指肘木は下段杵肘木上に延ばして先端に杵肘木を置き、高欄縁葛と外根太を受ける。中通りは連三ツ斗として高欄内根太を受ける。隅は隅扱首組とし、縁板は切目縁とする。高欄は地覆・栴束・平桁・平三ツ斗・中備・架木を組み、端部を跳高欄とする。正面両端は登高欄とし、擬宝珠親柱を備えた登七級木階を配する。木階両端の彫桁下は横嵌板とする。

⑩ 床組

内陣は桁行方向の柱通りに大引を渡し、梁間方向の柱通りに力根太を組み、前面間には二本・中央間には三本の根太を配る。内々陣は桁行方向に根太が渡されて根太掛に載る。根太上に直交して荒床が配され、それに紋縁畳が敷き込まれる。戸袋内も荒床が張られ、上部祭壇床は上げ根太組のうえ拭板が張られる。向拝は桁行方向の柱通りに大引を渡し、矩手に根太五本を配って拭板が張られ、登三級木階床組が備わる。

⑪ 天井

内陣は格天井とする。几帳面取りの格縁を粗等間に配し、格間に天井板を張る。小間は桁行方向に九間、梁間方向に七間配されている。内々陣は梁間方向に渡す通肘木上に板天井を載せて祭神室を塞ぐ。向拝は本屋丸桁と向拝丸桁上に二軒の化粧垂木を掛け渡し、繁垂木（背返し）形式とする。地垂木は正面木負に釘留とし、地垂木鼻先に木負を載せ、打越垂木を配る。打越垂木鼻先は向拝柱上部丸桁上に載る茅負に嵌めて釘留とする。化粧裏板は羽重ねに横張りとする。

⑫ 小屋組

敷桁を側柱通り筋に井桁に組み、その上部に小屋梁を梁間方向に架け渡し、更にその上部に束踏梁を矩手に架け渡す。束踏梁上に小屋束を四通り建て、桁行方向に渡す小屋針と梁間方向に渡す二重梁を組む。二重梁上に小屋束を二通り建て、梁間方向に渡す三重梁を組む。二重・三重の小屋束で指母屋を受ける。三重梁上に小屋束を三通り立て、梁間方向に渡す四重梁を組む。その上端に指棟木（地棟木）を載せ掛け、それに建つ棟束で野棟木・箱棟を受ける。梁間屋根下地は反り付き登梁が六通りに配され、母屋桁・上端彫状野垂木・野地板を組み、上端部を棟束に柄指しとする。敷桁の要所に天井吊木受丸太を渡し、天井吊木を受ける。唐破風指棟木尻は束踏梁を枕にして載掛け、更に尻部を桁行方向に渡す小屋梁を載せて押える。唐破風菖蒲桁は尻を敷桁上の束踏梁下半分に抱かせて込栓で緊結する。千鳥破風は幣殿から延びる小屋梁と敷桁間に繫梁を渡し、小屋束を立てて野棟木・野地を構成する。

⑬ 柱間装置

内陣正面は辺付を廻すだけで各間共吹放ちとし、御簾で空間を仕切る。内々陣正面は弊軸構えとし、中央間は棧唐戸諸折両開き、脇間は棧唐戸両開きとする。祭壇下戸袋は板戸引違いとする。内陣側面第一間は内法に中敷居を設け、上部を花頭窓構えとし、下部を横嵌板とする。花頭窓外面は宝珠と二龍の厚肉彫り彫刻とし、枠内には舞良戸引違いが備わる。第二間は敷・鴨居内法に舞良戸が備わる。その他の側壁は全て横嵌板張りとするが、背面中央間のみ仙人の鳥鷲と称する厚肉彫り彫刻が嵌板上の柱間内に備わる。向拝木階上段両側面には舞良戸片引きが備わり、手前柱間側壁は切目長押下部共に横嵌板張りとする。

Ⅱ) 幣殿

南北桁行方向三間、東西梁間方向一間、一重、両下造、屋根棧瓦葺。南北切目縁、北側祭器庫・南側神饌所附帯。

① 平面

桁行（東西方向）三間、梁間（南北方向）一間の規模とし、全面荒床板張りのうえ畳敷（二十畳）とする。拝殿側北一間柱間には一間四方の祭器庫が配され、北面に張出し祭器棚が備わり、東面は拝殿向きに吹放ちとなる隨身像の間がある。床は畳敷（三畳）と拭板で構成される。拝殿側南一間柱間には一間四方の神饌所が配され、南面に張出し神饌備品棚が備わり、東面は拝殿向きに吹放ちとなる隨身像の間がある。床は畳敷（三畳）と拭板で構成される。

② 基礎

桁行（東西方向）側廻りは切石加工の布基礎を据え、柱位置・床東通りは根石を据えた切石を要所に配している。床下は三和土叩きとする。豆砂利洗出し仕上げの雨落ち葛石は南北共に幣殿側に矩折り、側切石に接合させる。祭器庫・神饌所も側廻りは切石加工の布基礎を据え、柱位置に四角錐加工束石を配する。

③ 軸部

梁間方向の柱通りに内土台を据えて丸柱を建て、大引・足固貫・切目長押・内法長押にて側柱と緊結する。柱頭部外側にあつては獅子頭の掛鼻彫刻を付ける。西端柱は五平材とし、本殿向拝柱筋の土台に建て、柱頭部を半欠きとして前面より水引虹梁下端に払い込む。祭器庫・神饌所の丸柱は縁下を八角形として束石に建て、足固貫・切目長押・頭貫で固定する。隅柱頭部外側には木鼻が付く。

④ 組物

柱頭部に枳肘木を配し、実肘木にて丸桁を受ける。実肘木下の枳肘木中央には獅子頭の懸鼻彫刻が付く。組物間の頭貫上には琵琶板を嵌め、中備えに墓股が配される。内部は出組で枳肘木中央には獅子頭の拳鼻彫刻が付く。実肘木で天井廻縁を受ける。組物間は外部同様に中備えに墓股を配するが、手前一間は巻斗のみで脚部を付けずに未完とする。祭器庫・神饌所の柱頭部に枳肘木を配し、実肘木にて妻側虹梁・平側丸桁を受ける。虹梁中央部にも枳肘木を配し、頭貫と母屋桁を直交させこれを受ける。

⑤ 軒回り

二軒の繁垂木（背返し）とする。通肘木と丸桁間には板支輪が配され、外部は波と千鳥の彫刻・内部は波と蚪龍頭鳳凰が施される。丸桁に地垂木を天載せ釘留め固定とし、尻は垂木掛に固定する。飛檐垂木は木負下駄欠きに嵌め込みのうえ釘留めとする。地垂木・飛檐垂木共に棒垂木とし、茅負は眉決を付ける。茅負上部には布裏甲・二重裏甲を載せて小軒板を積層し、拝殿側軒とは水平に摺り付け、本殿側軒には反り上げて納める。化粧裏板は羽重ねに横板張りとする。祭器庫・神饌所は一軒の繁垂木（背返し）で片流れとし、側柱からの枝外垂木は九枝となる。地垂木は棒垂木とし、茅負は眉決を付ける。茅負上部には布裏甲・二重裏甲を載せて軒付を配する。螻羽は縋破風板とし、眉決は三段となる。化粧裏板は羽重ねに横板張りとする。

⑥ 屋根

両下造・棧瓦葺で、大棟は紐付台熨斗瓦に紐付割熨斗瓦を二段に組み、紐付雁振瓦が載る。大棟両端は本殿側を千鳥破風内に大棟を呑み込ませ、拝殿側は屋根面に棟を摺り付けて両端に谷を切って納める。祭器庫・神饌所屋根は片流れ・銅板一文字葺とし、両端張出し棚は祭器庫・神饌所の屋根軒下に、片流れ・銅板一文字葺小屋根として備わる。

⑦ 縁回り

切目縁形式とする。桁行方向の外土台上に二手先組物を配し、二手目杵肘木で縁葛と根太を受けて縁板を張る。祭器庫・神饌所縁も切目縁形式とする。縁板は幣殿切目長押高に上げて矩手に張り、側柱は隅切首組とする。側柱より透かし丸彫り彫刻の持送りを真隅に出し、二手先の連三ツ斗を組んで縁葛と根太を受け、それに縁板を張る。

⑧ 床組

梁間方向柱間に大引を渡し、東三本建てで桁行方向に根太を均等に九本配る。根太上に直交して荒床が配され、それに紋縁畳が敷き込む。祭器庫・神饌所も桁行方向に大引が渡され、切石上に建つ束でそれを受ける。根太は大引に直交して配し、それに荒床を載せて畳を敷き込む。左右東面する隨身像の間は上根太組のうえ、隨身像を設置する前面開放の棚が組まれる。

⑨ 天井

格天井とする。几帳面取りの格縁を粗等間に配し、格間に天井板を張る。小間は梁間方向に六間、桁行方向に十間配されている。中部に格縁二間四方の折上板天井を配し、側壁は四方に換気孔がある。祭器庫・神饌所は竿縁天井とし、竿縁矩手に天井板を羽重ねに横張りする。

⑩ 小屋組

丸桁上に大梁を梁間方向に三本架け渡し、それに中引梁を三本桁行方向に架け渡して小屋束を組む。梁間方向上段の二重梁も三本の小屋梁を桁行方向に架け渡し、小屋束を組んで三重梁・四重梁を支える。野棟木は二重梁上の小屋梁に載る小屋束が支え、母屋桁はそれぞれ梁間方向に架け渡す梁小口上端に載せ掛け、野垂木・野地板を受ける。桔木は南北に三本毎に配し、桔木鼻を吊金物で飛檐垂木に吊る。

#### ⑪ 柱間装置

舞良戸引違いが備わり、内側は格子戸一本引が配される。内法長押上に配される欄間は格子戸引違いで、外部は花頭窓構えの外付上枠が備わる。祭器庫・神饌所西側面は共に舞良戸引違いが備わり、両端張出し棚西面及び南・北面は舞良戸嵌殺し壁とする。幣殿内部からの出入口は帯戸引違いとする。拝殿側東面は共に隨身像の間は吹放ちとするが、その両端は帯戸嵌殺し壁とする。

### Ⅲ) 拝殿

桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、正面千鳥破風付、屋根棧瓦葺。前面側三方擬宝珠高欄付切目縁、脇障子付。

#### ① 平面

桁行三間、梁間三間の規模とし、正面一間を「下拝」・後方二間を「内拝」とする。前面側外周三方に擬宝珠高欄付切目縁を巡らし、正面三間には縁上の木階一級を備える。南面手前一間は縁上の木階三級が備わり、地面と高欄を繋ぐ石階七級も設えられる。下拝と内拝は正面側柱より一間奥の入側柱通り柱間無目敷居を挟んで現状一空間となるが、下拝は縁続きの当初板間上に後補根太組・荒床張りに畳敷（十九畳半）とする。内拝は当初拭板上に畳敷（三二畳半）とする。内拝前面中央拭板間には当初の床埋込み型賽銭箱が備わる。下拝北側面には参集殿からの後補渡り廊下が接続される。

#### ② 基礎

側廻りは切石加工の布基礎を据え、柱位置・床束通りには根石を据えた切石を要所に配しているが、化粧となる側柱は四角錐加工切石となる。縁束位置にも根石を据えた切石を要所に配し、土間はコンクリート木鏝仕上げで社殿外方向に水勾配を付ける。

#### ③ 軸部

側通り筋に土台を廻して丸柱を建て、入側柱筋の丸柱（床下は八角形）と床束に足固貫で縦横に挿し通して大引で足元を固め、側柱と固定する。床下側廻り柱間には縦連子が配され、後部より横張板で隙間無く固定する。柱頭部は頭貫で繋ぎ、虹梁・内法長押・切目長押・無目鴨居・無目敷居で側柱と緊結する。内部入側柱通りは柱頭部を頭貫で繋ぎ、虹梁・三方枠・無目敷居を配する。矩手の入側柱梁間方向には虹梁を架け渡している。幣殿境の中央柱間には挿鴨居・敷居が配される。柱頭部外側及び大瓶束頭部には禅宗様文様木鼻が備わる。

#### ④ 組物

柱頭部及び柱間に渡す虹梁中央大瓶束頭部に枳肘木を配し、外部は実肘木にて丸桁を受け、内部は秤肘木・巻斗で天井廻り縁を受ける。秤肘木矩手には両端木鼻付通肘木を渡して方斗上で組む。隅柱頭部には隅行肘木付の枳肘木が配され、鬼斗上で直交する縦横の連三ツ斗を受ける。外部は実肘木にて直交する丸桁を受け、内部は秤肘木・巻斗で隅部矩折の天井廻り縁を受ける。頭貫上の組物間には琵琶板を嵌める。

⑤ 軒回り

二軒の繁垂木（背返し）とする。通肘木と丸桁間には板支輪が配され、菊と蓮の浮彫り彫刻が施される。丸桁に地垂木を天載せ釘留め固定とし、尻は垂木掛に固定する。飛檐垂木は木負下駄欠きに嵌め込みのうえ釘留めとする。地垂木・飛檐垂木共に棒垂木とし、茅負は眉決を付ける。茅負上部には布裏甲・二重裏甲を載せて瓦座を据える。化粧裏板は地垂木・飛檐垂木共に羽重ねに横板張りとする。

⑥ 妻飾り（南北入母屋）

虹梁大瓶束形式とする。前包に須覆を載せ、須覆上の虹梁下端中央部には実肘木付平三ツ斗が備わる。大斗及び中巻斗矩手に跨って拳鼻が付く。挿母屋桁下端には実肘木付三ツ斗が備わり、組物間には琵琶板が嵌る。虹梁上端中央部には結綿付大瓶束を据え、両端には波型浮彫り彫刻の笈形を付している。大瓶束上端には実肘木付三ツ斗を配し、挿母屋桁を受けている。枝外垂木は四枝とし、化粧裏板は横張りとする。破風板の眉決は三段とし、拝み下端には蕪懸魚を飾り、登裏甲・二重裏甲を載せて瓦座を据える。

⑦ 妻飾り（正面千鳥）

虹梁大瓶束形式とする。前包に須覆を載せ、須覆上の虹梁下端中央部には実肘木付平三ツ斗が備わる。大斗及び中巻斗矩手に跨って拳鼻が付く。挿母屋下端には実肘木付三ツ斗が備わり、組物間には琵琶板が嵌る。虹梁上端中央部には結綿付大瓶束を据え、両端には波型浮彫り彫刻の笈形を付している。大瓶束上端には実肘木付三ツ斗を配し、挿棟木を受けている。枝外垂木は四枝とし、化粧裏板は横張りとする。破風板の眉決は三段とし、拝み下端には蕪懸魚を飾り、登裏甲・二重裏甲を載せて瓦座を据える。

⑧ 屋根

入母屋造・棧瓦葺で、正面に千鳥破風が備わる。本屋大棟は紐付台熨斗瓦に紐付割熨斗瓦を二段に組み、棟壁は青海波四段に万年星三段を組合せて上葺とし、紐付割熨斗瓦・紐付雁振瓦を載せる。大棟両端には鬼台に据えた影盛付鬼瓦が備わる。千鳥大棟は紐付台熨斗瓦に紐付割熨斗瓦を二段に組み、棟壁は青海波三段に万年星二段を組合せて上葺とし、紐付割熨斗瓦・紐付雁振瓦を載せる。千鳥大棟前面には鬼台に据えた影盛付鬼瓦が備わる。降棟は前後に四本配され、棟は紐付台熨斗瓦に紐付割熨斗瓦を二段に組み、棟壁は漆喰壁二段として上葺とし、紐付割熨斗瓦・紐付雁振瓦を載せる。棟先端には紋入り鬼台に据えた影盛付鬼瓦が備わる。隅棟は真隅に四本配され、棟は紐付台熨斗瓦に紐付割熨斗瓦を二段に組み、棟壁は漆喰壁二段として上葺とし、紐付割熨斗瓦・紐付雁振瓦を載せる。棟先端には紋入り鬼台に据えた影盛付鬼瓦が備わる。本屋大棟螻羽は瓦座上に棧瓦を据えて頂点に拝巴瓦を載せ、箕甲落ちは袖丸瓦・刀根丸で調整する。千鳥大棟螻羽は瓦座上に掛唐草瓦を据えて掛巴瓦・拝巴瓦を載せ、袖丸瓦・刀根丸瓦で調整する。本屋大棟に四箇所・千鳥大棟に二箇所の大環を通し渡し、屋根点検用鎖を備え付ける。

⑨ 縁回り

擬宝珠高欄切目縁形式とし、透かし丸彫り彫刻（項羽と劉邦・黄公石と張良）を配した脇障子を建てる。縁板は柱外面に留める根太掛けと縁束で支える縁葛に架け渡し、縁板矩手中央に配する根太と共に釘留とする。縁束脚元柄に脚固貫を挿通して四方を廻らせ、縁を固める。隅は隅叔首組とする。高欄は擬宝珠を介し、東側正面・南側側面階と接続する。

⑩ 床組

内拝は大引を桁行方向の柱筋に二本渡し、その中央間も一本大引を渡している。梁間方向は中央三間に配される床埋込賽銭箱位置を除いて柱筋に力根太を渡し、その上部矩手に根太を三本毎配して拭板を張詰め、後補畳が敷込まれている。下拝は梁間方向の柱筋に力根太を渡し、その上部矩手に根太を四本毎配して拭板を張詰めている。下拝嵩上後補床は当初拭板上に転ばし根太組を行い、後補畳を敷込んでいる。大引は礎石上に建つ床束で支え、脚固貫を縦横に組んでいる。柱筋外周は横嵌板を取付けて脚元を固めている。

⑪ 天井

内拝天井は格天井とする。几帳面取りの格縁を粗等間に配し、格間には天井板を張る。小間は中央間桁行方向に七間、梁間方向に七間とし、両端間桁行方向に六間、梁間方向に七間配している。下拝天井は中央間・両端間共に鏡天井張りとし、中央間には蟠龍が描かれ、両端間には鳳凰が描かれる。

⑫ 小屋組

丸桁上に大梁を梁間方向に五筋通り架け渡し、その上部矩手に束踏梁を載せる。小屋束は梁間・桁行方向共に粗等間に建て、二重梁受・二重梁・二重小屋束・三重梁受・三重梁を組み、棟束を建てて桁行方向に配される野棟木を受ける。母屋桁は各梁の鼻先に載せ掛け、梁中間高は母屋受を要所に配して母屋桁を載せ、野垂木・野地を受けている。野棟木上には箱棟を組んで大棟下地を形成する。桔木は東側正面が地垂木に八本・飛檐垂木に六本・化粧隅木に二本配し、唐破風は地垂木に四本・飛檐垂木に四本・菖蒲桁に二本配している。南北側面はそれぞれの面で地垂木に六本・飛檐垂木に八本配している。西側背面は地垂木に二本・飛檐垂木に四本・化粧隅木に二本配しており、合計で六二本の桔木鼻を吊金物で固定している。南北入母屋の挿棟木・挿母屋桁は、端の梁上に建てた小屋束で受け、尻を一本内側の小屋束に柄挿して鼻栓で留める。正面千鳥破風は大梁上に束踏梁を渡し、小屋束を建てて挿棟木・挿母屋桁・前包を受け、尻を一本内側の小屋束に柄挿して鼻栓で留める。

⑬ 柱間装置

正面側通り柱間には両折両開き板唐戸が配され、南側手前下拝柱間には舞良戸三本引が備わる。南側奥二間には蔀戸が配される。北側手前下拝柱間には参集殿渡殿内廊下の硝子戸三本引が備わり、北側奥二間には蔀戸が配される。下拝・内拝境柱通り筋には両端間に蔀戸が配される。

#### IV) 唐破風

向拝一間、正面木階五級、銅板軒唐破風付。北側面に参集殿渡殿内廊下が接続。

##### ① 平面

向拝は柱間一間とし、幅一間の擬宝珠木階五級を備える。

##### ② 基礎・軸部・組物

几帳面取りの角形切石礎石に角形礎盤を置き、几帳面角柱を建て、柱頭部内側面には水引虹梁を架け渡す。水引虹梁には波と千鳥・波と蚪龍の浮彫り彫刻が施される。向拝柱内側柱頭と身舎側柱は梁間方向に海老虹梁で繋ぎ、柱頭には絵様実肘木付三重出三ツ斗組を配し、変則に連三ツ斗形式として上部二重虹梁と矩手の菖蒲桁を受ける。向拝柱正面には獅子頭の掛鼻彫刻を付け、両側面は象頭の掛鼻彫刻が配される。向拝柱芯上二重虹梁の矩手に籠彫り彫刻の手挟を配して実肘木で受け、それより巻斗二つ内側に菖蒲桁が備わる。菖蒲桁は出三ツ斗実肘木で受け、二重虹梁に架け渡して、先端を小屋裏に配する桔木と吊金物で緊結する。水引虹梁と二重虹梁間の中央には、厚肉彫りの目抜龍彫刻が配される。

##### ③ 軒唐破風（東側正面）・屋根

挿棟木及び菖蒲桁二本を前方に延ばし、雲形の茨垂木を疎らに五本配し、先端部は眉決が三段付く唐破風板で納める。唐破風中央茨下部には、鳳凰透かし彫刻の兔の毛通しが配される。化粧裏板は棟木側から菖蒲桁方向に羽重ねに張っている。唐破風板上には登裏甲・二重裏甲を載せ、その上部に軒付を配して瓦棒銅板軒唐草水切り下地にて包む。二重虹梁と化粧棟木間の琵琶板上面には、三条小鍛冶の透彫り太鼓嵌彫刻が備わる。両側面は眉決が三段付く縹破風板で納め、桁隠は蚪龍彫刻を配している。屋根は銅板一文字葺とするが、正面照起りと両側面螻羽には瓦棒を配している。箱棟は銅板包みとし、先端には銅板包みの鱗付鬼板を据えている。小屋組は化粧棟木上に小屋束を建て、野棟木を受けて野地の照起りに合わせた骨板を配して屋根形状を構成する。野棟木より箱棟下地を形成する。





## 2. 箭弓稲荷神社の史料調査

### 2-1. 松山やきう稲荷の図

箭弓稲荷神社に関する史資料のうち、現段階で確認が出来る一番古いものが図7の「松山やきう稲荷の図」<sup>注17</sup>となる。作者は浮世絵師歌川国貞<sup>注18</sup>であるが、制作した作品数は一万点以上にも及ぶと言われ、特に役者絵や美人画は他の浮世絵師が描く作品と比較しても当時から高い評価が成されていた。国貞が本格的にこのような作風をテーマに取り組み始めたのは文化4年（1807）頃のことであったが、師匠歌川豊国に15歳で弟子入りした7年後のことであり、早い段階から才能を開花させる力量を持った逸材であったことが判る。「松山やきう稲荷の図」も正確な制作年代は不詳であるが、推定では文化年間中期から後期頃に掛けてのものと考えられており、往時の境内状況を知らうえでも重要である。

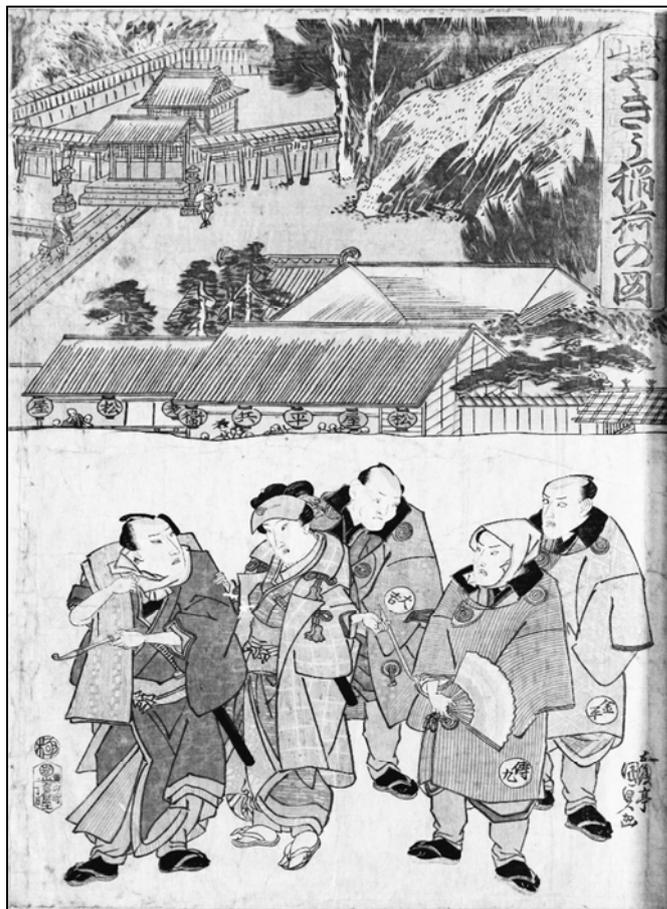


図 7-1 松山やきう稲荷の図 (1/2)

注 17 (埼玉県立浦和図書館所蔵「松山やきう稲荷の図」文化年間頃の作品、出版者：岩戸屋、撮影者：横山晋一)

注 18 (初代歌川豊国の門人であり、後に三代目歌川豊国を襲名する。号は五渡亭などと称した。歌川派の絵師として広重や国芳と共に隆盛期を築いた人物の一人である。)



図 7-2 松山やきう稲荷の図 (2/2)

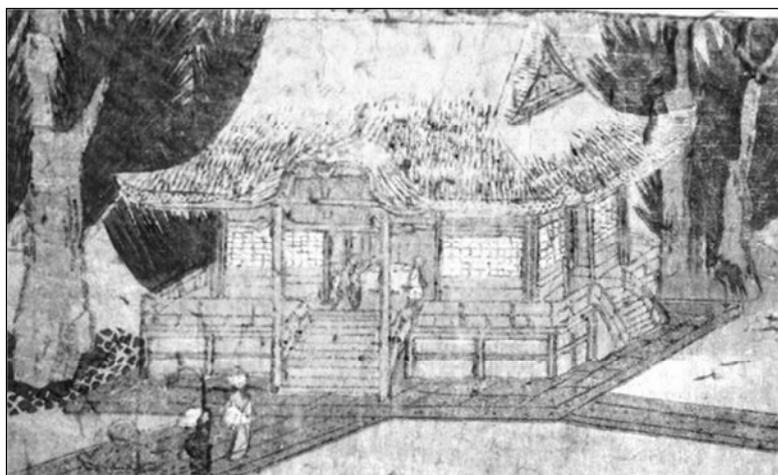


図 7-3 前本殿 (2/2 部分拡大)

「松山やきう稲荷の図」は2枚の絵で構成されており、1枚目(図7-1)には作題と作者名(国貞画)・出版者名(岩戸屋・横山町二丁目)が記されている。これより推測されることは、構図は境内右端を描いたもので、奥に見える朱塗りの社が宇迦之魂社と考えられる。通称として穴宮稲荷・団十郎稲荷とも称されるが、社記によれば「穴宮は当社眷属の穴居なるを以って俗に称す」とあり、七代目市川団十郎も芸道精進の大願成就を祈願している。特に江戸柳盛座での新春歌舞伎興行において、「葛の葉」や「狐忠信」などの段は毎日札止めの盛況となったことに団十郎は感謝し、文政4年(1821)に石祠一社を奉納している。これが切掛けとなり、それまでの民衆の崇敬に加え、多くの役者衆や花柳界・水商売の人々が詣でるようになり、江戸市中を始めとし、方々からの箭弓稲荷詣に拍車が掛かったとされる。なお、役者衆の背面に建つ建物が、松山箭弓茶屋二人衆の一人である松屋平兵衛の老松屋であることが軒下に吊るす提灯名から読み取れ、また、茶屋となる瓦葺・板葺屋根の建物が境内際や境内内側に存在していたことも判る。

2枚目（図7-2）では見開きとなり、境内中央部と左端が描かれているが、松山稲荷大明神の扁額を掲げる石鳥居の両端には茶屋が所狭しに濫立しており、それが境内にも及んでいることが読み取れる。中央の石敷参道際には狛犬や石燈籠が備えられ、その左手奥に神楽殿と札所が配されている。石敷参道の奥には、図7-3にある朱塗りの茅葺三間四面堂の本殿が位置している。屋根は入母屋造で唐破風屋根の向拝が正面に備わり、高欄を四周に廻らして右手に階も配している。正・側面の柱間装置は中央間を共に両開扉とし、その他は腰高障子引違戸を配している。また、基礎は亀腹形式とし、周囲雨落内は石敷仕上げとしている。ここに描かれる本殿は先に存在した社殿だと考えられるが、現状のものと比較すれば規模は小さく、屋根も茅葺となることから参詣者の印象に残り辛い社殿であったと考えられる。この浮世絵から読み取れる最も重要なことは、文化年間には現在の権現造の社殿はまだ存在せず、寛永7年（1630）に建立されたものと考えられる前社殿が存在していたことが明らかとなった。

## 2-2. 川越松山巡覧図誌

稿本「川越松山巡覧図誌」<sup>注19</sup>は上中下の三巻で構成される紀行文であるが、著者は竹村立義という人物であり、この他にも「秩父順拝図絵」・「御岳山一石山紀行」・「高尾山石老山記；杉田雑記」・「鹿島参詣記」・「日光巡拝図誌」などの紀行文も残しており、紀行家竹村立義は江戸時代後期を代表する地誌著述者であり、号は独笑庵と称した。

図8の「川越松山巡覧図誌」は文化15年（1818）5月4日に浄書されたものであるが、竹村立義が御供の者二名を従えて文化15年3月5日に江戸を出発し、5泊6日の旅を克明に記したものとなる。行程は江戸から膝折・野火止などを経て川越に至り、その後、吉見・松山・岩殿平の慈光寺から越生を抜け、再び川越城下に戻った後に三富・所沢を経由して小金井に行き、その後に江戸に戻っている。

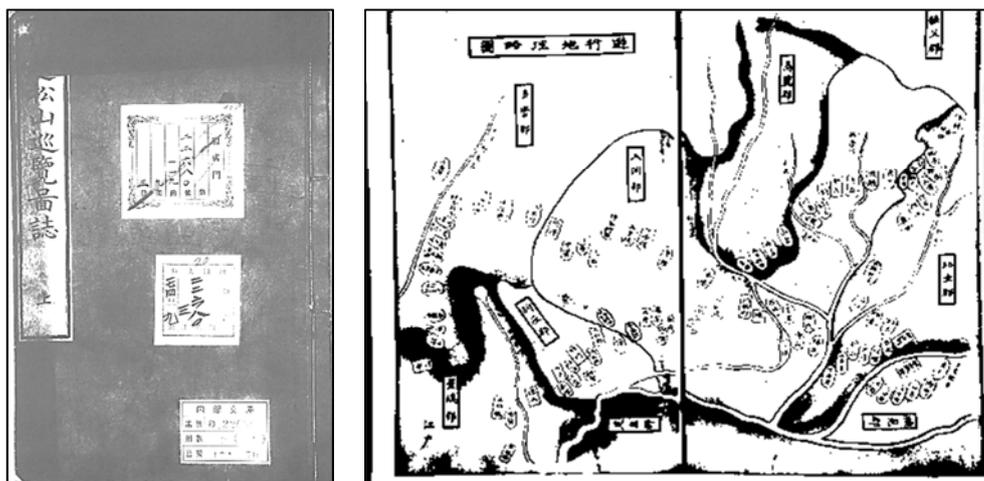


図8-1 川越松山巡覧図誌（上巻巻頭）

注19 （埼玉県立文書館写本所蔵「川越松山巡覧図誌自筆本は現在内閣文庫に所蔵されている」、撮影者：横山晋一）

箭弓稲荷神社への参詣は3日目のことになるため、文化15年3月8日の現況と判断される。なお、この時の解説書面と挿絵に始めて現社殿の情報が掲載されることになるが、造替事業の様子を窺い知ることができる重要な文献資料である。



図 8-2 川越松山巡覧図誌原文（中巻 3 頁～4 頁）

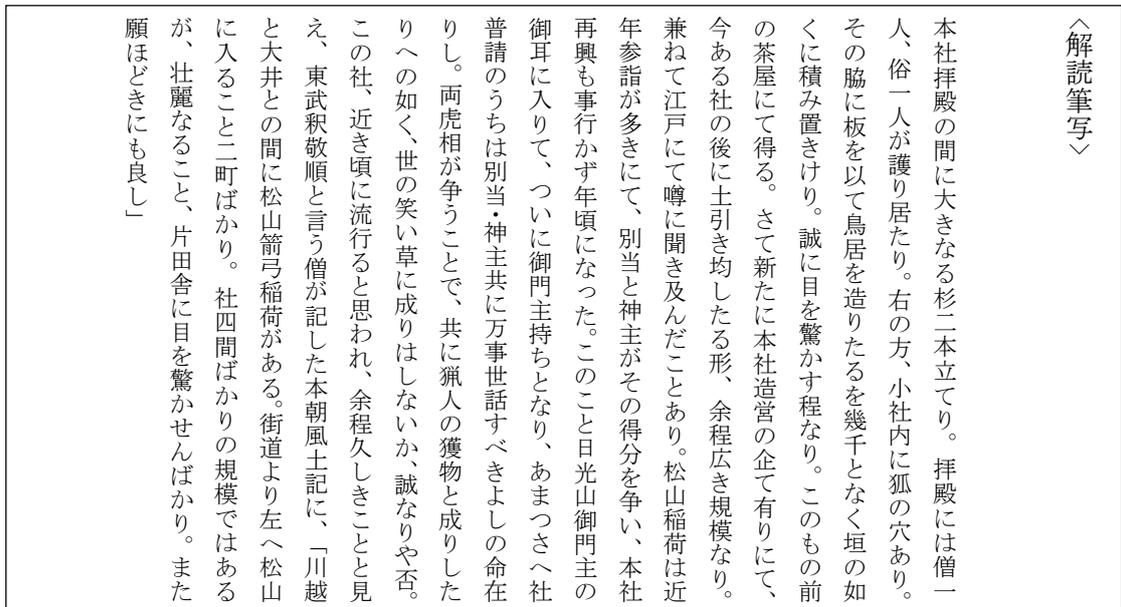


図 8-3 川越松山巡覧図誌解説筆写（中巻 3 頁～4 頁）



図 8-3 川越松山巡覧図誌挿絵 (中巻 8 頁~9 頁)

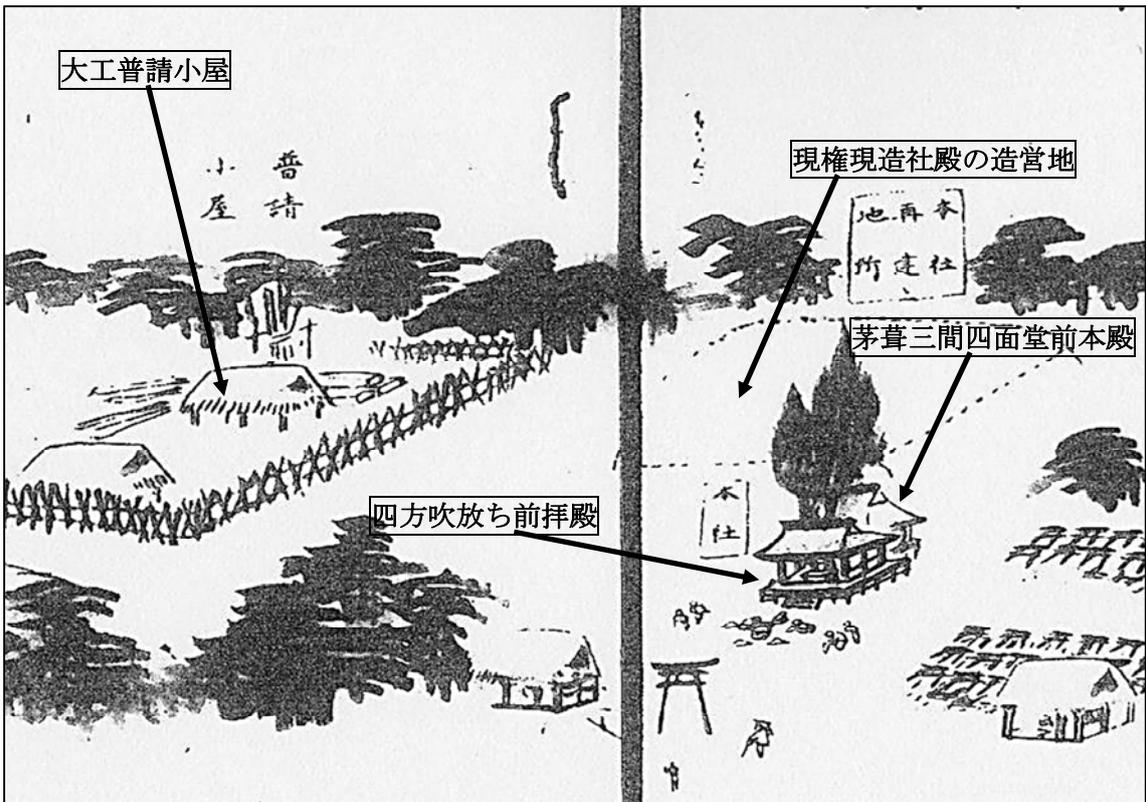


図 8-4 川越松山巡覧図誌挿絵 新本社造営地部拡大 (中巻 8 頁~9 頁)

竹村立義が参詣した頃の本殿は、先に記した朱塗りとする茅葺三間四面堂の社殿であり、それほど規模的にも大きくなかったが、その時点で新たな本社殿造替計画があり、前本殿の左奥手に造営地が地均しされている情景があったことが判る。また、茅葺三間四面堂本殿前面には四方吹放ちの拝殿があったことも読み取れる。これは日吉大社西本宮拝殿（大津市坂本）などにも見られる建築様式となるが、別当の僧が行う加持祈祷にも対応できる形態を採っていたものと判断される。更に仮設の大工普請小屋が既に建設されていることから、間も無く造替工事が着工することも判る。

解説筆写からも明らかな通り、「箭弓稲荷神社への参詣者が増え、別当（福聚寺）と宮司が得分（浄財の取分）で争っていたことは江戸にもその噂が流れるほど有名な話で、新たな本社造替も捗らず、久しい状態となっていた。このことはついに日光東照宮御門主の耳にまで入り、調停のうえ、御門主の預かりとして本社普請中は両者の世話もすることになったが、これが世間のもの笑いの種になった」ということが皮肉を込めて記されている。

この稿本の浄書が終えたのは文化15年（1818）5月4日のことであるが、時代が文政に改元された日でもあることから、状況的に造替工事着工は文政元年（1818）頃のことであったものと推測される。

### 2-3. 白川家門人帳

白川家とは律令官制の神祇官長官であり、古くより朝廷儀式や御拝作法に関して皇族に伝授すると共に、全国の神社を支配する立場にいた。その後、室町時代以降は次官であった吉田家が幕府の後押しを得て台頭したことから、白川家は朝廷儀式や御拝作法を伝授するに留まると共に、神社支配は「松尾社」・「稲荷社」・「大原野社」・「廣田社」・「日御碕社」の五社に数を減らしていた。<sup>注20</sup>文化5年（1808）に全国を四区分し、門人の基本台帳として政策した「白川家門人帳」<sup>注21</sup>と称する史資料が存在する。この四巻には2500名を超える入門者の名が記されるが、大まかな内訳として神社関係が全体の38%となる950名余りを占め、大工が170余名、武士が毛利家などの大名から旗本・城代・藩士などで70余名、公爵関係で約70名、その他百姓から各種職業に従事するものが約1300名となっている。

箭弓稲荷神社は首巻・武蔵編に掲載されるが、これによると寛政8年（1796）9月19日に、別当福聚寺と村中が「四条東石垣 京屋喜右衛門」の推挙を受け、門人である証として「正一位箭弓稲荷大明神」の「神爾・額字・御染筆被遺之」を得たことが記される。

一方、大工職が多く名を連ねるのは、社殿や堂宇の造営などで上棟祭式行事作法に関する許状と祭服烏帽子などの装束着用許可を得るためであるが、箭弓稲荷神社造替事業で大工棟梁を務めた飯田和泉守藤原金軌も白川家門人の一人である。また、嫡男源太郎も跡目として慶応元年（1865）8月に申し出が許可されている。宮大工集団飯田家が箭弓稲荷神社社殿造営事業を旨く受注できた背景には、歓喜院聖天堂造営などで身に付けた建築技量の他に、白川家門人繋がりの人脈があったことも一つの要因として考えられる。

---

注20 （金光英子「諸国門人帳にみる白川家の門人・日本宗教学会・宗教研究第86巻」2013年・p72～p74）

注21 （近藤善博「白川家門人帳（現代語訳版）・白川家門人帳刊行会」1972年）

## 2-4. 箭弓稲荷神社造替基本設計図

大工棟梁を務めた飯田和泉守藤原金軌が設計を行なったと考えられる図9の設計図面<sup>注22</sup>の存在が明らかとなり、今でも末裔が保管管理している。この所在が明らかとなった切掛けは、東京藝術大学大学院美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復研究領域 建造物研究室が平成 22 年度に実施した「堂宮大工飯田家の所蔵資料の評価と保存に関する基礎的研究」の調査が実施されたことによるが、飯田家に唯一残される権現造の図面である。しかし、この段階では何処の社殿の図面であるかが断定されていなかったため、今回 1/10 スケールで描かれたこの図面を改めて実測調査を行い、箭弓稲荷神社社殿の主要寸法と照合した結果、柱間寸法や軒高寸法が概ね合致した。このため、これが箭弓稲荷神社社殿造替のために描かれた基本設計図面であったことが明らかとなった。

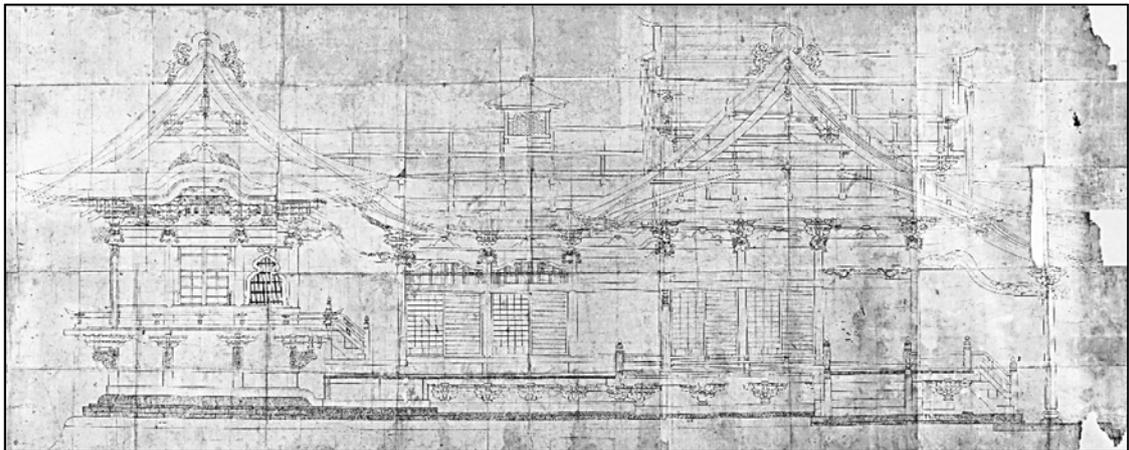


図 9-1 箭弓稲荷神社造替基本設計図（横長 3.37m × 縦長 1.32m）

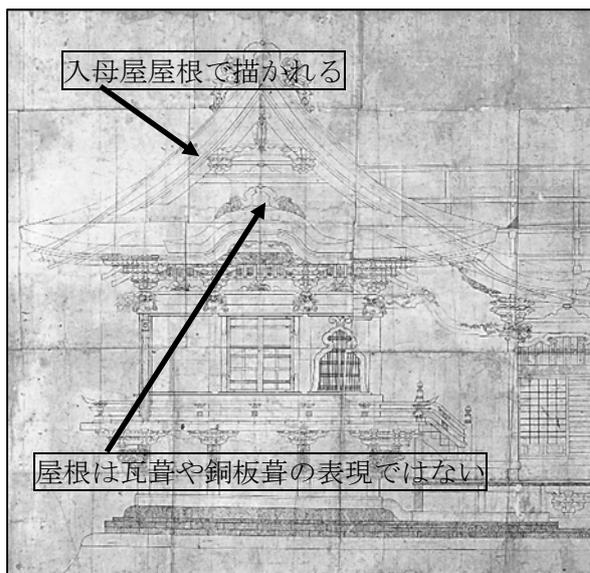


図 9-2 本殿部拡大図

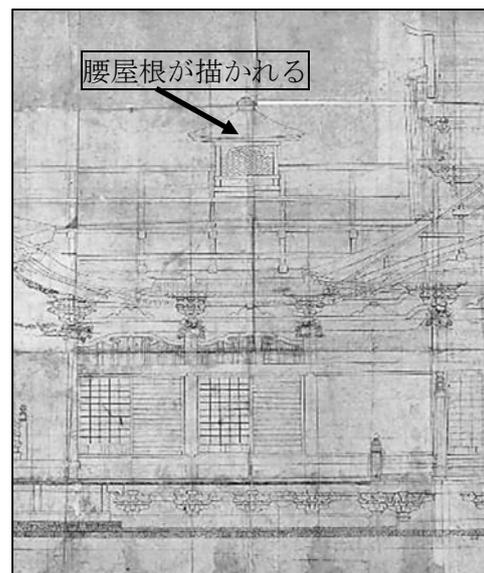


図 9-3 幣殿部拡大図

注 22 （飯田家所蔵「文化年間後期頃の作と考えられ、当初から権現造での計画であったことが判る」撮影者：横山晋一）

なお、この設計図面で注視されることは、本殿屋根が入母屋造で計画されていることであり、現状の切妻屋根・流造とは外観意匠が異なる点である。また、軒廻りは三手先で計画され、中備えには墓股を配している。更に軒唐破風を背・側面の三箇所にも設けることも計画していたようであるが、歓喜院聖天堂奥殿と同様な屋根形式を持つ本殿を、計画段階では目論んでいたことが予測される。この他、幣殿屋根上には煙抜き用の腰屋根も描かれているが、別当が密教寺院（天台宗）であるがための加持祈祷にも対応した計画であったと推測される。なお、小屋組調査の結果、部材に腰屋根が取り付け付いた痕跡が確認できないことから、実施の段階で計画変更を行い、設置を取り止めたものと想定される。

この他、本殿・幣殿・拝殿の屋根は瓦葺の表現ではなく、その描き方から稲荷総本社である伏見稲荷大社社殿屋根と同じ檜皮葺で、計画を企てていたのではないかと推測される。

## 2-5. 上棟遷宮棟札

箭弓稲荷神社では、本殿上棟の際に制作されたものと考えられる棟札二枚<sup>注23</sup>（写真1）が保存されている。その大きさは共に中央高154cm・肩高151cm・上幅21cm・下幅18cmで、厚みが18mmとなる。棟札の上下中央には洋釘孔痕が残存しており、近代に入って小屋裏棟木に固定が成されたようだが、元々は木箱入りで納められていたものと考えられている。



写真1 本殿上棟・遷宮之攸棟札（天保六年八月二日上棟）

注23 （箭弓稲荷神社所蔵「社殿附たりで棟札も埼玉県指定有形文化財・平成元年三月十七日」 撮影者：横山晋一）

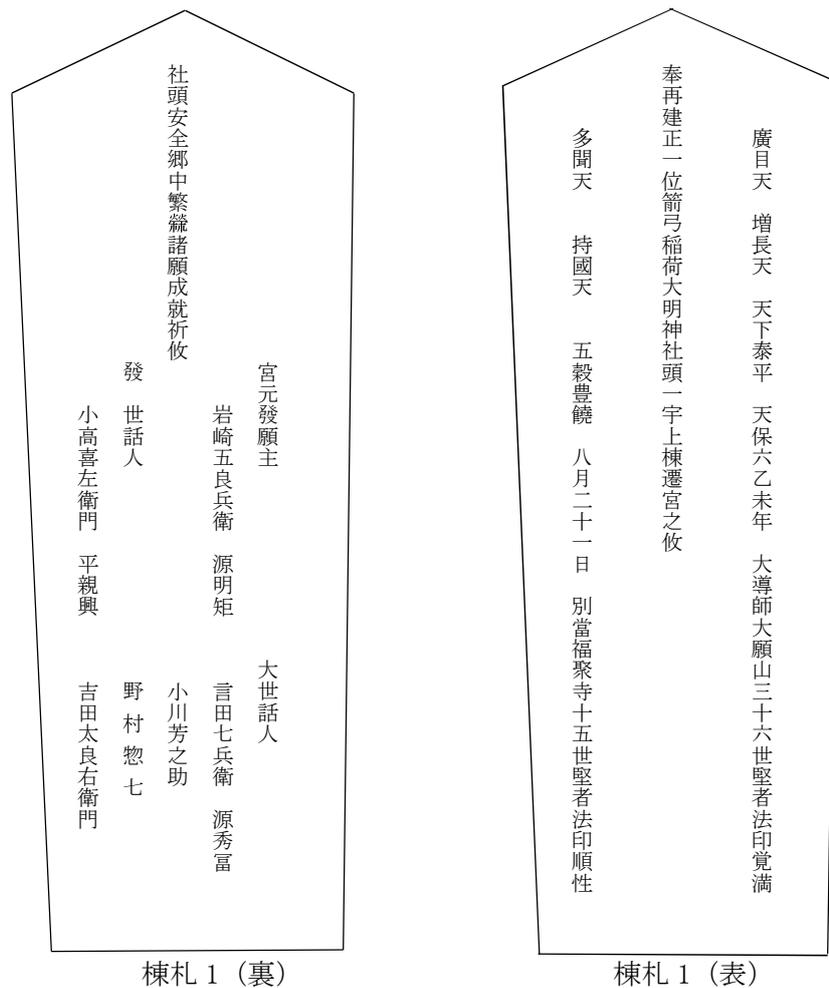


図 10-1 本殿小屋裏発見棟札 1

図 10-1 の棟札から読み取れることは、天保 6 年 (1835) 8 月 21 日に上棟式を執り行い、それと同時に遷宮の儀も成されたと考えられる。なお、この上棟は本殿を指すものと考えられる。この式典の大導師を務めたのが、大願山成就院浄光寺第 36 世の覚満和尚である。浄光寺は現在も東松山市下青鳥に所在する天台宗寺院であるが、往時は延暦寺直系の中本寺として寺領 23 石、末門 39 ヶ寺を従えるほどの寺院であったが、その末寺の一つとして別当福聚寺も名を連ねていた。福聚寺第 15 世の順性和尚が神社宮司と共に、実質的な社殿造替事業の責任者であったことも明らかとなった。しかし、順性和尚が第 15 世の任に就いたのは文政 9 年 (1826) 6 月のことで既に造替事業は始まっており、これに踏み切ったのは先代第 14 世恵旭和尚であったと考えられる。恵旭和尚は大僧都であったことから天台宗 13 階級僧位で言えば 5 級位となり、可也の実力者であったことが判る。中本寺であった浄光寺も恵旭和尚の申し入れには耳を傾けたものと考えられ、資金計画の相談や幕府への造替普請の了承を取り付けるために、浄光寺自らも何らかの形で松平川越藩への働き掛けが成されたのではないかと推測される。

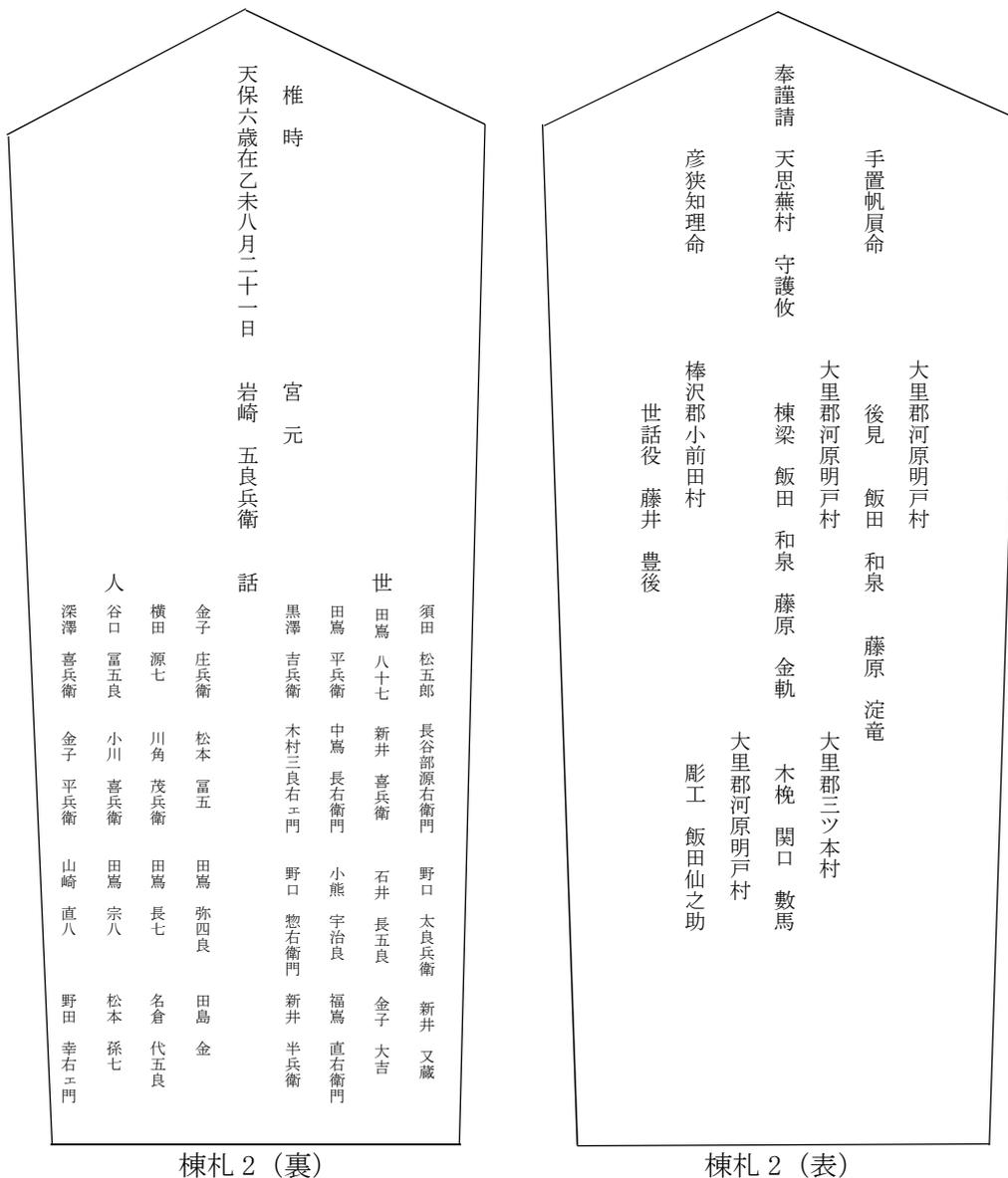


図 10-2 本殿小屋裏発見棟札 2

図 10-2 の棟札から読み取れることは、工事関係者・宮元・世話人が記されることである。これによって、大工棟梁は飯田和泉守藤原金軌が担い、その舎弟となる飯田仙之助が彫刻大工頭を担当したことが判る。飯田一族は国宝歎喜院聖天堂（熊谷市）の造営を担った大工棟梁林兵庫正清や、彫刻大工頭石原吟八朗義明のもとで修行を行ったとの伝承も残っており、箭弓稻荷神社社殿造替は一族にとり、師匠を超える一世一代の仕事であったと考えられる。この他、宮元となる岩崎五良兵衛は文政年間中における松山町の頭取名主であり、また、棟札 1 に記される世話人の小高喜左衛門は天保年間の松山町の名主となる。ここには松山町・本町・箭弓町に所在していた錚々たる実力者が名を連ねており、社殿造替のための資金調達などあらゆる面で尽力をした人々であったと考えられる。

## 2-6. 口上狂言箭弓稲荷

興行演目名が仮名手本忠臣蔵と称する歌舞伎を江戸河原先で上演するに当り、天野屋利兵衛を演ずる主役尾上菊五郎を中心に据えた浮世絵を、歌川国貞（五渡亭国貞）が描いている。天保6年（1835）三月に制作されたもので、図 11 にもある通り「口上狂言箭弓稲荷」注<sup>24</sup>の画題となっており、江戸市中を始め方々にこれが配られたものと考えられる。



図 11-1 口上狂言箭弓稲荷

<p>武州松山 箭弓稲荷は諸人 知る所のあらたかなる 御神にて、年毎に 参詣群集おびたしく わけて此度、御宮新たに 造営して、当九月は 御遷宮ありしこと。又 来る申の三月より、 御開帳有之。私儀 年来の講中にて 猶信心の御方様へ 御披露申上候。</p>	<p>五渡亭 国貞画</p>	<p>口上狂言 箭弓稲荷 天野屋利兵衛 尾上菊五郎</p>	<p>〈解説筆写〉</p>
--	--------------------	---------------------------------------	---------------

図 11-2 口上狂言箭弓稲荷記事解説

注 24 （東京都立図書館所蔵「口上狂言箭弓稲荷・天野屋利兵衛 尾上菊五郎」、デジタルデータ使用許可済み）

この記述によれば、「武州松山にある箭弓稲荷神社は誰もが知っている靈驗新たかな御神様であり、毎年、非常に多くの人々が参詣に訪れています。特にこの度は御宮を新たに造営しまして、この9月（天保6年9月）に御遷宮が執り行われます。また、翌年の3月からは御開帳が行われます。私は長年に渡る講中ではありますが、更に深い信心をお持ちの皆様方へ、このことお知らせ致します」と記されており、広く民衆に箭弓稲荷詣を進めていることが読み取れる。

この三代目尾上菊五郎<sup>注25</sup>は「松山やきう稲荷図」でも紹介した七代目市川団十郎らと共に、化政時代における江戸歌舞伎の黄金時代を作り上げた一人であったが、団十郎との交友関係から箭弓稲荷神社との何らかの繋がりがあったことは明らかであり、天保7年3月から始まる御開帳に併せ、巨額の事業費を費やすことになった造替工事に対して、少しでも多くの浄財を集めることに協力するため、菊五郎自らもこれに一役買ったものと考えられる。なお、浮世絵に描かれる箭弓稲荷神社拝殿は屋根が瓦葺の様相として描かれているが、これは国貞の推測による描写と考えられ、実際の社殿様相とは必ずしも合致するものとなっていない。

## 2-7. 幣殿神饌所・祭器庫出入口板戸に残る墨書

遷座された御祭神のご開帳が天保7年（1836）3月に行われた段階では、本殿が概ね完成していることは明らかだと考えられるが、幣殿神饌所・祭器庫出入口板戸に写真2に示す墨書が残されている。それには「天保七年の晩夏<sup>注26</sup>に箭弓社において写す」と記されており、これから推測しても御開帳が催された段階では既に、幣殿まで造替工事が完成していたことを裏付ける墨書となる。



社 矢 写 晩 丙 天  
弓 於 夏 申 保

章湖

〔解説筆写〕

写真2 幣殿神饌所・祭器庫出入口板戸に残る墨書

注 25 （初代尾上松助の養子であり、後に三代目尾上菊五郎を襲名する。初代市川団十郎以来続いてきた江戸歌舞伎の形を整理した人物として知られている。）

注 26 （陰暦六月をさすが、新暦では六月下旬から八月上旬となる。）

## 2-8. 箭弓稲荷日護摩由来

天保7年に催された御開帳の4年後、図12に示す「箭弓稲荷日護摩由来」<sup>注27</sup>なる木版刷り印刷物が刊行されていたことが調査で明らかとなったが、地元比企郡を始めとし、広範囲に日護摩が呼びかけられていることから推測しても、実績の造替事業費が当初予算から逸脱し、大幅な増となっていたことを窺わせる資料と言える。

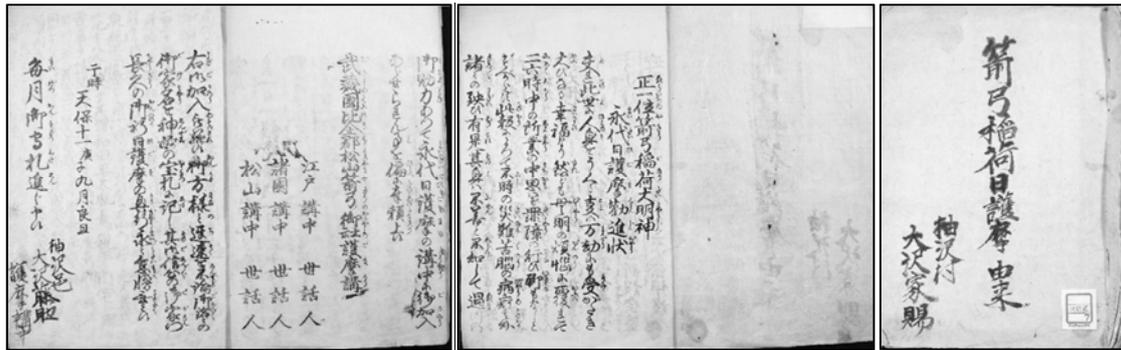


図12-1 箭弓稲荷日護摩由来 柚沢村 大沢家賜

〈解説筆写〉

正一位箭弓稲荷大明神  
永代日護摩勸進状

夫れ此世に人身をうくる事ハ万劫にも受けがたき  
大ひなる幸福なり、然ども無明の煩惱に覆れて  
二六時中の所業の中、思はず罪障の行ひ聊もなしと  
すべからず、此報によつて不時の災難苦惱病痾其外  
諸々の殃ひ有、是其身ハ不善と不知して過つ  
報患と察すべし、抑此殃難を免除よならバ速に  
神明仏陀の冥慮を願ひ、罪障を消滅し、現世  
安穩後生善所の幸を祈奉る事肝要ならん  
其大願を成就するハ護摩修行の法力に増事  
なしとぞ、然バ大日本ハ人皇第一代神武天皇の御宇  
より火焼の祭と称、於宮社燎柴薪設 祭、蓋  
迎陽氣之義なりと云唐土にハ云火祭、但し護摩  
とハ梵語を其俣に用ゆる名なり、如 斯倭・漢土  
西城の三国統一に神仏へ祈願し奉る祭祀の  
修法の最上の護摩なれば、往昔より行ハれて  
神仏三宝の加護疑ひなし、一時此護摩の供  
法あれハ善生の宿曜も是を守護して寿算  
福録増長し、其余徳ハ子孫に潤ひ家門繁栄  
為事不可違、亦此法を日毎に修し奉る時者

図12-2 箭弓稲荷日護摩由来解説筆写 (1/3)

注27 (埼玉県立文書館所蔵「箭弓稲荷日護摩由来・柚沢村・大沢家賜・天保十一年九月」、撮影者：横山晋一)

無病息災延命ハ云に不及、水火刀杖危難  
 疾厄疫癘盜賊の殃災を悉除退散せられん  
 事、此法に益ものなく、護摩修法の功力其妙  
 徳の大ひなる方法の加時祈祷に百倍せるよしを  
 承れり、於官此度箭弓の御社御再建成就の  
 宝前に永代日護摩の修法を願ひ奉らんと  
 信者講中の丹心を発し候へども、其資糧大にして  
 容易からず、依 之同志の人々に勸進しわづ  
 かに一日一銭の護摩料ハ信者の為にいたミはあらじ  
 其些の錢糧を捧て御神の加護の莫大なる恵を  
 万代不朽の子孫にまで蒙らん事亦難有修  
 法ならずや、連十方の信者達この發願心に  
 御助力あつて永代日護摩の講中に御加入  
 あらせられんことを偏に奉頼上候

武蔵国比企郡松山箭弓ノ御社護摩講

江戸講中 世話人  
 諸国講中 世話人  
 松山講中 世話人

図 12-2 箭弓稻荷日護摩由来解説筆写 (2/3)

右御加入被遊候御方様遅速を不論、御銘々の  
 御家名を神前の宝札に記し、其御信心の後家門  
 長久の御祈日護摩の興行永々怠慢無之候

于時  
 天保十一庚子九月良日

柚沢邑  
 毎月御守札進じ申候 大沢藤助  
 護摩講中

図 12-2 箭弓稻荷日護摩由来解説筆写 (3/3)

この解説筆写文を現代語訳すると、「そもそもこの世に人として生を受けることは、奇跡といえるほどに大きな幸いである。しかし、無知ゆえの煩惱に覆われた日常では、無意識のうちに往生の妨げになるような悪行（罪障）を成してしまうものである。その報いとして思いがけない災難や長煩い病苦、その他さまざまな災いがある。災いとは、自身では不善と知らずに間違いを犯したことへの報患であると察するべきである。いったい、そのような災難から免れようと思うなら、直ちに神仏の深い御心にすがって罪障を消滅させ、現世の安穩と来世の浄土での幸を神仏にお願い申し上げることが肝要であろう。そのような大願を成就させるには、護摩修行で身につけた法力（祈祷・除災などの際に発揮される超人的な力）に優るものはないという。そのため、我が国では人皇第一代天武天皇の時代から火焼の祭りと呼ばれて、宮社で雑木の篝火を煌々と焚いて祭りを設営した。おそらく、火焼（護摩）には万物が動き生まれ出ようとする気、すなわち陽気を迎える意味があるようだ。中国では火祭りといっている。ただし、護摩とはインドの古代語である梵語をそのまま漢字に当てはめた用語である。このように日本・中国・インドの三国で同様に、神仏に祈願申し上げる祭祀の修法として最上のものが護摩なのである。しかも往古より行われていることから、神仏三宝の加護が得られることは疑いない。一時この護摩による供法を行えば、良い星回りに守られて長寿で家産に恵まれ幸せは次第に増して、その余徳は子孫にも及び、一族が繁栄することは間違いのないことである。また、護摩供法を日々とりおこない差し上げれば、無病息災・延命はもちろん、水難や火災、刀剣による命にかかわる災難、疾病や流行病、盗難等々、さまざまな厄災をすべて排除し退散させるであろうことなど、この法（護摩）に優るものはない。護摩をとりおこなうことによる功德の力は、妙徳の大きいとされる万法の加持祈祷の百倍もあると拝聴している。

このようなことから、この度の箭弓の御社の再建成就にあたり、御社の神前で永代日護摩を執り行うことを信者講中が発願したのであるが、そのためには甚大な資金や食糧が必要であって、容易なことではない。そこで同志の人々に寄附を募り、一日わずか銭一文の浄財、一カ月銭三十文の奉納を願うものである。これは永久のことではあるが、銭は財宝とはいえ日に遣い捨てやすいものなので、一日に銭一文の護摩料は信者にとってそうそう懐の痛むものではないであろう。わずかな銭糧を奉納することで御神の加護を受け、その莫大な恵みの子々孫々にまで与えられる事は、また何とありがたいことではないか。

さても賢明な全国の信者の皆さま、この（発起人の）発願心に御助力下さり、永代日護摩の講中に御加入下さる様、偏にお頼み申し上げたい。なお、御加入下さった方には、加入時期の遅速を問わず、御一人御一人の御家名を神前の宝札に記し、その信心深い一族の長久の祈りは日護摩の奥行によって（怠慢無く）永久に続くことになる」と記されている。

これより推測されることは、「御社の再建成就」という文面が記されるため、既に天保七年三月頃に完成していたと考えられる本殿・幣殿に加え、天保11年（1840）9月には拝殿は既に完成していたことを想起させる。なお、その後も付帯工事は継続された模様で、全造替事業は天保14年（1843）10月の完了と見られる。

## 2-9. 箭弓稻荷大明神略縁起

「比企郡神社誌」注<sup>28</sup>に箭弓稻荷神社略縁起なるものが掲載されている。これは別当福聚寺第十五世順性和尚が記した文書とされるが、その記述内容は図13の通りである。

〈筆写〉

武蔵国比企郡松山

正一位箭弓稻荷大明神略縁起（神仏混淆時代略縁起）

夫倉稻魂神は百穀を播玉ふ故に奉名所にして、此御神は誠に諸人を哀憐の御心深く、蒼生作物は草の片葉までも百の災を穢除玉ふの御誓ひあり、亦日宇賀美多麻神は伊弉諾伊弉冊二柱尊所生神服機殿祝祭三狐神同座神也故名專女神神代伊弉冊亦委く日本紀神代卷を拝閲すれば天照大神の神勅にて豊葺原中国有保食神を月夜見尊就候あり其時保食神に対して月読尊の非礼ありしかば天照大神御怒甚く月夜見尊を咎玉いて復天熊人を遣して看玉ふ此折節は早保食神の神功全成就して其土地に稲麦粟稗大豆小豆の種悉く出生牛馬飼馴して農業の助力をする類ひまで教習はし有養蚕の道得抽絲など凡後年の今の代に国民生命を保寒暑を防ぐ所為までも丹誠せられ在るよしを天照大神の聞召て喜玉ふ事限りなく保食神は万民の盛になるべき基を開発く大功の神靈なりと賞し玉ふ、人皇四十三代元明天皇の御宇和銅四年辛亥二月九日初午に当の日山山城国三峯に保食神と荷田神を合して稲荷と称し祭は殊更神霊の奇端在に依なり是より益保食神稲魂を世上一統に尊崇し五穀成就を祈るに怠慢なし神亦神通広大に在はる日本国中の山林田野に至るまでも垂迹ありて百穀を経営し天下太平万民豊樂の大業を司玉ふ最も尊き神靈なり爰に当社正一位箭弓稻荷大明神と申奉るは往古久しき垂迹にて靈験感応枚挙遑あらず箭弓の名号の故を記せば頃は人皇六十八代後一条院の御宇長元元

図13 箭弓稻荷大明神略縁起筆写 (1/6)

年下総国千葉の城主前上総介平忠常謀反を企安房上総下総三ヶ国を切從破竹の如き勢ひにて威を八州に震ひ四万五千人の大軍を越し武蔵国へ押出せり此節冷泉院の判官代源頼信は甲斐守に被為任甲斐の国府に着玉ひし所忠常追討の論旨を賜り俄に軍の用意を調へ近郷の兵等を催し玉ふ此頼信朝臣は源家の棟梁多田満仲の御子にて頼光朝臣の御舍弟なりしかば軍略武勇兼備して心賢き大将なれども甲府に下りて間もなく万事心に任せぬ中に平忠常が勢ひ遠近を虜し猛威盛の時なれば頼信の催促に随ひ寄者僅なり然とて敵は程近き武蔵野へ操出し寺院民家を放火して直に都へ責登らんと乱妨甚しかりければ猶予の軍配なりがたく一族良党近郷の地待些に五千余人に不過小勢のまゝに甲府を立て武蔵国へ入玉ふ忠常は入間郡河肥の地に押出すこゝにおいて頼信朝臣は比企郡松山に陣を張看使をもつて敵陣を窺はせらるれば前上総介の軍配は長元元年より三年以来の戦場に自なる軍の調練元来烈しき関東の氣質に備はる武辺の勇惣軍既に五方に及び月の名におふ武蔵野に輝したる星兜尾花に等しき鋒長刀最晃々しき形勢なれば源氏の小勢の不知案内容易追討はなりがたくさすが武門に蒼ある頼信朝臣も心を悩し聊猶預し玉へば其手に従ふ兵等も敵の大軍に聽怖し勇威も怠みて看へたりしが頼信朝臣の在ます本陣の傍に最年経たる祠有頼信是を見そなはして在所の老人を呼出し当社は何の神なりやと問はせ玉へば翁は答て此御宮居は野久稻荷大明神と申て此野に久しき御神にて本地は十一面觀世音に在ます由を答しかば頼信朝臣は聞き召て夫は僥倖の事にこそ野久は則箭弓にて弓箭採身に因有殊に十一面觀世音

図13 箭弓稻荷大明神略縁起筆写 (2/6)

注28 (神社庁比企郡支部・比企郡視崇神会編「比企郡神社誌」1960年・P15~P19)

は神通の化現なり怖畏軍陣中衆怨悉退散の経説は空しからず  
通れ神通力の冥助に依て怨敵退散なさしめ玉へと朝敵退治の  
願書を呈し太刀一振俊馬一疋を神前へ奉納せられ一終夜の御  
祈願有て其暁に軍勢を調へ正し最敵重に進発あれば明行空に  
自ら雲の景色の白羽の箭と見ゆるか如く薄靡て一陣の風颯と  
吹立敵陣の方へ彼雲は箭を射るさまに飛行けば源氏の諸軍は  
勇立思はず雄詰を上互に心を励せば大将頼信攸然と軍配とり  
て真先に走出し神力応護の勝軍は此寄端に知らるゝぞ進々と  
下知あれば官軍一同に勢ひ烈しく心を一致に五千余騎平忠常  
が屯に押寄唯一戦に敵の大軍を討破り頓て賊党を三日三夜追  
討し悉く亡しかば偏に箭弓の神徳と頼信喜悅不斜社殿を再  
建仕玉へり此時より弥々益々神威靈驗炳然諸願満足の就中盜  
賊の難を徐福田満の開運を司り玉ひて其御利益を蒙る者日々  
月々に充滿せり然ば宝徳三年二月初午に河肥の左金吾持資主  
の心願成就の法楽を捧げられ文明年中まで年毎の祭礼をも太  
田道灌よりして執行せられしとぞ亦松山の城を上田氏難波田  
氏も康正年中より代々の領主達尊信尤厚かりき抑松山の地は  
人皇百三代後花園院の御宇康正元年三月関東の管領扇ヶ谷の  
上杉持朝の旗下の老功太田道真の差図によつて同じく扇ヶ谷  
の大将上田左衛門尉築て籠城せしが寛正二年六月下旬前左兵  
衛佐成氏下総国古河の城より打て出小山宇都宮結城の諸將武  
蔵の七党是に与し大軍にて責掛りしゆへ暫時開城して上田は  
鎌倉に備を立たり同年の九月成氏と上杉方と越ヶ谷野に戦ひ  
成氏敗軍なせしかば関東悉く管領家の下知に従ひ松山の城は  
以前の如く上田左衛門尉これを守る其後長享元年正月より同

図 13 箭弓稲荷大明神略縁起筆写 (3/6)

二年の夏まで両上杉家不和となり松山に対陣せしが終に山内  
の上杉敗軍して松山方勝利を得たり是より二年の後延徳元年  
六月十八日山内上杉顕定と扇谷上杉定正と再度武州入間郡河  
越の地に戦ふ此時松山の城より上田新蔵人曾我兵庫助扇谷の  
加勢として押出すと異本残太平記に記されたりされば上田氏  
は松山を築立られし以来康正長録寛正文正応仁文明長享延徳  
明応年中まで四十余年が間箭弓の御社の神徳を蒙りしこと少  
からず其後永正元年以上杉の河越合戦の時より上田氏は鎌倉に  
在て同じ扇ヶ谷の大将難波田弾正左衛門父子天文年中まで四  
十余年松山の城を守りて変らず当社の靈驗を尊まれるが天  
文十四年河越の城に移り松山は二年の間明城となれり天文十  
六年よりして小田原北条家の幕下上田能登守入道安德齋松山  
の城主なりしが十五年を経て永禄四年の九月武州岩築の住人  
太田美濃守山楽齋入道資正越後勢と同意して松山の城を責取  
上杉憲勝を大将にて二千余人を籠らせ資正は岩築に引上たり  
同年の十二月十一日甲州勢と北条方と一致して松山の城を五  
万五千余人の大軍にて責立しかども要害無双の名城にて太田  
資正か手配をなし置たる下知なれば寄手の大軍責めあぐみて  
落し得ず翌年の永禄五年甲州の飯富源四朗景仲といふ者和談  
をとりむすび城主憲勝は北条家に縁を結び都築郡にて三百貫  
を領し永禄五年三月より元の如く上田安德齋城主となり天正  
十八年まで二十九年が間安德齋の子息上田上総介松山の城主  
なり如斯城主も度々混雑して関東の兵乱止時なく別て川越松  
山の地は武蔵国中に屈竟の戦場なりしゆへやゝともすれば兵  
火の為に焼討せられ神社仏閣の尊きも大破衰廢して影も残ら

図 13 箭弓稲荷大明神略縁起筆写 (4/6)

ぬ土地さへありけり此故に当社も漸々に衰微して野中の小社となり近き辺に住庵主の僧が神前に一燈を供ずるを往昔の万燈に代たり斯て天正十八年神武の神宮を江都に開かせ玉ひしより百有余年の星霜に廃亡したる関東の神社仏閣君の御恵に再興して旧知に勝る繁昌となりし事最難有御代なりけり

再說当社の中興を尋奉れば今を去事二百二十五年の昔人皇百九代後水尾院の御宇元和三年南光坊天海大僧正駿府より下野国へ神輿を守護し趣せ玉ふ御道筋当松山の地を御通行の折節一天俄にかき曇雨風一陣烈しかりければ神輿を庵室に入奉り晴るを待せ玉ふ時しも忽然として威風嚴々たる老翁手に弓箭を携へ庵室の庭前を守護する如く現れたり僧正は奇異の思ひにて彼翁に向ひそも老翁は何人にて何故に此所に来られしぞと問はせ玉へば老翁答て日我は人類にあらず稲魂の神使なり今僧正の警衛し玉ふ御先を掃除して非常を静むる役を勤め当野に久しき住所を全せん事を願ふと告終て忽に影を止す此時風静りて最朗なる晴天となりぬ依之天海大僧正は庵主を呼出して神人の告を語り庵に近き当社の旧記を尋ね玉ひ其神靈を尊み社の造営をはからせられ則庵を一寺に取立玉ひ福聚寺といふ寺号を賜りて庵主を別当職に補せらる夫より以来神威年々に盛にして靈験感應響の物に応ずるが如し然ば寛保年中御地頭島田氏の心願成就ありて宮社の修覆あり其後十三世別当堯順大志願を發して本社拝殿往古の壯觀に勝らん事をはかる然れども大業なるに依て不易此時は寛政五丑年のことなりしが神靈の神通にて別当堯順へ夢中の示現あり我齡既に二千九百余年に及び結縁の時熟すと告玉ひしが奇なるかな其項

図 13 箭弓稻荷大明神略縁起筆写 (5/6)

より遠近の貴賤当社の御利益尊き事を知り伝へ心願満足の時を得て招ざるに歩行を運び神徳を蒙る物枚挙がたしこゝにおいて自然神威光々として朝日の輝くに異ならず此度本社拝殿の修造悉く成就して旧年に勝る御社となりし事全神徳御利益の故に依とはいへども一つには信者講中の寄進丹誠の致す所なり於茲当社の由来を本縁起の中より略記して普く諸人に告まいらせ其御利益を蒙らせ度神亦人々の崇敬に威徳弥増の感応あらん事愚納が丹心こゝにありといふ。

干時天保十一庚子年九月良辰

武蔵国比企郡松山箭弓御社別当

中興開山祐弁ヨリ十五世

法音山多聞院福聚寺堅者法印順性謹誌

図 13 箭弓稻荷大明神略縁起筆写 (6/6)

箭弓稲荷大明神略縁起は文末に記される年号から、天保 11 年（1840）9 月に認められたものであることが判るが、これは先の箭弓稲荷日護摩由来と同一の年月となる。日護摩由来では造替費用の高騰で膨れ上がった予算に対応するため、世話人たちが必死に浄財集めに苦慮している状況が読み取れるものであったが、こちらの箭弓稲荷大明神略縁起ではそのような切迫感を感じさせる記述は無く、どちらかと言えば神社の崇高な謂れを格調高く記した構成となっている。なお、文末下線部にもあるとおり、「本社拝殿が修造した」と記される文面からも、拝殿の工事は天保 11 年 9 月には既に完成していたと推測できる。ただ、この時期は天保大飢饉の影響を受けた厳しい時代であったことも事実であり、そのためか順性和尚の文面には“成就や完成”という用語は使用されず、拝殿が“修造”という表現となっている。これから推測できることは、現拝殿の構成部材の一部に、先に存在した社殿の古材転用が行われた可能性も十分に考えられ、可能な限り工事費の削減に努めたとも考えられる。なお、この文書は別当福聚寺が戦前頃まで保管していたとのことであるが、現在は原本が所在不明となっているため、参考資料扱いに留まっている。

## 2-10. 箭弓稲荷社再建普請諸入用帳

この地域の天台宗中本寺である成就院浄光寺より、図 14 に示す「箭弓稲荷社再建普請諸入用帳」注 29 なる貴重な文書が発見された。これは今回の造替普請に伴う実績報告書に相当するものであり、建物別・工種別に要した経費が詳細に記されるものとなる。



図 14-1 箭弓神社再建普請諸入用帳

注 29 （浄光寺より箭弓稲荷神社に譲渡「箭弓神社再建普請諸入用帳」天保十四年十月、撮影者：横山晋一）

〔解説筆写〕

箭弓稻荷社再建立普請諸入用帳

一、本社地之間	正面	壹丈八尺
奥行	壹丈七尺二寸	
一、向拝土	壹丈五寸	
一、幣殿地之間	正面	壹丈五尺八厘
奥行	四間壹尺五寸	
一、拝殿地之間	正面	六間半三寸九分六厘
奥行	四間三寸八分八厘	
一、向拝土	壹丈三尺壹寸貳分	
正面	壹丈五尺八厘	
本社組物成三年先 幣殿拝殿組物玉組		
本社諸入用合高		
一、右大工手間代		金五百三拾兩
一、間扶持方代		金貳百六拾五兩
一、材木代		金六百五拾兩
一、右材木引渡		金百八拾兩
一、木挽手間代		金貳百六拾五兩
一、右扶持方代		金百三拾兩貳分
一、屋根方手間代		金八拾五兩
一、右扶持方代		金四拾貳兩貳分

図 14-2 箭弓神社再建普請諸入用帳解説筆写 (1/4)

一、同 木代		金五拾兩
一、彫物方手間代		金三百三拾兩
一、右扶持方代		金百拾兩
一、石代 手間扶持引渡入用金		金貳百兩
一、鉄金物代		金八拾三兩
一、内陣 塗師絵方極彩色共		金九拾六兩貳分
一、内陣格天井 極彩色絵入		金貳拾五兩
一、同渡金 金物代		金拾五兩
金高凡ノ金三千五拾九兩貳匁		
幣殿諸入用		
一、大工手間代		金百八拾兩
一、右扶持方代		金九拾兩
一、材木代引換入用共		金百七拾兩
一、木挽手間代		金九拾貳兩
一、右扶持方代		金四拾六兩
一、石代 手間扶持引渡入用共		金七拾兩
一、彫物方 扶持方共		金四拾七兩貳分
一、屋根手間代 杉木代扶持方共		金參拾七兩貳分
一、格天井 粉色絵入		金拾五兩
一、本社幣殿 建前足場上覆入用		金百拾五兩
金高凡ノ金八百八拾參兩 銀參匁		

図 14-2 箭弓神社再建普請諸入用帳解説筆写 (2/4)

<ul style="list-style-type: none"> <li>一、大工手間代 金百五拾兩</li> <li>一、右扶持方代 金百貳拾五兩</li> <li>一、材木代 金參百四拾兩</li> <li>一、右引渡入用 金八拾參兩</li> <li>一、木挽手間代 金百參拾兩</li> <li>一、右扶持方代 金六拾五兩</li> <li>一、仮葱屋根方 手間代木材扶持共 金貳百五兩</li> <li>一、彫物方 手間代扶持方共 金貳百四拾老兩 銀六匁</li> <li>一、石代 手間代扶持方共 金百貳拾五兩</li> <li>一、千鳥破風向拝金物代共 金七拾兩</li> <li>一、向拝銅板葺 金五拾四兩</li> <li>一、鉄金物代 金五拾兩</li> <li>一、拝殿建前足場 金五拾兩</li> <li>一、材木小屋木挽小屋共 四棟 間口八間 奥行四間 金百拾八兩</li> <li>一、右諸入用修葺屋根替 金五拾六兩</li> <li>一、諸職人細工小屋 <small>間口十口四間 奥行四間</small> 金五拾六兩</li> <li>一、同諸小屋 間口九間 奥行三間 金五拾四兩</li> <li>一、拝殿合天井 三間彩色絵入 金參拾兩</li> <li>金高凡ノ金千七百四拾六兩 銀六匁</li> <li>參口金高凡惣ノ金五千六百八拾八兩 銀九匁</li> </ul>
--

図 14-2 箭弓神社再建普請諸入用帳解読筆写 (3/4)

<ul style="list-style-type: none"> <li>一、御礼所 坪数合百四拾五坪半 壹ケ所</li> <li>右素立側ノ迄諸職人 金九拾老兩</li> <li>手間扶持諸入用共</li> <li>同</li> <li>一、玄關 間口貳間半 奥行貳間 金貳拾兩</li> <li>一、水屋 <small>材木石大手間代 諸入用瓦屋根共</small> 金貳拾五兩</li> <li>一、仮立神樂殿 土瓦屋根 金拾老兩</li> <li>一、上棟諸入用 金貳百兩</li> <li>金高凡ノ金參百四拾七兩</li> <li>惣高合金六千參拾五兩銀九匁</li> </ul>	<p>天保十四卯年十月</p> <p>武協比企郡松山町</p> <p>名主 町方惣代 浅五郎 福聚寺 良之助</p>
---	--

図 14-2 箭弓神社再建普請諸入用帳解読筆写 (4/4)

この再建普請諸入用帳の冒頭には各建物規模が記されているが、図 14-3 に示す通り、現状の建物規模と概ね合致することから、この文書は箭弓稲荷神社現社殿のものともて間違いないと考えられる。なお、建物平面寸法検証も行って見たが、粗計画寸法に合致した。

I) 本殿			
本社地之間	正面	壹丈八尺 (十八尺) → 5.454mm	合致
	奥行	壹丈七尺二寸 (十七尺二寸) → 5.228mm	合致
	向拝土	壹丈五寸 (十尺五寸) → 3.182mm	合致
II) 幣殿			
幣殿地之間	正面	壹丈五尺八厘 (十五尺八厘) → 4.547mm	合致
	奥行	四間壹尺五寸 (二五尺五寸) → 7.726mm	
		(桁行寸法にて約 30mm の近似差)	概ね合致
III) 拝殿			
拝殿地之間	正面	六間半三寸九分六厘 (三九尺三寸九分六厘) → 11.937mm	合致
	奥行	四間三寸八分八厘 (二四尺三寸八分八厘) → 7.390mm	合致
	向拝土	壹丈三尺壹寸貳分 (十三尺壹寸貳分) → 3.975mm	
		(身舎柱～向拝柱間が約 267mm の大差となることから、実際は壹丈四尺壹分式厘と記すべきものを、誤って記したのではないかと推測される)	
	向拝正面	壹丈五尺八厘 (十五尺八厘) → 4.547mm	合致

図 14-3 箭弓神社再建普請諸入用帳に記される平面寸法検証

この普請諸入用帳は建物別・工種別に要した経費が克明に記されているが、本殿総工事費は 3059 両 2 匁であったことが判る。江戸時代中期から後期における米価価格から類推した 1 両の現在貨幣価値は凡そ 6 万円程度<sup>注 30</sup>になると考えられているため、これを当て嵌めた本殿の相当工事費は 1 億 8 千 4 百万円ほどとなる。これを本殿坪単価に換算すると約 1 千 3 百万円強/坪となり、かなりの高額であることが判る。なお、この記述で注視すべきは、屋根材料が木代と記されており、現在の銅瓦型葺屋根ではなかったことが裏付けられる。

同様に幣殿を見た場合、総工事費は 883 両銀 3 匁であったことが判る。現在貨幣価値に換算してみると、幣殿の相当工事費は 5 千 3 百万円ほどとなる。これを幣殿坪単価に換算すると約 3 百万円強/坪となる。発見文書などにより、天保 7 年 3 月までに本殿・幣殿の第一期工事を完了させ、併せて御開帳が執り行われているが、ここまでに要した工事費の合計は約 3942 両となり、現在貨幣価値での相当工事費は 2 億 3 千 7 百万円ほどとなる。なお、記述で注視すべき点は幣殿も同様に、屋根材料が木材となることであるが、ここでは特に使用された材種が「杉材」であることも明記されているため、創建当初の屋根は現状の棧瓦葺ではなく、杉板を小割して屋根材とする柿葺の可能性がこれより推測される。

注 30 (日本銀行金融研究所・貨幣博物館公式サイトより・2016.08.30 アクセス)

更に拝殿も同様に見た場合、総工事費は1746両銀6匁であったことが判る。現在貨幣価値に換算してみると、拝殿の相当工事費は1億5百万円ほどとなる。これを拝殿坪単価に換算すると、約4百万円弱/坪となる。なお、記述で注視すべき点は拝殿も同様に、屋根材料が木材となることであるが、ここでは「仮葺屋根」つまり仮設の素屋根が設置されたことも判ったが、天保7年3月からの御開帳に対応するため、拝殿が無い状況において参詣者への雨天対策を兼ねた仮設であったものと想定される。この他、大工手間代を各建物の坪単価で比較した場合、本殿は38両強/坪・幣殿は11両弱/坪・拝殿は6両弱/坪となり、拝殿に要した大工手間は本殿の15%、幣殿の55%とかなり低いことが判る。このことから、拝殿建立に関しては、既存建物の古材転用などがあったのではないかと推測される。

以上により、造替工事費の総合計は5688両銀9匁となるが、現在貨幣価値に換算した相当工事費の総額は3億4千2百万円ほどであったことが判る。これを社殿全体の坪単価に換算すると約6百万円弱/坪となるが、高額要因となる本殿を見た場合、幣殿や拝殿と比較すると平面積は一番小規模ではあるが、屋根の棟高は一番高く、また、切妻屋根螻羽の出も深く、連結するなかでは最も雄大に見える建物である。更に内外を装う彫刻は多種多様であると共に、個々に生命が宿っている感じを与えるもので、大工棟梁の飯田和泉守藤原金軌と彫刻大工頭を務めた舎弟の飯田仙之助が特に力を注いだことが読み取れる。しかし、これが起因し、拝殿の完成を遅らせる主たる原因になったのではないかと考えられる。

箭弓稲荷神社造替事業に関しては、この地を所管していた川越藩からの公的支援は一切無く、事業はそれまでの蓄えと新たな信徒からの浄財や借入を見込んだ単独での事業計画となる。工事途中には天保大飢饉にも直面し、往時の経済を揺るがす厳しい状況のなかで、拝殿造営を一時中断しながらも工事を天保11年(1840)9月には完成させていたと考えられる。なお、この精算書が提出されたのは3年後の天保14年(1843)10月のことであるが、付帯工事が継続して行われていたことや、この度の造替事業が当初計画より可也予算超過したことで、それを賄うための個別調整などがこの間にあったものと想定される。そして漸く3年の月日を要して支払い目処がたったことから、神社別当福聚寺から中本寺である浄光寺に最終事業清算報告を行なったものと考えられる。

## 2-11. 拝殿屋根改修棟札

本殿内陣の調査中に偶然にも、竣工後の拝殿屋根改修を裏付ける棟札一枚<sup>注31</sup>(写真3)が発見された。その大きさは中央高42cm・肩高40cm・上幅12cm・下幅10cmで、厚みが15mmとなる。棟札の上部と中央部には和釘と和釘孔痕が残存しており、それ以外の打ち替えは確認されないことから、改修工事の直後に拝殿小屋裏に取付け、その後、近代に入って何らかの理由によって取り外され、内陣奥に仕舞い忘れ去られていたものと考えられる。なお、棟札に記される記述は図15に記す通りである。

---

注31 (箭弓稲荷神社所蔵「本殿内陣より発見・安政五年四月」、撮影者：横山晋一)

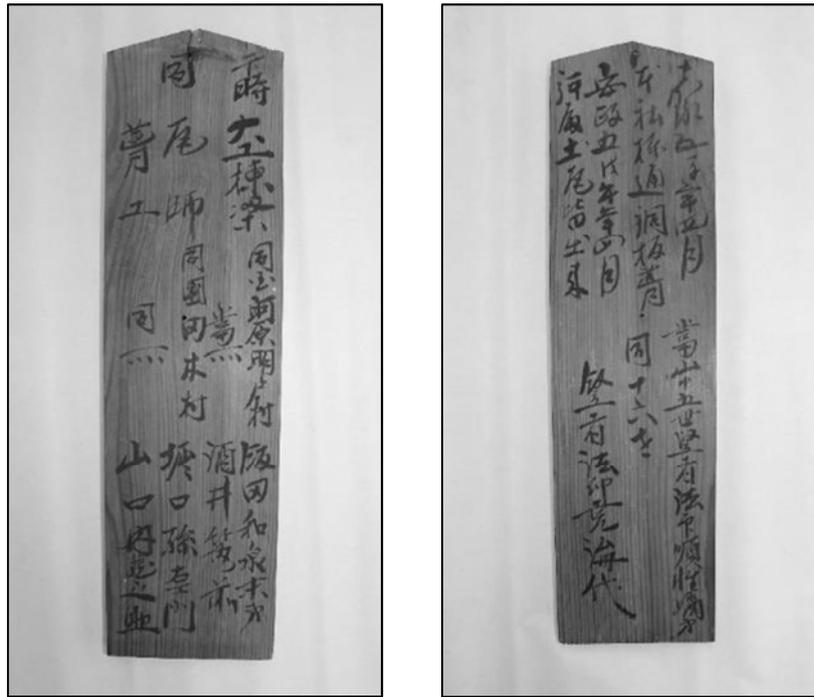


写真3 本殿内陣より発見された拝殿屋根改修棟札

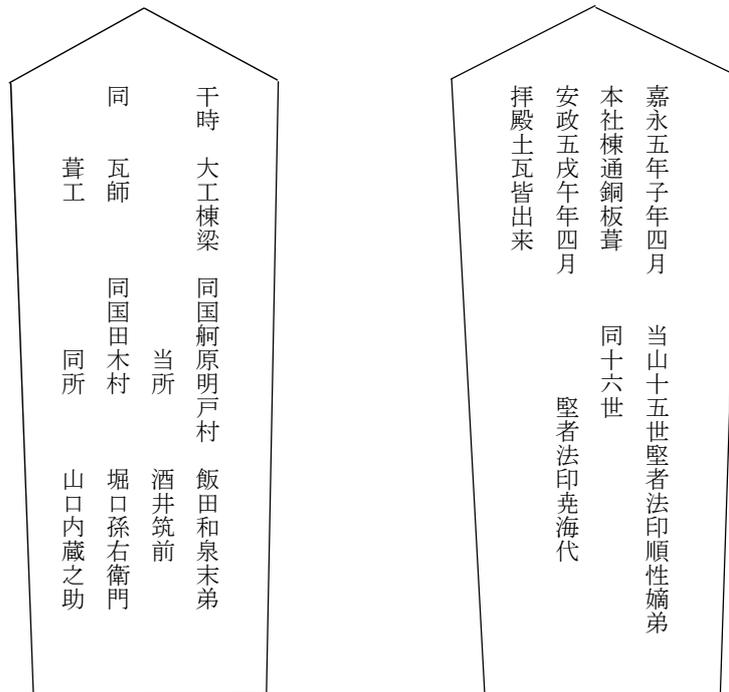


図15 拝殿屋根改修棟札解読筆写

図 15 の棟札解読筆写を表面より現代語訳すると、嘉永 5 年（1852）4 月に本社（本殿）の棟通りを銅板で葺くとあることから、無垢板材で仕上げていた箱棟を銅板包みに改修したことが判る。また、安政 5 年（1858）4 月に拝殿土瓦皆出来とも記されるが、これは安政 2 年（1855）10 月 2 日に関東地方を襲った安政大地震<sup>注 32</sup>の影響にて、拝殿も何らかの罹災があったものと考えられる。別当福聚寺の日記にも松山が甚大な被害を受けたことが記されるため、地震対策の一環で拝殿の屋根荷重を増す方策として、板葺屋根から瓦葺屋根（棧瓦）に変更したものと推測される。天保 11 年（1840）の竣工から数えれば、18 年目の本格的な改修であったことが判る。なお、箭弓稲荷神社中興の祖でもある別当福聚寺第 15 世順性和尚は文久 2 年（1862）2 月 18 日に示寂されるが、存命のこの時点で既に嫡弟となる第 16 世堯海に、実務を任せていたことが判る。一方、裏面には職方の名が記されており、この拝殿屋根改修工事では先の造替工事大工棟梁であった飯田和泉守藤原金軌の末弟がこれを担い、また、瓦製造は東松山市内の旧田木村で登り窯を有していた堀口氏が担当し、施工は同村の山口氏が行なったことも明らかとなった。なお、拝殿屋根は何度かの屋根修理によって昭和瓦も混在していたが、安政五年のものと考えられる古瓦も残存しており、また、同一形状の古瓦は幣殿屋根にも載っていたため、拝殿屋根の続きとなる幣殿屋根も雨仕舞いや納まりの関係上、安政 5 年に同じく屋根を瓦葺屋根（棧瓦）に改修していたものと推測される。

## 2-12. 明治 23 年境内絵図

箭弓稲荷神社が明治 28 年（1895）12 月 16 日に埼玉県知事宛に提出した永續法社入用支出明細表<sup>注 33</sup>が発見されたが、これに明治 23 年（1890）5 月 5 日に作成した境内絵図も添付され、図 16 に示す通り、往時の境内状況と社殿の様子を窺い知ることができる。

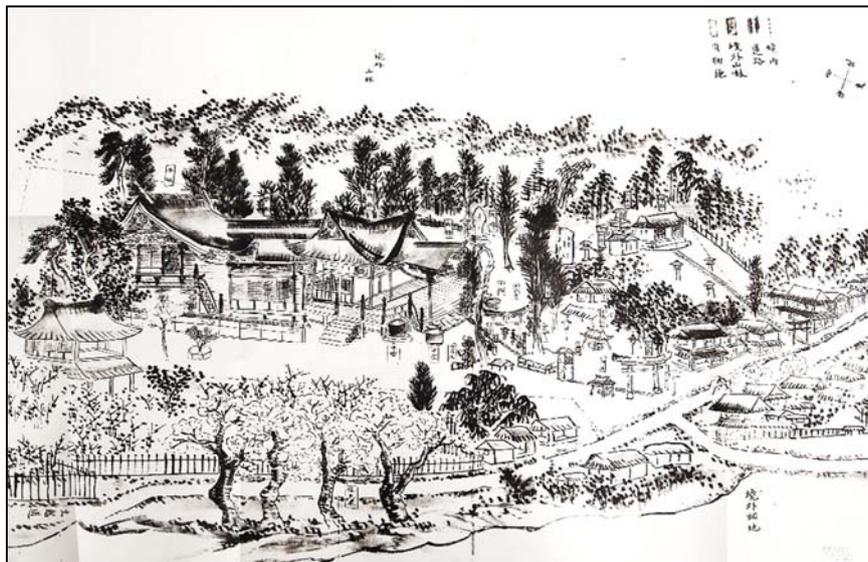


図 16-1 明治 23 年制作境内絵図

注 32 （安政江戸地震とも称し、マグニチュード 7 強の大地震であった。）

注 33 （埼玉県立文書館所蔵「永續法社入用支出明細表・明治二八年十二月」、撮影者：横山晋一）

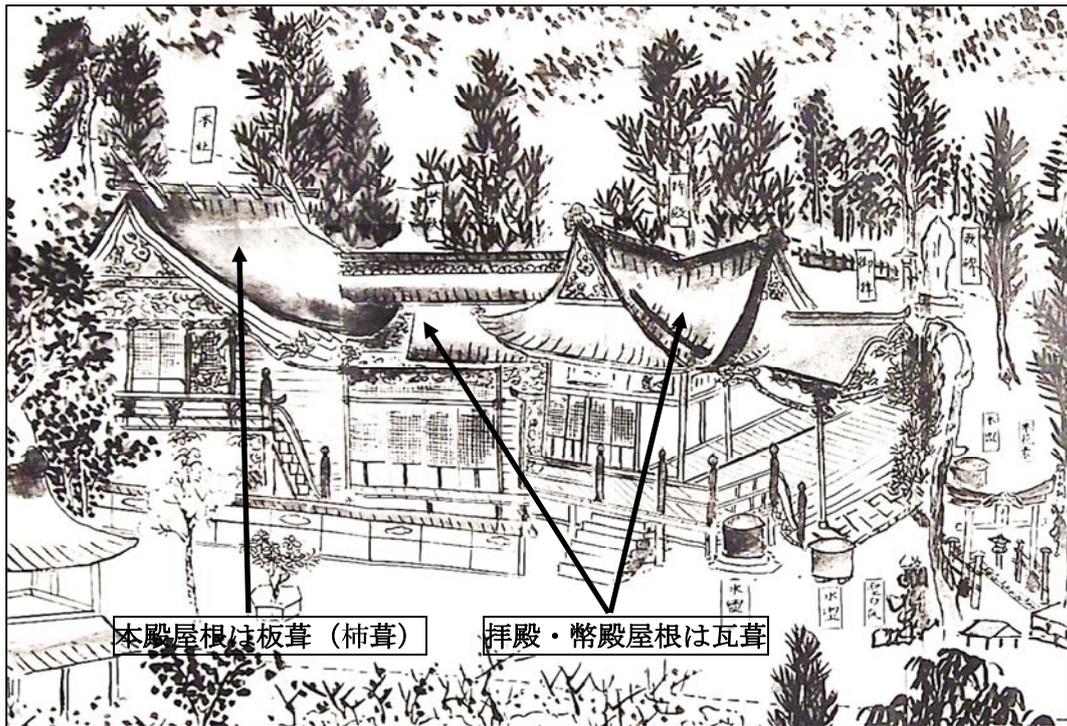


図 16-2 明治 23 年制作境内絵図 (社殿部拡大)

この絵図からも明らかな通り、安政 5 年 (1858) 4 月の改修で拝殿・幣殿の屋根が瓦葺 (椀瓦) に改変されたが、本殿は創建当初の板葺 (柿葺) のままの状況であったことが判る。明治 23 年 (1890) 当時を基点にみれば、本殿屋根は途中で修理が成されていなければ天保 11 年 (1840) 当初のままの屋根となり、築 50 年が経過しているため、屋根の損傷は可也著しいものであったと考えられる。一方、拝殿・幣殿屋根は瓦葺に改められて 32 年目を迎えていたが、屋根瓦も丁度落ち着いた良い色合いになっていたものと思われる。

### 2-13. 箭弓神社銅瓦寄附金連名簿

本殿屋根の痛みが激しかったことを物語る、箭弓神社銅瓦寄附金連名簿<sup>注 34</sup>なるものが調査によって発見された。図 17-2 の文面にも記される通り、本殿屋根が著しく傷んでいることから、屋根の恒久維持を目的に銅瓦型葺に改めることを往時の神社関係者が企て、明治 25 年 (1892) 10 月に広く信者へ寄進を呼びかけている。なお、文中下線部に興味深い一文があり、本殿の屋根が「檜皮葺」であったことが記されているが、実際に本殿小屋裏などからは檜皮の断片は発見されていないことから、往時の神官たちが見間違うほどに経年劣化の具合が檜皮葺にも見える屋根の様相であったと推測される。

注 34 (埼玉県立文書館所蔵「箭弓神社銅瓦寄附金連名簿・明治二五年十月」、撮影者：横山晋一)

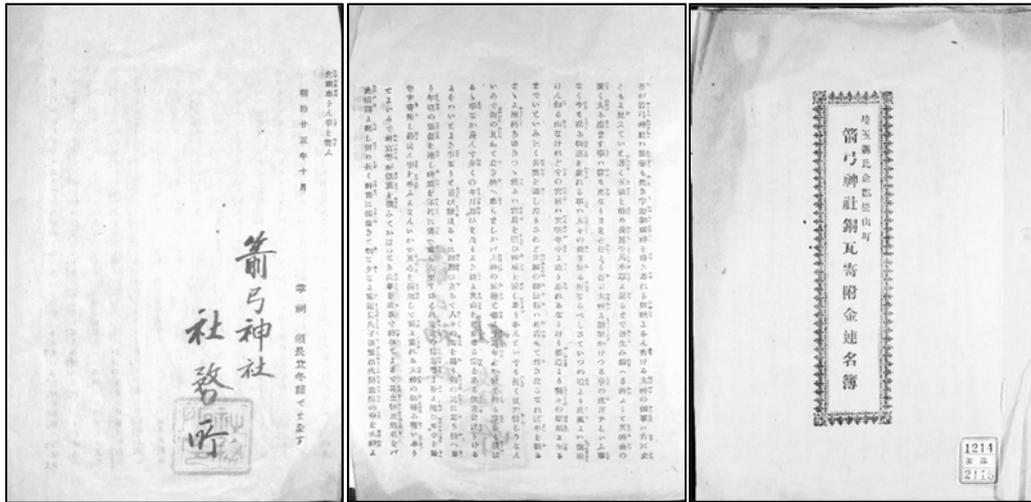


図 17-1 箭弓神社銅瓦寄附金連名簿

埼玉縣比企郡松山町  
 箭弓神社銅瓦寄附金連名簿

〈解説筆写〉  
 吾が箭弓神社の掛巻も畏き宇迦御靈神を齋き奉れる御社になん有ける大神の御事の古き史ともに見えていと著く五穀を始め養蠱牛馬木草に至るまで皆生み給へる神にして其神徳の廣く大ふ座ます事の言も更なりさと昔より吾が大神に諸祈かけつる事の成らずといふ事なく今も現ふ御恵を蒙れる事は人々の仰ぎ知る所なるべしさていつの頃より此慮よい鎮座けん知る由なけれど今の宮居は天明年中に造り奉れるなりけり構造より種々の彫刻に至るまでいとみじく善美を盡したりされど正殿の御屋根は檜膚もて葺きたるなれば年を経るまゝよ漸朽ちゆきつゝ終ふい宮居を損ひ神威を潰し奉りなんとも畏くはた惜しうなんいぬで銅の瓦もて葺き換へ奉らましかば大神の威徳と共に千萬年をかけて朽る事なく損はいい事なか飛んや多くの年月思ひをたりにき茲に其由を東京なる宗とある信者に謀りけるにそいとよき事なりと喜び諾はるに、則思ひ立ちて人々の力を籍り銅の瓦に葺き換へ奉り年頃の經營を達し神威を不朽に傳へ峯らんうすやむれ遠近の信者等よ分に随ひ多少を論ぜず寄附し給はん事を希ふになんいかで眞心を振起して常に蒙れる大神の御報ふ報い奉りてよいぬで神官等が微哀を憫みておほけなき此事を成させ給ひてよさて其金額及姓名をば此帳簿に記し留め長く神前に備置きて朝な夕なに家運長久子孫繁昌火防盜除の事を大神に乞禱奉らん事を誓ふ

明治廿五年十月  
 掌祠 須長宜冬謹でまをす  
 箭弓神社社務所

図 17-2 箭弓神社銅瓦寄附金連名簿

## 2-14. 明治 29 年境内絵図（箭弓神社郷社昇格祝）

本殿の屋根改修は寄附金が目標額に達した明治 29 年（1896）年の初春に実施され、板葺（柿葺）から現状の銅瓦型葺に改修が成されている。なお、屋根改修に要した経費は 1 千 9 百円となるが、明治 30 年当時の 1 円の貨幣価値は 3 千 8 百円<sup>注 35</sup>になると考えられているため、これを当て嵌めた相当工事費は 7 百 2 拾万円強ほどであったと考えられる。また、この他の境内整備事業として玉垣整備事業や神楽殿・額殿などの建設も行なわれており、総額 6 千 4 百円を要した一大事業であったようである。

このような整備を箭弓稲荷神社が急いだ理由は、神社関係者が一刻も早く「郷社」への昇格を目論んでいたことによるためであるが、無事に明治 29 年 6 月 9 日に郷社昇格を果たし、その祝いとして当時の境内状況を克明に反映した絵図が、印刷物として明治 29 年 10 月 25 日に発行されている。印刷発行は東京市浅草区茅町 2 丁目 3 番地に店を構えていた青山豊太郎が担っているが、本殿屋根が現状の銅瓦型葺に改められていることや、拝殿桁行前面一間間が吹放ちの下拝として描かれることが注視すべき点と言える。



図 18 埼玉縣武州松山箭弓神社境内全図（社殿部拡大）

注 35 （野村ホールディングス・日本経済新聞社・お金の歴史雑学コラム公式サイトより・2016.08.30 アクセス）

## 2-15. 明治 34 年県立川越高等学校記念写真

東松山市内には県立高校が二校存在するが、県立松山高等学校は大正 12 年（1923）4 月の開校、県立松山女子高等学校は大正 15 年（1926）4 月の開校となるため、それ以前でこの地域からの県立高校進学は県立川越高等学校に限られていた。このような状況もあってか、高校の遠足先の一つが箭弓稲荷神社であったようで、その時の様子を示した明治 34 年（1901）の貴重な集合写真<sup>注 36</sup>が見つかった。この写真と図 18 の絵図を比較しても屋根仕様は同一であり、拝殿は瓦葺（棧瓦）・向拝は銅板葺、本殿は銅瓦型葺となる。また、拝殿前面においては手前一間が吹放ちの下拝となっていたことも併せ確認できる。



写真 4 明治 34 年当時の箭弓稲荷神社社殿外観

現状の幣殿・本殿に関しては玉垣で四方を囲っているが、この時点では玉垣らしきものは無く、簡易な板塀で本殿を囲っていたことが写真から読み取れる。その他、拝殿南側軒下には大規模な絵馬が掲げられていたことも判る。

注 36 （埼玉県立川越高等学校同窓会事務局保管写真、箭弓稲荷神社遠足風景、デジタルデータ使用許可済み）

## 2-16. 大正 12 年縣社昇格申請公文書

明治 29 年（1896）6 月に郷社昇格を果たした後は、次の段階となる県社昇格に向けて関係者が多方面に尽力を行っているが、国指定重要文化財埼玉県行政文書<sup>注 37</sup>の中に、図 19 の郷社箭弓神社の縣社昇格に関する申請書が発見された。申請書日付は大正 12 年（1923）4 月 14 日付けとなっており、この添付資料として図面と写真が備わっている。

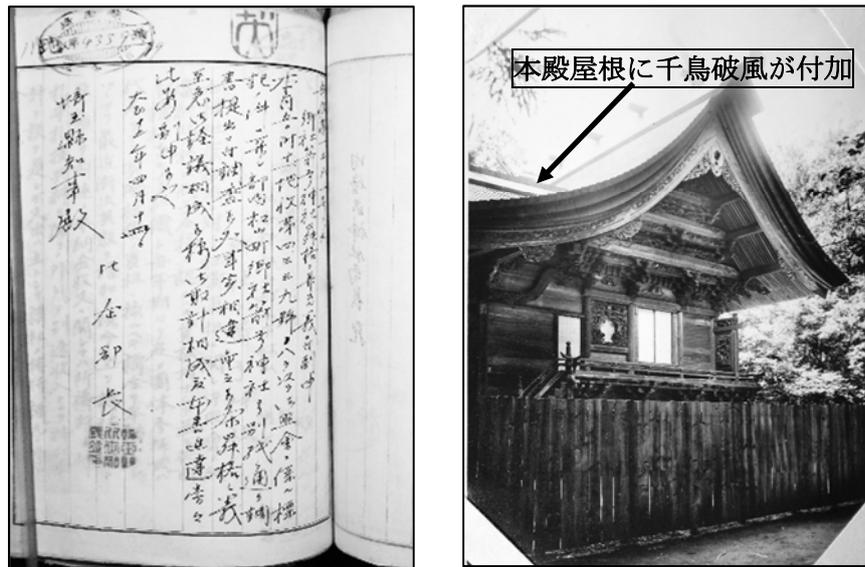


図 19-1 郷社箭弓神社の県社昇格申請書（鏡・写真）

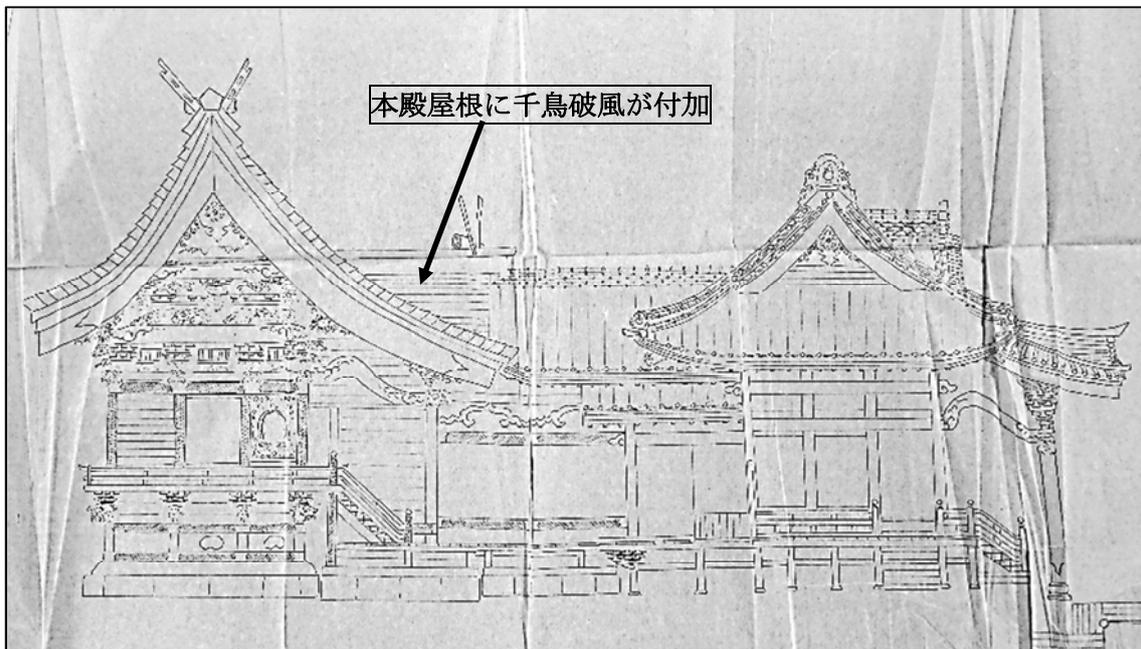


図 19-2 郷社箭弓神社の県社昇格申請書（図面）

注 37（埼玉県立文書館所蔵「埼玉県行政文書・明治初期～昭和 22 年までの書類が綴込み」、撮影者：横山晋一）

申請書は比企郡長から埼玉県知事あてに提出されているものであるが、恐らく現地審査が実施された後の文書だと考えられる。添付写真や図面に載る本殿千鳥破風は元々屋根には備わっておらず、大正12年初春に実施された改修工事で付加されたものと考えられ、これを配することで社格が高く見えるように諮ったと考えられる。この効果もあつてか、箭弓稲荷神社社殿は大正12年（1923）5月1日に、無事縣社昇格を果たしている。

## 2-17. 近世の近江商人と箭弓稲荷神社の関係性

近江商人は琵琶湖半の近江八幡・日野・五個荘・高島などの地域を出身とする商人であり、他国に出向いて稼ぎをすることで知られている。しかしながら、商いの活動をはじめた時期はそれぞれ異なり、商いの仕方も一様ではない。「八幡大店、日野千両店」と揶揄されるように、八幡大店は江戸の日本橋のような大都会に店舗経営するのが一般的であった。これに対し、日野商人は小規模な出店が多かった。千両もあれば建てられる店と皮肉られたことが関係してか、日野商人は都会から少し離れた田舎町に出店する傾向が見られる。

関東における日野商人の活躍は広く分布しており、滋賀県日野町立歴史民俗資料館・近江日野商人館の調査研究によれば、群馬県が138店（江戸時代開店・出店は74店）、埼玉県が118店（江戸時代開店・出店87店）、栃木県が113店（江戸時代開店・出店80店）、茨城県が65店（江戸時代開店・出店43店）であったと確認されており、北関東を中心として多く出店していたことが判る。このうち、埼玉県における活動に注視すると、中山道を軸として日光道・川越道などの各街道に商いの活動をしている。また、近江日野町志<sup>注38</sup>によれば、出店店舗の業種は醸造業関係が最も多く全体の55%を占めている。行商中に商いに都合の良い場所を探し、行商で得た利益で店舗を開業する形となる。そうした中、少ない資産しか持たない者は従来他人が営んでいた酒醬油醸造所を年間で借入れるケースが確認される。また、質屋を営業することもあり、そこでの延滞金などにより酒醬油の醸造場を提供されることもあり、それから醸造業を営む者もあった。そして多店舗経営へと発展させて行く。こうした経営展開こそが、日野商人の商いの手法であったと考えられている。

中山道は現在の国道17号・18号であり、その街道沿いに宿場町が栄えた訳であるが、それに加え、現在の川越道となる現在の国道254号も脇街道として利用されていた。中山道を岐阜方面より長野県に入ると安曇野で国道18号（外回り）方面と国道254号（内回り）方面の二つに街道が分岐するが、国道254号を埼玉に向かって進むと更に秩父道となる現在の国道299号にも分岐し、秩父方面に抜けることができる。日野商人の出店経歴から見ても、上尾・熊谷・本庄・高崎などの中山道への展開と、寄居・本庄・藤岡・富岡・下仁田などの川越道への展開と、図20に示す通り、二つの路線経路の存在が明らかである。

分岐する川越道の路線に長野県小県郡長和町古町に沓掛という中山道の宿場町があるが、この古町の須藤家より「武州松山 奉舟建 柳生稲荷大神社内安穩 家運長久祈所 天龍院」と記された江戸時代後期のものと考えられる神札が発見された。ここに記される「武州松山」は現在の東松山市であり、柳生（やぎゅう）稲荷大神社はすなわち、箭弓稲荷神社を指したものである。このような歴史資料からも、霊験新たかとなる箭弓稲荷神社の評判は日野商人たちが行商を行う旅先々で口伝によって広められ、武蔵・上野・信濃と関東

注38 （日野町教育委員会編「近江日野町志」1930年・p466）

圏外にも箭弓稲荷詣のご利益が流布して行ったものと考えられる。

なお、青木隆弘氏の近代酒造地域展開の研究によれば、武州は地店・江州店・越後店の3タイプに分けられ、江州店は近江商人の中でも日野地域から出た日野商人が担ったと述べている。現在、埼玉県内の中山道を軸として酒造業を営んでいる会社の多くが日野商人であり、秩父市の矢尾酒造、寄居町の藤崎惣兵衛商店、加須市の釜屋酒造、熊谷市の権田酒造、行田市の横田酒造などはその代表格である。県内の蔵元には他にも近江出身者の創業はあるが、深谷市の丸山酒造の様に江戸初期に地元に住む荻野七郎兵衛が酒造りをはじめたが、前述の如く、途中で近江商人の日野屋与吉が蔵を借りて明治12年まで営業していた例もあり、一時は経営的側面まで近江商人が関わった時期があった。また、それぞれの店より各地域へ暖簾分けして出店し、販路を広めて行ったようであるが、経営が立ちいかなくなると店を閉じ、営業権利を譲渡していた。当地に於いては、江戸時代の天明期より、寄居町に現存する藤崎惣兵衛商店の出店が記録に残されるが<sup>注39</sup>、同じく日野商人となる。

一方、箭弓稲荷神社へは数多くの奉納品があったようで、その多くは天保期の社殿造替に併せて奉納されたものが多い。また、扁額などに残る墨書から江戸日本橋の者が多いことが明らかであるが、日本橋と言えば近江八幡商人が多数を占めており、近江商人の商い理念となる「陰徳善事」と言う言葉に従い、地域の人びとが信仰する寺社に貢献することで、よそ者であるにも係らず、商いに信用を得ていたものと考えられる。

以上のことから近江商人と箭弓稲荷神社との関連性について考察すると、近江商人のうち、日野商人と八幡商人の支援があったと思われる。日野商人は先述の通り、行商を主体とすることから、中山道や川越道を軸に広告塔としての役割も大いに果たし、それが箭弓稲荷詣でを一層活気付ける要因になったと考えられる。それを裏付ける証拠として、長野県長和町の須藤家に箭弓稲荷神社の神札が保管されることも判った。なお、このような商い手法であったことからか、境内にその名を残す奉納は決して多くない事実もある。

一方の八幡商人は江戸日本橋に店を設ける経営展開であり、江戸時代中期以降の箭弓稲荷神社の盛況ぶりは良く知られるところであったことで、江戸市中を始めとする庶民や商売人多くがご利益を求め挙って参詣している。ここに八幡商人は目を付け、偉大なる奉納を行うことよって店の名や個人の名と言った売名行為を行った。それは今日の広告宣伝を意図したものであり、八幡商人はこのような手法によって箭弓稲荷神社を支援したのである。両者の商い戦法は二律背反的な側面はあるが、近江商人の行動哲学となる「三方よし」・「利真於勤」・「陰徳善事」に共通するものが根底に存在しており、箭弓稲荷神社は近江商人との関係性を得たことで、更に江戸時代後期に発展することになったと考えられる。

---

注39 (全国営業便覧発行所編「埼玉県営業便覧」1902年・p13)

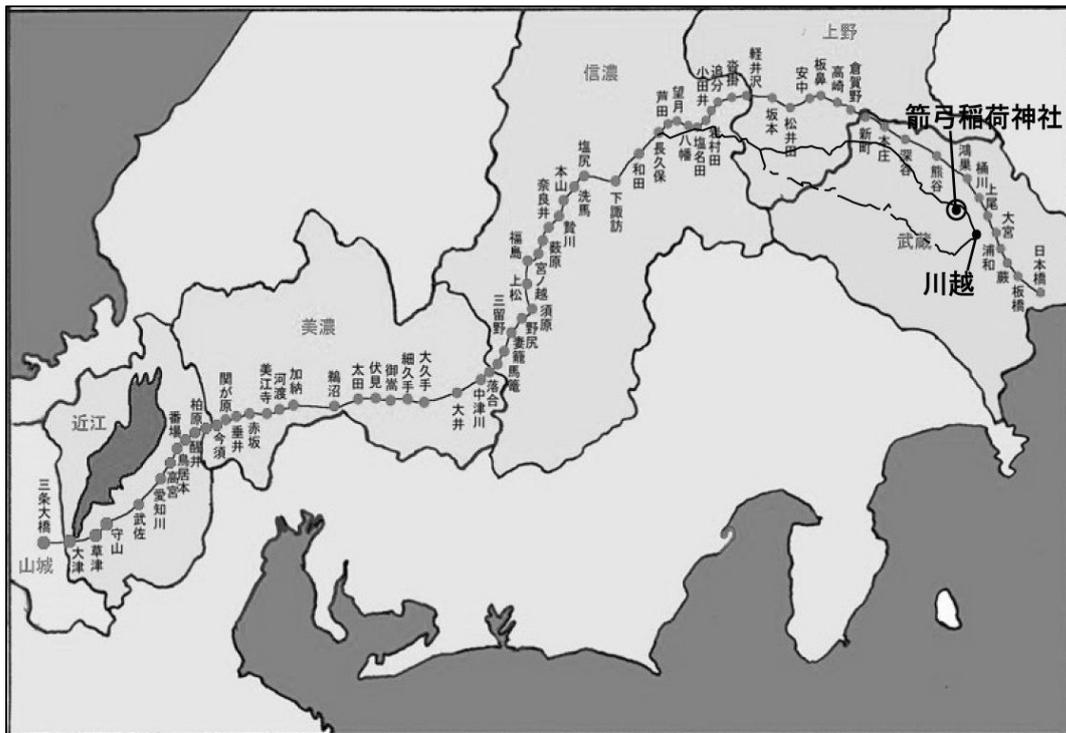
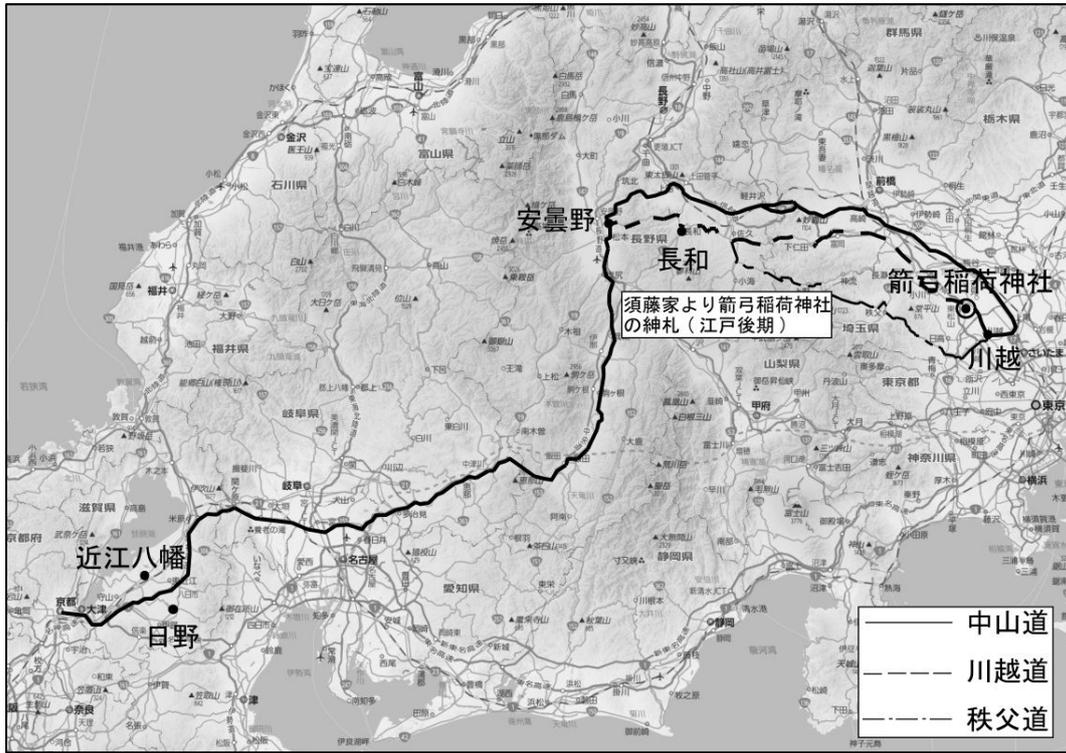


図 20 近江商人の関東圏への中山道・川越道商いルート

### 3. 史料研究小結

歴史研究により、造替工事は遅くとも文政元年（1818）頃には着工されているものと考えられ、大工棟梁であった飯田和泉守藤原金軌と舎弟の飯田仙之助が思い描いた計画通り、権現造形式の社殿として建立が成されたと言える。社殿はまず最奥の本殿から着工され、その後に幣殿へと移り、天保6年（1835）8月21日には上棟式並びに御祭神遷宮の儀が執り行われている。また、その翌年となる天保7年（1836）3月には第一期工事とも言える本殿・幣殿までの造営を大方完成させ、資金獲得のための御開帳に踏み切っている。なお、この段階ではまだ拝殿の造営は着工されていないため、拝殿位置には雨天対策のための素屋根が設けられたことが発見文書から推測される。また、御開帳に伴う作業休止期間は、凡そ2年位であったのではないかと推測される。

第二期工事となる拝殿の工事再開は天保9年（1838）頃と予測されるが、発見文書などにより天保11年（1840）9月には工事が完了していたと考えられる。このため、社殿単体で見れば着工から竣工まで凡そ20年ほどの時間を要したことになるが、中本寺の成就院浄光寺への箭弓稲荷社再建普請諸入用帳（事業精算書）の提出は3年後の天保14年（1843）10月となる。これは附帯工事が継続されていたことの外に、造替事業の予算超過分を少しでも軽減するための借金交渉が行われていたためではないかと推測される。

その後、嘉永5年（1852）4月に本殿屋根大棟（箱棟）を銅板包みとする改修が成され、また、安政大地震（安政2年10月2日）の影響により破損した拝殿・幣殿を修理すべく、安政5年（1858）4月に幣殿・拝殿の屋根を柿葺から棧瓦葺に変更する改修を行っている。維新後、明治29年（1896）には腐朽が著しい本殿柿葺屋根を銅瓦型葺に変更する改修が行われ、更に大正12年（1923）初春には本殿屋根前面に千鳥破風も増設している。なお、この年の5月1日に縣社昇格を果たしている。

歴史研究による史資料調査によって、以上のような社殿造替に至る背景や建立に関する経緯が判明し、また、その後の改修変遷も概ね明らかとなった。なお、近江商人との関係性も旨く保てたことで、中山道や川越道においても箭弓稲荷詣でのご利益の大きさを近江商人が広告塔となって広く地方にも周知したことにより、江戸市中や武州のみならず、関東圏外からも多くの参詣者が集ったものと考えられるが、このような背景によって箭弓稲荷神社の存在が位置付けられ、小説の舞台などにも拔擢されて行ったと推測される。

### 第3章 箭弓稲荷神社社殿の建築実態調査

#### 1. 社殿屋根復原調査

箭弓稲荷神社社殿は史資料調査からも推測される通り、天保11年(1840)に造替工事が完了した時点では屋根は現状とは違い、板葺(柿葺)であった可能性が高いことが明らかとなった。これは埼玉県内に所在する近世社寺建築では良く目にする仕様となる。一方、屋根を檜皮葺とする事例は現状では皆無に等しく、古くは秩父往還(甲州裏街道)にて甲斐国と密接の繋がりを持っていた、武蔵国秩父地方に所在する三峰神社<sup>注40</sup>や秩父神社<sup>注41</sup>では残される文書記録から、創建当初の社殿屋根は檜皮葺であったことが判っている。

箭弓稲荷神社社殿の小屋裏調査を実施したところ、本殿屋根螻羽の軒支輪小屋裏側(写真5)に挟まる柿板断片を複数枚発見した。発見柿板(写真6)は杉桁の平葺材で、材長は303mm(1尺)・材厚3.6mm(1寸2分)に拵えられた屋根材であり、葺足を30mm(1寸)としていたことも竹釘固定の断片から明らかとなった。これにより、平葺面は10枚重ねとなる標準仕様にて屋根施工が成されていたことも判った。



写真5 本殿屋根螻羽軒支輪小屋裏側からの発見当初屋根材

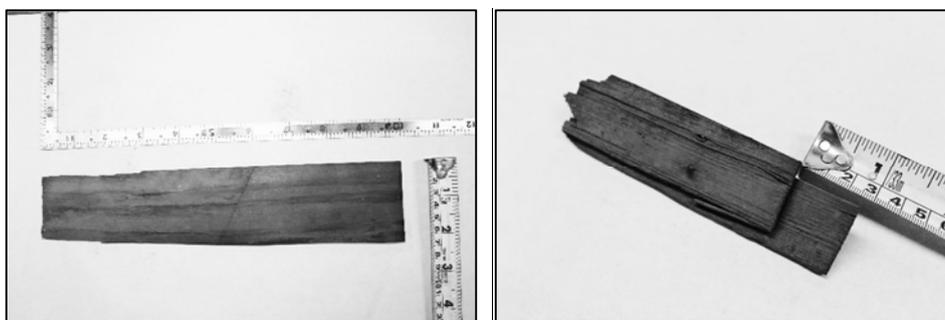


写真6 軒支輪小屋裏側からの発見柿板平葺材(杉桁)

注40 (三峰神社編纂「社史三峰山」社殿が檜皮葺であった史実が記される・1965年)

注41 (本殿造営棟札「天正20年(1592)、檜皮葺本殿成就との記述が棟札に有り」棟札確認：横山晋一)

同様の屋根断片材は拝殿内法長押背面からもその後に発見されたことから、創建当初の本殿・幣殿・拝殿の屋根は柿葺であったことが判明した。

一方、解体調査によって拝殿・幣殿の軒付より、特異な痕跡が確認された。それは幣殿裏板上端と拝殿裏甲上端に残存する釘孔痕跡のことであるが、一般的な柿葺屋根軒付施工であれば、平葺屋根面から伝わる雨水を軒先構成部材に浸透さないようにするため、裏板上には材厚 12mm (4 分) 程度の小軒板を積層し、その上端に水切りとする上目板と下押板先端を小軒板外面から 21mm (7 分) ほど迫出して固定する。そしてその先端より 15mm (5 分)・24mm (8 分)・30mm (1 寸) と平葺施工の葺足間隔を広げ、棟際品軒に向かって葺上げて行く。これからも軒付を固める小軒板の存在は重要となるが、裏板などへの取付けは要所を和釘でしっかりと固定するのが通常の作業手順であり、小軒板固定の竹釘は補助的なものでしかない。しかし、写真7からも明らかな通り、裏板鼻先 2 寸返り位置などに和釘を用いた痕跡が全く見当たらない状況となる。



写真7 幣殿裏板上に残る竹釘孔痕跡状況

柿葺屋根施工専門業者との確認も踏まえて想定されることは、竹釘 (φ3mm 弱・長 30～36mm 程度) で小軒板を貫通させることができるのは精々二枚厚が限界であり、箭弓稲荷神社拝殿・幣殿の現状軒先断面で検証すると、軒積高は 180mm (6 寸) ほどであったと考えられる。このため、一般的な小軒板厚に当て嵌めれば 15 枚分の積層となることから、固定は和釘を主体とした施工方法でなければならない。しかし、積層する軒付材が小軒板ではなく平葺板積層となれば和釘使用の必要は無くなり、現状で確認される竹釘だけの釘孔痕跡でも何ら問題はなくなる。

裏板に残る竹釘孔位置は鼻先より 60mm (2 寸) と 121mm (4 寸) の位置にあり、写真 8 の一般的な柿葺軒付け施工にも見られる通り、正にその位置が軒付板の釘留位置となる。なお、後部からの返し 90mm (3 寸) は裏板押えが配されていた部位だと考えられ、釘孔痕跡が軒付施工納まりと合致してくる。

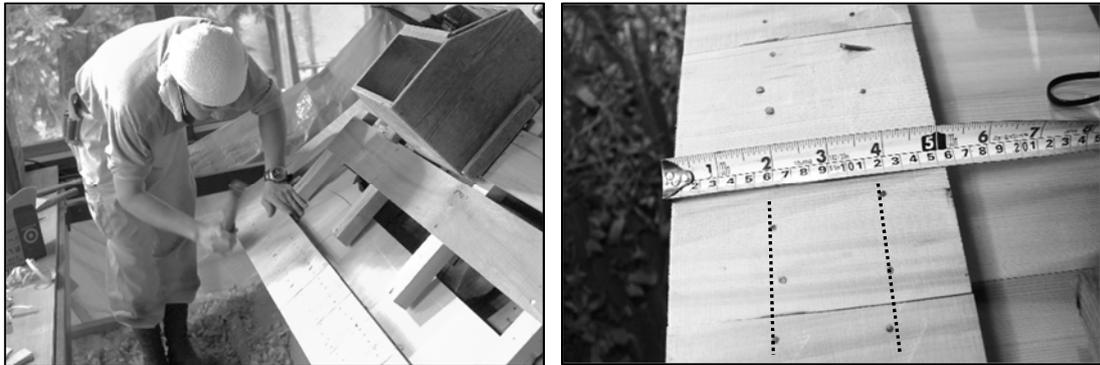
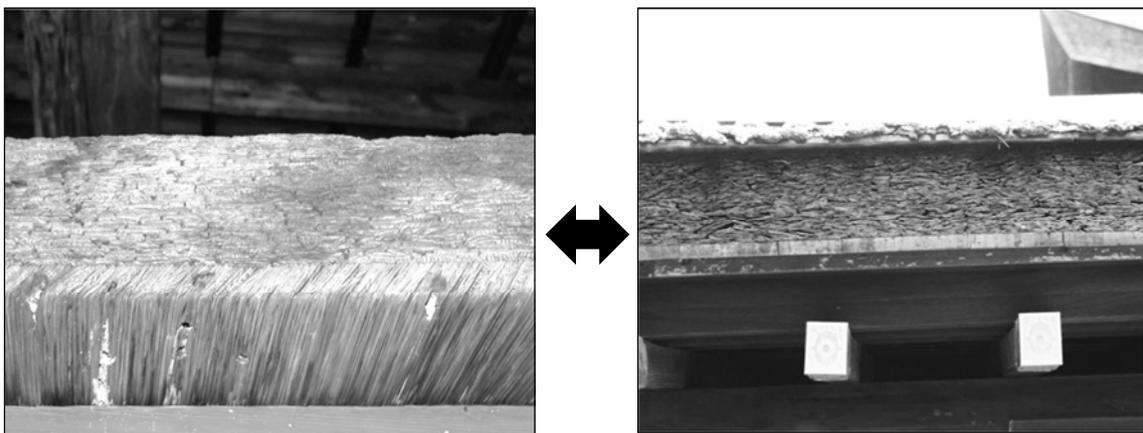


写真 8 埼玉県指定有形文化財調神社本殿柿葺屋根施工例

平葺板を軒付に積層する檜皮葺様式<sup>注 42</sup>での施工方法は類例が殆ど確認できず、京都丹波地方に所在する重要文化財大山祇神社本殿にこの稀少な工法が見られる程度である。軒先が小軒板でなく平葺板での施工となるため、見た目の美しさの反面、軒先腐朽の進捗が早いという欠点もあり、将来の修理計画も竣工と同時に企てる配慮が必要となってくる。恐らく関東地方では、屋根軒付を檜皮葺様式とする事例は殆ど存在しなかったと考えられるが、箭弓稲荷神社では敢えてこのような特異な施工方法が採られていた。箭弓神社銅瓦寄附金連名簿(図 17-2)でも記した通り、明治期の神官が「正殿の檜皮葺屋根の傷みがかなり進行しており」という記述から推測すれば、この特異な施工方法であったことから写真 9 のように経年劣化で檜皮葺屋根に同化し、見誤ってしまったためではないかと推測される。



(左) 柿葺（檜皮積み）施工

(右) 一般的な檜皮積み施工

写真 9 軒付経年劣化による柿葺（檜皮積み）と檜皮葺との対比

注 42 (京都府教育委員会編「重要文化財大山祇神社本殿修理工事報告書」、1966 年・P26)

なお、軒先廻りの部位について檜皮積みの実物検証を行うべく、写真10の拝殿原寸大モックアップを制作して意匠や納まりなどの確認を試みたが、想定以上に違和感が全く無く、寧ろ小軒板を積層する通常工法よりこちらが美的に見える。このため、竣工当時の箭弓稲荷神社社殿の屋根は壮麗で美しく、軽快感も備えた様相であったと示唆される。

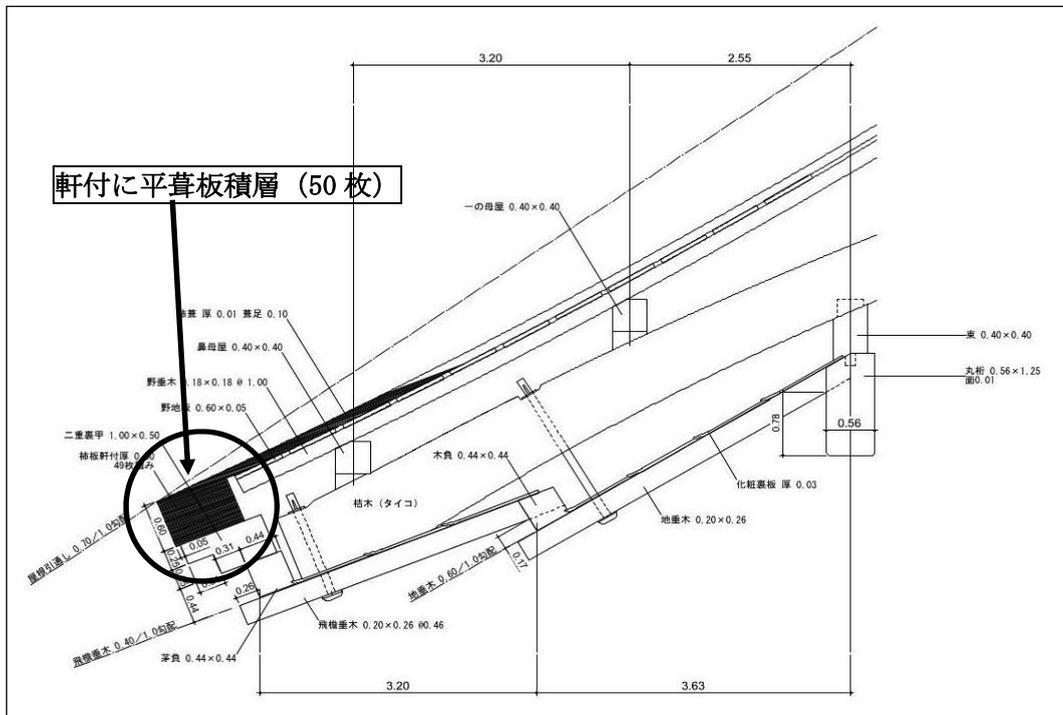


図 21 拝殿軒先廻り復原検証断面詳細図



写真 10 拝殿軒先廻り原寸大模型による檜皮積み納まり検証

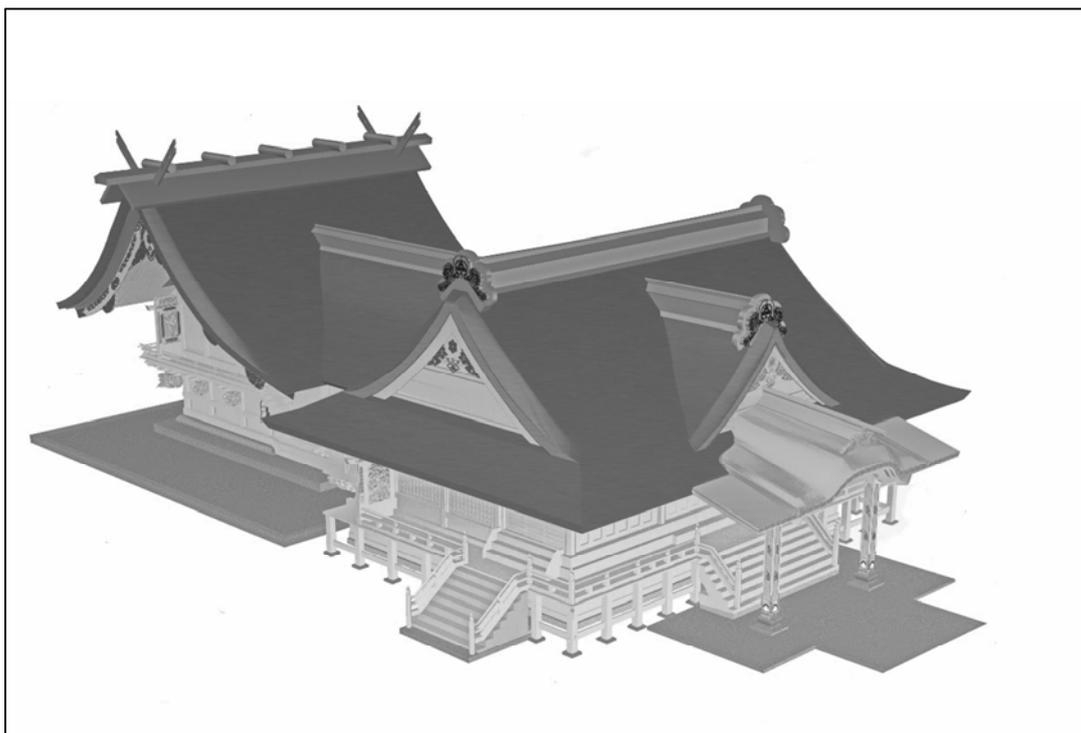


図 22 箭弓稲荷神社社殿天保 11 年当時の想定復原鳥瞰図

## 2. 拝殿内部復原調査

拝殿手前一間間は史資料調査における「明治 23 年制作境内絵図（図 15）」・「明治 29 年制作境内絵図（図 17）」・「明治 34 年県立川越高等学校記念写真（写真 4）」からも想定されていた通り、拝殿建物内の屋外空間に位置付けられる「下拝」であったことが解体調査で明らかとなった。現状は改変されて拝殿内部空間となっており、元々吹放ちであった正面桁行各柱間と側面梁間手前一間柱間に後補となる柱間装置の建具が配される。また、現状の後補荒床を解体すると、それより 240mm（八寸）下がりの位置に当初の化粧拭板が残存していた。これを内拝の床レベルに合わせるため、当初拭板上に後補根太組を施した揚床施工が成されていることが判った。なお、後補荒床に残存する墨書より、昭和 32 年（1957）11 月 2 日に拝殿の内拝拡張工事が実施されたことも明らかとなった。（写真 11）

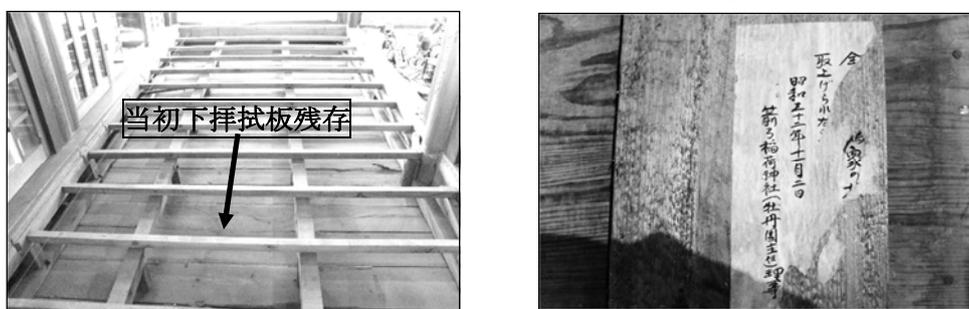


写真 11 拝殿下拝後補揚床状況・荒床に残存する墨書（昭和 32 年）

下拝・内拝境となる中通り柱間と側面の側柱間には、無目鴨居や柱内面に半蔀が備わっていた痕跡（写真 12）が残存していた。復原考察を行った結果、図 23 の納まりであったものと想定される。また、内拝も現状の畳が元々敷き込まれていた訳ではなく、化粧拭板であったことも判った。なお、下拝に接する内拝中央柱間には埋込型の賽銭箱（横幅 265 cm・奥行 175 cm・高さ 113 cm、写真 13）が備わっていたことも明らかとなったが、箭弓稲荷神社の造替工事を担った飯田一族はこれより以前、歓喜院聖天堂（熊谷市）の造営にも携わり、歓喜院聖天堂では賽銭泥棒と対峙するために賽銭箱を拝殿床下に埋め込む対策を途中で計画変更を行って採っている。箭弓稲荷神社においても天保期と言う時代情勢が厳しい状況のなかで、それが建築計画にも活かされたものと考えられる。なお、天保 11 年創建時の平面的復原考察は図 24 の通りとなる。

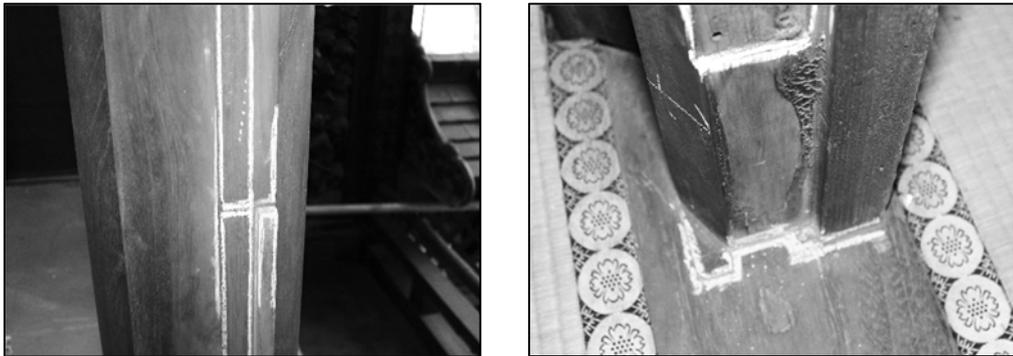


写真 12 拝殿下拝・内拝境の柱内面痕跡（半蔀痕跡）

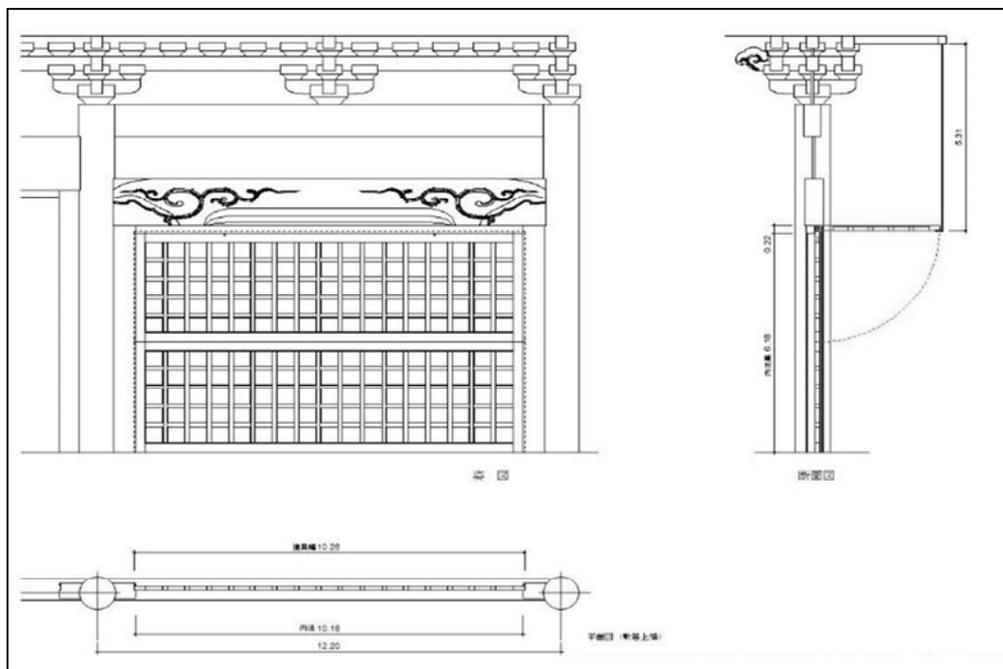


図 23 拝殿下拝・内拝境柱間の半蔀復原考察図

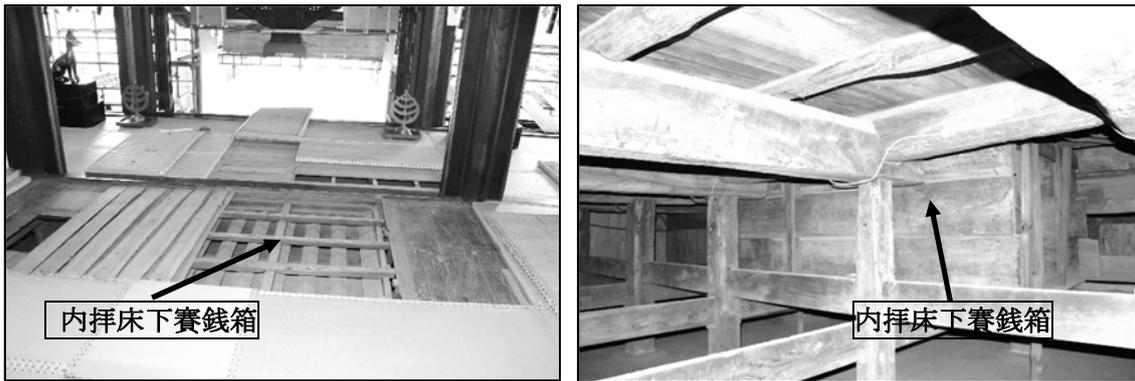


写真 13 拝殿内拝床下に残存する創建当初賽銭箱

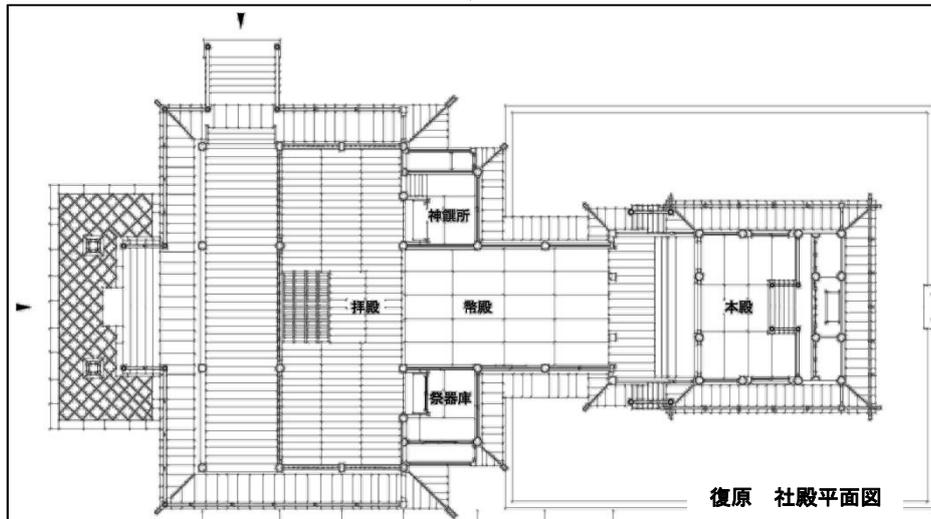
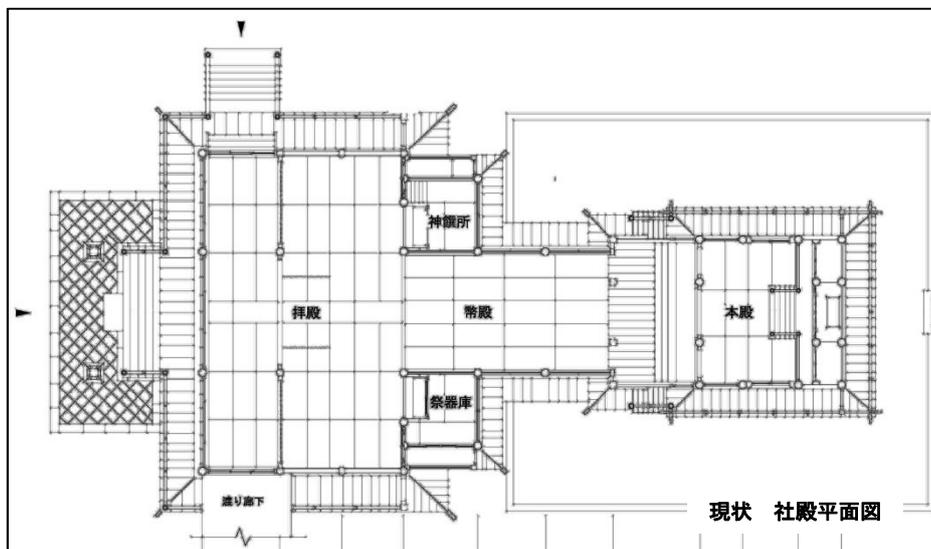


図 24 天保 11 年創建時の平面復原考察図

### 3. 社殿構成部材に残される墨書調査

墨書類を大まかに分類すれば、「年号を記す墨書」・「工事に関係する墨書」・「寄進者に関する墨書」に大別される。まず、年号を記す墨書に関しては、前章の史資料調査で紹介をした写真1・写真3の棟札と写真2の幣殿板戸墨書その他、本殿背面高欄根太掛の表層に記される墨書（写真14）が確認できる。これには文政10年（1827）2月の銘が記されるため、文献調査の推測通り、文政年間には本殿造営が成されていたことを裏付ける墨書となる。



写真14 本殿背面高欄根太掛に残存する墨書

拝殿下拝は三間の鏡天井となっているが、社殿造替工事が完了した2年後の天保13年（1842）冬に秋田紺屋町吉満愷兵衛からの寄進を受け、二対の鳳凰と蟠龍画が絵師堀雪筏によって描き加えられたことが墨書から推測される。（写真15）



写真15 拝殿下拝鏡天井板絵に残存する墨書（天保壬寅仲冬）

この他、拝殿側正面に面した幣殿神饌所・祭器庫東壁内には、備品として二対の隨身像が備えられている。その台座に記される墨書（写真 16）から、天保 10 年（1839）5 月に徳嶋吉五郎藤原孝好が寄進者の意向を受けて制作したことが判るが、社殿への設置は拝殿の竣工に併せて行われていたと想定すれば、丁度この前年の天保 9 年頃から第二期となる拝殿の造営工事が再開されていたものと推測できる。



写真 16 幣殿神饌所・祭器庫東壁内隨身像台座に残存する墨書

次に造営工事に関係する墨書として部材番付があるが、これによって複合社殿が一つの通し番付によって計画されたものであるか否かが判る。調査で確認された箭弓稲荷神社小屋束番付墨書より、本殿・幣殿・拝殿はそれぞれ個別の組合番付で建築計画されていることが明らかとなった。それを整理したものが図 25 となるが、幣殿と本殿においては縦軸の数字に大まかな繋がりが見られるが、拝殿に至っては明らかに別となる。これにより、小屋束墨書からも本殿・幣殿と拝殿の建立時期に相違があることが確認された。

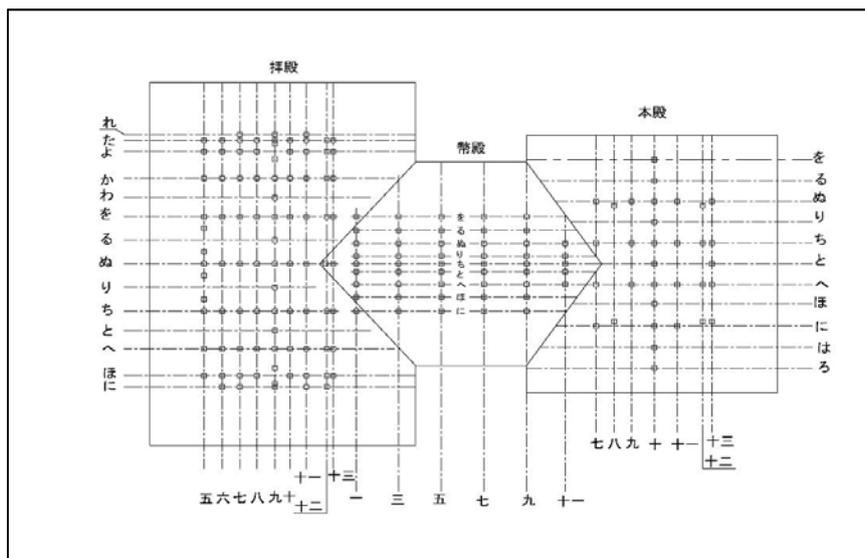


図 25 本殿・幣殿・拝殿の小屋束番付図

最後に寄進者に関する墨書となるが、この社殿の造替事業は川越藩からの公的な資金援助は一切なく、神社の自己資金と民衆からの浄財や借入が事業予算の骨子となっている。それは亀腹石や化粧柱に彫り込まれる多くの寄進者の名（図 26・27）からも明らかであるが、天保という厳しい時代であったからこそ、民意が反映されたとも見て取れる。

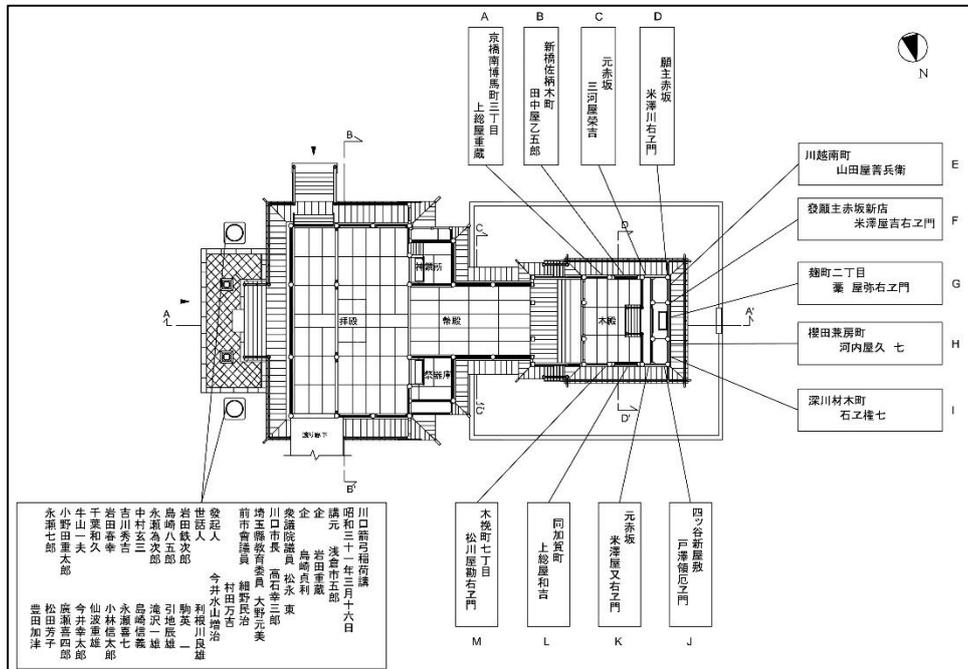


図 26 本殿亀腹石礎石・拝殿天水受鉢に残存する人名墨書

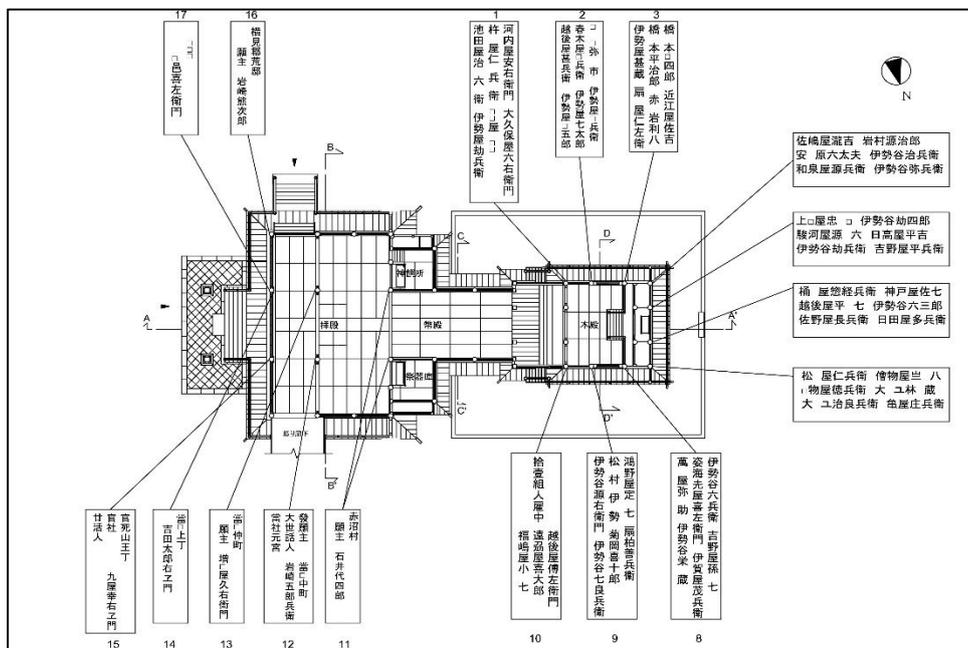


図 27 本殿・幣殿・拝殿柱に残存する人名墨書

#### 4. 社殿床下の発掘調査

歴史研究と建築実態調査によって、一つの屋根で繋がる権現造形式の社殿が同時期に完成したものではないことが明らかとなったが、今回の調査研究では社殿建築部材を全解体して復原調査を実施するものではないことから、床下の発掘調査を地元教育委員会の協力を得て実施し、上部建築構造との関係性について実態調査を実施した。

##### 1) 調査目的

- ・幣殿と拝殿の関係性について確認（建立時期が異なるか否か）
- ・幣殿と本殿の関係性について確認（建立時期が異なるか否か）
- ・本殿下部の土層確認（サブトレンチにて確認）

##### 2) 調査範囲

図 28 に示す通り、A～F 位置のトレンチを実施した。なお、F 位置についてはサブトレンチを行い、土層確認を併せて実施した。

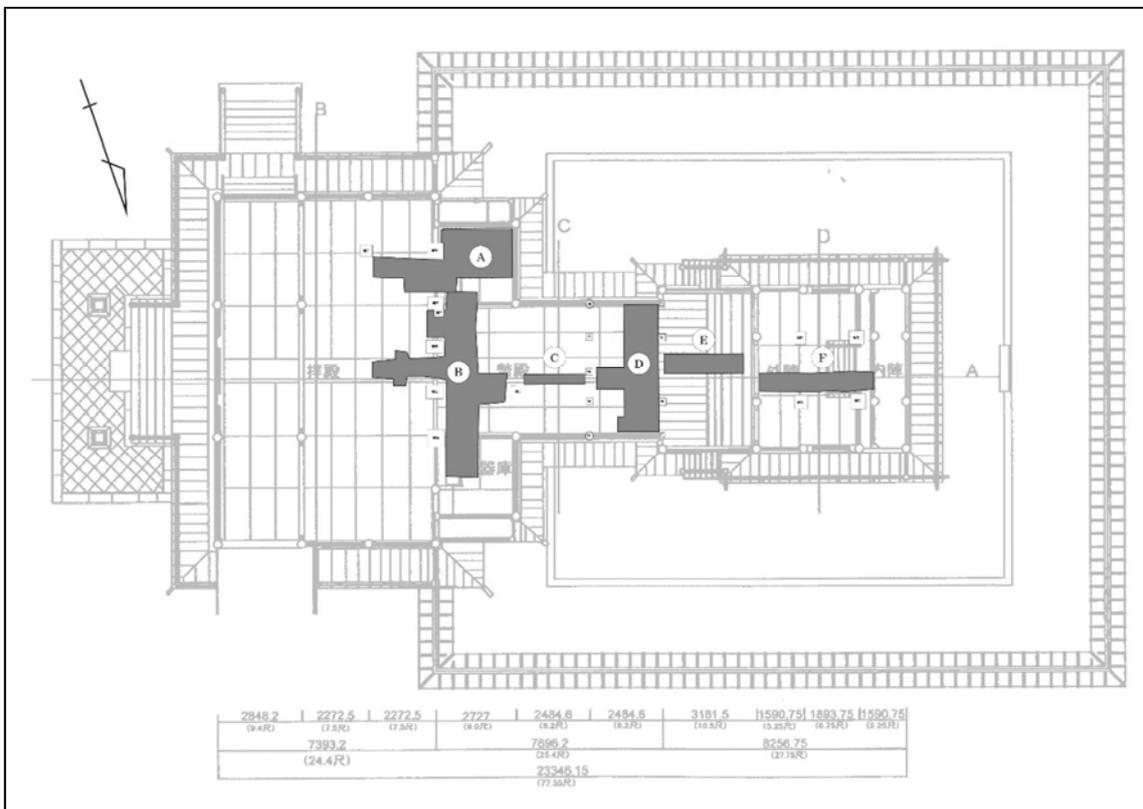


図 28 発掘調査トレンチ実施範囲（A～F）

##### 3) 調査結果

A 位置に関しては幣殿神饌所から拝殿に至る東西軸でのトレンチとなるが、この位置には造替時の地業工事が成されていないことが明らかとなった。また、この位置から小規模な柱穴 5 基も検出されたが、建築的な規則性は確認されず現社殿との関係性は特に無いものと判断される。

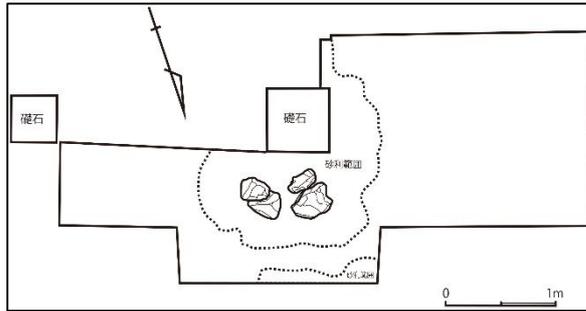


図 29 A位置トレンチによる地層確認

B位置に関しては幣殿中央から西側拝殿と北側祭器庫のトレンチとなるが、幣殿中央部には地業が確認される一方、拝殿と祭器庫には地業工事が成されていないことが明らかとなった。また、この中央位置から小規模な柱穴 3 基も検出されたが、Aトレンチ同様に現社殿との関係性は特に無いものと判断される。

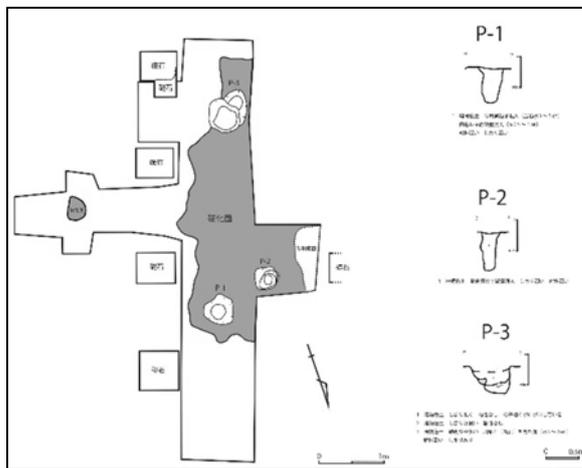


図 30 B位置トレンチによる地層確認

C位置に関しては幣殿中央部東西軸でのトレンチとなるが、全ての範囲で地業が施されていたことが確認された。

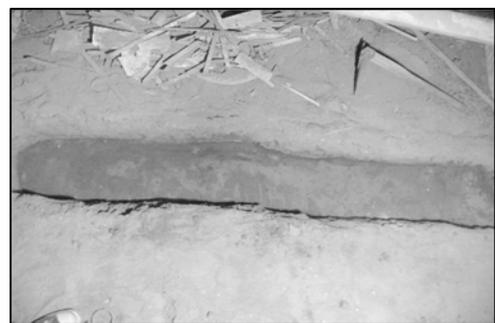
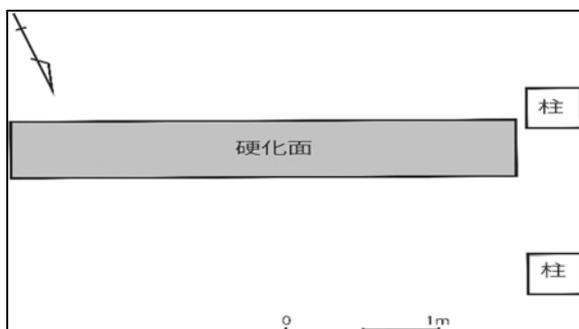


図 31 C位置トレンチによる地層確認

D位置に関しては幣殿と本殿が接する南北面でのトレンチとなるが、当初は基本的には地業は成されていたはずだが、現状は南側の約半分が砂利敷に改められている。何かしら途中での改修か、または本殿と幣殿の建立を別時期とする計画がそもそも前提としてあったかを思わせる地業となっている。

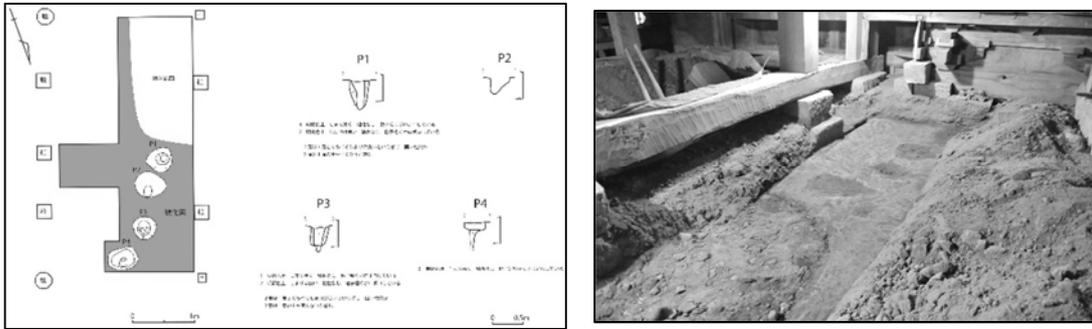


図 32 D位置トレンチによる地層確認

E位置に関しては本殿浜床と階中央部東西軸でのトレンチとなるが、全ての反映で地業が成されていたはずであるが、D位置からの砂利敷範囲が円弧状に一部延びている。この理由は詳らかではないが、後の改修によるものと推測される。

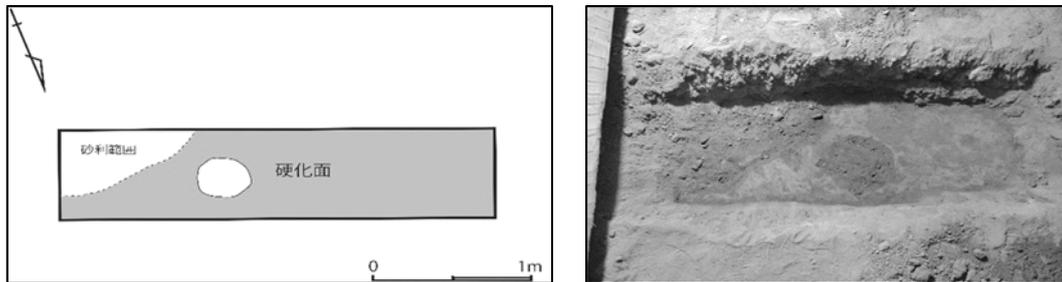


図 33 E位置トレンチによる地層確認

F位置に関しては本殿内陣中央部東西軸でのトレンチとなるが、全ての範囲で地業が確認された。また、小規模な柱穴1基も発見されたが、社殿との関係性はない。

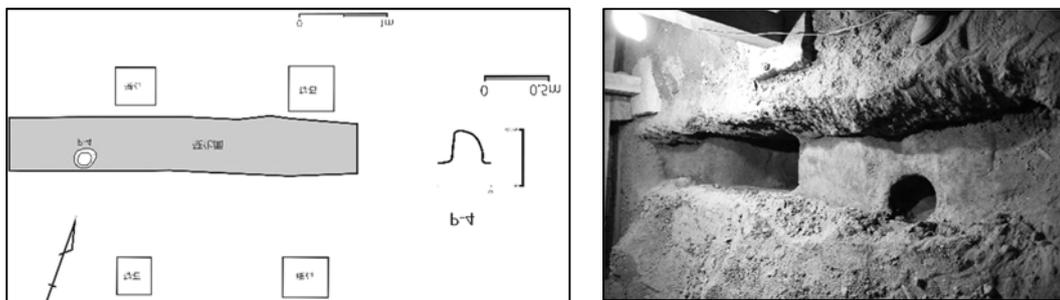


図 34 E位置トレンチによる地層確認

更にF位置に関しては土層確認のためにサブトレンチも実施したが、写真17の通り地山（関東ローム層）の上部には6層の土層があることが確認された。1層目となる最上部は黄色味が強い土で締め固めが成されておらず、盛ってあるだけのもので厚みは30cm程となる。2層目は礫層となり、厚みは20cm程度でさらさらの黒色土が混ざっていた。3層目は暗褐色の土で、厚みは10cm程度で若干の固さがあった。4層目は黄白色の石灰が意図的に混練された固い土であり、厚みが20cm程度の地業層となる。従ってこの面が社殿建立のための地業工事面となり、本殿床下現表層からは凡そ60cm下がりが地業面となることが判った。5層目は黄褐色のロームブロックを主体とした層で、厚みは50cm程度で若干の固さがあった。そして6層目となる黒土が旧表土であり、厚みは20cm程度のさらさらとした土となる。これにより、現表層から凡そ150cm下がりの位置に地山があり、支持層が表層に近い位置にあることから大規模社殿の建立には適した場所であったことが明らかとなった。



写真17 F位置サブトレンチによる地層断面

#### 4) 調査所見

今回の発掘調査により、本殿・幣殿床下基礎全面に総地業が施されていることが判明したが、一方で拝殿は柱下のみの坪掘り地業となっていることが判った。これにより、拝殿は本殿・幣殿建立となる第一期工事には元々予定されておらず、建設資金の調達目処が立った後の第二期工事で計画されていたものと推測される。また、本殿・幣殿基礎が総地業となることから、幣殿南北面に付帯する神饌所と祭器庫に関しても地業が施されていないため、これら二室も第一期工事の計画には無かったと考えられる。恐らく上棟式直後に、信者たちからの申し出で隨身像二体の寄進が決まったことで、急遽計画変更が行われ、第一期工事に追加された空間であると考えられる。

以上のように、箭弓稲荷神社社殿は二段階での建設事業であったことが判るが、これは歓喜院聖天堂を参考にした事業形態だと考えられ、権現造形式の本殿・幣殿までを第一期として祭神のご開帳を行い、その浄財が第二期の拝殿建設費用に充当されたことが、この発掘調査によって裏付けられた。

## 5. 建築実態研究小結

史資料調査でも推測していた通り、本殿屋根螻羽の軒支輪小屋裏側と拝殿内法長押から創建当初の屋根材と考えられる柿板断片が発見された。これにより、創建当初の社殿屋根は柿葺であったことが明らかとなったが、これに加え、屋根軒回りに残る痕跡から一般的な小軒板を積層して軒積を形成する納まりとはせず、平葺板をそのまま積層して軒積を形成する檜皮葺様式とする特異な施工方法を採用していたことも明らかとなった。この工法は全国的にも稀少であり、代表的な遺構として京都丹波地方に所在する重要文化財大山祇神社本殿が挙げられるが、関東地方での類例は見当たらない。この納まりを大工棟梁であった飯田和泉守藤原金軌が採用するに当っては、独自の発案とは考え辛く、助言提案した者がいたと考えられる。この情報発信源を京都丹波地方と仮定した場合、二つの可能性が出てくる。まずは柿葺施工を担った屋根職人頭が丹波地方の職人と縁があり、そこから得た知見を棟梁の金軌に提案した説である。次に第二として中山道や川越道を経由し、武蔵国に活動拠点を持っていた近江商人の存在が考えられる。箭弓稲荷神社には日野商人と近江八幡商人が出入りしていたことは明らかであり、棟梁の金軌に近江に近在する丹波での屋根施工技術を情報提供した説である。近江商人は神仏への信仰が篤く、陰徳善事を重んずる者が多数いたとされる。このため、成功した近江商人の多くは私財を社寺に寄進することも決して珍しくなく注43、彼らの行動哲学からも、民意で社殿の造替事業が行われている箭弓稲荷神社への協力は、最も望むところではなかったかと思われる。何れにしても、この特異な施工技術が関東地方にも存在していたことが明らかとなった。

次に内部空間であるが、本殿・幣殿においては著しい改変箇所は確認されず、御簾などの備品や設備更新を除けば創建当初のままの様相が堅持されている。一方、拝殿に関しては手前一間間が元々吹放ちの下拝空間であったことが調査により判明したが、参詣者はここまで土足で踏み、拝礼が行われていたことが明らかとなった。また、下拝と内拝は半葺によって空間が仕切られており、内拝側中央部には埋込型の賽銭箱が設えられていたことも確認された。これは歓喜院聖天堂拝殿にも見られる同様の形式となるが、他では余りにしない特異な形であることから、宮大工集団飯田一族が歓喜院聖天堂の造営にも携わっていたことを示す重要な根拠にも成り得る。なお、拝殿空間の拡張によって床は畳敷きに変更されているが、これによって多くの人々が一同に拝殿に介することが可能となった。

その他、社殿小屋束に残される組合せ番付により、幣殿から本殿へと向かう梁間方向の数字番付が、幣殿より若い番号が付されて本殿に向かっていることから、この二棟は計画的に同一時期に施工が実施されたものであったと推測される。

なお、建築実態調査と併行して実施した社殿床下発掘調査によって、拝殿床下には地業工事が実施されていないことが明らかとなり、元々この造替事業計画は二期に分割して実施する計画であったことが建築実態調査と発掘調査によって判明した。このような手法は歓喜院聖天堂の造営にも見られ、奥殿・中殿までを完成させた後に工事を休止し、浄財が獲得出来た後に拝殿の造営に取り掛かっている。箭弓稲荷神社社殿の造替もこれに倣い、段階的整備計画を進めるために本殿を彫刻で埋め尽くす絢爛な様相とし、参詣者がその素晴らしさを口伝で広めてくれることで、更なる参詣者の獲得を狙ったものと推測される。

注 43 (地域の公共事業にも積極投資が成される実績が数多く、一貫した哲学があったと分析されている)

## 第4章 権現造形式社殿の建築様式調査

### 1. 権現造の系譜考察

権現造は神社建築様式の一つに位置付けられ、本殿と拝殿との繋ぎの間を「石の間」・「幣殿」または「相の間」のいずれかで連結した社殿全体を指した建築様式である。福山敏男氏・稲垣栄三氏の既往研究によれば、このような社殿祖形は北野天満宮社殿（京都市）にあったと見られており、その起源は平安時代の天徳4年（960）まで遡ると考えられている。これ以降、神社建築に限って見れば慶長4年（1599）建立の豊国神社<sup>注44</sup>（図35）に至るまでの凡そ640年間は、このような建築様式の社殿は造営されてはいないものと推測され、この後、慶長12年（1607）の現北野天満宮社殿造替や大崎八幡宮社殿<sup>注45</sup>（仙台市）造営に始まり、寛永13年（1636）の日光東照宮社殿造替（日光市）と、その後は霊廟建築を中心にこの建築様式が全国にも広まり、一つの神社建築様式として確立されて行った。江戸幕府作事方大棟梁であった平内家に伝来した木割書に匠明<sup>注46</sup>がある。吉政・政信父子によって慶長13年（1608）に成立が果たされるが、その「社記集」のなかに五間四面大社ノ図（図28）として豊国神社が掲載されており、ここでは「宮寺造」という名称となっている。



図35 洛中洛外図屏風に描かれる豊国神社

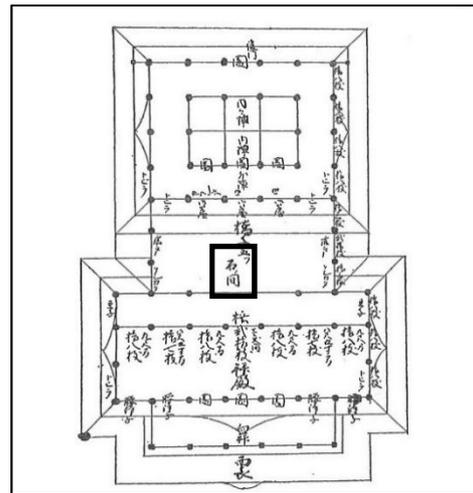


図36 匠明に掲載される宮寺造指図

権現造の呼称が定着し始めたのは幕末頃と考えられており、全国各地に造営された東照宮にこの複合社殿形式が多く見られたことで、御祭神となる東照大権現（徳川家康）の名に肖り、この名称が通称化された。なお、先行研究にて北野天満宮を嚆矢とする本殿と拝殿を繋ぐ「石の間」形式を踏襲する現存事例は大崎八幡宮の他に、日光東照宮や久能山東照宮（静岡市）などの東照宮に限られることが確認されており、また、徳川秀忠を祀るために芝増上寺境内に寛永9年（1632）に造営を行った台徳院殿霊廟<sup>注47</sup>以後は、梁間一間の

注44 （義演准后日記〈慶長三年九月〉に北野神社に倣った八棟造と記される）

注45 （仙台藩祖となった伊達政宗が中央から工匠を招き、豊国廟や北野天満宮を意図して造営した社殿となる）

注46 （太田博太郎・伊藤要太郎「匠明」1982年・P117）

注47 （社殿は昭和二十年五月に空襲で消失。台徳院殿霊廟模型が増上寺で修理保管されており、形状確認が可能）

細長い「幣殿」で接続する形式も採用され始める。「石の間」そのものは原則、本殿と同じ間口を有するもので、床を土間や石敷とするのが基本形態となるが、台徳院殿霊廟が基点となって間口を本殿より狭めることや、輪王寺大猷院（日光市）<sup>注48</sup>の繋ぎ間のように床を下げずに水平に張ることで「相の間」と言う考え方が位置付けられるようになった。これにより、社寺の祭礼用途に適合させた空間に変化して行ったことが判る。なお、「石の間」の呼称に関しては図36の匠明指図にも記される通りであるが、図37の大崎八幡宮社殿指図<sup>注49</sup>にもそれが確認できる。また、図38の北野天満宮社殿指図<sup>注50</sup>並びに図39の日光東照宮社殿<sup>注51</sup>では「幣殿」の呼称が用いられているが、大崎八幡宮・北野天満宮・日光東照宮は共に床を下げて板敷としているが、本殿間口との合致は大崎八幡宮のみであり、これによって図面では大崎のみ「石の間」の呼称になっていると考えられる。また、このことから恐らく豊国神社本殿と石の間も間口が同一であったものと想定される。

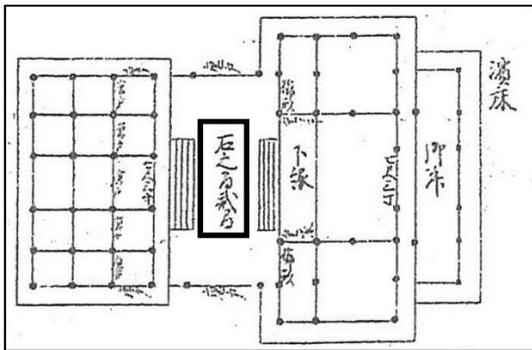


図37 大崎八幡宮社殿指図

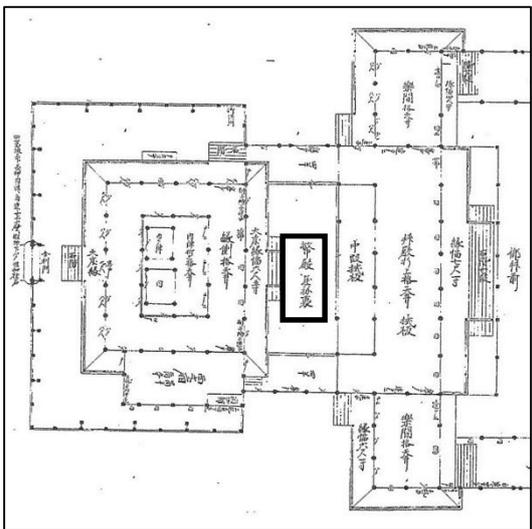


図38 北野天満宮社殿指図

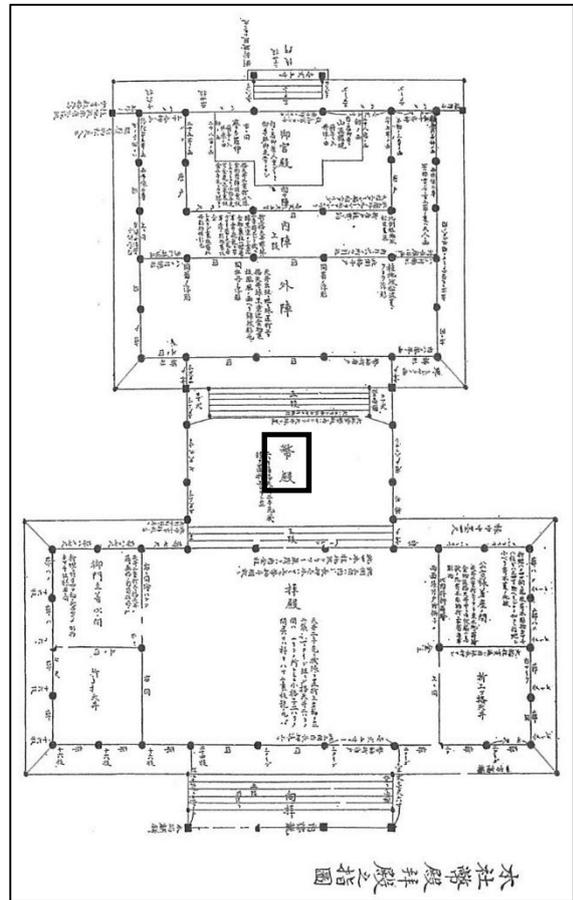


図39 日光東照宮社殿指図

注48 (承応二年<1653>に徳川家光を祀る霊廟として建立されたが、仏寺式要素を持つ建築である)

注49 (文化財建造物保存技術協会編「国宝大崎八幡宮保存修理工事報告書」2004年・P292)

注50 (中井家蔵「北野天満天神御立地割并社堂間数目録」)

注51 (日光東照宮蔵「東照宮本地割絵図・本社幣殿拝殿之指図」)

神社における幣殿に関して考察してみると、「神道名目類聚抄」<sup>注52</sup> 卷一宮社部条に「宮社ノカマヘハ、樓門ヨリ中門ニ至テ廻廊アリ、樓門ト中門ノ間ニ拝殿ヲ設ク、中門ヲ通りテ幣殿アリ、幣殿ト宮殿ノ間ニ祝詞屋アリ云々」とあり、その配置が示されている。また、同書の幣殿条には、「参詣ノ人奉幣ノ時、又ハ獻上物ナド、此所ニツイテ奉ルナリ」とあり、幣殿は奉納品を置く場所として記されている。一方、元禄から享保時代にかけて記された「古今神学類編」<sup>注53</sup> 卷之二十諸院篇 幣殿寶藏条には、「二所太神宮ニハ、正殿ノ東西ニ寶殿アリ。是ヲ東方殿西方殿ト稱シ、又ハ寶基本記ニハ寶藏ト云ヒ、江次第ニハ財殿ト云リ。東寶殿ニハ、禁裏ヨリノ幣帛ヲ奉納。此幣帛トハ錦綾ノ類歟。西寶殿ニハ是モ禁裏ヨリノ幣物御鞍等奉納ト也（中略）又、幣殿ト云ハ、此東西寶殿ノ外ニ荒垣ノ内乾方ニ當テ建リ。是、摂家其外高貴將軍家ヨリノ御幣物ヲ奉納スル御殿也トゾ。云々」と記されており、伊勢神宮に於いては身分により、幣殿と寶殿に納める幣帛並びに宝物を区別していること判る。しかし、その他の神社においては規模などから、奉納品などを区別して納めることは事実上不可能である。よって幣殿と寶殿が同一視されてきたものと推測されるが、幣殿の本来の役目となる幣帛を奉る単一社殿が、近世の利便性と合理的な考え方によってその趣旨を継承しながらも、新たな形態として本殿と拝殿を繋ぐ相の間と同一要素となり、屋根を一体化させた複合社殿の一つに組み込まれていったものと考えられる。今日、社殿を権現造とする大方の神社においては、幣殿は本殿と拝殿を繋ぐ聖域でもあると見なされるため、神職が祝詞奏上を行う場とすることが多いようである。

なお、幣殿名称初見は元永2年（1119）11月2日に記された「中右記」<sup>注54</sup> となるが、それには「甲辰、後聞、神人國貞が従者男取<sub>一</sub>松火<sub>一</sub>入<sub>一</sub>幣殿<sub>一</sub>出了<sub>一</sub>閉<sub>一</sub>戸頃而火從<sub>一</sub>幣殿<sub>一</sub>出來、云々」とあり、既に平安時代にはこの建築が存在していたことが判る。ただ、幣殿が境内に配されたのは大社・中社までのようで、寛文年間に記された「類聚神祇本源」<sup>注55</sup> 卷十一外宮別宮篇大中小社差別事条にも、小社への幣殿配置に関しては触れられてはいない。

以上のことにより、神霊を宿した御神体を祀る神域の「本殿」と、祭祀拝礼のために実務を担う神職奉仕者と祭祀権者の参詣者が着座する「拝殿」とを結ぶ相の間が「幣殿」・「石の間」となるが、本殿と拝殿の繋ぎ間の床を下げ、大方は本殿間口と同一幅とする空間が「石の間」であり、一方、繋ぎ間の床を下げずに同一高とし、本殿間口との関係を必ずしも同一幅とすることを意図しない空間を「幣殿」としていたと見て取れる。概括的にはこのような切り分けであったものと考えられるが、幣殿のことを地域によっては「中殿」・「間殿」とも称していた社殿も存在する。

神社建築は6世紀半ばの仏教公伝以後、飛鳥寺・法興寺・四天王寺・法隆寺などの寺院建築建立の影響を大きく受けたことは間違いなく、神の仮住まいに過ぎなかった屋代が御神体を常祀する神社へと変貌していくことになる。この成立に直接影響するのは神宮寺の建立であると考えられており、神仏習合の初期段階で登場するこの寺院が神社境内に建つことで、建築的な面での差別化を図ろうとする一方、同化する側面も一方で生じ始めた。

---

注52 （佐伯有義更訂「神道名目類聚抄」1934年）

注53 （神道大系編纂会編「神道大系 首編2 古今神学類編（上）」1981年・P479）

注54 （増補史料大成刊行会編「史料大成 第9巻 中右記」1965年・P178）

注55 （国文学研究資料館編「真福寺善本叢刊 第2期」2004年・P425）

8世紀以降の寺院建築に見られ始める特徴として、仏を祀る空間の「正堂」前に、教義に基づく儀礼空間の「礼堂」が別に設けられ始めることである。これは教義に基づく儀礼を重視した密教の影響<sup>注56</sup>によるものと後藤治氏は述べているが、それまでの仏堂内部空間の大半を仏像が占有する状況では、儀式を執り行うために庭上祭祀の併用は欠かせないものであった。このため、この形態は天候に左右されずに儀式を執り行うことを可能としたが、建築上は別棟であり、正堂と礼堂が併存する双堂形式であった。正堂最古の現存例として東大寺法華堂(図40)があり、天平年間の末期となる8世紀半ばの建築と考えられている。岡田英男氏は鎌倉時代に再建された礼堂を文永元年(1264)頃<sup>注57</sup>に接続し、一体の堂への改修をしたと推測している。その後、この形態は更に発展を遂げて行くことになり、堂内が内陣・外陣となる中世以降の仏堂形式へと展開していくことになるが、仏を祀る空間と儀礼空間との関係が多様化したことにより、寺院建築に新たな形態が生み出されたものと思われる。なお、これによって二つの建物を繋ぐという概念が工匠たちの脳裏にも植付けられ、神社建築においても権現造のような様式が創出される契機になったとも考えられる。

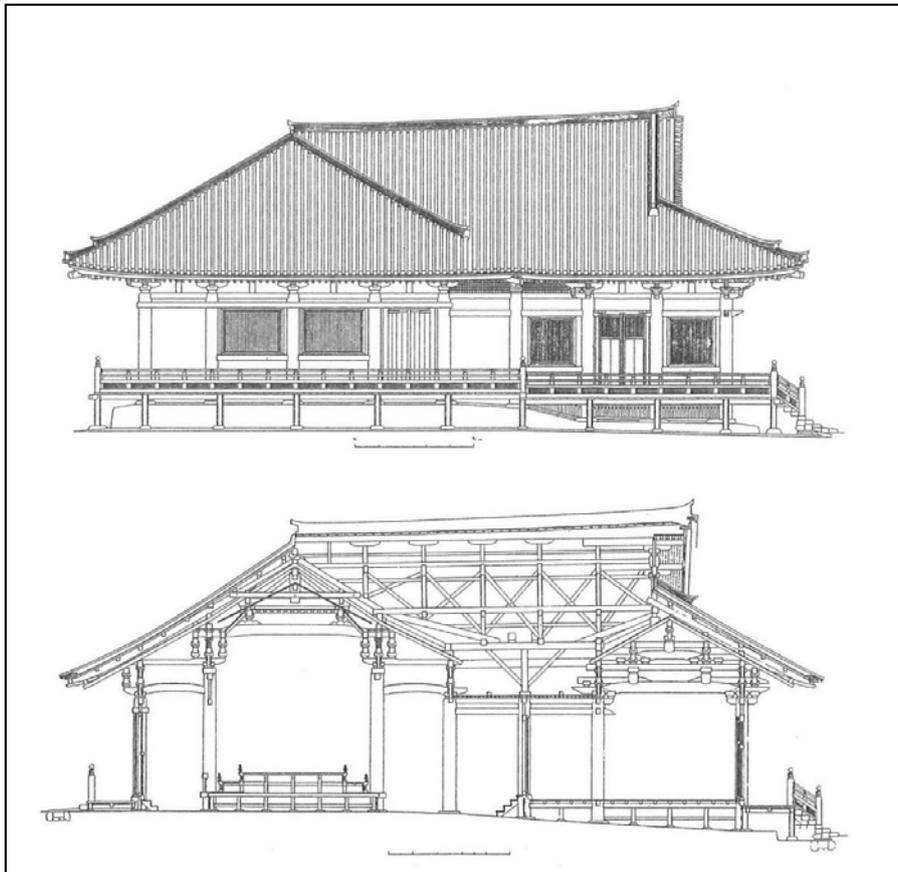


図40 東大寺法華堂側面図・断面図

注56 (後藤治「日本建築史」2003年・P27)

注57 (岡田英男「日本建築の構造と技法<下>」2005年・P83)

寺院建築の「正堂」は神社建築では「本殿」に相当し、また、寺院建築の「礼堂」は神社建築の「拝殿」に相当するとも考えられる。拝殿名称の初見は平安時代末期であり、「礼殿」と呼ばれていたときもある。このため、成立は本殿より後となるが、伊勢神宮・春日大社・松尾大社・宇佐神宮などの古社においては拝殿を設けていない。また、拝殿の形態には宇治上神社拝殿（宇治市）にも見られる横拝殿式と、尾張大国霊神社拝殿（稲沢市）にも見られる縦拝殿式のほか、石上神宮摂社出雲建雄神社拝殿（天理市）にも見られる割拝殿式などがあるが、寺院建築の双堂形式を思わせるのは横拝殿式が最も類似しており、本殿の軸線に対して横長となることから、本殿に対面する参詣者にとっても最も自然な形となるため、この形態が最も多く流布した拝殿形式と言える。

権現造形式社殿の祖形は前述の通り、平安時代の北野天満宮社殿に「石の間」が存在していたことは福山敏男氏の既往研究で示される通り明らかであるが、一方では古式な神社建築様式である「八幡造」との共通的な可能性について太田博太郎氏は指摘している。<sup>注 58</sup>

八幡造の事例の一つに宇佐神宮本殿（宇佐市）があるが、天平時代から朝廷の崇敬を受けてきた古社である。その本殿形式は独立した二つの棟が前後に結合して一つの社殿となるが、権現造と類似した建築様式とも見て取れる。図 41 に示す通り、正面三間・側面二間の後殿と側面一間の前殿とが並び、後殿と前殿とを「相の間」で繋いでいる。また、それぞれが切妻造の平入りとなり、相の間上部の谷に大きな横樋を渡して雨水を受けているが、宇佐神宮ではこの本殿が三殿並列している。なお、小山田家文書によれば、現本殿は江戸時代末期の安政 2 年（1855）から文久元年（1861）に掛け、旧規に倣って造替された社殿と伝えられている。<sup>注 59</sup> もし、八世紀前半にこの形式が完成している根拠が示されれば、二棟を繋ぐという建築形態は平安期の北野天満宮社殿よりも古く、この社殿形式が権現造の祖形に展開していく関係性について、必ずしも否定されるものではないと思われる。

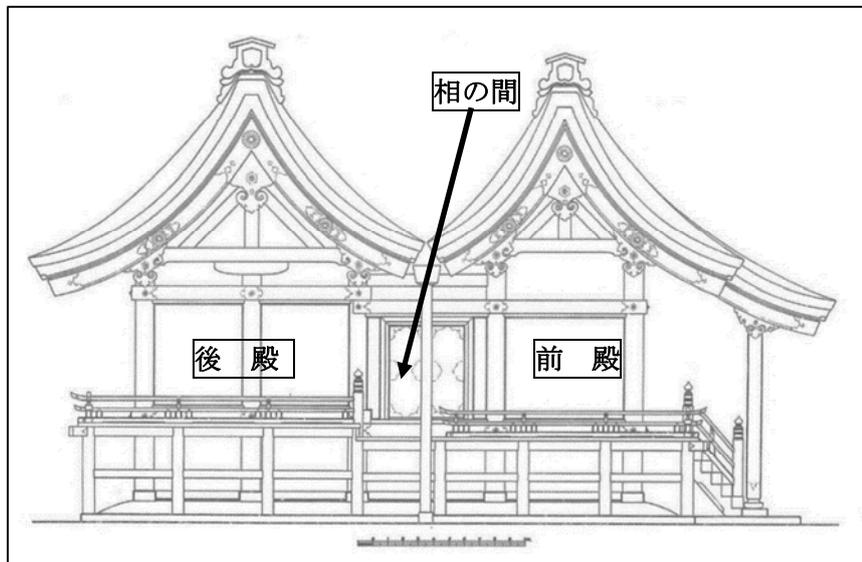


図 41 宇佐神宮本殿側面図

注 58 （太田博太郎「日本建築史序説」1947年・P76）

注 59 （稲垣栄三「神社建築史研究Ⅱ」2008年・P226）

この他、もう一つの見解として東大寺法華堂などでも見られた寺院建築の影響を受けたとの考え方が存在し、「永保寺開山堂」の建築形態が祖形となって権現造形式の社殿に展開していったとの見方も存在している。

永保寺（多治見市）は臨済宗南禅寺派の寺院であり、その境内に位置する開山堂は開山夢窓国師を祀る御堂として、室町時代初期の文和元年（1352）に建立されている。図 42 でも示す通り、前方には方三間の礼堂（外陣）があり、後方の方一間裳階付の祀堂（内陣）と「相の間」で繋いでいる。<sup>注 60</sup>また、礼堂内部を無柱空間とするために虹梁大瓶束形式で小屋組や屋根を支えており、これによって相の間を介して祀堂に祀られる開山頂相を直接拝することが出来るようになっている。寺院建築においてこのような複合社殿形式は特異な形態となるが、この二棟を繋ぐという概念が豊国神社社殿を始め、江戸時代初期建立の権現造社殿に何かしらの影響を齎した可能性も否定されるものではないと考えられる。

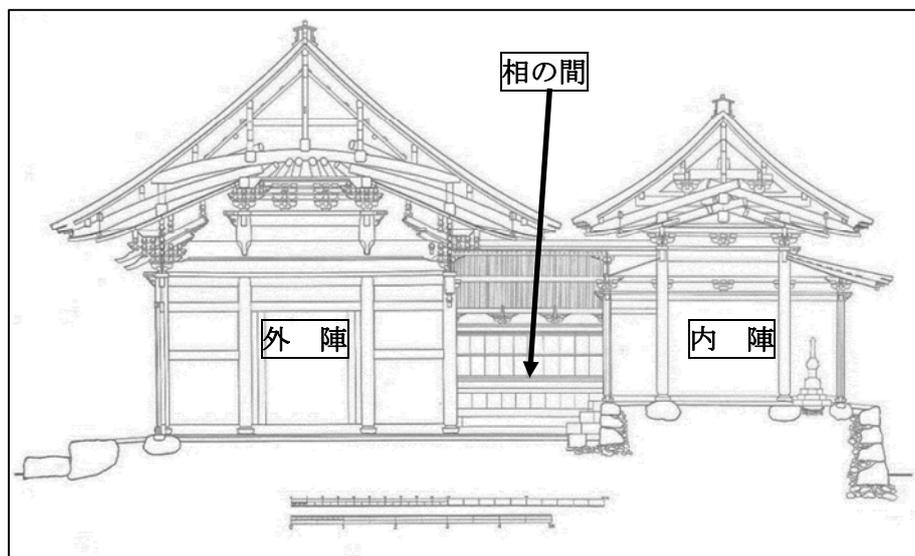


図 42 永保寺開山堂断面図

権現造形式の社殿に見られる二棟を繋ぐと言う概念は、宇佐神宮本殿が最も古式であると考えられるが、八幡造と権現造では接続意図や形状にも違いがあり、また、祭式手順の違いなどからもその関係性は慎重に検討すべきものと考えられる。一方、永保寺開山堂は間取り的には権現造形式に最も近い感はあるが、寺院建築の要素をそのまま神社建築に当て嵌めることについては、その関係性などを慎重に検討すべきものと考えられる。いずれにしても、天徳 4 年(960)の北野天満宮社殿を祖形とすれば、慶長 4 年(1599)の豊国神社までの 639 間は北野天満宮の建替えを除いてはこの建築様式は存在しなかったことになる。この間のことは現段階も不明であるが、そもそも平安期の北野天満宮社殿の石の間が屋内空間であったか屋外空間であったかは明らかではない。本来、神社は境内に単体の社殿を複数配置することが一般的であり、見方を変えれば権現造はそれに逸脱した形態となる。

注 60 （文化財建造物保存技術協会編「国宝永保寺開山堂及び観音堂保存修理工事報告書」2012 年・P12）

権現造が通称化される以前は、「八棟造」・「石の間造」・「宮寺造」の呼称でも呼ばれていたようで、この社殿形式の祖形は天徳 4 年に遡る北野天満宮社殿であったと考えられている。一方でその北野天満宮に伝わる口伝によれば、石の間は本殿前を横切る通路であったとの伝承があり、現在のようにそれが屋内空間であったかは詳らかではない。図 43 の神道名目類聚抄に描かれる宮社構図<sup>注 61</sup>からも明らかな通り、古式は本殿と幣殿は別棟とすることが原形であり、また、幣殿と中門間には屋外空間の石の間が存在している。このように、本殿・幣殿（石の間）・拝殿を連結する考え方はそもそも神社建築には無かったと思われるが、5 回目となる延徳 2 年（1490）の火災で建替えられた北野天満宮社殿の様相が、室町末期の制作となる洛中洛外図屏風に描かれている。それは現状と殆ど大差無い権現造形式社殿であり、室町後期には少なくともこの形態の社殿が存在していたことは明らかである。

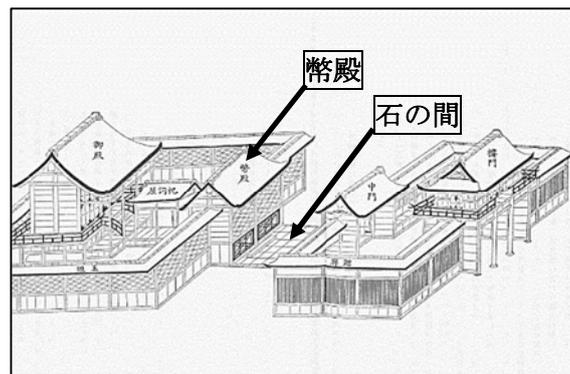


図 43 神道名目類聚抄（宮社構図）

永保寺開山堂は室町初期に建立された仏堂であり、礼堂（外陣）と祀堂（内陣）を相の間で接続する複合形式となる。永保寺開山堂と同一の臨済宗南禅寺派の金地院東照宮（京都市）とを比較すると、図 44 にも示す通り、建物の建築規模は平面的にも立面的にも概ね同一規模となり、金地院東照宮は永保寺開山堂の建築に倣った可能性がある。このことは同一宗派での共通性と見て取れるが、豊国神社以降の権現造形式社殿においても、古式な北野天満宮を除けば、寺院建築の要素がこの建築様式にも何かしら影響を及ぼしているとも考えられ、近世の工匠はそれを新たな神社建築様式として完成させたものと推測される。

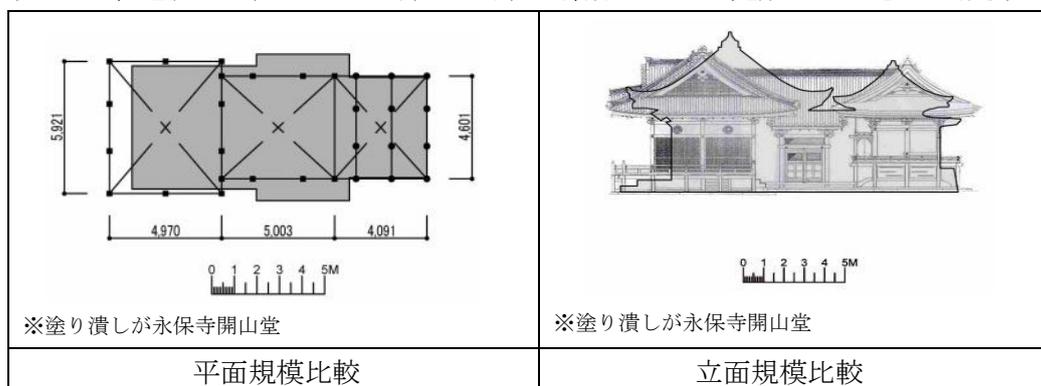


図 44 永保寺開山堂と金地院東照宮との規模比較検討

注 61 （神宮司應再編纂「神祇部一」1897 年・P443～P444）

## 2. 権現造社殿の建築規模比較検討

近世に入って徳川家による国家統治の正当性を確保するため、正一位東照大権現（徳川家康）を祀る東照社が各地で建立され始めるが、山田武晴氏の既往研究<sup>注62</sup>によると、これは神号授与による天皇からの東照大権現の存続保証と、天皇の宮号宣下による日光東照宮の存在保証が背景にあったためとしている。著名な東照社に権現造の建築様式が多かったことが影響してか、徳川家との直接的な関係が無い神社であってもこの建築様式を採用する神社も出現し始めたが、江戸時代における主要な権現造形式の社殿は表3に示す建物となる。これらの建物の基幹寸法を基に箭弓稲荷神社社殿との平面的（縦横長比・面積比）・立面的（各社殿高さ比・本殿基準高さ比）な比較検討を行い、それから読み取れる建築形態の変化についての考察を行うものとする。

	社寺名	建立年代	建立場所	指定区分
1	大崎八幡宮	慶長十二年(1607)	仙台市青葉区八幡 4-6-1	国宝
2	北野天満宮	慶長十二年(1607)	京都市上京区御前通今出川上る	国宝
3	久能山東照宮	元和三年(1617)	静岡市駿河区根古屋 390	国宝
4	和歌山東照宮	元和七年(1621)	和歌山市和歌浦西 2-1-20	重文
5	金地院東照宮	寛永五年(1628)	京都市左京区南禅寺福地町	重文
6	日光東照宮	寛永十三年(1636)	日光市山内 2301	国宝
7	六所神社	寛永十三年(1636)	岡崎市明大寺町耳取 44	重文
8	伊賀八幡宮	寛永十三年(1636)	岡崎市伊賀町東郷中 86	重文
9	相馬中村神社	寛永二十年(1643)	相馬市中村字北町 140	重文
10	日御碕神社	寛永二十一年(1644)	出雲市大社町日御碕 455	重文
11	浅草神社	慶安二年(1649)	台東区浅草 2-3-1	重文
12	上野東照宮	慶安四年(1651)	台東区上野公園 9-88	重文
13	輪王寺大猷院	承応二年(1653)	日光市山内 2300	国宝
14	三芳野神社	明暦二年(1656)	川越市郭町 2-25-1	県指定
15	高良大社	寛文元年(1661)	久留米市御井町 1	重文
16	根津神社	宝永三年(1706)	文京区根津 1-28-9	重文
17	妙義神社	宝暦六年(1756)	富岡市妙義町妙義 6	重文
18	歓喜院	宝暦十年(1760)	熊谷市妻沼 1627	国宝
19	桐生天満宮	享和二年(1802)	桐生市天神町 1-2-1	県指定
20	榛名神社	文化三年(1806)	高崎市榛名山町 849	重文
21	鶴岡八幡宮	文政十一年(1828)	鎌倉市雪ノ下 2-1-31	重文
22	箭弓稲荷神社	天保十一年(1840)	東松山市箭弓町 2-5-14	県指定
23	東京日吉神社	安政二年(1855)	昭島市拝島町 1-10-19	都指定

表3 建立年代順権現造社殿一覧表

注62 (山田武晴「複合的社殿の構成と祭祀者認識の相関・國學院大學成果論集」2012年・P181)

## 2-1. 本殿間口寸法に対する幣殿・拝殿の間口寸法比較

表3に列記した社殿において平面的検証を行うため、まずは本殿間口となる桁行側柱真々寸法を基準値とし、並行する幣殿（石の間・相の間）・拝殿の間口（横幅）寸法比について検証を行った結果、表4に示す比率となった。

社寺名	単位：mm			比率			関係図面
	本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
箭弓稲荷神社	5454	4545	11939	1	0.83	2.19	
1 大崎八幡宮	9818	9818	13636	1	1.00	1.39	付録 P148
2 北野天満宮	12969	18787	33211	1	1.45	2.56	付録 P149
3 久能山東照宮	6302	6302	10180	1	1.00	1.62	付録 P150
4 和歌山東照宮	6341	6341	10249	1	1.00	1.62	付録 P151
5 金地院東照宮	4601	4601	5921	1	1.00	1.29	付録 P152
6 日光東照宮	13788	9546	22272	1	0.69	1.62	付録 P153
7 六所神社	5020	5020	10416	1	1.00	2.07	付録 P154
8 伊賀八幡宮	4998	4998	10304	1	1.00	2.06	付録 P155
9 相馬中村神社	3530	3530	13590	1	1.00	3.85	付録 P156
10 日御碕神社	9696	4242	15150	1	0.44	1.56	付録 P157
11 浅草神社	6690	4945	14396	1	0.74	2.15	付録 P158
12 上野東照宮	7091	7091	15819	1	1.00	2.23	付録 P159
13 輪王寺大猷院	10651	4297	17187	1	0.40	1.61	付録 P160
14 三芳野神社	3976	3976	9104	1	1.00	2.29	付録 P161
15 高良大社	7919	7919	12835	1	1.00	1.62	付録 P162
16 根津神社	6666	6666	18412	1	1.00	2.76	付録 P163
17 妙義神社	4886	5135	4660	1	1.05	0.95	付録 P164
18 歓喜院	4678	3703	13399	1	0.79	2.86	付録 P165
19 桐生天満宮	3636	3636	11211	1	1.00	3.08	付録 P166
20 榛名神社	4462	2969	7453	1	0.67	1.67	付録 P167
21 鶴岡八幡神宮	12726	6667	9696	1	0.52	0.76	付録 P168
22 東京日吉神社	1818	4545	6363	1	2.50	3.50	付録 P169
			平均	1	0.97	2.05	

表4 本殿間口寸法に対する幣殿・拝殿間口（横幅）寸法比較表

箭弓稲荷神社本殿間口寸法1に対して幣殿は0.83・拝殿は2.19という比率となり、全体平均の本殿1：幣殿0.97：拝殿2.05の比率に近似した値ではあるが、やや幣殿の間口寸法が狭く絞られた横幅であることが判る。また、平均では本殿・幣殿の間口寸法が概ね同一

値となったが、これは本殿と幣殿の間口を基本的に同一とすることが設計意図として標準化されつつあったためと考えられる。なお、これによって幣殿の床を下げれば「石の間」と称し、更に床が水平に張られた寺院建築であれば「相の間」と称しており、本殿・拝殿を繋ぐ中間の建物名称は建物種別によって使い分けられていたとも推測される。

## 2-2. 本殿奥行寸法に対する幣殿・拝殿の奥行寸法比較

表4 矩手となる本殿梁間側柱真々寸法を基準とし、同一面の幣殿（石の間・相の間）・拝殿の奥行（縦幅）寸法比について検証を行った結果、表5に示す比率となった。

社寺名	単位：mm			比率			関係図面
	本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
箭弓稲荷神社	8409	7695	7393	1	0.92	0.88	
1 大崎八幡宮	7091	3818	6000	1	0.54	0.85	付録 P148
2 北野天満宮	12515	4970	7575	1	0.40	0.61	付録 P149
3 久能山東照宮	7324	4533	4848	1	0.62	0.66	付録 P150
4 和歌山東照宮	7475	4481	4866	1	0.60	0.65	付録 P151
5 金地院東照宮	4091	5003	4970	1	1.22	1.21	付録 P152
6 日光東照宮	13545	5159	8484	1	0.38	0.63	付録 P153
7 六所神社	5230	4960	5952	1	0.95	1.14	付録 P154
8 伊賀八幡宮	3180	6741	5910	1	2.12	1.86	付録 P155
9 相馬中村神社	8472	3884	5030	1	0.46	0.59	付録 P156
10 日御碕神社	11090	6363	12726	1	0.57	1.15	付録 P157
11 浅草神社	6218	12774	5889	1	2.05	0.95	付録 P158
12 上野東照宮	7908	5997	6546	1	0.76	0.83	付録 P159
13 輪王寺大猷院	12772	8803	6825	1	0.69	0.53	付録 P160
14 三芳野神社	3830	4364	5128	1	1.14	1.34	付録 P161
15 高良大社	7374	7511	7374	1	1.02	1.00	付録 P162
16 根津神社	7975	8484	7855	1	1.06	0.98	付録 P163
17 妙義神社	4886	5135	4660	1	1.05	0.95	付録 P164
18 歓喜院	7241	7545	7696	1	1.04	1.06	付録 P165
19 桐生天満宮	4697	7060	5727	1	1.50	1.22	付録 P166
20 榛名神社	4891	5705	4726	1	1.17	0.97	付録 P167
21 鶴岡八幡神宮	7272	5733	5818	1	0.79	0.80	付録 P168
22 東京日吉神社	5514	4545	4546	1	0.82	0.82	付録 P169
			平均	1	0.95	0.95	

表5 本殿奥行寸法に対する幣殿・拝殿奥行（縦幅）寸法比較表

箭弓稲荷神社本殿奥行寸法 1 に対して幣殿は 0.92・拝殿は 0.88 という比率となり、全体平均の本殿 1：幣殿 0.95：拝殿 0.95 の比率に近似した値ではあるが、やや拝殿の奥行寸法が狭く、また、手前側一間が下拝であったため、参詣者に手狭感を与えていたと思われる。なお、拝殿を同一形態とする歓喜院聖天堂（付図 19）では、拝殿 1.06 と広めとなっている。

### 2-3. 本殿・幣殿・拝殿の間口に対する奥行寸法比較

本殿・幣殿（石の間・相の間）・拝殿それぞれの間口（横幅）寸法を基準とし、奥行（縦幅）寸法に対する縦横比について検証を行った結果、表 6 に示す比率となった。

社寺名	各社殿間口に対する奥行比率						関係図面
	本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
箭弓稲荷神社	1	1.54	1	1.69	1	0.62	
1 大崎八幡宮	1	0.72	1	0.39	1	0.44	付録 P148
2 北野天満宮	1	0.96	1	0.26	1	0.23	付録 P149
3 久能山東照宮	1	1.16	1	0.72	1	0.48	付録 P150
4 和歌山東照宮	1	1.18	1	0.71	1	0.47	付録 P151
5 金地院東照宮	1	0.89	1	1.09	1	0.84	付録 P152
6 日光東照宮	1	0.98	1	0.54	1	0.38	付録 P153
7 六所神社	1	1.04	1	0.99	1	0.57	付録 P154
8 伊賀八幡宮	1	0.78	1	1.20	1	0.57	付録 P155
9 相馬中村神社	1	2.40	1	1.10	1	0.37	付録 P156
10 日御碕神社	1	1.14	1	1.50	1	0.84	付録 P157
11 浅草神社	1	0.93	1	2.58	1	0.41	付録 P158
12 上野東照宮	1	1.12	1	0.85	1	0.41	付録 P159
13 輪王寺大猷院	1	1.19	1	2.05	1	0.40	付録 P160
14 三芳野神社	1	0.96	1	1.10	1	0.56	付録 P161
15 高良大社	1	0.93	1	0.95	1	0.57	付録 P162
16 根津神社	1	1.20	1	1.27	1	0.43	付録 P163
17 妙義神社	1	1.05	1	1.10	1	0.50	付録 P164
18 歓喜院	1	1.55	1	2.04	1	0.57	付録 P165
19 桐生天満宮	1	1.29	1	1.94	1	0.51	付録 P166
20 榛名神社	1	1.10	1	1.92	1	0.63	付録 P167
21 鶴岡八幡神宮	1	0.57	1	0.86	1	0.60	付録 P168
22 東京日吉神社	1	3.03	1	1.00	1	0.71	付録 P169
平均	1	1.19	1	1.19	1	0.52	

表 6 本殿・幣殿・拝殿の間口に対する奥行（縦幅）寸法比較表

箭弓稲荷神社社殿は本殿・幣殿・拝殿共に間口に対する奥行寸法比が全体平均よりも大きいことが明らかとなったが、特に本殿奥行は平均の凡そ 29%増しとなり、また、幣殿奥行は平均の凡そ 40%増しであった。相馬中村神社や歓喜院聖天堂も同様に本殿奥行寸法比が大であるが、共に屋根形式が流造であるために柱割りなどが影響していると思われる。

## 2-4. 本殿床面積に対する幣殿・拝殿床面積比較

本殿床面積を基準とし、幣殿（石の間・相の間）・拝殿の床面積比について検証を行った結果、表 7 に示す比率となった。

社寺名	単位：m <sup>2</sup>			比率			関係図面
	本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
箭弓稲荷神社	45.862	55.137	88.265	1	1.20	1.92	
1 大崎八幡宮	69.619	37.485	81.816	1	0.54	1.18	付録 P148
2 北野天満宮	162.307	106.595	212.240	1	0.66	1.31	付録 P149
3 久能山東照宮	46.156	28.567	49.353	1	0.62	1.07	付録 P150
4 和歌山東照宮	47.399	28.414	49.872	1	0.60	1.05	付録 P151
5 金地院東照宮	18.823	23.019	29.427	1	1.22	1.56	付録 P152
6 日光東照宮	174.287	49.248	188.956	1	0.28	1.08	付録 P153
7 六所神社	26.255	24.899	61.996	1	0.95	2.36	付録 P154
8 伊賀八幡宮	21.649	27.940	60.897	1	1.29	2.81	付録 P155
9 相馬中村神社	29.906	13.711	68.358	1	0.46	2.29	付録 P156
10 日御碕神社	96.621	26.992	192.799	1	0.28	2.00	付録 P157
11 浅草神社	41.598	56.461	84.778	1	1.36	2.04	付録 P158
12 上野東照宮	56.076	42.525	103.551	1	0.76	1.85	付録 P159
13 輪王寺大猷院	119.864	37.826	117.301	1	0.32	0.98	付録 P160
14 三芳野神社	15.228	17.351	46.685	1	1.14	3.07	付録 P161
15 高良大社	58.395	59.480	94.645	1	1.02	1.62	付録 P162
16 根津神社	53.161	56.554	144.626	1	1.06	2.72	付録 P163
17 妙義神社	22.269	23.929	43.431	1	1.07	1.95	付録 P164
18 歓喜院	33.873	36.545	103.119	1	1.08	3.04	付録 P165
19 桐生天満宮	17.078	31.605	64.205	1	1.85	3.76	付録 P166
20 榛名神社	21.824	16.938	35.223	1	0.78	1.61	付録 P167
21 鶴岡八幡神宮	85.200	38.222	56.411	1	0.45	0.66	付録 P168
22 東京日吉神社	10.024	26.626	28.926	1	2.66	2.89	付録 P169
			平均	1	0.93	1.95	

表 7 本殿床面積に対する幣殿・拝殿床面積比較表

箭弓稲荷神社本殿床面積 1 に対して幣殿は 1.20、拝殿は 1.92 という比率となり、全体平均の本殿 1：幣殿 0.93：拝殿 1.95 の比率に近似した値ではあるが、幣殿床面積は平均の凡そ 23%増しでやや広めとなる。これは建築計画を始めた当初基本設計図（図 9）の幣殿屋根に煙出し腰屋根が描かれていたが、天台宗寺院の別当が加持祈祷をこの空間で行うことを目論んでいたことにより、床面積が多少広めに計画されたものと推測される。

## 2-5. 平面的検討小結

本殿・幣殿・拝殿の縦横長比と面積比をそれぞれ個別に検証を行った結果、箭弓稲荷神社社殿の平面計画は他の権現造社殿と比較しても平均的な平面規模形状であったことが判る。本殿は間口寸法 1 に対して奥行寸法を 1.54 とすることで白銀比<sup>注 63</sup>にも近似する平面形状となるが、祭神を祀る内陣祭壇配置や前面向拝部の間が広く、燭台などの備品配置に都合が良い。一方、幣殿は間口寸法 1 に対して奥行寸法が 1.69 とすることで黄金比<sup>注 64</sup>に近似する平面形状となるが、本殿間口より 909 mm（三尺）ほど間口が狭いことで御祭神が祀られる本殿が奥まって見える視覚効果があり、更には神職が祝詞奏上する場としての機能が優先される間となっている。また、拝殿は棟通りを矩手とする平入りとなるが、梁間短辺（奥行）寸法を 1 とした場合に桁行長辺（間口）寸法は 1.53 となり、本殿と同様に白銀比にも近似する平面形状となることで規模形状のバランスは良い。ただ、創建当初から手前一間間は踏込みの下拝であったことが建築実態調査で判明しているため、奥二間間が内拝となり、参詣者には手狭間を与えていたと考えられる。

以上の平面的な検討により、稲垣栄三氏が既往研究でも示唆されていた通り、幣殿（石の間）の形状変化が年代の推移と合致する状況にあることが確認できた。具体的には江戸最初期の「本殿」は奥行より間口の方が広く、それ以降の中期に至るまでは奥行と間口が拮抗するか、やや奥行が広がる傾向が見られる。中期以降は鶴岡八幡宮のような復古的な例を除けば、原則、奥行を間口より広く採ることが定型化していく。次に「幣殿」（石の間・相の間）であるが、江戸最初期は奥行より間口の方が広く、床を下げて本殿間口と同一幅の間口とすることで石の間の呼称で呼ばれた。それ以降の中期に至るまでも間口の広い方が多いが、奥行と間口が拮抗する傾向も出始めるようになる。また、個々の祭祀の関係から床を下げずに同一高とした幣殿（相の間）も出現し始め、更には本殿間口と同一幅の間口とはせず、その内で納める形態も見られ始める。中期以降は奥行と間口が拮抗する例も残るが、原則、奥行を間口より広く採ることが定型化し、本殿と拝殿を繋ぐ間となる幣殿の奥行寸法の調整により、社殿全体の意匠バランスを決定していたと考えられる。そして最後に「拝殿」となるが、江戸最初期は奥行より間口の方が圧倒的に広く、それ以降の中期に至るまでは特異な例を除けば、同様に間口の方が広い。中期以降もこのことは変わらず、間口の方を広くしている。なお、本殿・幣殿間口が拝殿間口より広くなることは原則無く、鶴岡八幡宮のように本殿の方が広がる事例は特例と考えられ、基本的には権現造の平面計画においては拝殿間口が大となる。以上が平面的な規模比較検討によって明らかとなった。

注 63 (1:√2<1:1.414>の比率で大和比とも称される)

注 64 (1:√3<1:1.618>の比率で第 1 貴金属比とも称される)

## 2-6. 本殿棟高寸法に対する幣殿・拝殿の棟高寸法比較

表4～7では平面的比較検証を行ってみたが、次ぎは立ち上がりとなる立面的な比較検証を行うため、まずは本殿棟寸法を基準値とし、接続する幣殿（石の間・相の間）・拝殿の棟高寸法比について検証を行った結果、表8に示す比率となった。

社寺名	単位：mm			比率			関係図面
	本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
箭弓稲荷神社	10636	8043	10025	1	0.76	0.94	
1 大崎八幡宮	9200	8700	8500	1	0.95	0.92	付録P148
2 北野天満宮	11600	11500	11375	1	0.99	0.98	付録P149
3 久能山東照宮	8600	7620	8000	1	0.89	0.93	付録P150
4 和歌山東照宮	8760	7672	8190	1	0.88	0.93	付録P151
5 金地院東照宮	6839	6606	7900	1	0.97	1.16	付録P152
6 日光東照宮	14923	12012	12573	1	0.80	0.84	付録P153
7 六所神社	7900	7500	8376	1	0.95	1.06	付録P154
8 伊賀八幡宮	8048	7415	8503	1	0.92	1.06	付録P155
9 相馬中村神社	9798	7822	9963	1	0.80	1.02	付録P156
10 日御碕神社	12490	7650	12610	1	0.61	1.01	付録P157
11 浅草神社	9055	8697	9450	1	0.96	1.04	付録P158
12 上野東照宮	10500	10200	10500	1	0.97	1.00	付録P159
13 輪王寺大猷院	12771	8030	10263	1	0.63	0.80	付録P160
14 三芳野神社	8090	7848	8363	1	0.97	1.03	付録P161
15 高良大社	11515	11403	11515	1	0.99	1.00	付録P162
16 根津神社	10205	9280	9825	1	0.91	0.96	付録P163
17 妙義神社	8276	7913	8434	1	0.96	1.02	付録P164
18 歓喜院	9250	8375	11125	1	0.91	1.20	付録P165
19 桐生天満宮	8347	7672	9999	1	0.92	1.20	付録P166
20 榛名神社	10390	7852	9730	1	0.76	0.94	付録P167
21 鶴岡八幡神宮	9900	10100	10800	1	1.02	1.09	付録P168
22 東京日吉神社	6080	7275	7150	1	1.20	1.18	付録P169
			平均	1	0.91	1.02	

表8 本殿棟高に対する幣殿・拝殿棟高比較表

箭弓稲荷神社本殿棟高寸法1に対して幣殿は0.76・拝殿は0.94という比率となり、全体平均の本殿1：幣殿0.91：拝殿1.02の比率に近似した値ではあるが、幣殿棟高は平均より凡そ16.5%の減となり、棟高を抑えた設計となっていることが判る。これは日御碕神社や

輪王寺大猷院・榛名神社にも同様の傾向が見られ、幣殿屋根を下げることで本殿が高く聳えて見える視覚効果を狙ったものと推測される。次に拝殿棟高であるが、これは平均より凡そ1%の減に留まり概ね平均値となるが、拝殿棟高は江戸初期建立社殿を除けば概ね本殿棟高に高さを揃える傾向が見られる一方、箭弓稲荷神社は敢えて下げていることが判った。

## 2-7. 箭弓稲荷神社社殿棟高寸法に対する各社殿棟高寸法比較

箭弓稲荷神社本殿・幣殿・拝殿の各棟高に対する各社殿との本殿・幣殿（石の間・相の間）・拝殿棟高寸法比について検証を行った結果、表9に示す比率となった。

社寺名	単位：mm			比率			関係図面
	本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
箭弓稲荷神社	10636	8043	10025	1	1	1	
1 大崎八幡宮	9200	8700	8500	0.86	1.08	0.85	付録 P148
2 北野天満宮	11600	11500	11375	1.09	1.43	1.13	付録 P149
3 久能山東照宮	8600	7620	8000	0.81	0.95	0.80	付録 P150
4 和歌山東照宮	8760	7672	8190	0.82	0.95	0.82	付録 P151
5 金地院東照宮	6839	6606	7900	0.64	0.82	0.79	付録 P152
6 日光東照宮	14923	12012	12573	1.40	1.49	1.25	付録 P153
7 六所神社	7900	7500	8376	0.74	0.93	0.84	付録 P154
8 伊賀八幡宮	8048	7415	8503	0.76	0.92	0.85	付録 P155
9 相馬中村神社	9798	7822	9963	0.92	0.97	0.99	付録 P156
10 日御碕神社	12490	7650	12610	1.17	0.95	1.26	付録 P157
11 浅草神社	9055	8697	9450	0.85	1.08	0.94	付録 P158
12 上野東照宮	10500	10200	10500	0.99	1.27	1.05	付録 P159
13 輪王寺大猷院	12771	8030	10263	1.20	1.00	1.02	付録 P160
14 三芳野神社	8090	7848	8363	0.76	0.98	0.83	付録 P161
15 高良大社	11515	11403	11515	1.08	1.42	1.15	付録 P162
16 根津神社	10205	9280	9825	0.96	1.15	0.98	付録 P163
17 妙義神社	8276	7913	8434	0.78	0.98	0.84	付録 P164
18 歓喜院	9250	8375	11125	0.87	1.04	1.11	付録 P165
19 桐生天満宮	8347	7672	9999	0.78	0.95	1.00	付録 P166
20 榛名神社	10390	7852	9730	0.98	0.98	0.97	付録 P167
21 鶴岡八幡神宮	9900	10100	10800	0.93	1.26	1.08	付録 P168
22 東京日吉神社	6080	7275	7150	0.57	0.90	0.71	付録 P169
			平均	0.91	1.07	0.97	

表9 箭弓稲荷神社社殿棟高に対する各社殿棟高比較表

箭弓稲荷神社本殿 1 に対して本殿平均値は 0.91 と低く、また、箭弓稲荷神社幣殿 1 に対して幣殿平均値は 1.07 と逆に高くなり、更に箭弓稲荷神社拝殿 1 に対して拝殿平均値は 0.97 と概ね同一比率となった。これにより、大工棟梁であった飯田和泉守藤原金軌は、最奥に配置される本殿を際立たせるための設計を意図したことが明らかとなった。

## 2-8. 箭弓稲荷神社本殿棟高寸法に対する各社殿棟高寸法比較

箭弓稲荷神社本殿棟高を上げた設計意図を更に明確にするため、各社殿の本殿・幣殿（石の間・相の間）・拝殿棟高寸法比について検証を行った結果、表 10 に示す比率となった。

		単位：mm			比率			関係図面
		本殿	幣殿	拝殿	本殿	幣殿	拝殿	
	箭弓稲荷神社	10636	8043	10025	1	0.76	0.94	
1	大崎八幡宮	9200	8700	8500	0.86	0.82	0.80	付録 P148
2	北野天満宮	11600	11500	11375	1.09	1.08	1.07	付録 P149
3	久能山東照宮	8600	7620	8000	0.81	0.72	0.75	付録 P150
4	和歌山東照宮	8760	7672	8190	0.82	0.72	0.77	付録 P151
5	金地院東照宮	6839	6606	7900	0.64	0.62	0.74	付録 P152
6	日光東照宮	14923	12012	12573	1.40	1.13	1.18	付録 P153
7	六所神社	8653	7500	8376	0.81	0.71	0.79	付録 P154
8	伊賀八幡宮	8048	7415	8503	0.76	0.70	0.80	付録 P155
9	相馬中村神社	9798	7822	9963	0.92	0.74	0.94	付録 P156
10	日御碕神社	12490	7650	12610	1.17	0.72	1.19	付録 P157
11	浅草神社	9055	8697	9450	0.85	0.82	0.89	付録 P158
12	上野東照宮	10500	10200	10500	0.99	0.96	0.99	付録 P159
13	輪王寺大猷院	12771	8030	10263	1.20	0.75	0.96	付録 P160
14	三芳野神社	8090	7848	8363	0.76	0.74	0.79	付録 P161
15	高良大社	11515	11403	11515	1.08	1.07	1.08	付録 P162
16	根津神社	10205	9280	9825	0.96	0.87	0.92	付録 P163
17	妙義神社	8276	7913	8434	0.78	0.74	0.79	付録 P164
18	歓喜院	9250	8375	11125	0.87	0.79	1.05	付録 P165
19	桐生天満宮	8347	7672	9999	0.78	0.72	0.94	付録 P166
20	榛名神社	10390	7852	9730	0.98	0.74	0.91	付録 P167
21	鶴岡八幡神宮	9900	10100	10800	0.93	0.95	1.02	付録 P168
22	東京日吉神社	6080	5520	7150	0.57	0.52	0.67	付録 P169
				平均	0.91	0.80	0.91	

表 10 箭弓稲荷神社本殿棟高に対する各社殿棟高比較表

箭弓稲荷神社本殿棟高1に対して幣殿は0.76、拝殿は0.94という比率となり、全体平均では本殿が0.91、幣殿が0.80、そして拝殿が0.91となった。建築規模からすれば日光東照宮本殿や輪王寺大猷院本殿・日御碕神社本殿の方が箭弓稲荷神社本殿より棟高がやや高くなるが、北野天満宮本殿や高良大社本殿とは棟高は粗同一高となる。また、その他の選抜した権現造社殿より箭弓稲荷神社本殿棟高の方が高い。この社殿は江戸時代後期となる天保期の造営ではあるが、厳しい時代であったからこそ祭神を祀る本殿棟高を少しでも高く上げ、建築的にも一層崇高に見せるための設計努力が成された結果が、この数値と社殿の外観形状に表れているものと推測される。

なお、永保寺開山堂祀堂（内陣）棟高1に対して、幣殿（相の間）は0.67、礼堂（外陣）は1.33の比率となった。これを箭弓稲荷神社社殿と個別比較すると、幣殿は永保寺開山堂が凡そ12%の減と更に棟高が低く、逆に拝殿棟高は永保寺開山堂が凡そ41%増して棟高が高い。これによって正面からは祀堂は礼堂の影に隠れて見えない状態であるが、永保寺開山堂は室町時代初期の造営で建立年代が違ふことに加え、建物の建築美を優先した見せる建築計画ではなく、宗派の教義に基づいた計画であったためと考えられる。祀堂（内陣）はそもそも禅寺において先師を祀る建築であるため、奇を衒うが如く目立つ必要性がないために、このような高さ関係になったものと想定される。

## 2-9. 立面的検討小結

本殿・幣殿・拝殿の各社殿高さ比と本殿基準高さ比をそれぞれ個別に検証を行った結果、箭弓稲荷神社本殿は棟高を可能な限り高くする建築計画が成されたと考えられる。また、幣殿屋根を下げることで本殿屋根が更に高く聳えて見える視覚効果も設計段階から考慮されていたとも考えられるが、元々大規模な社殿を更に大きく見せる相乗効果も演出されている。箭弓稲荷神社社殿は北野天満宮・日光東照宮・輪王寺大猷院などと比較すれば立面規模は小さいが、それ以外では基本的に箭弓稲荷神社社殿の方が大きいか、または拮抗する状況にある。また、江戸時代最初期は本殿・幣殿（石の間）・拝殿の棟高を原則同一高としていたが、それ以降は本殿棟高を上げるか、本殿・拝殿を同一棟高としたまま幣殿（相の間）棟高を下げて、本殿が高く聳えて見せる手法の傾向が確認できる。平面と同様、幣殿の立面的な形状変化が年代推移と合致することが確認された。

以上のことを総合的に鑑みても、箭弓稲荷神社社殿は平面的にも立面的にも幣殿（石の間）の規模形状を調整することで、大規模な外観の様相と機能構成に配慮した建築計画が成された建物と見て取れる。なお、これ以降は時代世情が芳しくなくなることもあり、正統な系譜を辿る権現造形式の社殿は殆ど建立されなくなるため、箭弓稲荷神社社殿が江戸期に流行した権現造形式の完成形とも考えられる。

### 3. 建築彫刻の考察

社寺建築の装飾が極められ、それが最高位の完成度に到達するのは近世に入ってからのことである。また、これらの装飾手法は彫刻・金具・漆塗装・彩色塗装・染色が主となるが、現存する嚙矢の装飾建築として七世紀後半頃の再建とされる法隆寺金堂が挙げられる。金堂の軒廻りには雲斗栱があり、その表面は線刻による雲形渦文様が施されるが、この祖形は中国で古くから培われてきた奇怪な動物文に由来しているとの説がある。<sup>注65</sup>なお、雲斗栱は五重塔や中門にも備わっている。一方、金堂内部には浄土の仏や天人の姿が壁画として描かれるほか、天井板には六弁蓮華文・支輪板には植物文が描かれており、天蓋などと一体感を齎す装飾空間が堂内で形成されている。このようなことから、我国装飾建築の祖形としても法隆寺金堂は掲げられている。その後、平安時代初期までは奈良時代を踏襲したかたちで装飾は彩色塗装が主とされてきたが、中期以降は密教伝来の影響を受け、新たな装飾手法が付加された寺院建築が登場することになるが、極楽浄土さながらの美しく飾られた阿弥陀堂建築がそれに当たる。天喜元年（1053）建立の平等院鳳凰堂や天治元年（1124）建立の中尊寺金色堂はその代表例となるが、平等院鳳凰堂の外観は極楽浄土の宝楼阁を模したものとされ、また、中堂内部は常行堂形式の平面形態に倣ったもので、観無量寿経に説かれる十六観がおのずから観想できる仕組みとなっている。<sup>注66</sup> 堂内中央の来迎壁には漆塗装の須弥壇が備わり、螺鈿を鏤めた宝相華文で飾られている。ここに丈六阿弥陀如来坐像が安置されるが、漆塗装・螺鈿装飾は天蓋までに及び、更には柱・斗栱・長押・支輪・天井などには宝相華文や条帯文で構成する彩色文様が施され、その着色は新たとなる纏綯彩色手法で構成部材を立体的に表現する。また、鍔金具が鍍金などで彩られると共に、虹梁端部には八八双形状で宝相華文を透し彫りとした木彫り飾板（写真18）が備わり、近世の建築彫刻を彷彿させる一面もあるが、建築の造型的装飾化を進展させるための要素を備えたものであった。ただ、漆塗装や木彫彫刻がまだ広く流布していた訳ではなく、天皇家や公家といった特定の権力者に関係する社寺建築に限られていた。このため、古代の装飾建築を華麗に見せたのは彩色塗装による効果が大きいものと言える。



写真18 鳳凰堂虹梁飾板彫刻

鎌倉時代に入ると、源平合戦の戦火にて失われた東大寺などの復興に伴い輸入された大仏様と、禅宗を背景に同じく大陸から齎された禅宗様によって新たな宋の建築様式が導入され、寺院建築は大いなる影響を受けて装飾化が進行し始める。新たに導入された建築様式が装飾化を進展させる要因は建築構造の変化であり、それまで柱の面外転倒を防いでいた長押に変わり、貫が導入されたことが大きい。これにより、材の組合せ先端に装飾として繰形や線彫り彫刻などが施され始めた。具体的には木鼻・台輪

注65 (伊藤延男「日本の美術246・日本建築の装飾」1986年・P29)

注66 (工藤圭章他「不滅の建築3・平等院鳳凰堂」1988年・P48)

先端・虹梁袖切・虹梁下部積杖彫・大瓶束下部結綿・尾垂木・実肘木・隅木先端・墓股・花頭窓・藁座・弓欄間などの部位に装飾化が図られるが、特に禅宗様の役割は大きく、装飾のあり方が彩色塗装から彫刻へと移行することに寄与したと言える。このことは和様や神社建築へも影響を齎したが、例えば三間社流造となる園城寺新羅善神堂（貞和三年<1347>）欄間には既に、薄肉の透かし彫り彫刻が備わっている。また、図柄も古代に多く見られるような宗教的な要素はなく、世俗的な「花鳥」がモチーフとなることから、近世に開花する装飾の自由度を感じさせる装飾彫刻の一つである。このようなことから、中世の装飾建築は彫刻的細部装飾の導入が一番大きく、また、その彫刻も薄肉彫りから丸彫り彫刻へと技法が展開するなど、固定観念に捉われずにいかに建築を美しく装飾するかに拘った近世装飾建築の黎明期に位置するものと言える。

豪華絢爛な近世装飾建築の幕開けは桃山時代にその基盤が構築されたと考えられ、特に時の権力者にも重用されていた絵師狩野派の影響は大きく、絵画の世界のみに留まらず、その美術造形概念は社寺建築の造営を司った大工や彫刻大工までに影響を及ぼし、彫刻装飾モチーフの幅を広げる切掛けを作った。また、狩野永徳の画風は織田信長や豊臣秀吉の好みに合致したことで台頭することになり、その後の徳川幕府奥絵師としての地位獲得に繋げている。近世の装飾建築はその内外装を黒漆・赤漆・透漆などで彩る漆塗装や染色、そして多様な鍔金具の採用に加え、丸彫りや籠彫りと言った高度な技法による彫刻の出現が挙げられるが、装飾の表現方法がより現実に近い立体化に趣向が転じていることが判る。これは彫刻のみならず彩色塗装でも同様の方向性が見られ、見せ掛けの立体表現となる纏縹彩色ではもの足らず、実際に画面を盛り上げて立体感をリアルに表現する置上彩色技法が開発されている。立体的な彫刻はモチーフも様々であり、木鼻・腰組持送り・柱間壁板・組物間琵琶板・妻壁・欄間などの部位に、霊獣・動物・霊鳥・水鳥・野鳥、更には七福人や中国故事に因んだ彫刻が備わるようになった。なお、このことが起因して装飾彫刻は建築構造体とは別造りとなり、パーツとして後で組み入れられるようになった。更には建築構造体となる柱・長押・頭貫などの表面にも、地紋彫りが施されるようになった。また、これによって建築の分業化も促進し、専門職として彫刻大工の職能が位置付けられていくことになるが、寛永度の日光東照宮造営に携わった伝説の左甚五郎や諏訪立川流・大隅流一門などもこれに該当する。その後の転機として、老中水野忠邦が行った天保の改革で「奢侈禁止令」が以前より徹底され、社寺建築外部塗装も原則的に禁じられたが、結果としてこれが更なる彫刻技量向上の切掛けとなった。勿論これは新たな社寺建設資金不足の解消策にもなったが、素木彫刻は個々に写実的な表現工夫が成され、切れ味の鋭さが増したものとなって行った。色彩による彫刻の演出効果が無くなったことはある意味において功を奏し、近世装飾建築を飾る彫刻は更なる進化を遂げた。<sup>注67</sup>しかし、これも民衆の目線が社寺に向いていた江戸時代後期までのことで、政治状況が悪くなる末期では特定の社寺や地域を除けば装飾建築の躍進的発展はなく、ややもすれば下降線を辿る方向に陥って行った。

---

注67 （窪寺茂「江戸の装飾建築・近世における建築の解放」1994年・P23）

### 3-1. 上州彫物師集団の系譜考察

箭弓稲荷神社社殿の彫刻棟梁は、造替工事を統括した棟梁飯田和泉守藤原金軌の舎弟となる飯田仙之助である。仙之助を含む彫工師系図は図 45 に示す通りとなるが、左甚五郎を元祖とする「上州彫物師集団」の流れを汲んだ人物と言える。この上州彫物師集団の祖となる高松又八邦教は上州花輪村（現みどり市）の出身であったが、江戸彫工の源流を築いた島村俊元の高弟として江戸で修行を行い、寛文年間には公儀彫者師を拝命して本流を受け継いでいる。幕府作事方彫刻棟梁として寛永寺常憲院霊廟（宝永 6 年<1709>）の装飾彫刻制作や、輪王寺大猷院の修復（享保 16 年<1731>）の装飾彫刻制作などに携わっている。そのような又八を師事したのが同郷でもあった石原吟八朗義武であるが、師匠の元で技を磨き、ついには輪王寺大猷院の修復にも携わり、上州の名人との異名で呼ばれるまでになった。その後、歓喜院聖天堂奥殿の装飾彫刻制作にも携わっているが、寛保 2 年（1742）の利根川大水害による事業中断の影響と、その後の飢饉にも見舞われたことで聖天堂造営事業からは撤退し、代わりに門弟であった関口文治郎らにその後の彫刻制作を任せている。その後は地元の花輪村に戻り、祥禅寺本堂（宝暦 4 年<1754>）の装飾彫刻制作に勤しんだが、晩年は病との闘いであったようである。なお、上州彫物師集団は石原吟八朗を祖とする「黒川郷彫物師集団」と関口文治郎を祖とする「上田沢村彫刻師集団」に二分されていくことになるが、それぞれが江戸時代末期までその特徴的な技を継承したとされる。<sup>注 68</sup>

黒川郷彫物師集団を引き継いだ吟八郎高弟の石原吟八義明の詳細については不明であるが、関口文治郎ら優秀な彫物師たちと共に歓喜院聖天堂の彫刻制作に携わったと伝えられ、また、その弟子となる飯田仙之助も同じく歓喜院聖天堂に師匠と共に携わったことで経験を積み、やがて箭弓稲荷神社の彫刻棟梁としてその手腕を振るうことになる。飯田家は大里郡川原明戸村（現熊谷市）に拠点をおいて活動した大工集団であり、一門は建築大工と彫刻大工に分かれ、兄である金軌の系統が建築大工となり、弟である仙之助の系統が彫刻大工となって建築工事を受注し、親戚縁者も含めた一門で装飾建築の造営を担っていたようである。その集大成が箭弓稲荷神社の造替事業となったが、20 年を超える大規模工事であったことから、仙之助は本殿が上棟を果たした翌年の天保 7 年（1836）には逝去してしまい、その意思は嫡男であった岩次郎とその子となる源太郎に引き継がれた。しかし、残念ながら飯田家の彫刻大工系譜は時代情勢の影響を受けて幕末で途切れることとなった。なお、仙之助・岩次郎父子が箭弓稲荷神社社殿とは別に装飾彫刻を担った県内に現存する社寺は、嵐山町にある安養寺山門（天保 10 年<1839>）、寄居町にある極楽寺手水舎（江戸時代後期）、秩父市にある三峰神社手水舎（嘉永 6 年<1853>）、熊谷市にある明道寺本堂・手水舎（嘉永七年<1854>）、東松山市にある大雷神社本殿（慶応元年<1865>）であることが墨書などから明らかとなっている。なお、箭弓稲荷神社社殿も含め、これらの多くは外部塗装を施さない素木造で、装飾建築における彫刻の完成度を最高位に高めたものとなる。

この他、県外では群馬県太田市に所在する冠稲荷神社本殿（江戸時代後期頃）も飯田家の手によるものであり、建築棟梁は兄の金軌が担い、彫刻装飾を弟の仙之助が担ったことが判っている。

注 68 （阿部修治「甦る聖天山本殿と上州彫物師たちの足跡」2011 年・P78）

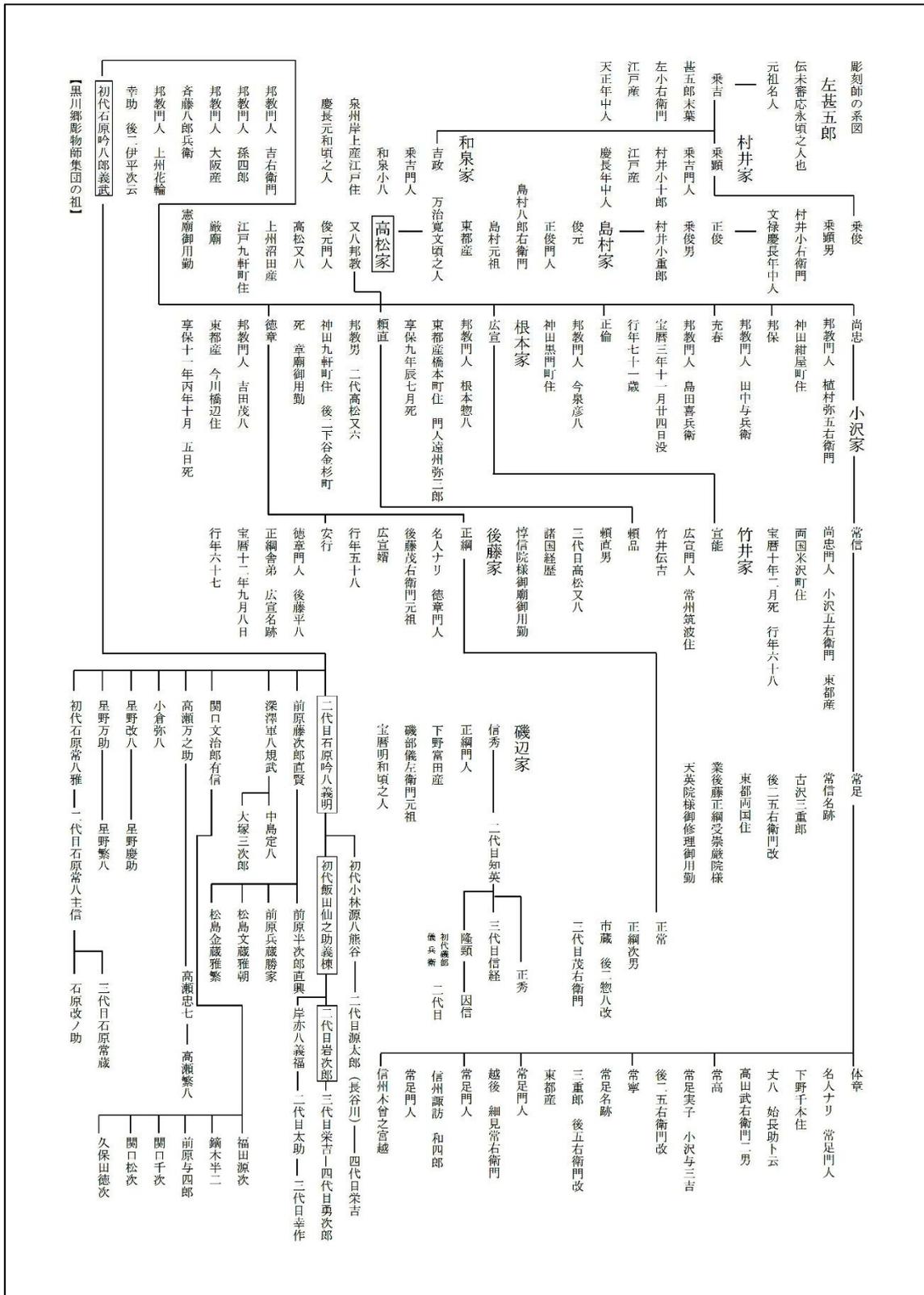


図 45 左甚五郎を元祖とする彫刻大工系図 注 69

注 69 (文化財建造物保存技術協会編「群馬県指定重要文化財榛名神社社殿保存修理工事報告書」2004年・P36 加筆修整)

### 3-2. 社殿外装彫刻指標の検討

権現造社殿外装における彫刻種別とその配置については、基本原則となる共通点や時代世相を反映した相違点があるものと考えられるため、外装彫刻に絞って比較検証を行ってみるものとした。なお、選抜した社殿は表 11 の通りであるが、装飾建築の代名詞とも言える豪華絢爛な様相で見る者を圧倒する日光東照宮並びに輪王寺大猷院を江戸時代初期の建物とし、中期の建物として妙義神社並びに歓喜院聖天堂を選定した。また、後期について黒川郷彫物師集団と上田沢村彫刻師集団に二分されていく上州彫刻師集団の特徴も併せて探るため、黒川郷の系統遺構は箭弓稲荷神社とし、一方、上田沢村の系統遺構として桐生天満宮と榛名神社を選定するものとした。なお、権現造社殿に限って見れば、江戸時代末期には彫刻が外装を華やかに演出する装飾建築は建立されておらず、箭弓稲荷神社社殿が権現造では最後を飾る装飾建築であると考えられるため、検討は以下の主要社殿において行うものとした。

	社寺名	建立年代	建立場所	時代区分
1	日光東照宮	寛永十三年(1636)	日光市山内 2301	江戸初期
2	輪王寺大猷院	承応二年(1653)	日光市山内 2300	江戸初期
3	妙義神社	宝暦六年(1756)	富岡市妙義町妙義 6	江戸中期
4	歓喜院	宝暦十年(1760)	熊谷市妻沼 1627	江戸中期
5	桐生天満宮	享和二年(1802)	桐生市天神町 1-2-1	江戸後期
6	榛名神社	文化三年(1806)	高崎市榛名山町 849	江戸後期
7	箭弓稲荷神社	天保十一年(1840)	東松山市箭弓町 2-5-14	江戸後期

表 11 外装彫刻比較権現造社殿一覧表

比較検討に関してはまず、各社殿毎に「本殿・幣殿(石の間・相の間)・拝殿の各建物別」に分類を行う。そのうえで一覧表の縦軸を部位別に分類した腰組・本体・軒廻り・軒上・脇障子及び向拝に分け、更に種別に分類した人物彫刻・霊獣・動物・霊鳥・野鳥・昆虫及び魚類・樹木及び花木類・果物類・草花類・自然をモチーフとした彫刻の種別に細分化して、彫刻の配置確認を行うものとする。なお、横軸では建物別に仕切ることで、初期に多用される彫刻モチーフが中期・後期では如何に変化していくかが判り易い配列に纏める。このような形態で社殿外装彫刻指標の検討を行うものとしたが、この基礎資料となった個別の外装彫刻指標検討に関しては、付録にこれを取り纏める。

以下表が外装彫刻指標による種別・配置の比較となるが、歙喜院聖天堂奥殿・榛名神社幣殿はそれぞれ本殿とし、また、日光東照宮石の間・輪王寺大猷院相の間・歙喜院聖天堂中殿・榛名神社間殿は幣殿として分類した。

(1) 本殿外装彫刻

			東照宮	輪王寺	妙義	歙喜院	桐生	榛名	箭弓
腰組	人物彫刻	仙人・唐子他				○	○	○	
	霊獣	龍				○		○	○
		飛龍							○
		龍馬					○		
		唐獅子				○	○		
		犀			○	○	○		○
	動物	猿				○			
		亀							○
		猫				○			
		栗鼠				○	○		
		馬							○
	野鳥	雀						○	
		鷄				○			
		鳩					○	○	
	水鳥	鴨					○		
		鴛鴦				○	○		
	昆虫・魚類	蝶				○			
		鯉					○		○
		山椒魚							○
	樹木・花木類	蘇鉄				○			
		松					○	○	
		梅				○	○		
		桜				○	○		
		躑躅				○			
		椿				○			
	果物類	桃				○	○		
		葡萄				○	○		

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓
腰組	草花類	菊	○				○		
		芙蓉				○			
		蒲公英					○		
		牡丹				○			
		竹				○			
		蔦				○			
		菖蒲				○			
	穀物・野菜類	粟						○	
	水草類	沢瀉					○		
		水葵				○			
		河骨					○		
	自然をモチーフとした彫刻	雲						○	
		流水	○			○			
波				○	○	○	○	○	
本体	人物彫刻	仙人・唐子他				○	○	○	○
	霊獣	龍		○		○	○	○	○
		唐獅子		○	○	○	○	○	○
		白沢				○			
		麒麟				○	○		
		獏					○	○	○
		犀				○			
	動物	虎				○	○		
		兎				○			
		猿				○			
		象					○		
		亀				○			
		鹿				○			
	霊鳥	鳳凰		○	○	○			
		鶴				○			
		山鵲		○		○	○		
		錦鶏				○			
鶯					○				
鷹						○			

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓
本体	野鳥	燕				○			
		鳩					○		
	水鳥	雁				○			
	昆虫・魚類	鯉				○			
	樹木・花木類	柏					○		
		桐		○	○	○			
		蘇鉄						○	
		紅葉				○	○		
		松	○	○			○		
		梅	○			○	○	○	
		桜					○		
		椿		○		○			
	海棠				○				
	果物類	蜜柑				○			
	草花類	菊	○	○		○	○		
		唐花		○		○			
		芙蓉					○		
		鉄線				○	○		
		牡丹	○	○		○	○	○	
		竹				○	○	○	
		菖蒲				○			
		薔薇				○	○		
	朝顔				○				
	水草類	水葵				○			
		水仙				○			
	自然をモチーフとした彫刻	雲					○	○	○
		流水		○		○			
		波			○	○	○		
		滝				○			
	その他	扇子			○				
		軍配団扇			○				
		弁天双六				○			
		宝相華				○			

		東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓	
軒回り	人物彫刻	仙人・唐子他						○	
	霊獣	龍	○	○	○	○			○
		飛龍				○	○	○	○
		蜃				○	○	○	○
		唐獅子		○			○		
		猿	○			○	○		○
	動物	象				○	○		
		狐							○
	霊鳥	鳳凰	○			○	○		○
		山鵲				○	○	○	○
		錦鶏					○		
		銀鶏					○		
		吐綬鶏					○		
		鶴		○					
	野鳥	鷹						○	
		燕				○			○
		瑠璃鳥				○			
		鶺鴒				○			
		鶺鴒					○		
		音呼							○
		鶺鴒				○	○		
		鶺鴒				○			
		小禽			○				
	きびたき				○				
	水鳥	翡翠			○	○			
		鶺鴒			○				
		鴨			○		○		
		鶺鴒				○	○		
		鶺鴒				○	○		
	樹木・花木類	柏						○	
		桐				○	○		○
		松					○		
梅					○	○		○	

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓
軒回り	樹木・花木類	躑躅					○		
		椿				○	○		
	果物類	葡萄							○
	草花類	菊				○	○	○	
		唐花							
		芙蓉				○			
		蒲公英							○
		紫陽花				○			
		鉄線				○	○		
		牡丹	○			○	○	○	
	菖蒲			○	○				
	穀物・野菜類	粟			○		○		
	水草類	沢瀉				○			
		石菖			○				
		杜若						○	
		水葵			○	○			
		水仙				○	○		
		河骨				○	○		
	自然をモチーフとした彫刻	雲			○	○	○	○	
		流水				○			
波				○	○	○	○	○	
軒上	人物彫刻	仙人・唐子他				○			○
	霊獣	龍							○
		飛龍							○
		唐獅子					○		
		麒麟	○						
		犀		○					
	動物	亀							○
	霊鳥	鳳凰	○			○			
		鶴							○
		山鵲							
	野鳥	木菟					○		

			東照宮	輪王寺	妙義	歓喜院	桐生	榛名	箭弓
軒上	樹木・花木類	桐	○						
		松				○			
		椿				○			
	草花類	菊	○		○	○		○	
	草花類	唐花				○			
		鉄線					○		
		牡丹		○		○	○		○
	自然をモチーフとした彫刻	雲	○				○		○
		波		○			○		○
脇障子	人物彫刻	仙人・唐子他	○						
	霊獣	龍							○
		唐獅子						○	○
	霊鳥	鷹					○		
	野鳥	雉				○			
	樹木・花木類	柏				○			
		松	○				○		
		椿				○			
	草花類	菊				○		○	
		牡丹	○					○	○
	自然をモチーフとした彫刻	雲					○		○
		流水				○	○		○
	合計			18	17	19	107	83	30

表 12 各社殿の本殿外装彫刻種別と配置一覧表

## (2) 幣殿外装彫刻

			東照宮	輪王寺	妙義	歙喜院	桐生	榛名	箭弓	
腰組	人物彫刻	仙人・唐子他					○			
	霊獣	龍						○		
		飛龍					○			
		龍亀						○		
	動物	猫					○			
	野鳥	雀						○		
	昆虫・魚類	蝶					○			
	草花類	菊	○							
		鉄線					○			
		牡丹					○			
	自然をモチーフとした彫刻	雲							○	
		流水	○							
		波					○	○		
本体	霊獣	龍		○		○	○	○		
		唐獅子	○	○	○		○	○	○	
	動物	牛					○			
	霊鳥	鳳凰		○						
		鶴							○	
		鷹					○			
	野鳥	鶯		○						
	樹木・花木類	桐		○						
		松					○	○		
		梅		○						
	果物類	葡萄	○							
	草花類	菊	○							
		唐花	○	○						
		紫陽花					○			
		蒲公英					○			
		桔梗					○			
		牡丹	○		○		○			
笹						○				
甘草					○					

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓
本体	草花類	姫射干					○		
		撫子					○		
	水草類	沢瀉					○		
	自然をモチーフとした彫刻	雲					○	○	
		波		○	○		○		
軒回り	霊獣	唐獅子	○						
	動物	兔			○				
		馬						○	
	霊鳥	鳳凰		○		○	○		
		山鵲		○					
		錦鶏						○	
		鷹		○					
	野鳥	雀						○	
		燕							○
		音呼							○
		懸巢		○				○	
		雉						○	
		尾長雉				○			
		鷓鴣				○			
	水鳥	鴨						○	
		雁						○	
		鶉						○	
	樹木・花木類	紅葉						○	○
		松		○					
		海棠				○			
	果物類	柿					○		
	草花類	菊	○		○	○	○		
		桔梗						○	
		唐花	○						
		牡丹	○	○	○			○	
		蓮				○			
	水草類	沢瀉						○	

			東照宮	輪王寺	妙義	歆喜院	桐生	榛名	箭弓
軒回り	水草類	河骨						○	
	自然をモチーフとした彫刻	雲				○	○		
		流水				○			
		波			○		○	○	○
	その他	風神				○			
		雷神				○			
合計			11	14	7	11	28	24	5

表 13 各社殿の幣殿外装彫刻種別と配置一覧表

## (3) 拝殿外装彫刻

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓	
腰組	霊獣	龍						○		
		犀						○		
		龍龜						○		
	野鳥	雀						○		
	草花類	菊	○							
	自然をモチーフとした彫刻	雲							○	
		流水	○							
波								○		
本体	霊獣	龍		○			○	○		
		唐獅子		○	○			○		
	霊鳥	鳳凰	○	○						
		鶴							○	
		山鵲	○							
	野鳥	雀	○						○	
		瑠璃鳥	○							
		木菟	○							
	樹木・花木類	桐	○	○						
		松	○						○	
		梅	○							
		桜							○	
		椿	○							
	草花類	菊	○						○	
		唐花		○						
		牡丹	○		○				○	
	自然をモチーフとした彫刻	雲							○	
波				○				○		
軒回り	霊獣	龍	○	○						
		息	○							
		蜃				○			○	
		唐獅子	○			○				
	動物	馬							○	
	霊鳥	山鵲		○	○	○				
		吐綬鶏							○	

			東照宮	輪王寺	妙義	歆喜院	桐生	榛名	箭弓
軒回り	霊鳥	孔雀				○			
		鷹		○				○	
	野鳥	雀						○	
		瑠璃鳥				○			
	野鳥	頬白				○			
		目白				○			
		百舌			○				
		懸巢		○					
		鳩				○		○	
		鶉				○			
		木菟				○			
		小禽				○			
		鶺鴒				○			
		雉			○				
	水鳥	翡翠				○			
		鷓鴣							
		鴨				○			
		雁				○		○	
		鷺				○		○	
		鶺鴒				○			
	樹木・花木類	柏				○			
		紅葉			○				
		松		○				○	
		梅			○	○			
		桜						○	
		山茶花				○			
		椿			○	○		○	
	果物類	柿				○			
	草花類	菊	○		○	○			○
		芙蓉				○			
		紫陽花				○			
		桔梗				○			
		唐花	○						

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓
軒回り	草花類	牡丹		○	○	○			
		菖蒲				○			
		緋扇				○			
		九輪草						○	
	水草類	沢瀉				○			
		水葵				○		○	
		水仙				○			
		河骨				○		○	
	自然をモチーフとした彫刻	流水	○			○			○
		波			○			○	
軒上	人物彫刻	仙人・唐子他						○	
	霊獣	唐獅子		○					
		犀	○						
		龍亀						○	
	霊鳥	鶴	○						
	樹木・花木類	松	○					○	
		草花類	菊	○					
	牡丹			○					
	自然をモチーフとした彫刻	雲						○	
		流水	○						
波		○					○		
向拝	人物彫刻	仙人・唐子他				○		○	○
	霊獣	龍	○		○	○		○	○
		飛龍				○			○
		龍馬							○
		息	○						
		唐獅子	○	○	○	○		○	○
		獏			○	○			○
		犀	○			○			
		龍亀				○			
		鯨				○			
	動物	虎	○			○			
猿					○		○		

			東照宮	輪王寺	妙義	歎喜院	桐生	榛名	箭弓
向拝	霊鳥	鳳凰		○		○	○	○	○
		鶴			○				
		山鵲			○	○		○	
		鷹		○				○	
	野鳥	瑠璃鳥							○
	昆虫・魚類	蝶				○			
		鯉				○			
	樹木・花木類	柏						○	
		桐		○					
		松		○	○			○	○
		梅		○	○	○	○		○
		桜			○				
	果物類	枇杷				○			
		桃						○	
	草花類	菊		○	○	○		○	○
		蒲公英							○
		牡丹	○			○		○	
		竹	○						○
	水草類	水仙				○			
	自然をモチーフとした彫刻	雲	○		○			○	○
波		○			○			○	
その他	鬼				○				
脇障子	人物彫刻	仙人・唐子他			○			○	○
	霊鳥	鳳凰							○
	野鳥	鶯							○
	樹木・花木類	松						○	
		梅							○
	草花類	牡丹						○	
		竹			○				
自然をモチーフとした彫刻	雲			○			○	○	
合計			34	20	25	55	3	53	22
総合計			63	51	51	173	114	104	69

表 14 各社殿の拝殿外装彫刻種別と配置一覧表

#### 4. 外装彫刻指標検討小結

彫刻種別や配置を横断的にみると、まず腰組は明らかに江戸初期の建立となる日光東照宮や輪王寺大猷院は彫刻配置が限定的か、或いは配置せずの何れかに限られる。これは本殿・幣殿（石の間・相の間）・拝殿ともに共通することであるが、東照宮では腰組斗拱間に延命長寿の仙薬として武家社会でも好まれた菊をモチーフとする「菊水」一種を踏襲し、連結する建物に反復展開させている。なお、輪王寺大猷院は装飾彫刻が備わらない。これが江戸時代中期建立の歓喜院聖天堂からは一転することになり、例えば腰組斗拱間には「唐子三人竹馬遊び」・「唐子七人小間遊び」・「唐子三人鶏合遊び」・「唐子三人凧揚げ遊び」・「唐子七人砂採り遊び」と、趣向を変えた彫刻が順に絵本の頁を捲るかの如く配されている。これはこの時代に農業技術が進歩し、農家においても一定の現金収入が得られる者が増えたことで、旅に出て新たな知識や見聞を広めたいという人間願望に起因しているが、伊勢神宮参詣・善光寺参詣・日光東照宮参詣など寺社参詣であれば粗無条件で通行手形が発行されたため、庶民の娯楽に旅も位置付けられるようになった。このため、地方でも名が知れる社寺は挙って浄財獲得のために思考を凝らすようになるが、丁度歓喜院聖天堂造営が始まった頃には狩野探山に画法を学んだ橘守国が、「絵本故事談」・「絵本写宝袋」・「絵本通宝志」などの絵手本を世に発表した。なかでも「絵本直指寶」は養蚕過程や唐子遊びの様々な様相、また、中国と日本の聖賢・仙人・武者・山水や八景・歌仙・草木に至るまでを判り易く描写しており、読み書きが不得意な絵師や彫刻大工にも大きな影響を与える絵手本となった。これにより、絵師と彫刻大工の彫刻図案作成能力差などの技量は縮小され、江戸初期とは違って同一の立場と意識で彫刻制作を成すようになった。更にその時代は江戸文化が降盛した最高潮期でもあり、宗教思想と共に大衆受けする唐子彫刻などを積極的に目線が一番近い位置に配置したものと考えられる。歓喜院聖天堂以降の腰組彫刻の傾向を見ると、本殿では必ず何かしらの霊獣（龍・飛龍・龍馬・唐獅子・犀など）が備わり、これに花木類と波が相俟った題材にて構成されることが多い。これは腰組が建物の重要な脚元でもあることから、火防や魔除けの意味がそれらに込められているものと考えられる。なお、それが接続する幣殿では腰組彫刻は激減し、本殿腰組彫刻の意図を継承するのは関口文治郎が担った桐生天満宮と榛名神社のみとなる。題材は本殿と同じく霊獣を主体とし、それに草花や波などで構図を構成している。更に拝殿に至っては榛名神社のみがその意図を継承するだけであり、基本的には腰組に彫刻配置は成されていない。

次に本体彫刻の傾向を本殿から見ると、初期の日光東照宮のように柱間壁に大嵌彫刻がまだ用いられないことから、狩野探幽たち奥絵師の手にて唐獅子の壁画が描かれた。これにより、彫刻は棧唐戸錦板上と内法長押上小壁板に配されるのみとなるが、題材は花木・草花類と直截的な美しさを誇張したものに限られる。また、探幽が絢爛かつ豪壮な桃山様式からの転換を図ったことで、彫刻も枠に品良く納まる瀟洒な構成と小気味良い軽妙豊かな表現を醸しており、限定種別の展開ではあるが品良く美しい。一方、輪王寺大猷院は東照宮と違って壁画は無いが、彫刻配置の在り方は踏襲している。但し、これより題材主体が花木・草花類から霊獣・霊鳥に移り変わって来ることになり、その後の装飾建築にも影響を及ぼしている。その最たる例が中期の歓喜院聖天堂となるが、霊獣・霊鳥・花木・草

花類に加え、動物・野鳥・水鳥・昆虫及び魚類・果物・水草類・波など、多くの種別要素が加算されている。それは桐生天満宮までその傾向が見られるが、後期の榛名神社では種別が減って行き、そして箭弓稲荷神社では霊獣と自然をモチーフとした雲のみとなり、輪王寺大猷院に類似した彫刻種別数に近づく傾向を示している。これが幣殿となると、日光東照宮では霊獣や果物類が加わり、また、輪王寺大猷院では野鳥が加わってくる。しかし、歓喜院では霊獣の龍が配されるのみでその他の彫刻は無く、これは寛保 2 年（1742）の豪雨と利根川の大水害の影響で造営事業が 11 年間休止を余儀なくされたことに関係するかも知れない。彫刻種別数とすればその後の桐生天満宮が一番多く、後期の箭弓稲荷神社では彫刻は配していない。これは拝殿も同様な傾向であるが、桐生天満宮では彫刻は無く、榛名神社では彫刻が多種多様に配されている。榛名神社の彫刻配置は拝殿に力点を置いていることから、このような特徴を見ることができる。

更に軒回り彫刻の傾向を本殿から見ると、初期の日光東照宮・輪王寺大猷院共に霊獣・霊鳥・草花類の彫刻が備わっているが、屋根の要となる軒回りをそのような分類で固めることで邪悪を追い払う意図があることを感じる。それはその後の社殿にも共通して言えることであるが、中期・後期の歓喜院聖天堂・桐生天満宮・箭弓稲荷神社ではこれに野鳥・水鳥・自然をモチーフとする雲や波などを加え、華やかな様相を演出して民衆の視線を引き付けることを目論んだものと考えられる。これが幣殿となると一定の法則は特に無く、日光東照宮・輪王寺大猷院は大方本殿を踏襲したものとなるが、歓喜院聖天堂では野鳥・花木・草花類・自然をモチーフとする雲と流水に加え、風神・雷神彫刻が備わっている。また、榛名神社では多種多様な彫刻が備わり種別は一番多くなるが、箭弓稲荷神社では野鳥・花木類・波と数は減ってくる。拝殿では桐生天満宮と箭弓稲荷神社を除き、どの社殿も霊獣・霊鳥・野鳥・花木類・草花類などの題材にて華やかさを演出している。

破風内螭羽も含む軒上彫刻の傾向を本殿から見ると、初期の日光東照宮は霊獣・霊鳥・花木類・草花類・自然をモチーフとする雲の多種多彩となるが、輪王寺大猷院は霊獣・草花類・自然をモチーフとした波とやや彫刻種別は少ない。また、中期の歓喜院聖天堂も草花類しかなく、後期の桐生天満宮と箭弓稲荷神社が多種多様な彫刻が配されている。これはこの二社のみが本殿屋根を切妻とすることで、より多くの彫刻を配する環境となるためである。このうち特に箭弓稲荷神社は本殿棟高が高いことから、一番多くの彫刻類を配置することが可能である。なお、これが拝殿になると彫刻がある社殿が限定され、日光東照宮・輪王寺大猷院・榛名神社のみでその後も社殿には彫刻は配されていない。最後に向拝となるが、基本的に彫刻は霊獣・霊鳥・動物が主体となり、全ての邪悪と厄を追い払うと共に時代世相に適った題材彫刻を配置し、参詣者にメッセージを送っている。

外装彫刻種別数は中期の歓喜院聖天堂が 173 種と断突に多いが、それ以降は減る傾向にあり、後期の箭弓稲荷神社では初期の日光東照宮と粗同数に近い 69 種となる。このように数のうえでは箭弓稲荷神社は少ないが、この建物のみが唯一素木造となり、彫刻の造り込みは他と比較しても精度は高く、正に個々の彫刻に生命が宿っているようである。各々の迫力は格別であり、霊獣に睨まれれば身動きができない状況に陥るほどである。従ってこの社殿の完成により、江戸時代に発展を遂げた装飾建築が一応の完成をみたと示唆される。

## 第5章 第一部箭弓稲荷神社社殿の建築史研究のまとめ

### 1. 史料研究の成果

散逸する史料の収集・整理と解説によって、以下の諸事項が明らかとなった。

- 1) 造替事業の着工：文化15年（1818）末期から改元された文政元年（1818）初頭頃であったものと推測される。
- 2) 上棟・遷宮の儀：天保6年（1835）8月21日に本殿が上棟し、同日に祭神の御遷宮も成されたものと推測される。
- 3) 祭神の御開帳：天保7年（1836）3月に、本殿に祀られる祭神の御開帳が開始されたものと推測される。
- 4) 社殿工事の完成：第一期工事で既に完成する本殿・幣殿に対し、引き続きこれに接続する拝殿の第二期工事が実施され、天保11年（1840）9月には権現造形式の社殿が完成していたものと推測される。
- 5) 造替事業の完了：附帯工事も含む全造替事業は、天保14年（1843）10月の箭弓稲荷社再建普請諸入用帳の完成を持ち、全事業が完了したと推測される。
- 6) 拝殿・幣殿屋根の改修：安政大地震の影響を受け、安政5年（1858）4月に拝殿並びに幣殿屋根を柿葺から棧瓦葺に改めたものと推測される。
- 7) 本殿屋根の改修：明治29年（1896）3月頃に、屋根を柿葺から銅瓦型葺に改め、さらに大正12年（1923）初春には屋根前面に千鳥破風を増設したものと推測される。

### 2. 建築実態調査の成果

社殿の解体修理に伴って、以下の諸事項が明らかとなった。

- 1) 当初の社殿屋根の仕様：社殿小屋裏から発見された柿板端材（杉板）によって、当初の屋根仕様は柿葺であったことが判明した。なお、軒先は稀少な形状となる檜皮葺様式であったことも明らかとなった。
- 2) 拝殿の内部改修：昭和32年（1957）11月の拝殿内部改修によって、二分されていた下拝（外部空間）と内拝（内部空間）が統合され、現在のような一室の内部空間に整備されたことが判明した。

### 3. 権現造形式社殿調査の成果

指定文化財となる権現造形式の社殿比較検討によって、以下の諸事項が明らかとなった。

- 1) 平面形状の変化：平面形状が変化するのは幣殿（石の間）であり、最初期では間口寸法が奥行寸法に勝っていたが、寛永13年（1636）造営の六所神社社殿（岡崎市）を境とし、間口寸法より奥行寸法が勝る傾向が見られた。また、幣殿床が石の間形式として土間レベルまで下がらず、拝殿床と同一高となるのもこの社殿が基点となっている。

江戸時代後期となる天保 11 年（1840）建立の箭弓稲荷神社社殿もこの傾向に符号した形態となっている。

- 2) 立面形状の変化：最初期の社殿は拝殿と幣殿（石の間）棟高を同一としていたが、平面形状の変化と同様に、寛永 13 年（1636）造営の六所神社社殿（岡崎市）から幣殿棟高が拝殿棟高より下がる傾向が確認された。この幣殿棟高が下がる理由は詳らかではないが、これによって本殿が聳えて見える視覚効果も生んでいる。なお、箭弓稲荷神社社殿もこの傾向に符号した形態となる。
- 3) 外装彫刻の変化：江戸時代初期の外装彫刻は武家好みとなる菊や牡丹などの草花類を始め、龍や唐獅子などの守護獣を中心に彫刻題材として選択し、それを一定の規則性を持たせた形で配置している。しかし、これが江戸時代中期以降から変化し、社寺参りの対象が武家から庶民に視点に移ることで、彫刻も草花類や守護獣に加え、宗教思想や大衆受けする彫刻が加わり、必ずしも一定の規則性に捉われない彫刻配置と変化する傾向が確認される。箭弓稲荷神社社殿もこの傾向に符号した形態となるが、特にこの社殿は外装彫刻に塗装を施さず、その質の高さを強調する技法を備えた典型例であり、江戸時代後期の彫刻技法を内在した装飾建築と言える。

## 第二部 社殿瓦屋根修理に伴う建造物保存技術研究

## 第1章 研究背景と目的

「文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすか」という課題に対して、箭弓稲荷神社社殿の場合は、屋根葺材の復原可否議論があった。すなわち、遺構研究で判明した稀少な軒付形式を持つ柿葺屋根へ復原するか、瓦屋根修理による現状維持かである。

我国の文化財建造物修理は現状の形式をそのまま保存することを基本原則とするため、現状を変更することに厳しい制限を加えている。しかしながら、調査研究によって本来の形式が判明した場合は、復元的修理を行うことを認めている。その復原形式を示すことが、学術的価値を社会に還元できるからである。また、これに加えて伝統技法の踏襲を原則的に貫くことで、現代・未来に生きる者が過去の歴史を知る手掛かりともなる。

箭弓稲荷神社社殿が柿葺であった期間は安政大地震の影響もあるが、20年足らずと短く、瓦葺時代の方が長い。この理由は防火対策や屋根の長寿命化と推測される。今回は屋根改修の経緯、当面の維持管理、耐震補強によって現状の瓦屋根維持が可能であったことなどを考慮し、所有者は屋根の復原整備を将来的な課題に留め、現状修理の方針を採択した。ただし、現状の安政瓦は焼きが甘く、特に棟積み目地を覆う屋根漆喰は脆弱で、従前の瓦と伝統技法の継承は、耐久性に大きな問題があった。このため、今回の社殿屋根修理においては、外観と耐久性に適した代用瓦の開発を試行するに至った。

このようなことから、本論第二部では新たな試みとなる外観と耐久性に適した代用瓦の開発を目的とし、瓦粘土原料の検討、瓦焼成に伴う燻化手法の開発、経過観察および開発成果と課題について総合的に研究を進める。

### 研究の範囲

第二部ではまず、新たな代用瓦制作を行う瓦製造産地を決めるため、主要な産地で使用される瓦粘土の比較分析を行い、今回の瓦制作条件に合致する産地を確定させることが第一となる。そのうえで選定された産地の瓦粘土を蛍光X線分析装置で定量分析を行い、含有物質配合比率を調査して、酸化焼成・還元焼成による色変化具合を実験で明らかとする。また、還元焼成での色変化性質を旨く活用し、微量に添加物を加えることで屋根漆喰に近似した白色誘発を導く実験検討を重ねる。一方、今回の代用瓦仕様は現状に倣って燻し瓦で制作することになるため、燻化工程を駆使して紐部を白色、本体部を鼠色に発色させなければならない。このため、燻化工程手法の実験検討を重ね、最適なガス投入量と燻化工程時間を確定させる必要がある。このような実験的研究を実施して、代用瓦の制作手法を導き出すものとする。

更に屋根上に葺かれた代用瓦の破損劣化や色具合変化が生じていないかを確認するため、竣工後24ヶ月目での経過観察測定を実施し、支障がないことまでを確認する。そのうえで、この代用瓦制作の成果と文化財建造物修理での課題を確認する。

## 第二部論文構成

第二部：社殿瓦屋根修理に伴う建造物保存技術研究

第 1 章「研究背景と目的」では、文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすかという課題に対して、文化財建造物修理の基本原則を確認しつつも、その建物が抱える個別課題を解決するため、新たな代用瓦制作に至った経緯と研究目的を明らかとする。

第 2 章「瓦粘土原料の定量分析による着想」では、瓦製造産地選定に至る経過を踏まえ、選定した産地で使用される瓦粘土原料の含有物質の特定と構成比率を確認し、還元焼成によって色変化する粘土性質を旨く活用し、紐部を白色・本体部を鼠色とするための最適な配合比率を、実験的検討によって導き出した経過と手法を述べる。

第 3 章「瓦焼成に伴う燻化手法の開発」では、燻化工程による炭素皮膜の付着量を削減するため、最適なガス投入量と燻化工程時間を確定させるため、実験的検討によって導き出した経過と手法を述べる。

第 4 章「経過観察」では、拝殿・幣殿の屋根上に載る代用瓦につき、竣工 2 年面点検（24 ヶ月目）で実施した経過観察測定による破損劣化や色具合変化について報告すると共に、この代用瓦がもたらした成果と文化財建造物修理での課題確認を行う。

第 5 章「第二部まとめ」では、代用瓦制作の実験的研究から得られた成果を整理すると共に、建造物保存技術研究の視点からの課題を列記する。

## 第2章 瓦粘土原料定量分析による着想

### 1. 瓦の伝来と屋根漆喰の課題

我国の社寺建築や和風住宅の屋根に載る和瓦の起源は、崇峻天皇元年（588年）に百濟から僧・寺工・路盤博士・画工と共に渡来した四人の瓦博士（麻奈文奴・陽貴文・俊貴文・昔麻帝彌）の作となる飛鳥寺（法興寺）造営に伴う屋根瓦が嚆矢と考えられている。その後、中央での仏教興隆政策の一環となる造寺運動や、白鳳時代の律令制度確立に伴う造寺が地方に波及したことで瓦需要も飛躍し、大陸から齎された技術は我国に「瓦職工」という新たな職能を誕生させることになるが、7世紀末に建立された藤原京大極殿などの宮殿にも瓦が採用されていたことが発掘調査によって明らかとなっている。以後、平城京・長岡京・平安京の宮殿建築にも瓦が採用されている。瓦の質は飛鳥・白鳳時代は良かったが、天平時代に入ると量産が増える一方、品質が低下する傾向になった。この時代、最も多く瓦を作らせたのは聖武天皇であり、平城京や東大寺、全国の国分寺の屋根に瓦が用いられている。また、都以外での瓦の使用は希であったが、九州の大宰府も外交や防衛上の観点から瓦屋根であった。また、蝦夷に対する軍事上の策源地でもあった東北の多賀城も瓦屋根であったことが発掘調査によって明らかとなっている。

平安京の大極殿と大内裏は屋根が碧瓦（緑釉瓦）であったが、その他の建物は黒瓦が用いられていた。この時代、寺院が山岳仏教へと転向し始めることで、元々品質の悪さが指摘されていた瓦は山への運搬や耐寒性にも不利だとされたことから、この時代から需要が減少し始める。瓦に取って代わって台頭し始めるのが、檜皮葺や柿葺などの樹皮や板材の屋根である。瓦と違って持ち運びも容易であり、また、場所を選ばずに複雑な屋根形状にも対応し易いということで、室町時代まではこの屋根材が優位に立っている。安土桃山時代に入ると戦国武将たちによって城郭建築が造られ始め、屋根は防火・防水を兼ねた瓦が採用され始め、需要がいきなり急増するようになった。これに伴って武将たちもお抱えの瓦工を置くようになるが、特に織田信長の安土城は近世の城郭建築の最初を飾るものとして、装飾性も含め多くの技術革新が行われている。特に現代においても大量生産が成され、多くの建築の屋根に載る「燻し瓦」の製法が伝えられ、この時代から品質が良く安価な燻し瓦の供給が始まり、城郭や大名屋敷、寺院への需要の裾野が広まって行った。

ただ、江戸時代に入っても民家屋根には瓦を用いることは許されず、明暦3年（1657）1月18日の大火後には消化活動の邪魔になるとの理由で、瓦使用は禁止となった。しかし、60年後となる享和5年（1720）の八代将軍徳川吉宗の治世ではこれが一転し、防火には瓦葺屋根が適しているとの判断から、瓦葺屋根の奨励が行われている。これは民家屋根もその対象となるが、この40年ほど前の延宝2年（1647）に近江三井寺の出入り瓦工であった西村半兵衛が延宝二年（1674）に考案した棧瓦<sup>注70</sup>の誕生が契機となっている。このような動向が後押しし、瓦は序々に庶民にも定着し始め、また、各地に瓦産地も誕生し出した。

明治維新後に本格導入された鉄道建設の効果もあり、瓦需要は飛躍的な発展を遂げて行った。更に地域の気候風土に適した釉薬瓦・無釉薬瓦・燻し瓦の改良が重ねられ、また、関東大震災以後は瓦が落下しないように引掛爪を付加するなどの改良も行われた。なお、極寒地などの特定地域を除けば、燻し瓦が瓦屋根に採択される傾向が比較的が多い。

注70 （駒井鋼之助「INAX BOOKLET Vol.1.6・瓦」1986年・P43）

その燻し瓦を屋根に葺く代表的な近世城郭として姫路城<sup>注71</sup>が挙げられるが、連立式望楼型の天守を持つ渦郭式平山城である。現形への増改築は慶長5年(1600)に三河吉田から転封して来た池田輝政の手によるもので、翌年より八年の歳月を掛けて秀吉築城の城郭を拡張している。五重六階建の大天守は南面石垣地面から46.3mの棟高を有する規模であることから、播磨灘からの強い海風が直面する。このため、伝統的瓦施工法となる下地葺土馴染み固定や数枚おきの釘留固定のみでは、やがて瓦の納まりにずれが生じ易くなるため、写真19・20に示す通り屋根の丸瓦や熨斗瓦など、目地や取り合いは全て屋根漆喰にて固め、吹上対策を講じている。これが創建当初から執られている工法か否かは詳らかではないが、目地からの雨水進入を防ぐ効果はより高くなる。なお、このような対策は海岸線に近い伊豆下田の古民家屋根や、沖縄の古民家屋根などにも見ることが出来る。



写真19 大天守最上層屋根

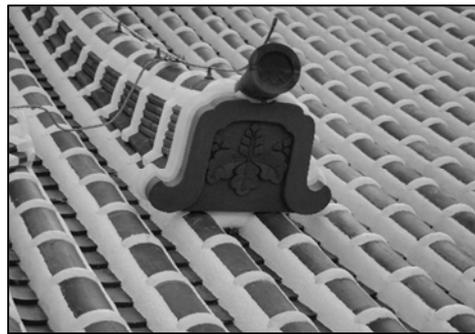


写真20 屋根漆喰施工直後

屋根漆喰を採用することは、吹上対策などの実用面と伝統技法の踏襲という面ではその施工手法の採択に意味はあるが、屋根漆喰の耐久面では課題が残る。焼き物である瓦と塗り物である漆喰では強度面で根本的な相違があり、丁寧な鏝押えが成されたとしても、地震などの外的要因で界面剥離や亀裂が生じ始める。これにより、耐用年数は概ね20~30年が限界と判断され、維持保全のためのメンテナンスコストが発生する。このため、建物の長寿化と負担軽減を図るため、戦後に紐付き和瓦が開発された。これは丸瓦や熨斗瓦の端部に屋根漆喰に見せ掛けた紐付きの一体型瓦で、恒久性に富んでいる。しかし、従来の製造技術では燻し銀と称される単色でしか制作できず、姫路城のような白と黒が相俟つ美しい屋根を表現するのは無理があった。このため、外観と耐久面に配慮した図46に示す代用瓦(白色紐付き燻し和瓦)の開発を行うことを、今回修理の目標に掲げることになった。



写真21 屋根漆喰破損状況

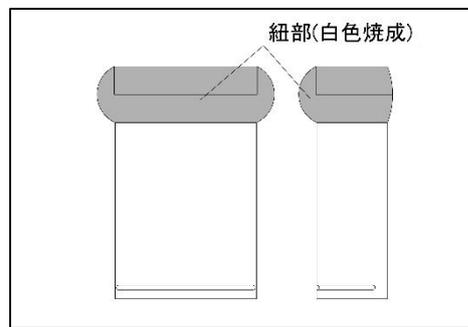


図46 二色となる燻し瓦制作案

注71 (今回修理は前回修理から数えて45年ぶりの屋根替となる・姫路市公式サイトより・2015.07.31アクセス)

## 2. 瓦製造産地の選定と粘土原料の分析

今回の代用瓦制作を行うに当たり、全国瓦生産の凡そ71% (平成23年度) を占める三州瓦を選定するものとしたが、以下のような産地比較検討を試み、条件に合致したことによる。

粘土資料	250 $\mu$ 以上	250 $\mu$ ~ 45 $\mu$	45 $\mu$ 以下
三州	6.4%	22.2%	71.4%
淡路	4.7%	14.9%	80.5%
石州	5.6%	24.5%	69.9%
美濃	8.7%	15.8%	75.5%
群馬	4.0%	22.9%	73.0%

表15 篩分けによる粒度測定

焼成環境にもよるが、一般的な瓦粘土は45  $\mu$  以下の粒度の方が瓦表面を綺麗に焼き上げることができると言われているが、表16からは淡路が上位であることが判る。但し、どの産地も45  $\mu$  以下の粘土比率が70%程度となるため、大差がないことが確認される。

粘土資料	45 $\mu$ ~ 5 $\mu$	5 $\mu$ ~ 2 $\mu$	2 $\mu$ 以下
三州	50.4%	18.9%	30.7%
淡路	65.4%	20.5%	14.1%
石州	38.2%	16.0%	45.8%
美濃	47.4%	17.7%	35.0%
群馬	52.5%	15.5%	32.1%

表16 粒度分析器による45  $\mu$  以下の粒度測定

粒度分析器を用いて45  $\mu$  以下の粒度分布を確認したところ、2  $\mu$  以下は石州が上位であることが判明した。2  $\mu$  はモンモリロナイトやカオリナイトなどの粘土鉱物と同一の大きさに相当すると考えられ、粘土分が多いとも言える。これによって可塑性や焼成による焼き締りが高まり、高品質の瓦表面となる。表16からは石州が最上位であり、次いで美濃・群馬・三州・淡路の順となるが、若干淡路が下回るものの2  $\mu$  以下の粘土粒度において各地域に大差が無いことがこれによって明らかとなった。

次にこれら粘土を同一条件の元に焼成実験を試みたが、焼成条件を最高焼成温度 1130 度・1 時間保持での酸化焼成を実施した。これにより、成型時水分・Ig. loss・吸水率・収縮率を指標として表17に示す比較検討を行った。

粘土資料	成型時水分	Ig. Ioss	吸水率	収縮率		
				乾燥時	焼成後	全体
三州	19.8%	5.2%	6.7%	5.8%	4.4%	9.9%
淡路	19.4%	4.3%	0.4%	3.5%	3.5%	6.9%
石州	19.4%	5.3%	8.9%	5.3%	3.2%	8.4%
美濃	21.3%	6.1%	7.8%	6.6%	4.4%	10.8%
群馬	20.3%	5.5%	0.6%	7.7%	4.9%	12.2%

表 17 テストピースによる焼成実験

Ig. Ioss は粘土鉱物に含まれる有機物の質量を強熱減量試験による質量の減少率を示しているが、この数値が高いほど粘性が大の粘土で、一定の焼成温度を超えると変形し易くなる。また、この数値が低いほど砂分が多く粘性が小の粘土で、焼き締りが甘いものとなる。このため、5.2%～5.5%程度が最良と考えられているが、三州瓦はこれに匹敵する結果となった。また、吸水率も6%前後が最良と考えられており、これにも三州瓦は類似する結果となる。なお、石州・美濃の吸水率が高い原因は今回設定の焼成温度（1150 度）が低いために起きた現象であり、一方、淡路・群馬の吸水率が極端低い原因は今回設定の焼成温度が高すぎためである。

以上のような検討のうえ、今回の代用瓦制作は三州瓦の協力を得て行うものとしたが、三州瓦の素地となる配合粘土は、三河粘土・山粘土・水簸粘土を混合したものであり、収縮率・吸水率・水分などを調整して原料の配合比率を定めている。この配合粘土原土の採掘エリアや定量分析調査<sup>注72</sup>を実施し、表 18 に示す通りの物質で構成されていることが明らかとなったが、その主たるは二酸化ケイ素（66.5%）と酸化アルミニウム（19.4%）であることが確認された。また、これに酸化鉄（3.48%）が次ぐ状況となっている。

1. 配合粘土 (含有率：%)			
SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>
66.5	19.4	3.48	0.57
CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O
0.44	0.59	0.8	2.59
8成分合計：94.37%			

表 18 配合粘土定量分析表（蛍光X線分析装置）

注 72 （蛍光X線分析装置により、粘土にどのような元素がどれ位の比率で入っているかを計測する調査）

これにより、配合粘土には正長石 ( $\text{KAlSi}_3\text{O}_8$ )・モンモリロナイト ( $\text{E}_{0.33}(\text{Mg}_{0.3}\text{Al}_{1.7})\text{Si}_4\text{O}_{10}$ )・カオリナイト ( $\text{Al}_2\text{Si}_2\text{O}_5$ )・石英 ( $\text{SiO}_2$ )等の鉱物が含まれていることが明らかとなったが、ノルム計算によって主たる鉱物比率は次に示す通りとなった。

① 正長石 注73

$$\text{K}_2\text{O} 2.59 + \text{Al}_2\text{O}_3 2.59 + \text{SiO}_2 7.77 = 12.95\%$$

$$12.95 \div 94.37 \times 100 = 13.7\% \Rightarrow \boxed{\text{約 } 14\%}$$

② モンモリロナイト 注74

$$\text{Na}_2\text{O} 0.64 + \text{MgO} 0.59 + \text{Al}_2\text{O}_3 3.33 + \text{SiO}_2 7.9 = 12.46\%$$

$$12.46 \div 94.37 \times 100 = 13.2\% \Rightarrow \boxed{\text{約 } 13\%}$$

③ カオリナイト 注75

$$\text{Al}_2\text{O}_3 13.48 + \text{SiO}_2 13.48 = 26.96\%$$

$$26.96 \div 94.37 \times 100 = 28.5\% \Rightarrow \boxed{\text{約 } 29\%}$$

④ 石英 注76

$$\text{SiO}_2 37.25\%$$

$$37.25 \div 94.37 \times 100 = 39.5\% \Rightarrow \boxed{\text{約 } 40\%}$$

X線回折調査にて低角度で反応する粘土鉱物を検証した場合、結晶が崩れたカオリナイトを確認することができる。これにモンモリロナイトが関係して抜群の可塑性を生み出しているが、その他鉱物(砂分)で構成され、良好な瓦素地粘土が形成されている。なお、配合粘土には酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) が 3.48%含まれているが、この成分が酸化焼成によって瓦素地を褐色化させ、また、還元焼成では黒色化に発色させる要素となる。

三州瓦では配合粘土による素地成型・乾燥後に、瓦素地表面を更に平滑にし、燻し銀の発色をより高める手法として、素地表面に高純度の木節粘土を薄塗りする工程が加わる。刷毛塗りや溝付けなど、施工方法は瓦生産地によっても違いはあるが、三州におけるこの木節粘土原土の定量分析調査を実施し、表 19 に示す物質で構成されていることが判った。

2. 木節粘土 (含有率：%)			
$\text{SiO}_2$	$\text{Al}_2\text{O}_3$	$\text{Fe}_2\text{O}_3$	$\text{TiO}_2$
44.9	36.2	1.01	0.92
CaO	MgO	$\text{Na}_2\text{O}$	$\text{K}_2\text{O}$
0.15	0.28	0.36	0.3
8成分合計：84.12%			

表 19 木節粘土定量分析表 (蛍光X線分析装置)

注 73 (岩石を構成する鉱物の一種であり、カリウムが含まれることからカリ長石とも呼ばれている)

注 74 (スメクタイトに属する粘土鉱物の一種であり、建設業ではベントナイトと言う総称で呼ばれている)

注 75 (アルミナ系粘土鉱物の代表的なもので、主に磁器やコート紙などの原料として使用されている)

注 76 (六角柱状の結晶を成し、石英を主とする砂は珪砂とも称され、硝子原料に使用されている)

木節粘土にはマスコバイト ( $KAl_2(Si_3Al)O_{10}$ )・モンモリロナイト ( $E_{0.33}(Mg_{0.3}Al_{1.7})Si_4O_{10}$ )・カオリナイト ( $Al_2Si_2O_5$ )・石英 ( $SiO_2$ ) などの鉱物が含まれていることが明らかとなったが、ノルム計算によって主たる鉱物比率は次に示す通りとなった。

① マスコバイト 注77

$$K_2O \ 0.3 + Al_2O_3 \ 0.3 + SiO_2 \ 0.9 = 2.1\%$$

$$2.1 \div 84.12 \times 100 = 2.5\% \Rightarrow \boxed{\text{約}3\%}$$

② モンモリロナイト

$$Na_2O \ 0.36 + MgO \ 0.28 + Al_2O_3 \ 1.72 + SiO_2 \ 4.0 = 6.36\%$$

$$6.36 \div 84.12 \times 100 = 7.6\% \Rightarrow \boxed{\text{約}8\%}$$

③ カオリナイト

$$Al_2O_3 \ 33.58 + SiO_2 \ 33.58 = 67.16\%$$

$$67.16 \div 84.12 \times 100 = 79.8\% \Rightarrow \boxed{\text{約}80\%}$$

④ 石英

$$SiO_2 \ 6.42\%$$

$$6.42 \div 84.12 \times 100 = 7.6\% \Rightarrow \boxed{\text{約}8\%}$$

X線回折調査にて低角度で反応する粘土鉱物を検証した場合、図47の通りに結晶が崩れたカオリナイト・マスコバイト・石英を確認することができる。これにモンモリロナイトが関係して同じく可塑性を生み出しているが、木節粘土は純度が高まることで瓦素地への付着も良くなり、焼成段階での収縮剥離が極めて少なくなる。なお、木節粘土の含有物質の主たるも二酸化ケイ素 (44.9%) と酸化アルミニウム (36.2%)、そして酸化鉄 (1.01%) となる。注視すべきはこれに粗同量の酸化チタン (0.92%) が含有されていることが判り、これが酸化鉄と焼成によって化合することで、木節粘土塗布の瓦素地は酸化焼成によって薄黄白色化し、還元焼成では粗同一に近い薄黒白色化に発色することが確認された。この性質を開発の手掛かりとし、木節粘土に元々含有するチタン・マンガンをもっと微量な配分で添加して、漆喰白色に近似した発色を誘発する可能性を見出すことができた。

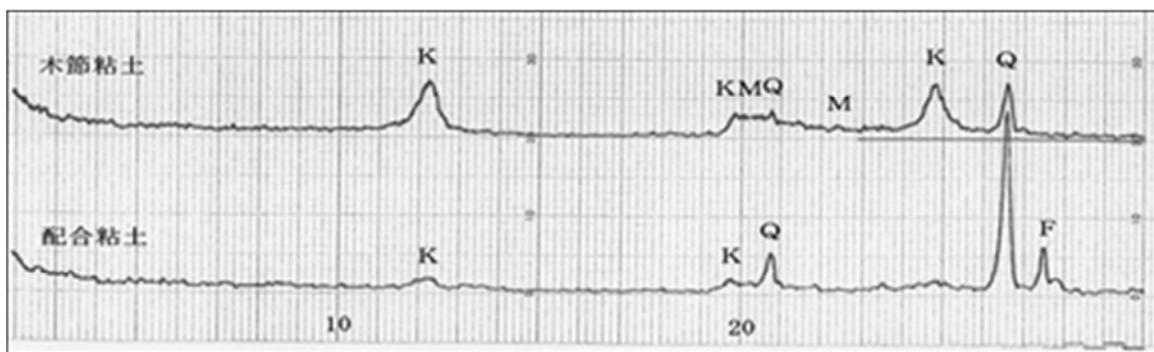


図47 X線による鉱物分析調査 (X線回折装置) 注78

(凡例) K:カオリナイト、Q:石英、M:マスコバイト、F:正長石

注77 (和名を白雲母と称する鉱物で、微粉碎されたものは塗料などの真珠光沢顔料として使用されている)

注78 (X線反射角度によって構成される鉱物特定を行う調査)

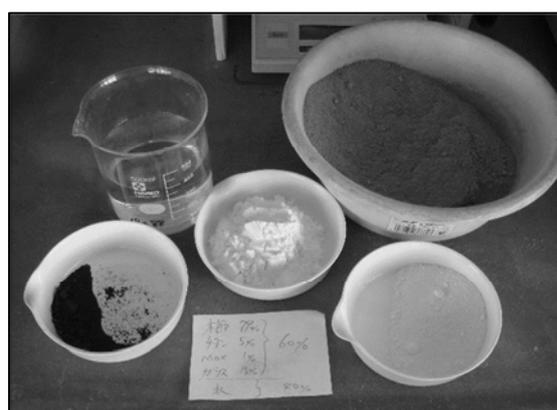
### 3. 木節粘土の調合

表 18・19 から明らかな通り、共に含有率の主たるは二酸化ケイ素 ( $\text{SiO}_2$ ) と酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) であり、原料は白色となる。その他の鉱物も基本的には白色であるが、これら粘土を焼成しても主成分である化合物のムライト ( $\text{Al}_6\text{O}_{13}\text{Si}_2$ ) となって、焼成後も基本的に白色のままで変化はしない。また、石英等の無色鉱物は微粉にすることで光の乱反射が発生し、同じく白色に見えてくる効果がある。

この度の実験研究では瓦屋根に多用される紐付き和瓦（雁振瓦・熨斗瓦）の紐部のみを、本来の屋根漆喰と同様の色調・テクスチュアに仕上げることが目的である。このため、消石灰・すさ・角叉・川砂・油等を原料とする屋根漆喰の色合いを色測計で予め測定し、僅かに薄黄味を含んだ色調の白色を最終目標に掲げた。木節粘土は陶磁器の原料として高級洋食器づくりには欠かせないものであるが、瓦製造では刷毛土として表面を平滑にすることのみで、産地によっては使用しない地域もある。木節粘土の成分構成は前述の通り、白色となる鉱物で構成されているため母材として最適である。これに色付けを行うための顔料となる金属類（原料にも含まれるチタン・マンガン）を微量に添加させることで、焼成による漆喰白色に近似した発色誘発の可能性を導いた。



配合検討 A（木節 94%）



配合検討 B（木節 84%）



配合検討 C（木節 79%）



配合検討 D（木節 74%）

写真 22 配合検討実験（木節粘土：チタン：マンガン：硝子粉：清水）

### 第3章 瓦焼成に伴う燻化手法の開発

#### 1. 燻化手法の検討

三州瓦では通常、火入れから最高焼成温度が 1150 度に達する 27 時間目頃に火止めを行い、その後自然冷却で窯内温度が 900 度まで冷却されたことを見計らって燻化のためのガスが投入される。ガスの投入は窯を外気と遮断・密封状態とした状況で炭化水素を含むガスの投入となるが、それを素地表面で熱分解させることで瓦表面に炭素皮膜を沈着させる工程となり、燻化と称されている。以前は燻化材として松材・松葉等の自然素材が主流であったが、現在はブタン・プロパン・LPG・LNG 等の工業製品に取って変わっている。そのような燻化作業は産地や季節によっても若干異なるが、概ね 40 分ほどの時間を掛けて総流量 7.5 m<sup>3</sup>/h のガスを投入し、燻し銀に仕上げていくが、今回は瓦本体を黒掛かった灰色とし、紐部を白色とする二色の燻し瓦を制作するため、銀色に変化しない燻化工程としなければならない。試作検討の結果、今回の特殊瓦制作に関しては概ね 5 分 30 秒ほどの時間で、総流量 0.35 m<sup>3</sup>/h のガスに削減することが最良との実証観察結果を得た。なお、ガスの流量やガス配合比率、また、窯温度条件などで粘土素地に微妙な色変化が生じることも明らかとなった。

① ガス投入総流量

- ・ 0.32 m<sup>3</sup>/h → 素地表面に赤目が出始める
- ・ 0.37 m<sup>3</sup>/h → 素地表面に燻し銀が出始める

② ガス配合比

- ・ 夏場 → ブタンガス 90% : プロパンガス 10%
- ・ 冬場 → ブタンガス 60% : プロパンガス 40%

③ ガス投入タイムスケジュール

作業インターバルと投入ガス量		
0～1.5/min	1.5～4/min	4～5.5/min
0.08 m <sup>3</sup> /h	0.19 m <sup>3</sup> /h	0.08 m <sup>3</sup> /h
合計 : 0.35 m <sup>3</sup> /h (5.5/min)		

表 20 ガス投入作業工程表

ガス投入時間が表 20 以下であれば素地表面に赤目が出始め、また、これ以上長ければ燻し銀が出始めることが確認された。窯温度に関しては図 48 で示す通り、900℃目安でガス投入を行うことが最も望ましいが、これ以下の窯温度で燻化を実施してみたところ粘土素地表面に赤目が生じ始めることも判った。なお、ここに記す条件はこの度の瓦研究開発先として選定した三州瓦製造窯元のガス単窯での結果が示されており、窯の形態や焼成条件・産地（粘土）で数値が変わるため、必ずしも一律ではないことを明記しておきたい。

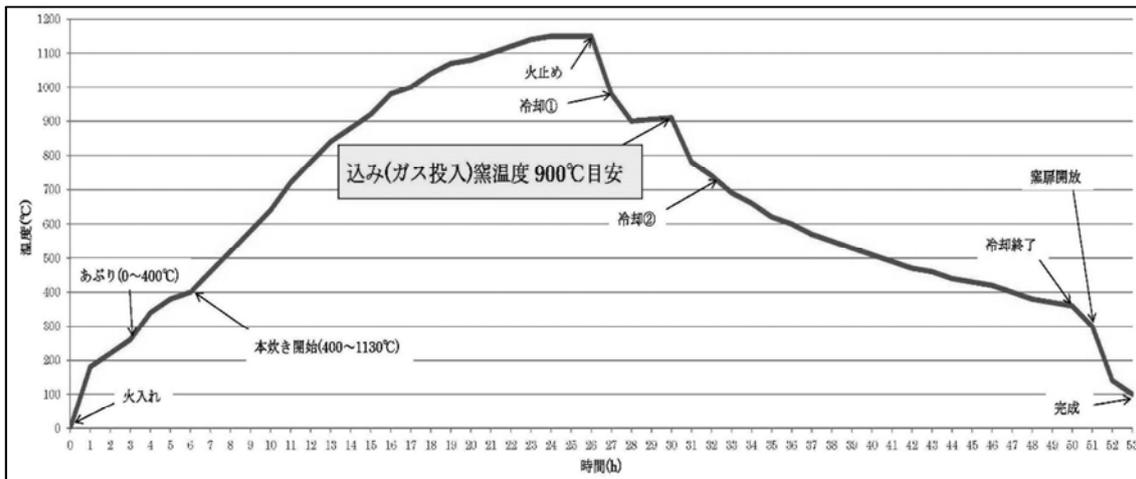


図 48 ガス単窯ヒートカーブ（燻化は窯温度 900°C〈火入れから 30 時間目位〉）

## 2. 瓦白地への塗布方法と配合設定

漆喰に近似した白色を燻化による還元焼成で引き出すため、母材となる木節粘土への添加材となるチタン・マンガンと素地への接着バインダーの役目を果たす硝子粉につき、最良の配合比率を明らかとするため、表 21 に示す仮設定を行い、実工程にて標本を制作して色の発色具合を検討した。また、木節粘土の塗布手法に関しても刷毛引きと吹付けの二種で施工を行い、発色具合や色斑についても確認を行うものとした。

固形分配合比率 A			
木節粘土	チタン	マンガン	硝子粉
84%	5%	1%	10%
固形分配合比率 B			
木節粘土	チタン	マンガン	硝子粉
80%	5%	1%	14%

表 21 木節粘土固形分仮設定配合表

焼成・窯出し後の第一段階での試作品が写真 23・24 となるが、写真 23 に掲載される試験体 1（左）は木節粘土を刷毛引き塗布したものであり、焼成後に瓦素地の色が浮き出し刷毛目が露となっている。一方、試験体 2（右）はエアガンによる吹付塗布となるが、瓦素地の色が表面に浮き出していないことから、これ以降の試験体制作と最終的な代用瓦制作では、紐部を吹付塗布による手法で行うものとした。

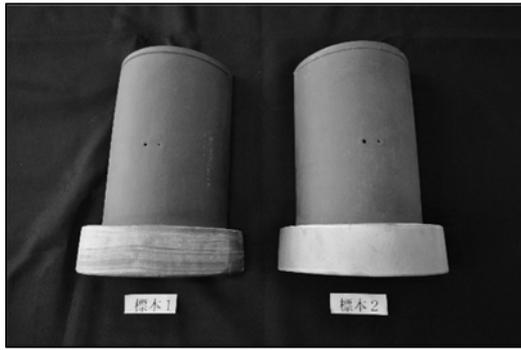


写真 23 木節粘土塗布手法比較

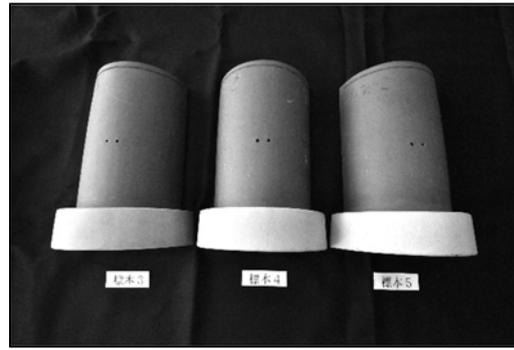


写真 24 木節粘土塗布回数比較

写真 24 に掲載される試験体は木節粘土の塗布回数比較での試作である。試験体 3 (左) は塗布回数が 1 回であり、試験体 4 (中央) は塗布回数が 2 回となり、また、試験体 5 (右) は塗布回数が 3 回である。塗布回数を重ねることで粘土素地の黒鼠色が消える効果を確認できたが、試験体 5 では塗布量が増すことによって素地に吹付けた木節粘土が剥離する現象を確認した。添加材にバインダーとなる硝子粉が含有されているとは言え、高温焼成によって一定の塗厚を超えたことで発生した破損現象であると考えられるが、この結果を踏まえてこれ以後の吹付塗布回数は試験体 4 で実施した 2 回に定めるものとした。

固形の木節粘土を吹付け手法で素地作りを行うためには適度な難度が必要となるため、表 21 に記したそれぞれの固形分配合比率において、固形分 60% に対して清水 40% を混合するものを 60% 品とし、また、固形分 40% に対して清水 60% を混合するものを 40% 品と定めた。試験体毎にこの組合せを変えるなどして①～⑥のものを第二段階での試作品として、それぞれの発色具合を確認した。

① 試験体 6

- 1 回目 (固形分配合比率 A、固形分 40% : 清水 60%)
- 2 回目 (固形分配合比率 A、固形分 40% : 清水 60%)

② 試験体 7

- 1 回目 (固形分配合比率 B、固形分 40% : 清水 60%)
- 2 回目 (固形分配合比率 B、固形分 40% : 清水 60%)

③ 試験体 8

- 1 回目 (固形分配合比率 A、固形分 60% : 清水 40%)
- 2 回目 (固形分配合比率 A、固形分 40% : 清水 60%)

④ 試験体 9

- 1 回目 (固形分配合比率 B、固形分 60% : 清水 40%)
- 2 回目 (固形分配合比率 B、固形分 40% : 清水 60%)

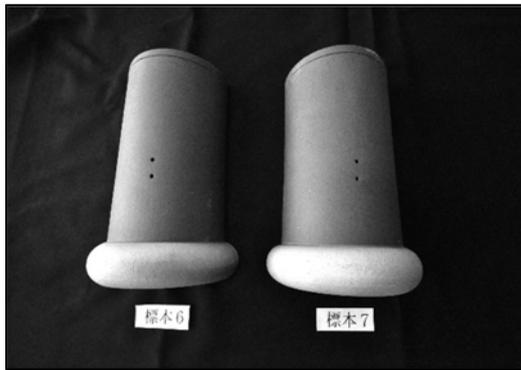


写真 25 試験体 6 (左)・7 (右)

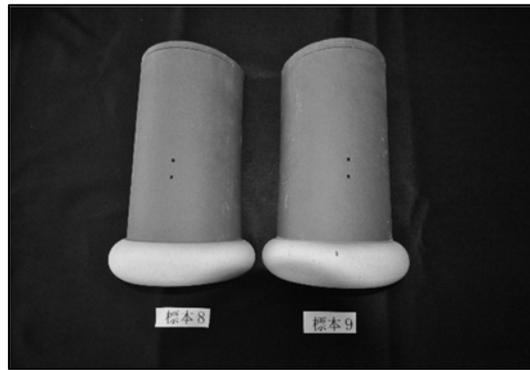


写真 26 試験体 8 (左)・9 (右)

試験体 6・7 を比較検証したところ、7 の方が薄黄色は微かに出ており、屋根漆喰を基準とする色差も若干だが試験体 7 の方が近い。一方、標本 8・9 に関しては、8 の方が薄白黄色は 9 より強く、色差もこちらの方が近い。それは試験体 7 と比較しても 9 の方が屋根漆喰の白色に近く、これより木節粘土配合比が高い方が優位であることが明らかとなった。

次の第三段階での試作品はそれぞれ二回とも、固形分 60% に対して清水 40% の水比率としたが、粘土配合比率に関しては図 42 のままとした。

⑤ 試験体 10

1 回目 (固形分配合比率 A、固形分 60% : 清水 40%)

2 回目 (固形分配合比率 A、固形分 60% : 清水 40%)

⑥ 試験体 11

1 回目 (固形分配合比率 B、固形分 60% : 清水 40%)

2 回目 (固形分配合比率 B、固形分 60% : 清水 40%)



写真 27 試験体 10



写真 28 試験体 11

試験体 10・11 に関しては共に 2 回とも 60% 品であるが、木節粘土配合比が高い 10 の方が微かに薄白黄色は強く、色差も第一段階の実験標本の中では一番近い数値が得られた。この実験結果により、水比率は 60% 品のものが最良と判断された。

第四段階での試作品制作に関しては薄白黄色の白発色を更に高めるため、硝子粉の比率を下げてチタン・マンガンの金属比率を上げた。配合比率は表 22 に示す通りとなる。

固形分配合比率C			
木節粘土	チタン	マンガン	硝子粉
84.5%	7%	1.5%	7%

表 22 変更木節粘土固形分比率配合表

⑦ 試験体 12・13

1 回目（固形分配合比率C、固形分 60%：清水 40%）

2 回目（固形分配合比率C、固形分 60%：清水 40%）

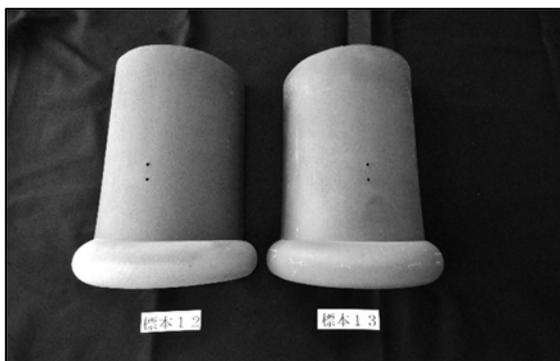


写真 29 試験体 12



写真 30 試験体 13

第四段階で制作した試験体 12・13 は同一条件の配合比率となるが、実験的に単窯（容積：9 m<sup>3</sup>）内部での積み込み位置を変え、12 は中心高より下部に、また、13 は中心高より上部のガス投入口際に配置した。その結果、ガス投入によって一時的に温度が低い状態で燻化された試験体 13 には炭素が必要以上に付着し、全体が黒ずんだものとなった。一方、中心高より下部に積んだ試験体 12 は僅かに薄黄白色に発色したが、前述の試験体 10 と比較してみたところ、基準となる屋根漆喰の色合いに近いのは試験体 10 の方であった。なお、これによって窯内部での積み込みは上下位置での配置では難しいことが明らかとなり、中央部にこの二色の特殊瓦白地を配置しなければならないことになる。すなわち、窯は一般の燻し瓦白地で周囲を埋め、真ん中にこの特殊瓦の白地を配置する必要がある。

また、母材となる木節粘土配合比率そのものも高めた方が、基準とする自然素材の屋根漆喰色調に近似することが明らかとなった。更に焼成による粘土素地と吹付材の界面剥離を防ぐために硝子粉混合したが、この配合比率が 10%を超えると母材凝固が進み、吹付塗布作業にも支障が出始めた。このため、表 22 の配合比率に再検討を加えることにした。

再検討のうえ、最終となる第五段階での試作品制作に関しては表 23 にも示す通り、主材となる木節粘土比率 90%に高め、また、酸化鉄との化合によって白色化を誘発させるチタンは 4%とし、薄黄を誘発するマンガンは 1%の割合とした。また、吹付け作業の影響を考慮し、硝子粉は 5%の割合に留めた。これによって最終決定の試験体 14 の試作を行った。

固形分配合比率D			
木節粘土	チタン	マンガン	硝子粉
90%	4%	1%	5%

表 23 最終決定 木節粘土固形分比率配合

⑧ 試験体 14

1 回目（固形分配合比率D、固形分 60%：清水 40%）

2 回目（固形分配合比率D、固形分 60%：清水 40%）



写真 31 試験体 14



写真 32 試験体 14 と漆喰標本

### 3. 代用瓦（白色紐付き燻し和瓦）制作小結

最終的に制作した試験体 14 は写真 31 に示す通り、ほんの僅かに薄黄味をおびた白色で仕上がり、目視では漆喰と粗同一の色調となった。また、表 24 でも示す通り、試験体 14 は CIE 注 79 が定める主要三表色の XYZ 表色系・L\*a\*b\*表色系・マンセル表色系を用いても、屋根漆喰表色に対して概ね近似した数値を求めることができた。更に色差は 11.72 となり、許容差も唯一上位の C 級に含まれた。また、紐部の色合いは淡い黄色を若干感じさせる白色に仕上がり、均一性を目指す工業製品とは違って、左官職人の手による屋根漆喰と同等に軒下からは見える。これにより、外観や耐久性に適した代用瓦の制作が適い、社殿を維持継承するライフサイクルの側面でもその有用性は高いと判断される。しかし、今回の事例はあくまで目地漆喰瓦の代用法を試行したものであることから、同様な手法の採用に当たっては、対象物件における保存継承に対する十分な検討が必要と言える。

注 79（国際照明委員会を挿し、光と照明の測定手法の開発と国際規格などの指針づくりを行っている）

	名称	XYZ表色系			L*a*b*表色系			色差		マンセル表色系						
		XYZ			L*a*b*			dE*ab		H_V/C						
A	屋根漆喰	XYZ	84.13	86.06	94.64	L*a*b*	94.34	-0.51	4.54	dE*ab	-	H_V/C	3.75Y	9.43	/	0.54
B	最終試験体14	XYZ	59.71	61.53	67.28	L*a*b*	82.70	-1.50	4.37	dE*ab	11.72	H_V/C	1.20Y	8.22	/	0.52
C1	試験体1	XYZ	37.86	38.84	40.7	L*a*b*	68.64	-0.74	5.75	dE*ab	25.73	H_V/C	4.76Y	6.77	/	0.76
C2	試験体2	XYZ	33.81	34.71	36.24	L*a*b*	65.52	-0.79	5.7	dE*ab	28.84	H_V/C	5.20Y	6.45	/	0.75
C3	試験体3	XYZ	34.59	35.23	39.41	L*a*b*	65.93	0.13	2.58	dE*ab	28.49	H_V/C	0.00N	6.49	/	0.37
C4	試験体4	XYZ	34.35	34.91	37.28	L*a*b*	65.68	0.39	4.7	dE*ab	28.67	H_V/C	1.22Y	6.47	/	0.68
C5	試験体5	XYZ	47.97	48.55	50.75	L*a*b*	75.17	0.98	6.32	dE*ab	19.31	H_V/C	9.65YR	7.44	/	0.96
C7	試験体6	XYZ	31.87	32.5	36.21	L*a*b*	63.75	-0.01	2.69	dE*ab	30.64	H_V/C	0.00N	6.27	/	0.37
C8	試験体7	XYZ	35.56	36.26	38.99	L*a*b*	66.72	0	4.44	dE*ab	27.62	H_V/C	2.37Y	6.58	/	0.61
C9	試験体8	XYZ	38.18	38.82	41.17	L*a*b*	68.62	0.35	5.19	dE*ab	25.74	H_V/C	1.29Y	6.77	/	0.74
C10	試験体9	XYZ	27.65	28.19	30.74	L*a*b*	60.06	0.01	3.49	dE*ab	34.3	H_V/C	0.00N	5.9	/	0.48
C11	試験体10	XYZ	47.84	48.58	49.05	L*a*b*	75.19	0.54	8.06	dE*ab	19.5	H_V/C	0.99Y	7.45	/	1.16
C12	試験体11	XYZ	33.27	33.91	35.94	L*a*b*	64.89	0.05	4.99	dE*ab	29.46	H_V/C	2.32Y	6.39	/	0.69
C13	試験体12	XYZ	38.37	38.81	39.68	L*a*b*	68.61	0.98	6.9	dE*ab	25.88	H_V/C	0.18Y	6.77	/	1.03
C14	試験体13	XYZ	12.43	12.59	13.12	L*a*b*	42.14	0.56	4.13	dE*ab	52.21	H_V/C	1.26Y	4.14	/	0.6
	平均		36.676	37.388	39.754		66.69	0.07	4.95		27.72		2.76Y	6.579		0.694

表 24 試験体白色部表色比較表（測定は 10 回測定平均値）



写真 33 箭弓稻荷神社拝殿・幣殿屋根に載る白色紐付き燻し和瓦（竣工時）

## 第4章 経過観察

社殿の保存修理は平成25年(2013)10月に着手し、工期1年で拝殿・幣殿の屋根替えを主とした工事が実施された。また、屋根破損による小屋裏への雨水流入の影響もあつてか、拝殿南東隅木や桔木、また、茅負や裏甲などにも腐朽箇所が見受けられた。このため、小屋組の補修や構造補強も合わせて行われた。また、耐震診断の結果、拝殿の強度が不足していることが明らかとなったため、再び屋根に瓦が葺かれても支障が無いように、現状変更手続きを行って床下廻りと壁面の耐震補強工事を併せて実施することになった。

今回の代用瓦制作に関しては試作開発に凡そ5ヶ月の時間を要し、その後の瓦制作に3ヶ月、屋根施工に3ヶ月と屋根工事は全体工期を通して行われていたことになる。なお、屋根施工は竣工の1ヶ月前まで瓦に損傷を与えないように慎重に行われていたが、何とか神社当局から期限が示されていた平成26年9月上旬までに保存修理工事を完了させることができた。それから2年の月日が経過したが、この代用瓦(白色紐付き燻し和瓦)の破損劣化や耐候性が劣ることなどの理由による色具合変化なども懸念されたため、27ヶ月目での経過観察測定を実施することになった。その結果が表25に示す通りとなるが、予想以上に経年劣化や色具合に変化が生じていないことが確認された。

	名称	XYZ表色系			L*a*b*表色系			色差		マンセル表色系					
		XYZ	84.13	86.06	94.64	L*a*b*	94.34	-0.51	4.54	dE*ab	-	H_V/C	3.75Y	9.43/	0.54
A	屋根漆喰	XYZ	84.13	86.06	94.64	L*a*b*	94.34	-0.51	4.54	dE*ab	-	H_V/C	3.75Y	9.43/	0.54
B	最終試験体14	XYZ	59.71	61.53	67.28	L*a*b*	82.70	-1.50	4.37	dE*ab	11.72	H_V/C	1.20Y	8.22/	0.52
C1	屋根瓦1	XYZ	60.16	58.52	52.76	L*a*b*	81.03	6.62	14.45	dE*ab	13.04	H_V/C	5.18YR	8.05/	2.86
C2	屋根瓦2	XYZ	55.59	57.16	66.22	L*a*b*	80.27	-1.16	1.12	dE*ab	4.05	H_V/C	-	7.97/	0.2
C3	屋根瓦3	XYZ	55.49	57.05	66.25	L*a*b*	80.21	-1.14	0.99	dE*ab	4.19	H_V/C	-	7.97/	0.18
C4	屋根瓦4	XYZ	53.62	55.21	63.87	L*a*b*	79.16	-1.33	1.18	dE*ab	4.74	H_V/C	-	7.86/	0.22
C5	屋根瓦5	XYZ	52.99	54.45	62.64	L*a*b*	78.72	-1.05	1.48	dE*ab	4.91	H_V/C	-	7.81/	0.21
C7	屋根瓦6	XYZ	57.31	58.98	68	L*a*b*	81.28	-1.29	1.4	dE*ab	3.28	H_V/C	-	8.08/	0.22
C8	屋根瓦7	XYZ	55.62	57.27	65.48	L*a*b*	80.33	-1.35	1.84	dE*ab	3.44	H_V/C	-	7.98/	0.27
C9	屋根瓦8	XYZ	49.95	51.41	60.37	L*a*b*	76.93	-1.24	0.36	dE*ab	7	H_V/C	-	7.63/	0.2
C10	屋根瓦9	XYZ	59.73	61.4	68.61	L*a*b*	82.59	-1.15	3.17	dE*ab	1.26	H_V/C	-	8.21/	0.38
C11	屋根瓦10	XYZ	54.64	56.17	62.75	L*a*b*	79.71	-1.12	3.09	dE*ab	3.24	H_V/C	-	7.92/	0.37
C12	屋根瓦11	XYZ	56.34	57.91	64.41	L*a*b*	80.69	-1.11	3.36	dE*ab	2.25	H_V/C	-	8.02/	0.4
C13	屋根瓦12	XYZ	52.83	54.38	63.38	L*a*b*	78.68	-1.28	0.77	dE*ab	5.37	H_V/C	-	7.81/	0.2
C14	屋根瓦13	XYZ	53.73	55.28	63.32	L*a*b*	79.2	-1.22	1.72	dE*ab	4.37	H_V/C	-	7.86/	0.25
C15	屋根瓦14	XYZ	51.67	53.18	60.56	L*a*b*	77.98	-1.26	2.01	dE*ab	5.25	H_V/C	-	7.74/	0.27
C16	屋根瓦15	XYZ	62.98	64.88	74.23	L*a*b*	84.42	-1.48	1.88	dE*ab	3.05	H_V/C	-	8.4/	0.27
	平均		55.51	56.883	64.19		80.08	-0.704	2.59		4.63		-	7.954	0.433

表25 試験体白色部表色比較表(27ヵ月後の経過観察結果)

XYZ表色系は混色の色体系であり、原色を設定してその混色量で色を定量的に表示することに適したものであるが、Yのみが明度を持つことから明るさの指標はこの数値を一つの目安とするが、今回の瓦制作の最終基準となった試験体14でのY値は61.53であったのに対し、経過観察で得た15箇所のY平均値は56.88となり、その差は4.65と近似の値を示し

ている。また、X 値での差は 4.20、Z 値での差は 3.09 となり、どれもが 5 以下の数値を示すことから基準値となった瓦とは粗同一の色合いであると言え、この表色系指標からの経年劣化は無いものと判断される。

L\*\_a\*\_b\*表色系は均等色空間上の座標を表し、心理的に同じ色違いに見える色同士の距離を均等にする色立体となるが、L\*が明度のことを示している。試験体 14 での L\*は 82.70 であるのに対し、経過観察で L\*平均値は 80.08 となり、その差は 2.62 と僅差となる。クロマネティクス指数 a\*での差は 0.8、クロマネティクス指数 b\*での差は 1.78 となり。どれもが 3 以下の数値を示しており、この表色系指標からも経年劣化は無いものと判断される。

dE\*ab は色差を示しており、L\*\_a\*\_b\*から色の差を求めたものとなる。試験体 14 では 11.72 であったのに対し、経過観察での平均値では 4.63 であった。

H\_V/C はマンセル表色系であり、まずは試験体 14 の色相が 1.20Y であるのに対し、経過観察ではその多くが 0.00N に近い数値となり、R/Y/G/B/P に該当しない。次に明度であるが、試験体 14 では 8.22 であるのに対し、経過観察での平均値は 7.95 となり、その差は 0.27 の僅差となった。彩度においては試験体 14 の 0.52 に対し、経過観察での平均値は 0.43 となり、その差は 0.09 と同じく僅差となった。このため、マンセル表色系指標からの経年劣化は無いものと判断される。

以上、各表色系指標比較からも、基準値とした試験体 14 の数値に経過観察平均値も概ね合致することが明らかとなり、耐候性の問題や経年劣化は殆ど生じていないことが確認された。すなわち、竣工後間も無い漆喰白色の美しさは未だに堅持されていることになるが、真物の漆喰目地であればこの月日が経過すれば見え隠れ部などは既に黴が発生し、本来の漆喰白色の明るさは失われている可能性が高い。このように、代用瓦（白色紐付き燻し和瓦）は汚損に対しても汚れ難さがあることが確認できた。

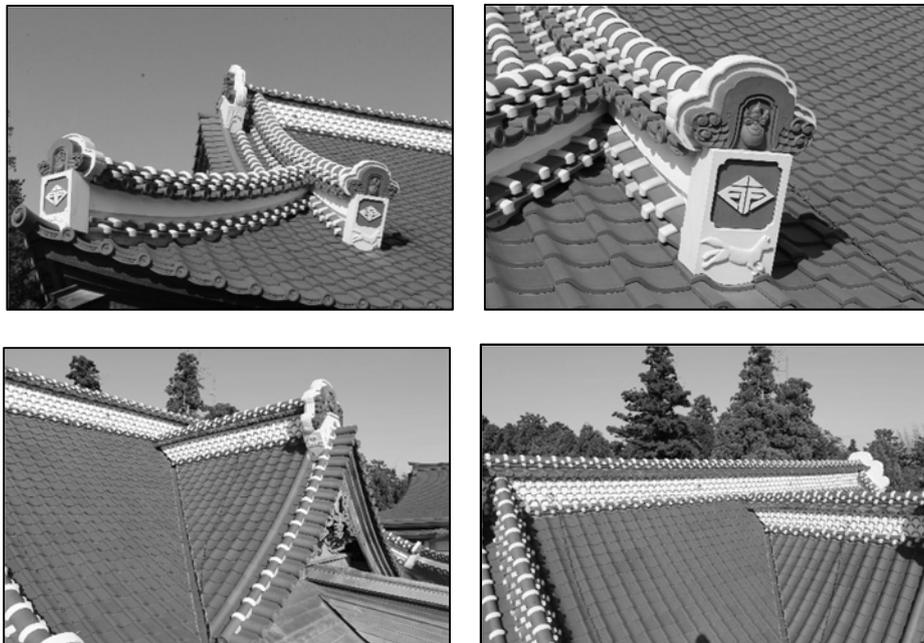


写真 34 箭弓稻荷神社拝殿・幣殿屋根瓦 27 ヲ月目での経過観察状況

## 第5章 第二部社殿瓦屋根修理に伴う建造物保存技術研究のまとめ

今回の代用瓦制作の最終的な成果としては、拝殿・幣殿屋根上に載る瓦の27ヵ月目での経過観察測定において、経年劣化や色具合変化が全く生じていないという好結果が得られ、更には当初予測していなかった白色紐部の汚損が殆ど発生しないという結果も大きく、真物の屋根漆喰では得られない効果が確認できた。しかしながら、文化財建造物の修理においては伝統技法の踏襲が第一義となるため、まずはこれを前提に技術検討すべきである。

一昨年、屋根全面を漆喰瓦とする国宝姫路城大天守の保存修理工事が完了したが、外壁漆喰と漆喰瓦が相俟つ美観が話題となった。伝統技法の踏襲は大きな意味を持っており、当初の仕様に拘ってこれが実践されることでその建物の本質に我々現代人が触れ合うことが可能となる。ある意味唯一、過去との対話が図れる手法とも言える。しかし、一方では近年発生した大規模地震が契機となり、現代技術の利点を活かした修理手法を取り入れ、人命の安全確保を図ることも重要な責務となっている。

「文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすか」という点において、まずは伝統技法の踏襲を念頭に技術検討を行い、これを補完する形で現代技術を旨く組み合わせた修理を実施することが、最良な形で価値の存続と建造物維持継承を可能にする手段と成り得る。決定した復原年代での内外観意匠を長期維持継承するために、構造耐力的な側面で現代技術がこれを適切に補完すれば、ライフサイクルの長期化も図れることになる。いずれにしても、オーセンティシティの側面からも議論を深めて、個々の文化財建造物にとって最適な修理手法を選択すべきである。

なお、代用瓦制作を通じた課題としては、瓦焼成による歩留まりの向上が上げられる。代用瓦は二色の燻し瓦となるため、燻化工程による炭素皮膜が付着する前に燻化作業を止めなければならない。しかし、窯の構造上、ガス流入口が窯上部と下部の二箇所からの吹き出しとなっているため、窯内部での白地積込み位置が最上部や最下部の配置では、中央部と比較して早く炭素皮膜の付着が始まってしまう。このため、今回のケースでは代用瓦の窯積込み位置は中央部の配置しかなく、一回当たりの歩留まりは60%程度しか見込めない。すなわち、現段階では量産化がし辛いという欠点があり、これに伴ってイニシャルコストも割高になる傾向を示している。今後、この代用瓦を文化財建造物以外の建物に裾野を広げていくためには、窯の構造的な見直しが必要になってくるものと考えられる。

今回の代用瓦制作実験研究で得た粘土配合比率と焼成手法は、以下に記す通りとなる。

- ① 採用木節粘土調整配合：木節粘土（90%）を母材に、チタン（4%）・マンガン（1%）・硝子粉（5%）を調合することで、漆喰に近似した白色誘発を可能にした。
- ② 単窯投入ガス総流量：0.35 m<sup>3</sup>/h が最適であることが判明した。
- ③ 燻化所要時間：ガス投入時間全体で5分30秒が最適であることが判明した。
- ④ ガス投入インターバル：3回に分け、1回目（0.08 m<sup>3</sup>/h）・2回目（0.19 m<sup>3</sup>/h）・3回目（0.08 m<sup>3</sup>/h）で実施することが最適であることが判明した。

## 結 論

## 第一部・第二部のまとめと結論

第一部の「箭弓稲荷神社社殿の建築史研究」ではまず、史料研究と建築実態調査から社殿造替に至る背景や建立に関する経緯を明らかとし、創建当初の社殿の復原検討とその後の改修変遷を解明することを目的に掲げ、次のことを明らかとした。

箭弓稲荷神社社殿の造替事業は文化15年(1818)から文政元年初頭頃に着工され、社殿の完成は天保11年(1840)9月であったと判明した。また、附帯工事も含めた全事業の完了は天保14年(1843)10月であったことも判った。なお、造替当初の社殿屋根は柿葺であり、軒先は柿平葺板する檜皮葺様式が採用されていたことも明らかとなった。その後の改修変遷として、安政5年(1858)4月に拝殿・幣殿屋根を現状の棧瓦葺に改めている。これは安政2年(1855)10月2日に発生した安政大地震の影響によるものと考えられ、防火対策や屋根の長寿命化が背景にあり、屋根を瓦葺に改めたものと推測される。また、明治29年(1896)3月には本殿の柿葺屋根も、現状の銅瓦型葺に改修している。さらに、拝殿内部に関しては、昭和32年(1957)11月に下拝と内拝を統合して一室の内部空間に改修がされていたことも判明した。なお、建築実態調査と床下発掘調査から、この社殿の造替事業は元々二期に分割した建築計画であったことが明らかとなり、第一期は本殿・幣殿までの建立で、第二期が拝殿の建立となる。本来は全事業予算を確保したうえで工事を実施することが一般的であるが、往時は箭弓稲荷詣でが盛況であったことから、途中で得られる浄財をある程度見込み、見切り発車で事業に着手したものと推測される。

一方、権現造形式社殿の建築様式調査では、主要社殿におけるその建物形状や外装彫刻指標の変化などを比較し、箭弓稲荷神社社殿の建築様式視点からの見解を纏めた。まず、社殿の建物形状検討では、平面形状変化が幣殿(石の間)において発生することが確認された。江戸時代最初期の幣殿は本殿妻側柱通りと同一の広い間口に対し、奥行寸法が狭い平面形状が主流であった。しかし、寛永13年(1636)に建立された六所神社社殿(岡崎市)を境に間口と奥行き寸法が拮抗するようになり、その後は間口が狭まって奥行寸法が延びる傾向が主流となって行った。同年に増改修された伊賀八幡宮社殿(岡崎市)では既に幣殿間口が狭まり、奥行き寸法が延びる平面形状が採られていた。なお、幣殿床が「石の間」として下がらずに、拝殿と同一の床高になるのも六所神社社殿が基点となっており、箭弓稲荷神社社殿の平面形態はこれらの傾向に符号している。

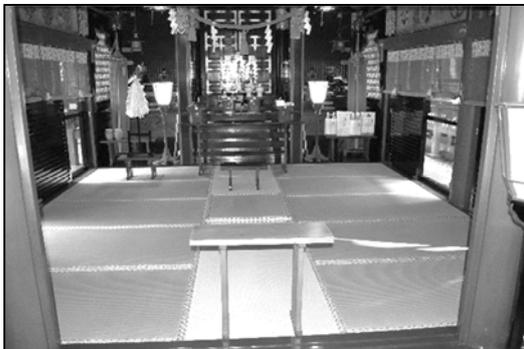


写真 35 六所神社幣殿



写真 36 伊賀八幡宮幣殿

さらに、立面形状変化も同じく、幣殿（石の間）屋根において発生することが確認された。権現造形式社殿は江戸時代最初期に八棟造と称される所以の通り、拝殿大棟と幣殿（石の間）大棟が同一の棟高となり、それに若干高なる本殿大棟が接続することで連続感のある八棟を形成している。しかし、平面形状変化と同様に六所神社社殿を境にして、幣殿棟高が拝殿棟高より下がる傾向が確認された。以後、中期・後期を通じて幣殿棟高が下がる立面形態が主流となるが、箭弓稲荷神社社殿もこの傾向に同じく符号した外観となる。

一方、豪華絢爛で立体的な表現手法による彫刻を備えた権現造社殿の外装彫刻検討では、江戸時代初期は菊や牡丹などの草花類や龍や唐獅子と言った守護獣など、武家好みのモチーフが主流で、これが一定の規則性で配置される特徴を確認することができる。しかし、これが中期以降からは変化し、宗教思想や大衆受けする直截的な彫刻が加わる傾向が確認された。すなわち、寺社参詣の対象が武家から町人に転じたことで、ご利益や建物の素晴らしさを方々から集まる庶民の口伝によって伝播することを意図したものと考えられる。箭弓稲荷神社社殿はこの傾向にも符号しているが、特に社殿彫刻に塗装を施さず、その質の高さを強調する技法を備えた典型例でもあり、江戸時代後期の最高水準の彫刻技法が内在した装飾建築とも言える。

箭弓稲荷神社社殿の個別の特徴としては、幣殿棟高が拝殿・本殿棟高より大きく下がり、また、本殿棟高が他より一層高く聳えているため、そこに祀られる御祭神の崇高さを外部から確認し易くした立面形状になると言える。一方、本殿の外装彫刻には火除けや魔除けの意味合いを持つ「龍や蜃などの霊獣彫刻」を多く配しながらも、「仙人の鳥鷲」などの宗教思想をモチーフとした直截的な彫刻がバランス良く組み合わせることで、参詣者の印象に残り易い構成となっている。なお、造替事業に携わった彫刻大工頭の飯田仙之助が神社に奉納したと考えられる木彫りの御神体像が、今回の調査研究によって発見された。写真 37 の通り、享和 2 年（1802）12 月の銘が台座にあり、宝珠を頭部に被せた狐に載る宇迦魂神の手には弓矢が備わり、福德神でありながらも部門の守護神として、あらゆる邪悪を追い払うことを意図した御神体像である。これからも、神社と飯田家との繋がりや造替事業計画前から既にあったことを窺わせる。なお、飯田仙之助は本殿が上棟した年の天保 6 年（1835）12 月に他界しており、その意思は嫡男飯田岩次郎が引き継いだものと考えられる。

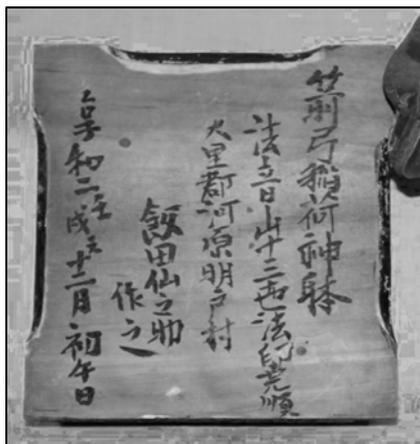


写真 37 木彫御神体像台座墨書

本殿内陣に関しては彫刻や建具などに漆・彩色装飾が施されているため、前社殿の転用説も存在したが、調査によって本殿主要軸部との部材接合状況や、諸折両開き棧唐戸鏡板の龍頭彫刻形状が写真 38 (①と②) に示す通り、飯田流龍頭の特徴でもある鼻と口の形・前面に被る上瞼・長い渦巻く髭などの彫刻的特徴が合致したことにより、本殿内陣龍頭彫刻は飯田仙之助の作風と同一の丸彫り彫刻であることが明らかとなった。これにより、本殿内陣装飾は天保期の社殿造替と同時期に、飯田家によって施工が施されたことが判明した。

箭弓稲荷神社外装彫刻の種別は 69 種と、歓喜院聖天堂の 173 種から比較すれば半分以下となる。また、外装彫刻総数に関しては 203 基であり、歓喜院聖天堂の 378 基と比較すれば 175 基ほど彫刻数は少ない。しかし、箭弓稲荷神社の外部彫刻は素木であることや、彫刻の造り込みは他の追随を許さないほど精巧であるため、制作の手間隙は同等と見なすことができる。この他、権現造形式主要社殿の外装彫刻総数が多数となる降順で比較した場合、日光東照宮が最大の 606 基となり、次いで輪王寺大猷院の 557 基となる。そして三番手が歓喜院聖天堂となるが、日光東照宮では種別が 63 種のため、同じモチーフが凡そ平均的に 10 基ある計算となる。また、輪王寺大猷院の種別は 51 種となり、同じモチーフが凡そ平均的に 11 基ある計算となるが、江戸初期の社殿彫刻は奥絵師たちによって外観意匠が厳格管理されていたことにより、このように同一種別の彫刻が整然と配列される結果に至ったと考えられる。なお、モチーフや構図などに一定の自由度を持った彫刻が配置され始めるのは、今回の調査対象範囲では妙義神社社殿からとなることが明らかである。

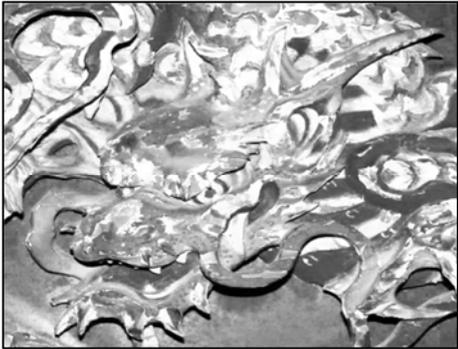
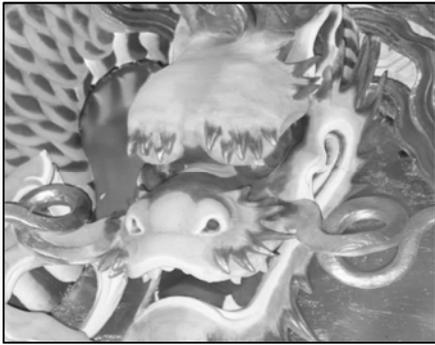
① 箭弓稲荷神社本殿内陣龍頭彫刻	② 三峰神社手水舎龍頭彫刻
 <p data-bbox="277 1301 483 1335">(飯田仙之助 作)</p>	 <p data-bbox="849 1294 1054 1328">(飯田岩次郎 作)</p>

写真 38 龍頭彫刻比較

第二部の「社殿瓦屋根修理に伴う建造物保存技術研究」では、文化財的価値の存続と建造物維持継承をいかに果たすかという課題を有しながら、代用瓦の開発研究が行われた。今回、瓦制作産地に選定した三州瓦で使用される木節粘土成分は、酸化鉄と酸化チタンの含有率が比較的lowかったことが功を奏して、目指す開発方向にこの性質を旨く適用させることができ、凡そ半年間に渡る実験研究の末、紐部を白色・本体部を鼠色とする二色の代用瓦制作を導くことが適った。

この代用瓦が拝殿・幣殿屋根上に葺かれて 24 ヶ月を経過したことから、竣工 2 年目点検と称して劣化状況と退色状況を確認するための経過観察調査を実施したが、異変は全く生じておらず、健全な状態であることが判った。さらに、白色の紐部は殆ど汚損しておらず、汚れ難さが備わることも確認された。もし、これが従来仕様の漆喰であればこの期間を経れば黴が発生するなどして徐々に黒ずんで来ることは必定であり、竣工当初の輝きは大方

減衰することは間違いない。この代用瓦は24ヵ月を経過した現在も修理竣工時の美観を粗そのままの状態に堅持しており、このことは外観の維持継承とライフサイクルの長期化にも寄与し、経済面や環境面からも現代社会が目指す方向性に合致するものとなる。しかしながら、文化財建造物修理は伝統技法の踏襲を第一義とする原則に変わりはなく、これを絶やすことなく未来へ継承することが重要な意味を持っている。このようなことから、現代技術の利点を活かした文化財建造物の修理手法は、基本的に見え隠れに限定されることが多く、外装塗料材などを除けば見え掛りでの積極活用は殆ど希である。そのような中、今回は外観意匠の過半を占める屋根に代用瓦が載ることで、ある意味、文化財的価値の存続と建造物維持継承に対して、試行的な意味合いを持つ開発行為でもあった。いずれにしても、今後はさらに技術的な検討を重ね、オーセンティシティの側面からも議論を深めて、個々の文化財建造物にとって最適な修理手法を選択すべきであると考えられる。

なお、この代用瓦制作を通じて明らかとなったもう一つの課題は、瓦製造業者が激減していることである。平成7年(1995)1月17日に発生した阪神淡路大震災の影響を受け、多くの瓦屋根家屋が倒壊してしまった。この決定的な要因により、瓦屋根による家屋再建を選択する人が減り、耐震的に絶対有利とされた軽量屋根の現代風家屋が多く選ばれた。これより、風評被害も伴って各産地での瓦製造は右肩下がりとなり、震災前の平成6年度を基準に平成23年度の瓦出荷統計と比較しても、30%程度と著しく落ち込んでいる。このため、多くの瓦製造業者は廃業に追い込まれているが、このことは全国瓦生産の71%(平成23年度)を占める三州瓦も例外ではなく、それぞれの瓦製造業者にとって生き残りを掛けた厳しい状況が現在も続いている。

我国の文化財建造物の屋根仕様を見た場合、国指定では檜皮葺が約23%、柿葺が約12%、茅葺が約10%となることから、恐らく残りの過半近くは瓦葺が占めることになる。これからも明らかな通り、文化財的価値の存続と建造物の維持継承は、実はその背景に瓦製造技術の継承がなければ成り立たないことになる。しかし、業界に安定した仕事量が確保されない限り、これに従事する人材確保も儘ならない状態に陥ることは言うまでもなく、早期にこれを解決する手立てが必要とされている。このような観点からも、今回の代用瓦を文化財建造物以外の歴史的建造物や一般建築に間口を広げることで、同様の屋根材として活用を図る他、屋根材以外の内外装材として新たに展開させることも可能であり、アイデア次第では多様な発展性が内在する瓦と言える。いずれにしても、この問題解決を図るために建築業界全体が瓦製造業を支え、新たな施策を打つなどの真摯な対応が望まれる。この前提のもとに我国の文化財建造物の瓦屋根も守られ、安定的な状態で未来に継承させることが可能となってくる。

以上、本研究では史料研究・遺構研究・文化財建造物保存技術研究の視点から、箭弓稲荷神社社殿の修復保存を通して、実践的な建築史研究の手法が導けたと結論することができる。

## 参考文献一覧

### 著作

- 1) 東松山市の歴史（上巻・中巻）：東松山市市史編さん課, 東松山市, 1985 年
- 2) 東松山市の文化財（その2）：東松山市文化財保護審議会, 東松山市, 1957 年
- 3) 中世武蔵人物列伝：埼玉県立歴史資料館, 埼玉県, 2006 年
- 4) 松平大和守の研究：松平大和守研究会, 2004 年
- 5) 新編武蔵風土記稿（再編纂・第十巻）：蘆田伊人, 雄山閣, 1996 年
- 6) 箭弓稲荷神社：岡田潔, さきたま文庫, 2003 年
- 7) 埼玉県の地質鉱物・天然記念物調査報告書：埼玉県教育委員会, 2001 年
- 8) 三角縁神獸鏡と復元鏡：東松山市教育委員会, 東松山市, 2013 年
- 9) 稲荷大社の社殿の問題：福山敏男, 稲荷信仰辞典編集委員会（山折哲雄）, 1999 年
- 10) 日本建築史研究（続編）：福山敏男, 墨水書房, 1971 年
- 11) 白川家門人帳（現代語訳版）：近藤善博, 白川家門人帳刊行会, 1972 年
- 12) 比企郡神社誌：比企郡視崇神会, 神社庁比企郡支部, 1960 年
- 13) 社史三峰山：三峰神社, 1965 年
- 14) 重文 大山祇神社本殿修理工事報告書：京都府教育委員会, 大山祇神社, 1966 年
- 15) 神社建築史研究Ⅱ：稲垣栄三, 中央公論美術出版, 2008 年
- 16) 匠明：太田博太郎・伊藤要太郎, 鹿島出版会, 1982 年
- 17) 国宝大崎八幡宮保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2004 年
- 18) 神道名目類聚抄：佐伯有義, 大岡山書店, 1934 年
- 19) 神道大系 首編2 古今神学類編（上）：神道大系編纂会, 1981 年
- 20) 史料大成 第9巻 中右記：増補史料大成刊行会, 臨川書店, 1965 年
- 21) 真福寺善本叢刊 第2期：国文学研究資料館, 臨川書店, 2004 年
- 22) 日本建築史：後藤治, 共立出版, 2003 年
- 23) 日本建築の構造と技法（下）：岡田英男, 思文閣出版, 2005 年
- 24) 国宝 宇佐神宮本殿保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 1985 年
- 25) 国宝 永保寺開山堂他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2012 年
- 26) 複合的社殿の構成と祭祀者認識の相関：山田武晴, 國學院大學, 2012 年
- 27) 重文 久能山東照宮保存修理工事報告書第一集：久能山東照宮修理委員会, 1968 年
- 28) 重文 東照宮本殿他三棟保存修理工事報告書：和歌山東照宮修理委員会, 1981 年
- 29) 重文 東照宮（金地院）保存修理工事報告書：京都府教育委員会, 金地院, 1961 年
- 30) 国宝 東照宮本殿・石之間・拝殿保存修理工事報告書：東照宮修理委員会, 1967 年
- 31) 重文 六所神社本殿他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 1976 年
- 32) 重文 伊賀八幡宮保存修理工事報告書：伊賀八幡宮修理委員会, 1968 年
- 33) 重文 相馬中村神社本殿他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 1993 年
- 34) 重文 日御碕神社社殿保存修理工事報告書：日御碕神社社殿修理委員会, 1969 年
- 35) 重文 浅草神社社殿保存修理工事報告書：浅草神社社殿修理委員会, 1963 年

- 36) 重文 東照宮保存修理工事報告書：上野東照宮修理委員会, 1965 年
- 37) 国宝 輪王寺大猷院靈廟保存修理工事報告書：輪王寺大猷院修理委員会, 1966 年
- 38) 埼玉県指定 三芳野神社社殿保存修理工事報告書：三芳野神社修理委員会, 1992 年
- 39) 重文 高良大社本殿他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 1976 年
- 40) 重文 根津神社本殿他保存修理工事報告書：根津神社社殿修理委員会, 1959 年
- 41) 重文 妙義神社本殿他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 1989 年
- 42) 重文 歎喜院聖天堂保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2011 年
- 43) 群馬県指定 天満宮社殿保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2006 年
- 44) 群馬県指定 榛名神社社殿保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2004 年
- 45) 重文 鶴岡八幡宮上宮本殿他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2009 年
- 46) 東京都史跡 日吉神社社殿保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2008 年
- 47) 国宝 永保寺開山堂他保存修理工事報告書：文化財建造物保存技術協会, 2012 年
- 48) 日本の美術 246・日本建築の装飾：伊藤延男, 至文堂, 1986 年
- 49) 不滅の建築 3・平等院鳳凰堂：工藤圭章他, 毎日新聞社, 1988 年
- 50) 江戸の装飾建築・近世における建築の開放：窪寺茂, INAX, 1994 年
- 51) 甦る聖天山本殿と上州彫物師たちの足跡：阿部修治, さきたま出版会, 2011 年
- 52) 日本木彫史：坂井犀水, 藤森書店, 1929 年
- 53) 東照宮再発見：高藤晴俊, 日光東照宮, 1990 年
- 54) 日光東照宮：須田慎太郎, 集英社インターナショナル, 2015 年
- 55) 日本の美術 12・霊廟建築：村上詎一, 至文堂, 1990 年
- 56) 熊谷市史・妻沼聖天山の建築：熊谷市教育委員会, 熊谷市, 2016 年
- 57) 神祇部一：神宮司應編纂, 1897 年
- 58) 日本建築史序説：太田博太郎, 彰国社, 1947 年
- 59) 群馬の社寺彫刻：小林一好, みやま文庫, 1999 年
- 60) 尾島町近世社寺建築調査報告書：尾島町教育委員会, 1998 年
- 61) かわら日本史：駒井綱之助, 雄山閣出版, 1981 年
- 62) 瓦 日本の町並みをつくるもの：伊東ていじ他, INAX, 1986 年
- 63) 粘土瓦ハンドブック：田中稔, 技報堂出版, 1980 年

## 論文

- 64) 石の間・建築史 2-1：福山敏男, 日本建築学会, 1940 年
- 65) 諸国門人帳にみる白川家の門人：金光英子, 日本宗教学会, 2013 年
- 66) 近世神社建築における意匠題材について：吉満史絵, 日本建築学会, 1997 年
- 67) 徳川家霊廟の構造形式について：伊東龍一, 日本建築学会, 2000 年
- 68) 孚式権現社霊廟建築考：水野耕嗣, 日本建築学会, 2011 年
- 69) 諸国東照宮の造営から見る幕府作事方御大工頭木原義久の職分：高橋洋司, 2009 年
- 70) 木原義久による地方の東照宮社殿に関する考察：正見泰, 日本建築学会, 2010 年
- 71) 近世尾張地方における「尾張造り」と「権現造り」について：酒井一光, 1995 年
- 72) 群馬県近世社寺造営に参与した彫物師：伊東龍一, 日本建築学会, 1982 年
- 73) 関東の彫物大工の系譜と幕府彫物大工棟梁高松家：伊東龍一, 日本建築学会, 1991 年

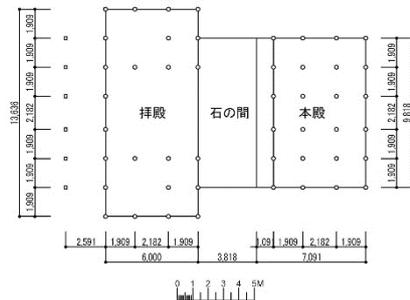


## 付 録 資 料

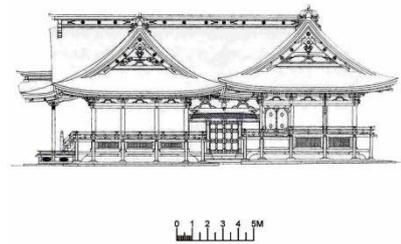
# 1. 箭弓稲荷神社社殿と主要社殿の形状比較検討

## 1-1. 大崎八幡宮社殿との比較検証

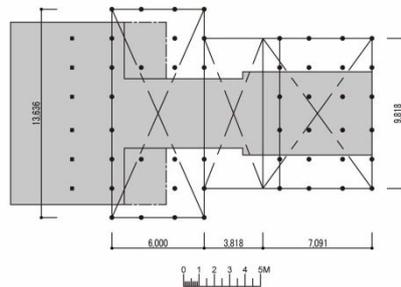
所在地 宮城県仙台市青葉区八幡四丁目六番一号  
構造形式 本殿：桁行五間 梁間三間 一重 入母屋造  
石の間：桁行一間 梁間一間 一重 両下造  
拝殿：桁行正面七間 背面五間 梁間三間 向拝五間 一重 入母屋造  
建立年代 慶長 12 年(1607)  
立面引用 国宝大崎八幡宮 本殿・石の間・拝殿保存修理工事報告書(2004 年刊行) 注 80



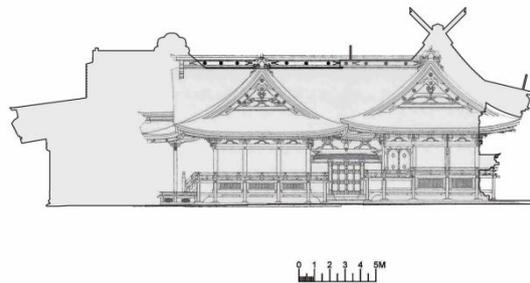
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、大崎八幡宮は石の間の奥行が狭く、元々八幡造を基に建築計画が成されたとの指摘が先行研究でされている。なお、本殿規模は大崎八幡宮の方が大であるが、拝殿は箭弓稲荷神社の方が広く、江戸時代後期建立であることから商業的な意識が強くなっていることを窺わせる。一方、立面規模は箭弓稲荷神社が本殿棟高は大であるが、幣殿棟高は両社殿共に粗同一高となる。大崎八幡宮は個別に本殿・石の間・拝殿の棟高は粗同一として、屋根に破風を五つ配する八棟造とすることにより、その美しさを誇張する設計手法となっている。

注 80 (文化財建造物保存技術協会編「国宝大崎八幡宮保存修理工事報告書」2004 年・P113)

## 1-2. 北野天満宮社殿との比較検証

所在地 京都府京都市上京区御前通今出川上る馬喰町

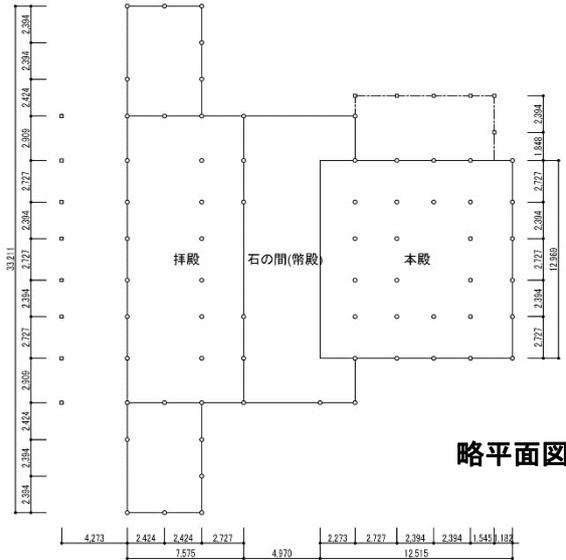
構造形式 本殿：桁行五間 梁間四間 一重 入母屋造

石の間：桁行三間 梁間一間 一重 両下造

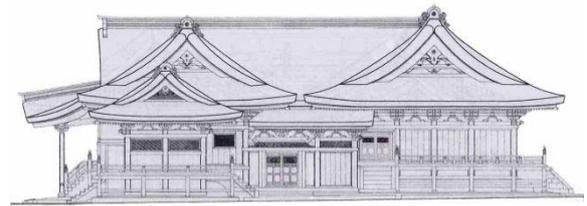
拝殿：桁行七間 梁間三間 向拝七間 一重 入母屋造

建立年代 慶長 12 年(1607)

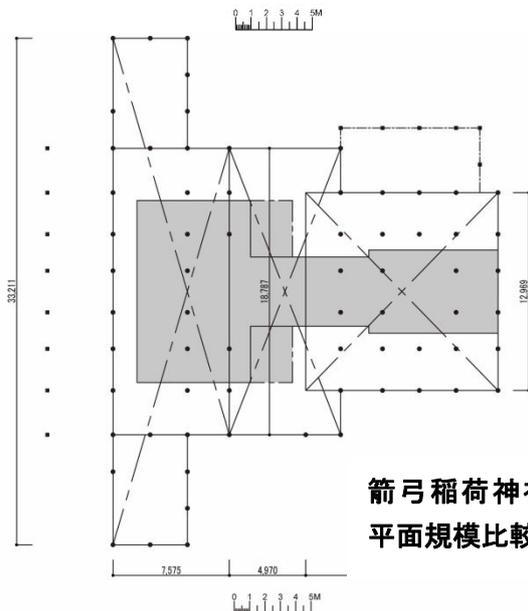
立面引用 京都府教育庁文化財保護課作図資料（戦後の昭和期に作成）



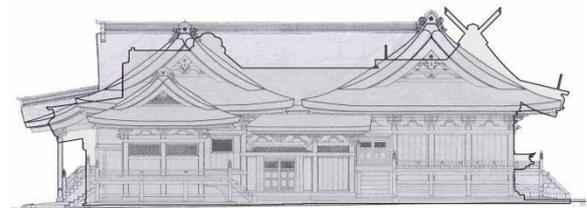
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



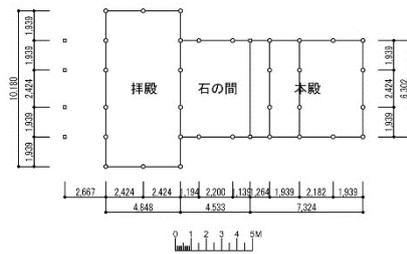
箭弓稲荷神社との  
立面規模比較

### 比較検証結果

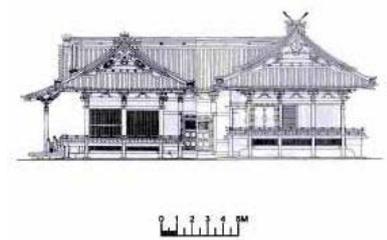
平面規模・立面規模共に北野天満宮の方が大である。また、北野天満宮も大崎八幡宮と同様に屋根を八棟造として各棟高は粗同一となり、その美しさを誇張する設計となる。

### 1-3. 久能山東照宮社殿との比較検証

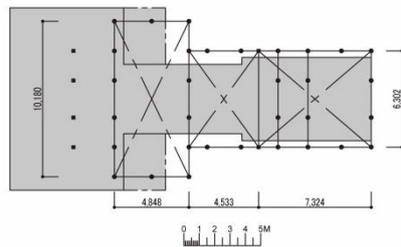
所在地 静岡県静岡市駿河区根古屋 390 番地  
 構造形式 本殿：桁行三間 梁間三間 一重 入母屋造  
 石の間：桁行一間 梁間一間 一重 両下造  
 拝殿：桁行五間 梁間二間 向拝三間 一重 入母屋造  
 建立年代 元和 3 年(1617)  
 立面引用 重要文化財久能山東照宮保存修理工事報告書第一集(1968 年刊行) 注 81



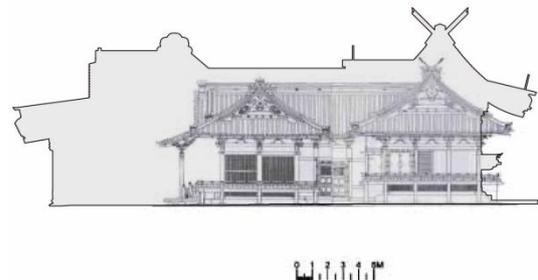
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

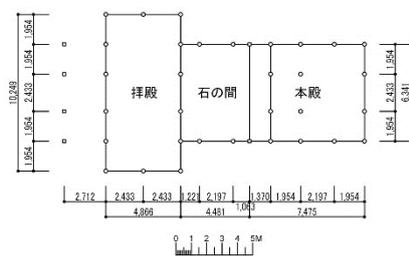
#### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、本殿規模形状は両社殿共に近似している。なお、拝殿は箭弓稲荷神社の方が断然広いのは商業的な意識が強いためと考えられるが、久能山東照宮は日光東照宮と共に神格化した徳川家康（東照大権現）を祀る東照社の祖であり、将軍徳川家が統治の正当性を後世まで子孫が継承することを示す証でもあった。このため、拝殿規模が小さいのは限られた関係者を対象としていたためと考えられる。一方、立面規模は久能山東照宮の方が低く、各社殿高さも粗同一となるが、屋根を八棟造とすることでその美しさが誇張されたバランスの良い外観となっている。

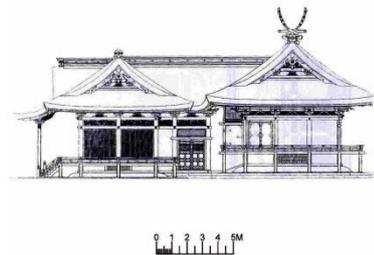
注 81 (久能山東照宮修理委員会編「重要文化財久能山東照宮保存修理工事報告書第一集」1968 年)

## 1-4. 和歌山東照宮社殿との比較検証

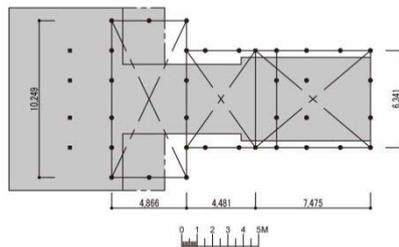
所在地 和歌山県和歌山市和歌浦西 2-1-20  
 構造形式 本殿：桁行三間 梁間三間 一重 入母屋造  
 石の間：桁行三間 梁間一間 一重 両下造  
 拝殿：桁行五間 梁間二間 向拝三間 一重 入母屋造  
 建立年代 元和7年(1621)  
 立面引用 重要文化財東照宮本殿他三棟保存修理工事報告書(1981年刊行)注82



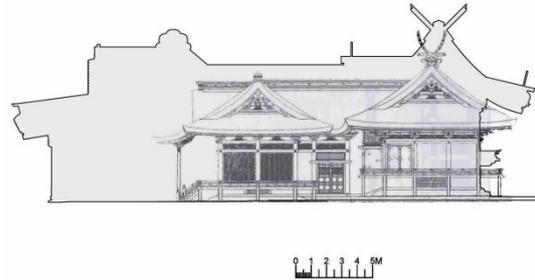
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、本殿規模形状は両社殿共に近似している。また、和歌山東照宮は本殿・石の間・拝殿規模形状が久能山東照宮と近似しており、建立年代も四年ほど違うだけであることから、平面計画は久能山東照宮棟梁であった中井正清による指南が背景にあったのではないかと考えられる。一方、立面規模は箭弓稲荷神社の方が各棟高共に大であるが、注目すべき点はこの東照宮から本殿棟高が上がり、幣殿・拝殿棟高より一段高く聳えることである。この手法によって、東照大権現の崇高さを表現したとも考えられる。

注82 (東照宮修理委員会編「重要文化財東照宮本殿他三棟保存修理工事報告書」1981年)

## 1-5. 金地院東照宮社殿との比較検証

所在地 京都府京都市左京区南禅寺福地町 86-12

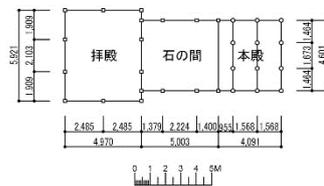
構造形式 本殿：桁行三間 梁間二間 一重 入母屋造

石の間：桁行三間 梁間一間 一重 両下造

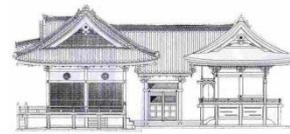
拝殿：桁行三間 梁間二間 向拝一間 一重 入母屋造

建立年代 寛永5年(1628)

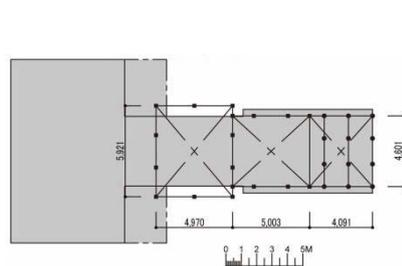
立面引用 重要文化財東照宮(金地院)修理工事報告書(1961年刊行) 注83



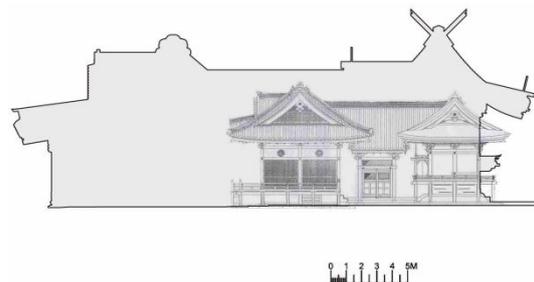
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、金地院東照宮は本殿・石の間・拝殿が見た目は正形に近い平面計画となっており、特に拝殿は久能山東照宮や和歌山東照宮と比較しても狭隘なスペースであり、家康の遺言でもある「京都には南禅寺中金地院へ小堂をいとなみ、所司代はじめ武家の輩進拝せしむべし」ということから、手狭は間取りになっていると考えられる。一方、立面規模は箭弓稲荷神社の方が各棟高共に大であるが、注目すべき点はこの金地院東照宮は本殿棟高より拝殿棟高の方が大となることである。拝殿が平面・立面共に大となることで、本殿はその奥に連なるような感覚で位置するが、この建築形態の原形は永保寺開山堂であると推測される。

注83 (京都府教育委員会編「重要文化財東照宮(金地院)保存修理工事報告書」1961年)

## 1-6. 日光東照宮社殿との比較検証

所在地 栃木県日光市山内 2301

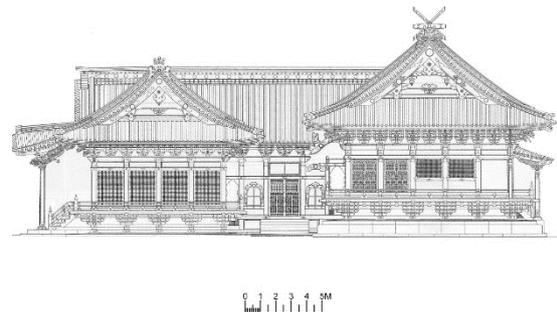
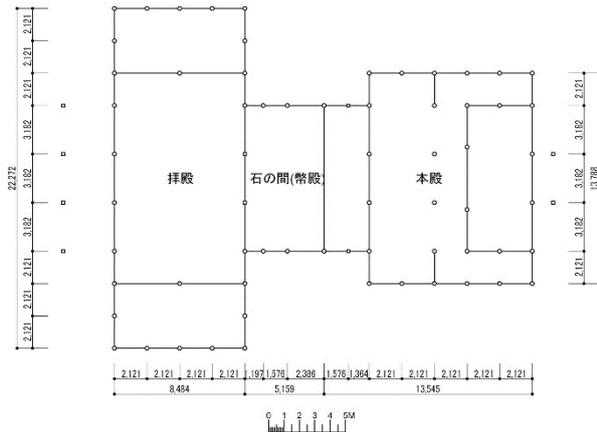
構造形式 本殿：桁行五間 梁間五間 一重 入母屋造

石の間：桁行三間 梁間一間 一重 両下造

拝殿：桁行九間 梁間四間 向拝三間 一重 入母屋造

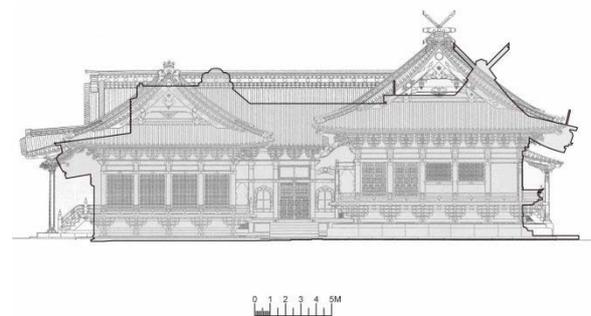
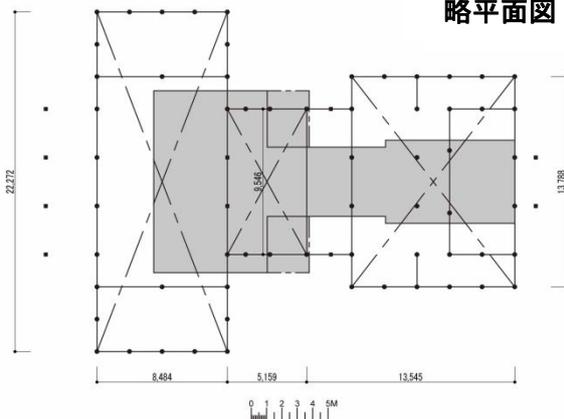
建立年代 寛永 13 年(1636)

立面引用 国宝東照宮本殿・石の間・拝殿修理工事報告書(1967 年刊行) 注 84



略平面図

側面図



### 箭弓稲荷神社との 平面規模比較

### 箭弓稲荷神社との 側面規模比較

#### 比較検証結果

平面規模・立面規模共に日光東照宮の方が大である。また、久能山東照宮と同様に神格化した徳川家康（東照大権現）を祀る東照社の祖でもあり、将軍徳川家が統治の正当性を後世まで子孫が継承することを示す証の社殿でもある。ただ、久能山との違いは建物規模が大規模となり、更に煌びやかな彫刻装飾で内外を覆う社殿は圧倒する威厳を備え、また、拝殿東には將軍着座間、西には法親王着座間も設けられた。この社殿造営が契機となり、その後多くの彫刻を纏う装飾建築が誕生するが、箭弓稲荷神社社殿もその系譜となる。なお、屋根は本殿棟高を大とし、その美しさを余すことなく表現した最高峰の社殿である。

注 84 (東照宮修理委員会編「国宝東照宮本殿・石の間・拝殿保存修理工事報告書」1967 年)

## 1-7. 六所神社社殿との比較検証

所在地 愛知県岡崎市明大寺町耳取 44

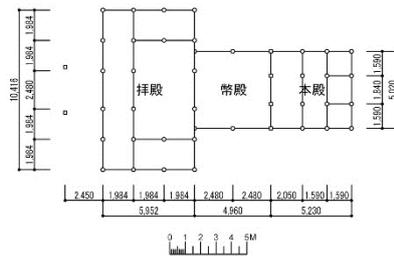
構造形式 本殿：三間社流造

幣殿：桁行二間 梁間三間 一重 両下造

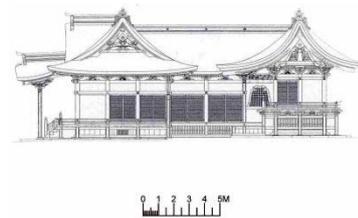
拝殿：桁行五間 梁間三間 向拝一間 一重 入母屋造

建立年代 寛永 13 年(1636)

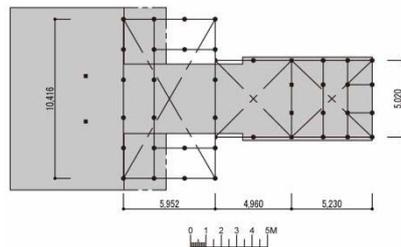
立面引用 重要文化財六所神社本殿・幣殿・拝殿他保存修理工事報告書(1976 年刊行) 注 85



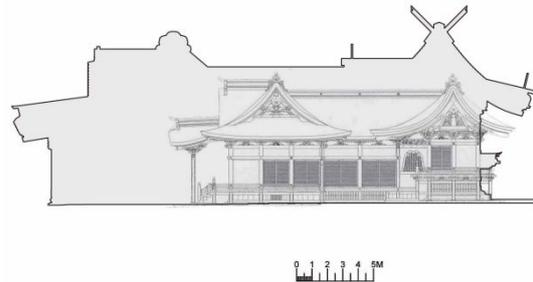
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、六所神社は本殿・幣殿が見た目は正形に近い平面計画となっている。また、拝殿は日光東照宮拝殿でも見られたように空間の区画化が成されている。一方、立面規模は箭弓稲荷神社の方が各棟高共に大であるが、六所神社は本殿と拝殿棟高が粗同一であり、拝殿千鳥破風棟高も同じく粗同一となることから、正面拝殿屋根に重厚感が生み出されている。なお、拝殿・幣殿は連続性のある外観意匠として幣殿屋根を一段下げること、本殿棟高がやや高く見える視覚効果を齎している。

注 85 (文化財建造物保存技術協会編「重要文化財六所神社本殿・幣殿・拝殿他保存修理工事報告書」1976 年)

## 1-8. 伊賀八幡宮社殿との比較検証

所在地 愛知県岡崎市伊賀町東郷中 86

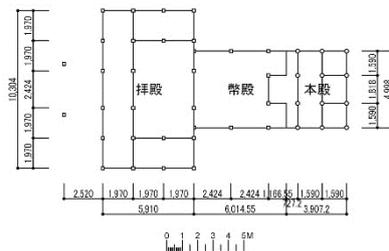
構造形式 本殿：三間社流造

幣殿：桁行二間 梁間一間 一重 両下造

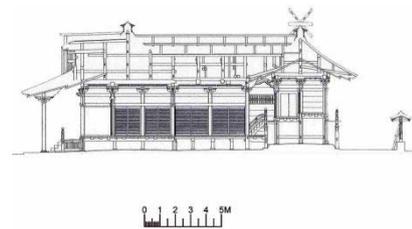
拝殿：桁行五間 梁間三間 向拝一間 一重 入母屋造

建立年代 寛永 13 年(1636)

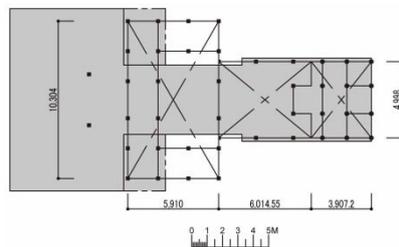
立面引用 重要文化財伊賀八幡宮社殿修理工事報告書(1968 年刊行) 注 86



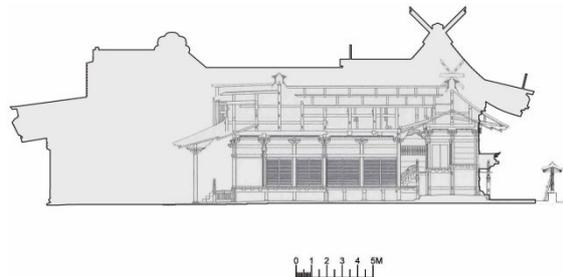
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

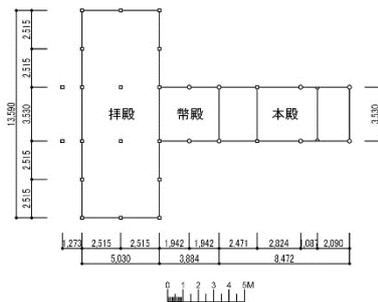
平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、伊賀八幡宮拝殿は日光東照宮拝殿でも見られたように空間の区画化が成されている。この社は元々、松平家の氏神として文明二年(1470)に創建されたもので、その後、徳川家康によって三間社流造の本殿が造営され、更に三代将軍家光によって権現造社殿への増改修が成された後、東照大権現を祭神に加えている。一方、立面規模も箭弓稲荷神社の方が各棟高共に大であるが、伊賀八幡宮は元々単体であった本殿に後世増設の幣殿・拝殿が取り合ったもので、軒先廻りの納めに努力の痕が窺える。なお、幣殿屋根が一段下がり、本殿・拝殿は同一高である。

注 86 (伊賀八幡宮修理委員会編「重要文化財伊賀八幡宮保存修理工事報告書」1968 年)

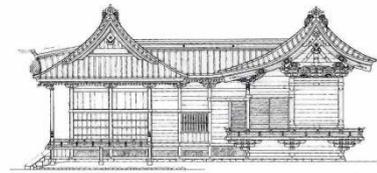
## 1-9. 相馬中村神社社殿との比較検証

所在地 福島県相馬市中村字北町 140  
 構造形式 本殿：一間社流造  
 幣殿：桁行三間 梁間一間 一重 両下造  
 拝殿：桁行五間 梁間二間 向拝一間 一重 入母屋造  
 建立年代 寛永 20 年(1643)  
 立面引用 重要文化財相馬中村神社本殿・幣殿・拝殿

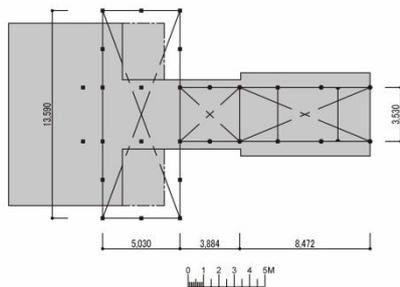
保存修理工事報告書(1993 年刊行) 注 87



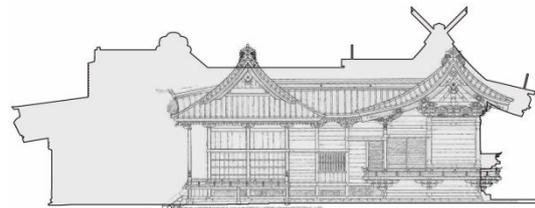
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、相馬中村神社本殿・幣殿は間口が一間のため、奥行面が細長い印象を受ける平面計画となる。矩手に配される拝殿の桁行長は本殿・幣殿の奥行長と近似しており、丁度平面形状はT字形となっている。一方、立面規模も箭弓稲荷神社の方が各棟高共に大であるが、六所神社や伊賀八幡宮と同様に本殿・拝殿の棟高を概ね同一高とし、繋ぎとなる幣殿棟高を下げる外観としているが、全体的に重々しさは感じられず、軽快な様相を醸し出している。

注 87 (文化財建造物保存技術協会編「重要文化財相馬中村神社本殿・幣殿・拝殿保存修理工事報告書」1993 年)

## 1-10. 日御碕神社社殿との比較検証

所在地 島根県出雲市大社町日御碕 455

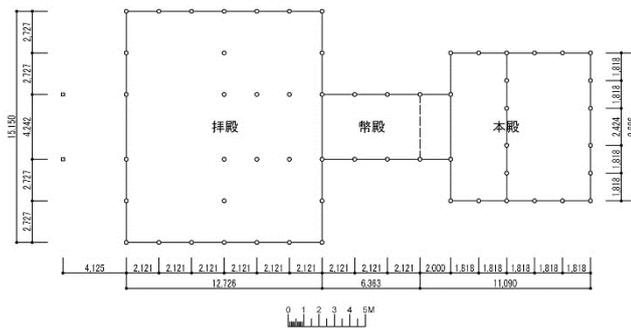
構造形式 本殿：桁行三間 梁間五間 一重 入母屋造

幣殿：桁行三間 梁間一間 一重 両下造

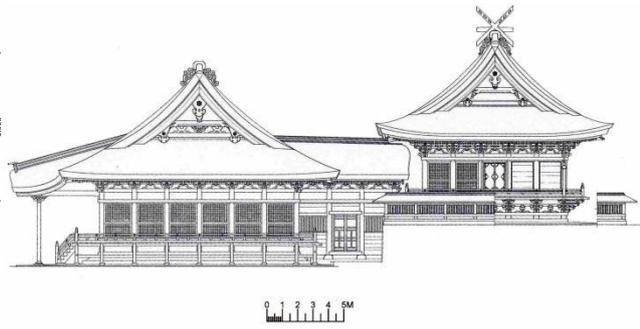
拝殿：桁行五間 梁間六間 向拝一間 一重 入母屋造

建立年代 寛永 21 年(1644)

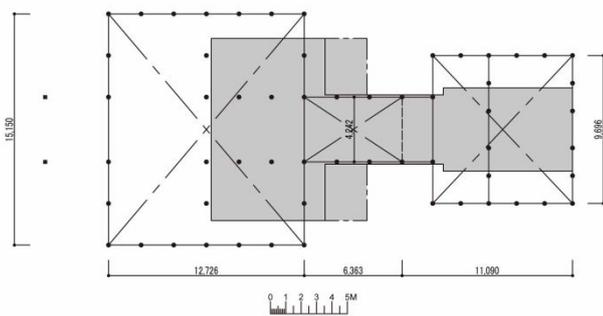
立面引用 重要文化財日御碕神社社殿保存修理工事報告書(1969 年刊行) 注 88



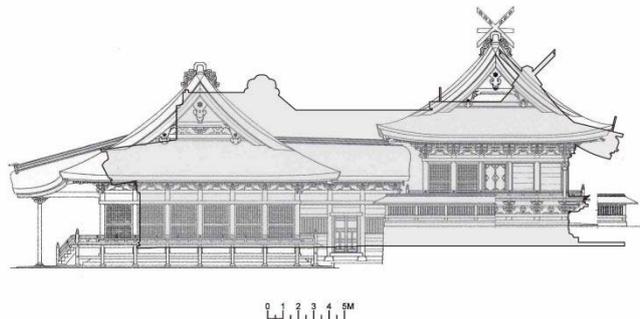
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

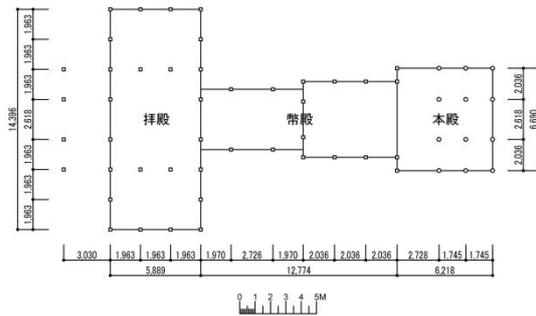
### 比較検証結果

平面規模は日御碕神社の方が床面積・奥行長共に大である。特に本殿・拝殿は正形に近い形状で大規模な間取りとなっており、これを間口一間の幣殿が両棟を接続している。一方、立面規模も日御碕神社の方が大であるが、境内環境の都合上、本殿は凡そ2mほど高い法面に建ち、拝殿との地盤レベルが違っているために本殿棟高が高く聳え見えるが、これを同一高の地盤面に置き換えると、本殿・拝殿の棟高は粗同一高となる。なお、幣殿棟高は一段下がることで、本殿が聳えて見える視覚効果を生んでいる。

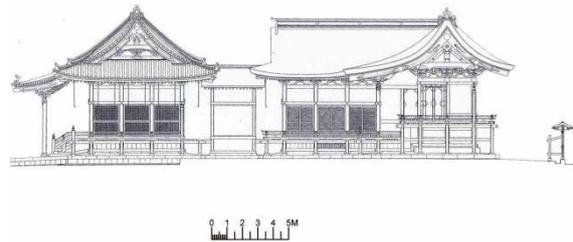
注 88 (日御碕神社社殿修理委員会編「重要文化財日御碕神社社殿保存修理工事報告書」1969 年)

## 1-11. 浅草神社社殿との比較検証

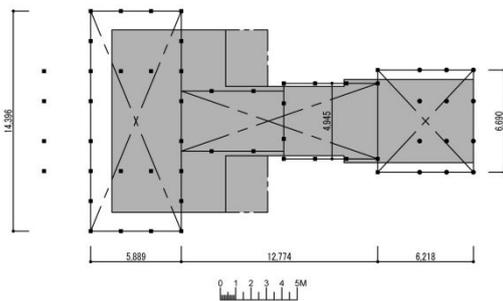
所在地 東京都台東区浅草2丁目3番1号  
 構造形式 本殿：三間社流造  
 幣殿：桁行三間 梁間一間 一重 入母屋造  
 拝殿：桁行七間 梁間三間 向拝三間 一重 入母屋造  
 建立年代 慶安2年(1649)  
 立面引用 重要文化財浅草神社社殿保存修理工事報告書(1963年刊行) 注89



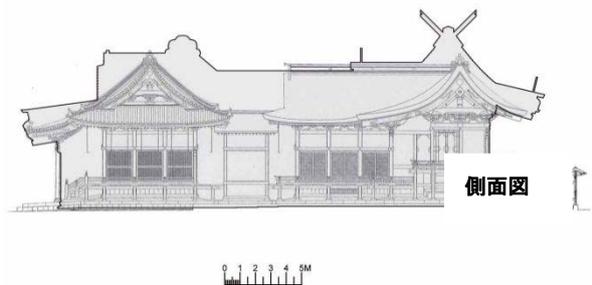
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積は大であるが、奥行長は浅草神社の方が大となる。また、浅草神社は幣殿と拝殿棟が切り離れる「拝殿独立+本殿・幣殿複合型」となり、吹曝しの釣殿を介して一体を成す権現造社殿となる。一方、立面規模は箭弓稲荷神社の方が本殿・幣殿共に大であるが、幣殿は粗同一高となる。浅草神社本殿・幣殿及び拝殿の棟高は粗同一高となることから、高さの視覚からは特筆すべきものはないが、拝殿屋根と本殿・幣殿屋根が切離れていることで、本殿屋根が横広T字形に大きく見える効果を生んでいる。

注89 (浅草神社社殿修理委員会編「重要文化財浅草神社社殿保存修理工事報告書」1963年)

## 1-12. 上野東照宮社殿との比較検証

所在地 東京都台東区上野公園 9-88

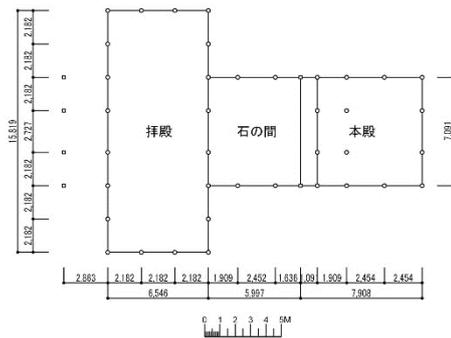
構造形式 本殿：桁行三間 梁間三間 一重 入母屋造

石の間：桁行三間 梁間三間 一重 両下造

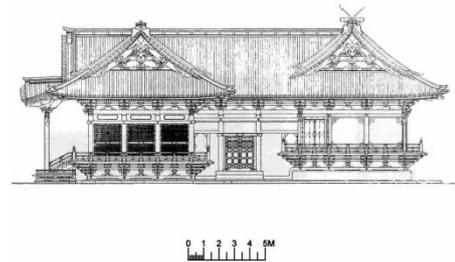
拝殿：桁行七間 梁間三間 向拝三間 一重 入母屋造

建立年代 慶安四年(1651)

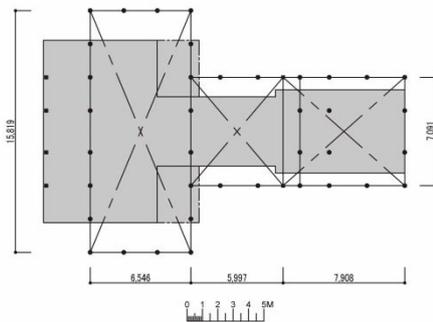
立面引用 重要文化財東照宮社殿保存修理工事報告書(1965年刊行) 注90



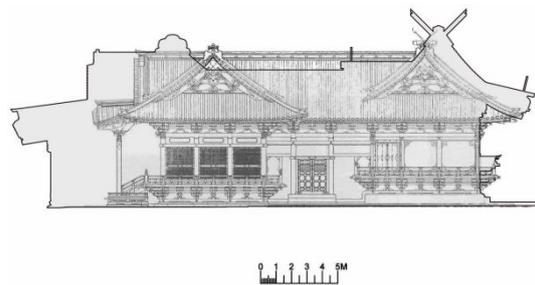
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が奥行長は大であるが、床面積規模は概ね近似している。上野東照宮本殿・石の間は久能山東照宮・和歌山東照宮と同一の柱間で平面計画が成されているが、拝殿は浅草神社と同一の柱間として平面規模を拡張している。一方、立面規模は箭弓稲荷神社が本殿棟高・拝殿棟高が若干大となるが、幣殿棟高は上野東照宮の方が大となる。上野東照宮は本殿棟高を他の棟高より若干高めており、久能山東照宮屋根形状と類似したものとなり、八棟造の美しさが誇張される江戸初期の様相を窺わせるものとなる。

注90 (東照宮修理委員会編「重要文化財東照宮保存修理工事報告書」1965年)

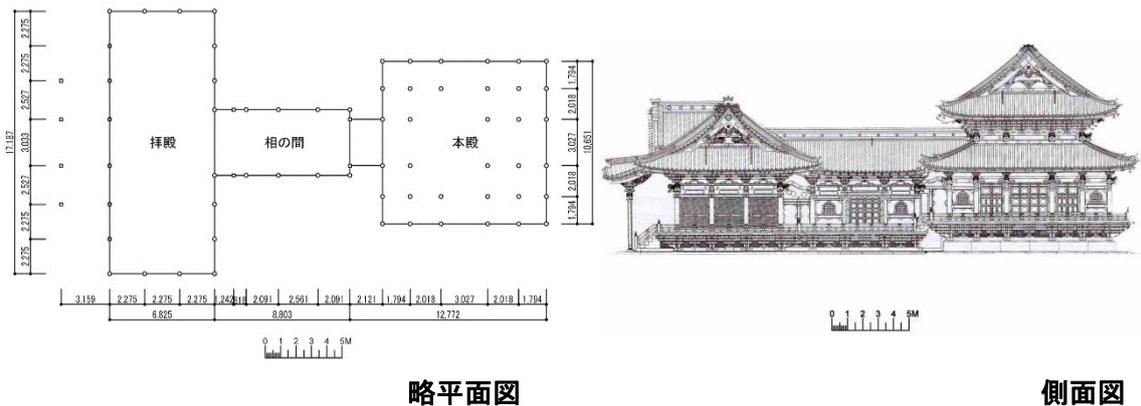
## 1-13. 輪王寺大猷院との比較検証

所在地 栃木県日光市山内 2300

構造形式 本殿：桁行五間 梁間五間 一重 入母屋造  
 相の間：桁行三間 梁間一間 一重 両下造  
 拝殿：桁行七間 梁間三間 向拝三間 二重 入母屋造

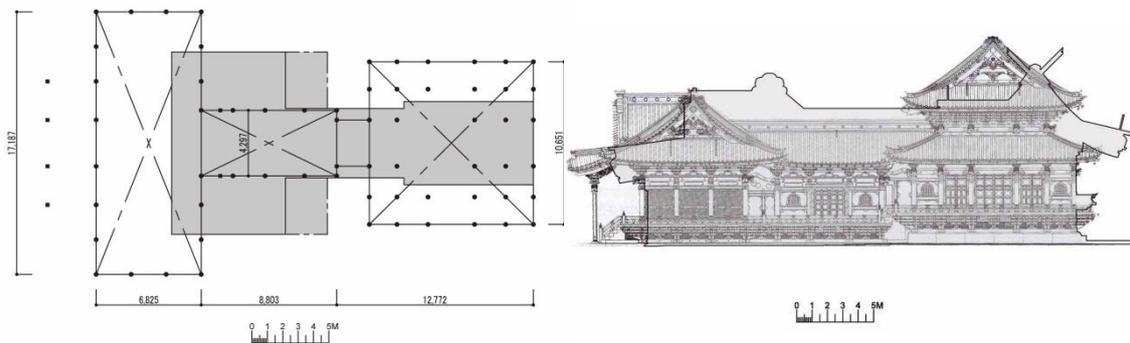
建立年代 承応2年(1653)

引用 国宝輪王寺大猷院霊廟本殿・相之間・拝殿保存修理工事報告書(1966年刊行) 注91



略平面図

側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較

箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

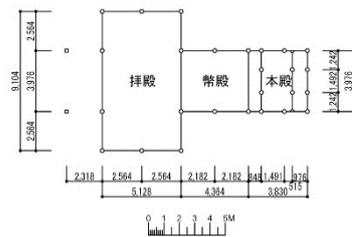
### 比較検証結果

平面規模は輪王寺大猷院の方が床面積・奥行長共に大である。本殿・拝殿の繋ぎの間は「相の間」とし、日光東照宮を始めとする「石の間」とは違って床は下げず、その床面は拝殿と同一高としている。また、本殿は正形に近い平面形状で最奥部に御宮殿が配されるが、この相の間形状が中期以降の権現造社殿に影響を齎したと考えられる。一方、立面規模は本殿・相の間は輪王寺大猷院の方が箭弓稲荷神社より大であるが、拝殿は概ね同一高となる。輪王寺大猷院の本殿棟高寸法に対する相の間・拝殿の棟高比は選抜した権現造社殿では比率が低く、屋根の高低差による視覚効果によって本殿が一層高く聳えて見える。

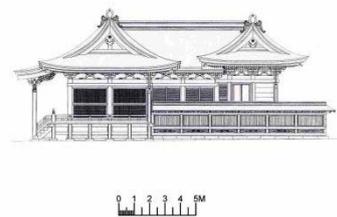
注91 (輪王寺大猷院修理委員会編「国宝輪王寺大猷院霊廟本殿・相之間・拝殿保存修理工事報告書」1966年)

## 1-14. 三芳野神社社殿との比較検証

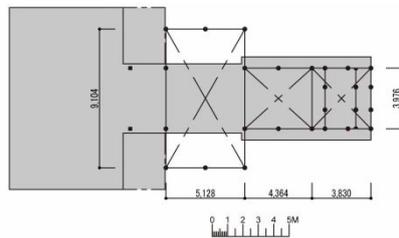
所在地	埼玉県川越市郭町 2-25-11
構造形式	本殿：桁行三間 梁間二間 一重 入母屋造 幣殿：桁行二間 梁間一間 一重 両下造 拝殿：桁行三間 梁間三間 向拝一間 一重 入母屋造
建立年代	明暦2年(1656)
立面引用	埼玉県指定有形文化財三芳野神社社殿保存修理工事報告書(1992年刊行) 注92



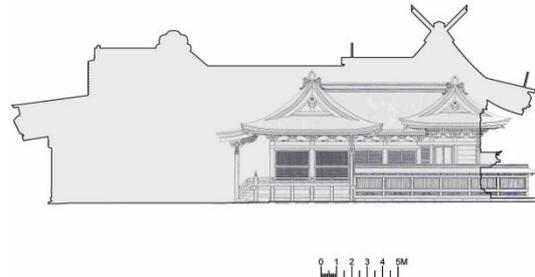
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は箭弓稲荷神社の方が床面積・奥行長共に大であるが、三芳野神社本殿は元々江戸城二の丸紅葉山に所在していた東照宮本殿を移築したものと伝えられ、寛永元年(1623)建立の拝殿とを明暦二年(1656)建立の幣殿で繋ぎ、現在の権現造の形態に整備している。このため、立面規模も箭弓稲荷神社の方が各棟高共に大であるが、三芳野神社は本殿・幣殿・拝殿の棟高を概ね同一高とし、本殿との一体感を成すことを幕府大工頭であった木原義久は設計段階から特に考慮したものと考えられ、外観は軽快な様相で纏められている。

注92 (三芳野神社社殿修理委員会編「埼玉県指定有形文化財三芳野神社社殿保存修理工事報告書」1992年)

## 1-15. 高良大社社殿との比較検証

所在地 福岡県久留米市御井町1番地

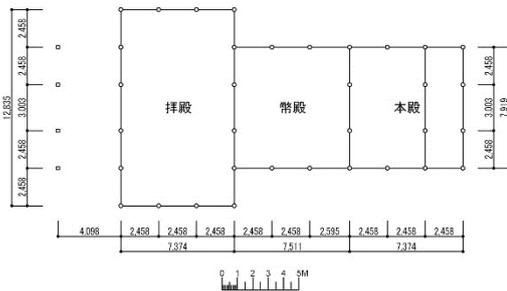
構造形式 本殿：桁行三間 梁間三間 一重 入母屋造

幣殿：桁行三間 梁間一間 一重 両下造

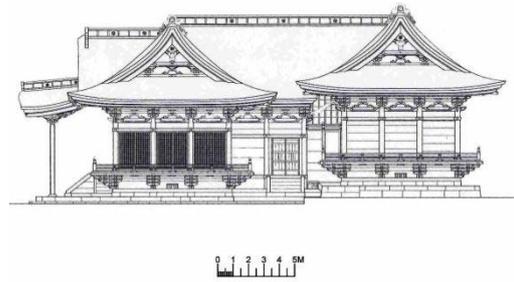
拝殿：桁行五間 梁間三間 向拝三間 一重 入母屋造

建立年代 寛文元年(1661)

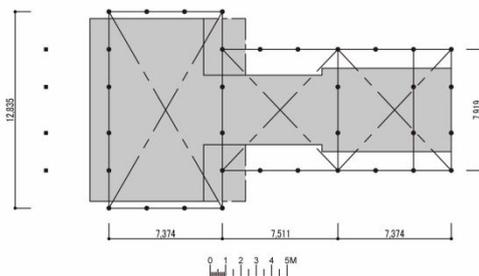
立面引用 重要文化財高良大社本殿・幣殿及び拝殿保存修理工事報告書(1976年刊行) 注93



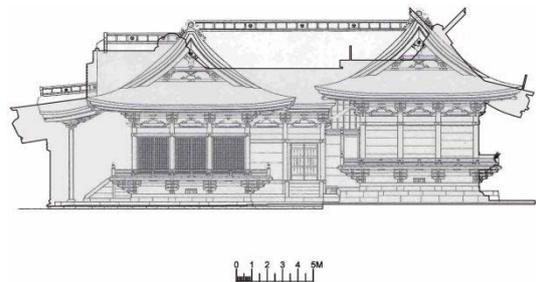
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は高良大社の方が床面積は大であるが、奥行長は箭弓稲荷神社の方が大となる。また、高良大社は本殿と幣殿が同一間口であり、且つ、共に正形の平面形状となっている。一方、立面規模は高良大社の方が本殿・幣殿・拝殿共に大であるが、本殿は拝殿地盤面より一段高くなっている。なお、各社殿共に棟高は粗同一高となるが、江戸時代初期建立の大崎八幡宮を思わせる外観形状であり、八棟造の美しさが誇張されている。

注93 (文化財建造物保存技術協会編「重要文化財高良大社本殿・幣殿及び拝殿保存修理工事報告書」1976年)

## 1-16. 根津神社社殿との比較検証

所在地 東京都文京区根津 1 丁目 28 番 9 号

構造形式 本殿：桁行三間 梁間三間 一重 入母屋造

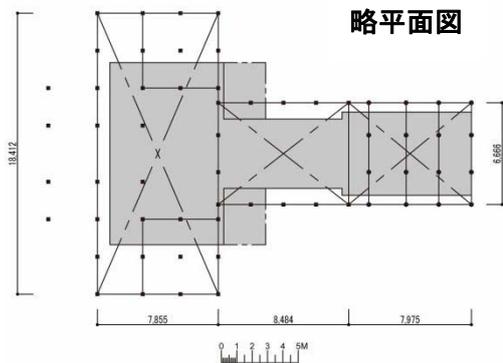
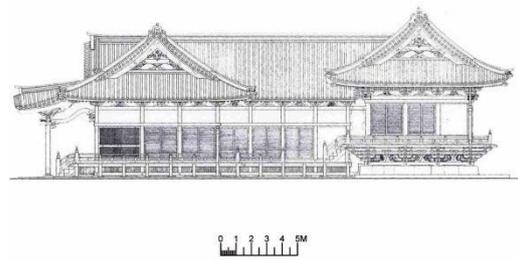
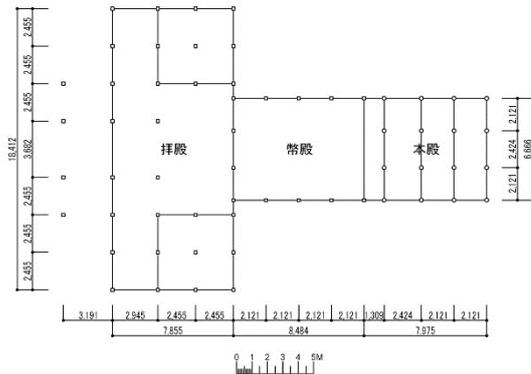
幣殿：桁行四間 梁間一間 一重 両下造

拝殿：桁行正面七間 背面九間 梁間三間 向拝三間 一重 入母屋造

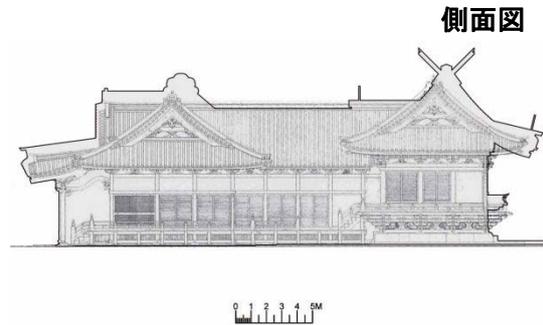
建立年代 宝永 3 年(1706)

立面引用 重要文化財根津神社本殿・幣殿・拝殿（戦災復興）

保存修理工事報告書(1959 年刊行) 注 94



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

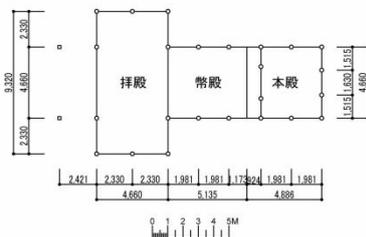
### 比較検証結果

平面規模は根津神社の方が床面積は大であるが、奥行長は概ね同一である。また、根津神社は本殿と幣殿を同一間口とし、拝殿と接続する形をとっている。一方、立面規模は箭弓稲荷神社の方が本殿・拝殿共に若干ではあるが大となる。根津神社は拝殿・幣殿を連続性のある外観意匠として一体感を持たせた設計となっており、本殿棟高をやや高めることで、高く聳えて見える視覚効果を齎している。

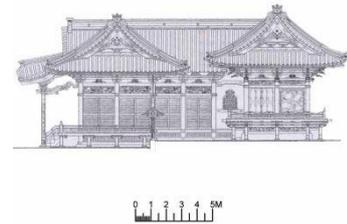
注 94 (根津神社社殿修理委員会編「重要文化財根津神社本殿・幣殿・拝殿<戦災復興>保存修理工事報告書」1959 年)

## 1-17. 妙義神社社殿との比較検証

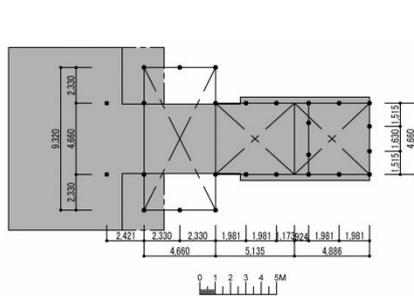
所在地	群馬県富岡市妙義町妙義6番地
構造形式	本殿：桁行三間 梁間二間 一重 入母屋造 幣殿：桁行三間 梁間一間 一重 両下造 拝殿：桁行三間 梁間二間 向拝一間 一重 入母屋造
建立年代	宝暦6年(1756)
立面引用	重要文化財妙義神社本殿・幣殿・拝殿他保存修理工事報告書(1989年刊行) 注95



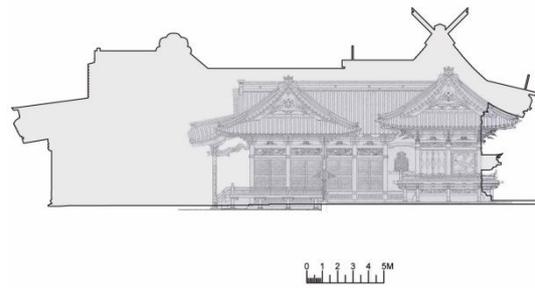
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

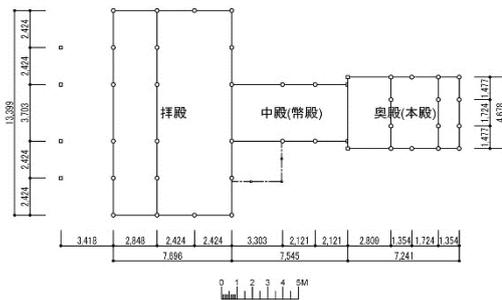
### 比較検証結果

平面規模・立面規模共に箭弓稲荷神社の方が大である。妙義神社は本殿と幣殿を同一間口とし、拝殿と接続する形をとっており、コンパクトな平面形態となっている。一方、妙義神社立面は拝殿・幣殿を連続性のある外観意匠として一体感を持たせた設計となっており、本殿地盤を拝殿より一段高めて棟高を上げることで、高く聳えて見える視覚効果を齎している。なお、妙義神社より腰組・本体・軒廻りなど多様な装飾彫刻が備わり始め、日光東照宮を彷彿させるものがある。地方における装飾建築の嚆矢的な位置付けを持つ社殿でもあり、これを皮切りに幅広い題材の装飾彫刻を有する社殿が後に出現してくる。

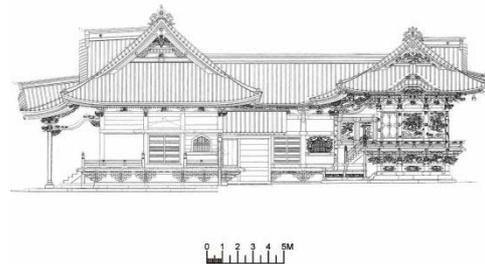
注95 (文化財建造物保存技術協会編「重要文化財妙義神社本殿・幣殿・拝殿他保存修理工事報告書」1989年)

## 1-18. 歎喜院聖天堂との比較検証

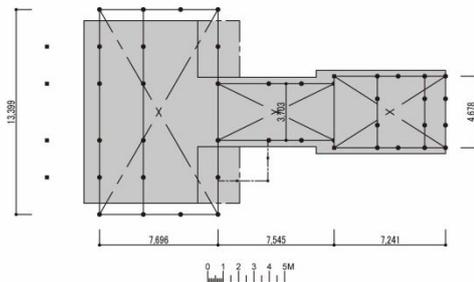
所在地	埼玉県熊谷市妻沼 1627
構造形式	奥殿：桁行三間 梁間三間 一重 入母屋造 中殿：桁行三間 梁間一間 一重 両下造 拝殿：桁行五間 梁間三間 向拝三間 一重 入母屋造
建立年代	宝暦 10 年(1760)
立面引用	重要文化財歎喜院聖天堂保存修理工事報告書(2011 年刊行) 注 96



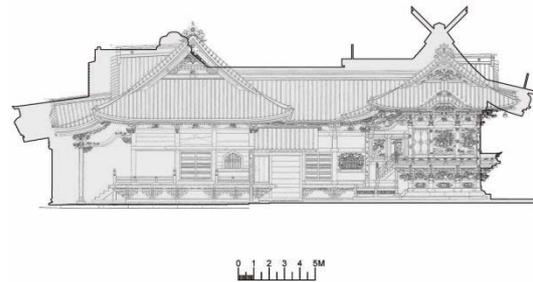
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

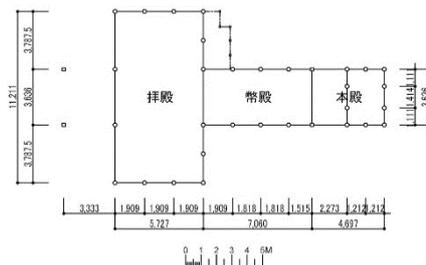
### 比較検証結果

平面規模は床面積・奥行長共に箭弓稲荷神社の方がやや大である。箭弓稲荷神社棟梁であった飯田金軌は、歎喜院聖天堂棟梁を務めた林政清・政信親子に師事した弟子であり、拝殿に下拝・内拝の区分けがされるなど平面が類似しているのは、箭弓稲荷神社の平面計画の祖形が聖天堂であったためと考えられる。一方、立面規模は箭弓稲荷神社の方が本殿は大であるが、拝殿・幣殿は粗同一高となっている。聖天堂奥殿（本殿）は拝殿より棟高を下けているが、他の権現造社殿では殆ど見られない様相であり、江戸期の装飾建築集大成となる煌びやかな奥殿を目の当たりとする、期待感を高めるための演出とも考えられる。金軌舎弟の飯田仙之助も同様に聖天堂彫刻棟梁を務めたと考えられている石原吟八朗に師事したとされ、箭弓稲荷神社の装飾彫刻祖形はこの歎喜院聖天堂にあると思われる。

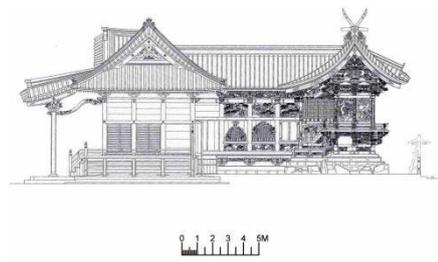
注 96 (文化財建造物保存技術協会編「重要文化財歎喜院聖天堂保存修理工事報告書」2011 年)

## 1-19. 桐生天満宮社殿との比較検証

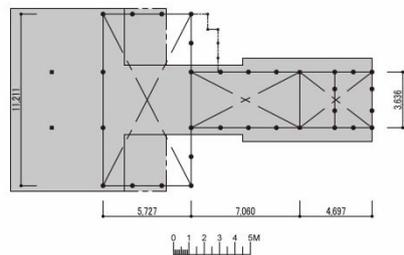
所在地 群馬県桐生市天神町1丁目2番1号  
 構造形式 本殿：桁行三間 梁間二間 一重 流造  
 幣殿：桁行四間 梁間一間 一重 切妻造  
 拝殿：桁行五間 梁間三間 向拝一間 一重 入母屋造  
 建立年代 享和2年(1802) ※本殿・幣殿のみ寛政五年(1793)に先行完成  
 立面引用 群馬県指定重要文化財天満宮社殿保存修理工事報告書(2006年刊行) 注97



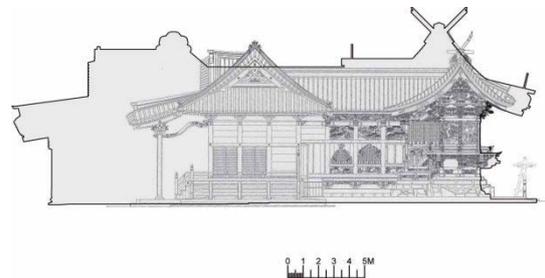
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

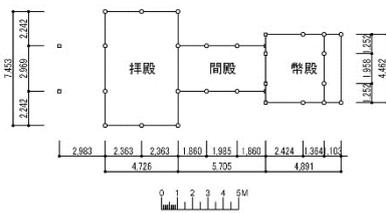
### 比較検証結果

平面規模は床面積・奥行共に箭弓稲荷神社の方が大である。奥行長は概ね同一である。また、桐生天満宮は本殿と幣殿を同一間口とし、拝殿と接続する形をとっている。一方、立面規模も箭弓稲荷神社の方が大であるが、桐生天満宮は本殿・拝殿の棟高は粗同一高として接続する幣殿屋根を下げる形態としている。桐生天満宮本殿の装飾彫刻は煌びやかであり、これを担ったのは歓喜院聖天堂彫刻棟梁とされる石原吟八郎の愛弟子であった関口文治郎であり、飯田仙之助の兄弟子となる。腰組彫刻・胴嵌彫刻・軒廻り彫刻など、歓喜院聖天堂を彷彿させる構成となっている。

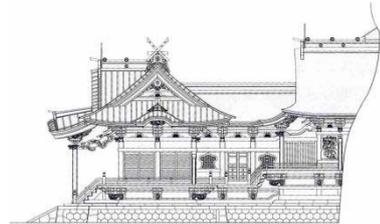
注97 (文化財建造物保存技術協会編「群馬県指定重要文化財天満宮社殿保存修理工事報告書」2006年)

## 1-20. 榛名神社社殿との比較検証

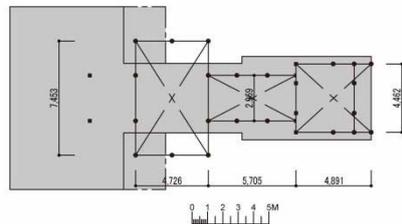
所在地 群馬県高崎市榛名山町 849  
 構造形式 幣殿：桁行三間 梁間三間 一重 隅木入春日造  
 間殿：桁行三間 梁間一間 一重 両下造  
 拝殿：桁行三間 梁間二間 向拝一間 一重 入母屋造  
 建立年代 文化3年(1806)  
 立面引用 群馬県指定重要文化財榛名神社社殿保存修理工事報告書(2004年刊行) 注98



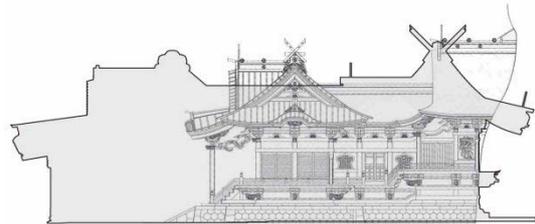
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模は床面積・奥行長共に箭弓稲荷神社の方が大である。しかし、榛名神社は建築的な本殿は存在せず、幣殿背後の岩山洞窟を本殿とする神社本来の自然崇拝形式を採っているため、同一条件による比較は出来ない。奥行長は概ね同一である。このため、立面規模比較も同様であるが、基壇上に建つ榛名神社幣殿と箭弓稲荷神社本殿は粗同一高となり、また、両拝殿も粗同一高となる。榛名神社は桐生天満宮の彫刻棟梁を担った関口文治郎の手による装飾彫刻が備わっているが、桐生天満宮や歓喜院との違いは拝殿・間殿・幣殿と全体的に満遍なく装飾彫刻が鏤められていることである。拝殿にあつては向拝部のみに装飾彫刻を備えることが多く、彫刻師関口の晩年最後の仕事としての拘りが窺える。

注98 (文化財建造物保存技術協会編「群馬県指定重要文化財榛名神社社殿保存修理工事報告書」2004年)

## 1-21. 鶴岡八幡宮社殿との比較検証

所在地 神奈川県鎌倉市雪ノ下2丁目1番31号

構造形式 本殿：九間社流造

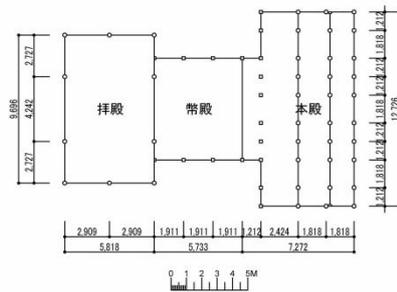
幣殿：桁行四間 梁間一間 一重 両下造

拝殿：桁行三間 梁間二間 一重 入母屋造

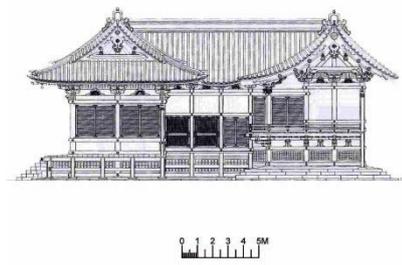
建立年代 文政11年(1628)

立面引用 重要文化財鶴岡八幡宮上宮本殿・幣殿・拝殿

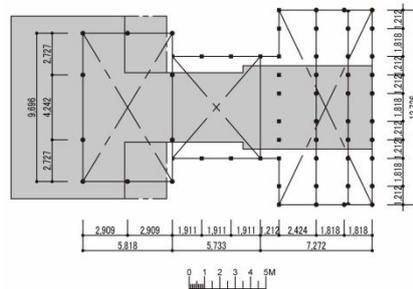
保存修理工事報告書(2009年刊行)注99



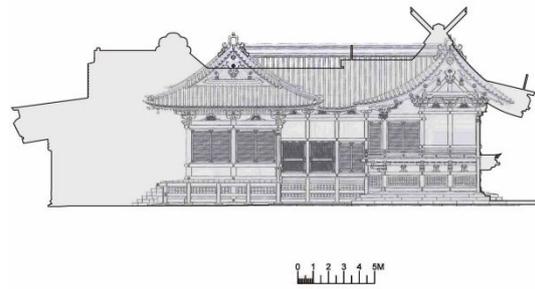
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

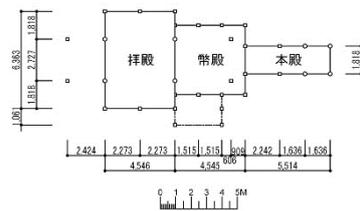
### 比較検証結果

平面規模は床面積・奥行長共に箭弓稲荷神社の方が大である。しかし、鶴岡八幡宮は他の権現造社殿とは平面形態が違い、本殿と拝殿を比較すると本殿の方が床面積は大となる。この本殿空間には、八幡神となる応神天皇・比売神・神功皇后が祀られている。一方、立面規模も箭弓稲荷神社の本殿・拝殿の方がやや高くなるが、幣殿棟高は鶴岡八幡宮の方が高い。鶴岡八幡宮(上宮)の再建は十一代将軍徳川家斉の指示によるものであるが、本殿・幣殿・拝殿の棟高を同一とし、また、装飾彫刻も最低限に控えた外観とすることで、江戸時代初期の権現造社殿様相を目指した建築計画ではなかったかと推測される。

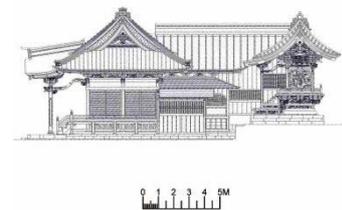
注99 (文化財建造物保存技術協会編「重要文化財鶴岡八幡宮上宮本殿・幣殿・拝殿保存修理工事報告書」2009年)

## 1-22. 東京日吉神社社殿との比較検証

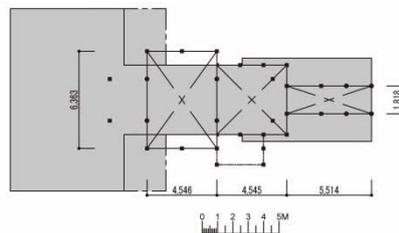
所在地 東京都昭島市拝島町 1-10-19  
 構造形式 本殿：一間社流造  
 幣殿：桁行一間 梁間一間 一重 両下造  
 拝殿：桁行三間 梁間二間 向拝一間 一重 入母屋造  
 建立年代 安政2年(1855)  
 立面引用 東京都指定史跡日吉神社境域日吉神社社殿  
 保存修理工事報告書(2008年刊行) 注100



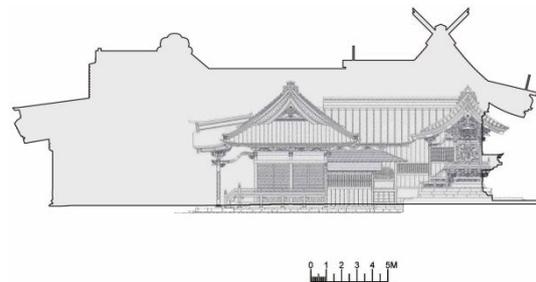
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模・立面規模共に箭弓稲荷神社の方が大である。日吉神社の平面形態は特異であり、拝殿・幣殿・本殿の順で間口が窄む形となっている。このため、奥に向かうほど先細りする感覚を覚える。一方、日吉神社立面は本殿地盤を拝殿より一段高めており、これによって本殿棟高が拝殿棟高に近似する状況となる。更に幣殿大棟は拝殿屋根に接合していないことから、権現造としながらも独立感を齎す外観となっている。日吉神社は江戸時代末期建立の権現造であり、時代情勢などからも外観意匠よりも祭祀に関連する機能を優先させた建築計画ではなかったかと想定される。

注100 (文化財建造物保存技術協会編「東京都指定史跡日吉神社境内日吉神社社殿保存修理工事報告書」2008年)

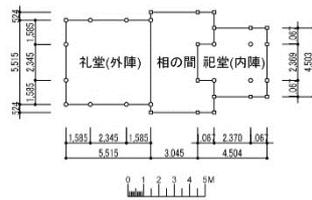
## 1-23. 永保寺開山堂との比較検証

所在地 岐阜県多治見市虎溪山町 1-40

構造形式 祀堂(本殿に相当)：桁行一間 梁間一間 一重 入母屋造  
 礼堂(拝殿に相当)：桁行三間 梁間三間 向拝 間 一重 入母屋造  
 ※(外陣には相の間空間も含まれる)

建立年代 文和元年(1352)

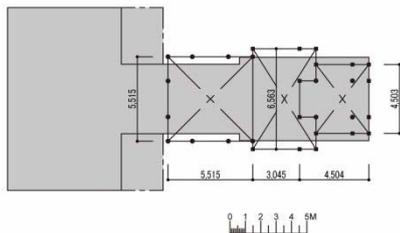
立面引用 国宝永保寺開山堂及び観音堂保存修理工事報告書(2012年刊行) 注101



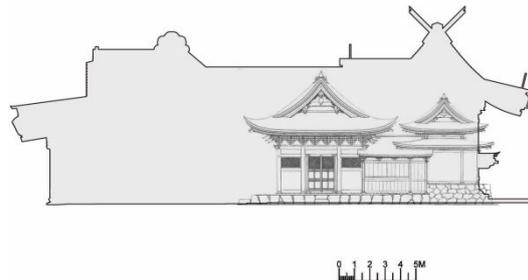
略平面図



側面図



箭弓稲荷神社との  
平面規模比較



箭弓稲荷神社との  
側面規模比較

### 比較検証結果

平面規模・立面規模共に箭弓稲荷神社の方が大である。そもそも永保寺開山堂は開山夢窓国師を祀る御堂として、室町時代初期の文和元年(1352)に建立された堂宇であり、神社建築様式に影響を齎すのはこれ以後のことになる。このため規模形状は江戸時代後期建立の箭弓稲荷神社とは合致する要素はないが、金地院東照宮は永保寺と同一の臨済宗南禅寺派の寺院であることから、平面規模や立面形状が類似している。特に前面の礼堂が奥の祀堂より棟高が大となる様相はよく似ている。なお、相の間間口が礼堂(外陣)や祀堂(内陣)より幅広となるのは永法寺開山堂の祭祀上の特徴と考えられる。

注101 (文化財建造物保存技術協会編「国宝永保寺開山堂及び観音堂保存修理工事報告書」2012年)

## 2. 権現造形式主要社殿の外装彫刻種別と配置

### 2-1. 日光東照宮社殿

#### (1) 本殿外装彫刻

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他					○(写真13)
霊獣	龍			○(写真5)		
	麒麟				○(写真9)	
	獏			○(写真6)		
霊鳥	鳳凰			○(写真7)	○(写真10)	
樹木・花木類	桐				○(写真11)	
	松		○(写真2)			○(写真14)
	梅		○(写真2)			
果物類	葡萄					
草花類	菊	○(写真1)	○(写真3)		○(写真12)	
	牡丹		○(写真4)	○(写真8)		○(写真14)
自然をモチーフとした彫刻	流水	○(写真1)				
	雲				○(写真9)	

表 26 日光東照宮本殿の外装彫刻種別と配置一覧表

本殿					
					
写真1	菊と流水	腰組			

写真 39 日光東照宮本殿の腰組彫刻写真

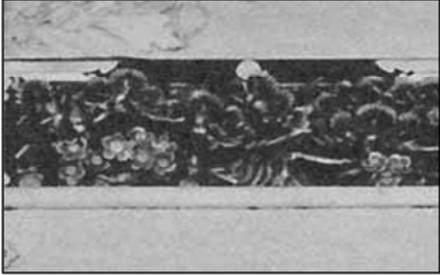
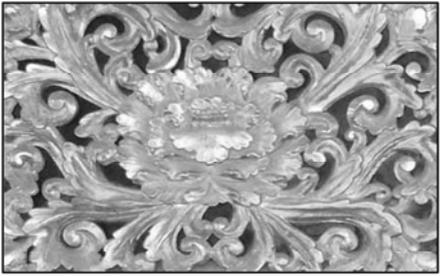
本殿					
					
写真2	梅と松	本体	写真3	菊	本体
					
写真4	牡丹	本体			

写真 40 日光東照宮本殿の本体彫刻写真

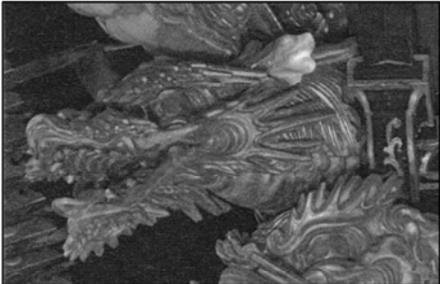
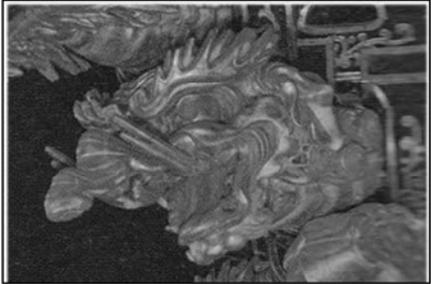
本殿					
					
写真5	龍	軒回り	写真6	猿	軒回り
					
写真7	鳳凰	軒回り	写真8	牡丹	軒回り

写真 41 日光東照宮本殿の軒回り彫刻写真

本殿					
					
写真9	麒麟と雲	軒上	写真10	鳳凰	軒上
					
写真11	桐	軒上	写真12	菊	軒上

写真 42 日光東照宮本殿の軒上彫刻写真

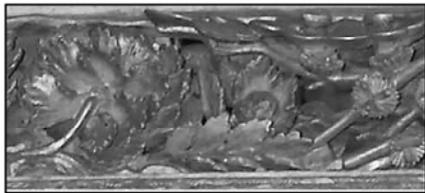
本殿					
					
写真13	天人舞楽	脇障子	写真14	松と牡丹	脇障子

写真 43 日光東照宮本殿の脇障子彫刻写真

(2) 幣殿外装彫刻

彫刻		幣殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	
霊獣	唐獅子		○(写真16)	○(写真21)		
果物類	葡萄		○(写真17)			
草花類	菊	○(写真15)	○(写真18)	○(写真22)		
	唐花		○(写真19)	○(写真23)		
	牡丹		○(写真20)	○(写真24)		
自然をモチーフとした彫刻	流水	○(写真15)				

表 27 日光東照宮幣殿の外装彫刻種別と配置一覧表

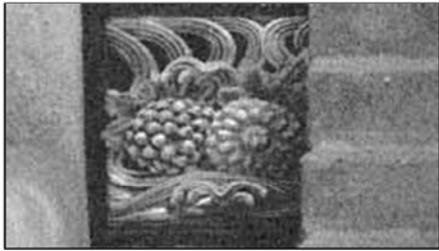
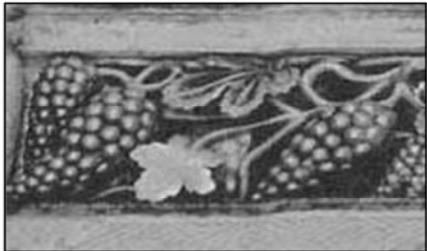
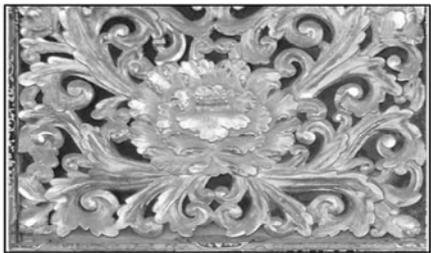
幣殿					
					
写真15	菊と流水	腰組	写真16	唐獅子	本体
					
写真17	葡萄	本体	写真18	菊	本体
					
写真19	唐花	本体	写真20	牡丹	本体

写真 44 日光東照宮幣殿の腰組・本体彫刻写真

幣殿



写真21

唐獅子

軒回り



写真22

菊

軒回り



写真23

唐花

軒回り



写真24

牡丹

軒回り

写真 45 日光東照宮幣殿の軒回り彫刻写真

(3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	向拝
霊獣	龍			○(写真34)		○(写真42)
	息			○(写真35)		○(写真43)
	唐獅子			○(写真36)		○(写真44)
	犀				○(写真39)	○(写真45)
動物	虎					○(写真46)
霊鳥	鳳凰		○(写真26)			
	鶴				○(写真40)	
	山鵲		○(写真27)			
野鳥	雀		○(写真28)			
	瑠璃鳥		○(写真28)			
	木菟		○(写真29)			
樹木・花木類	桐		○(写真30)			
	松		○(写真31)		○(写真40)	
	梅		○(写真29)			
	椿		○(写真27)			
草花類	菊	○(写真25)	○(写真32)	○(写真37)	○(写真41)	
	唐花			○(写真38)		
	牡丹		○(写真33)			○(写真44)
	竹					○(写真46)
自然をモチーフとした彫刻	流水	○(写真25)		○(写真37)	○(写真41)	
	雲					○(写真47)
	波				○(写真39)	○(写真45)

表 28 日光東照宮拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿					
					
写真25	菊と流水	腰組			

写真 46 日光東照宮拝殿の腰組彫刻写真

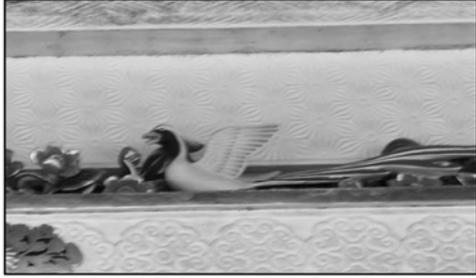
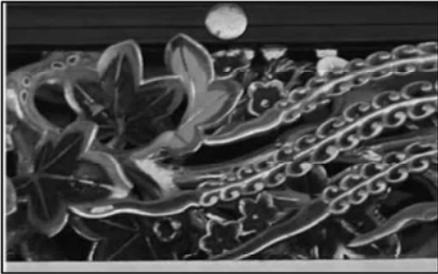
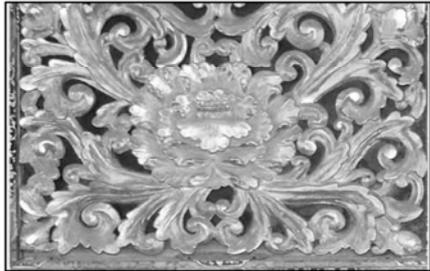
拜殿					
					
写真26	鳳凰	本体	写真27	山鵲と椿	軒回り
					
写真28	雀と瑠璃鳥	軒回り	写真29	木菟と梅	軒回り
					
写真30	桐	本体	写真31	松	本体
					
写真32	菊	本体	写真33	牡丹	本体

写真 47 日光東照宮拜殿の本体彫刻写真

拝殿

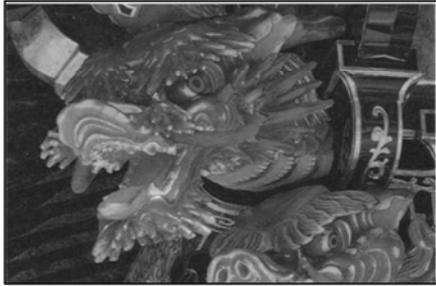


写真34

龍

軒回り

写真35

息

軒回り



写真36

唐獅子

軒回り

写真37

菊と流水

軒回り



写真38

唐花

軒回り

写真 48 日光東照宮拝殿の軒回り彫刻写真

拝殿

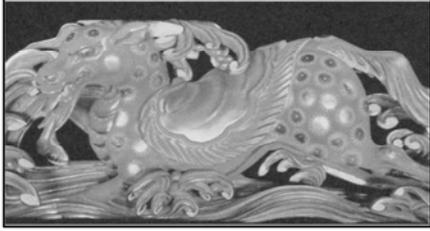


写真39 犀と波 軒上



写真40 鶴と松 軒上

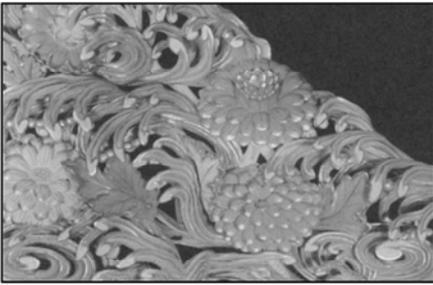


写真41 菊と流水 軒上

写真 49 日光東照宮拝殿の軒上彫刻写真

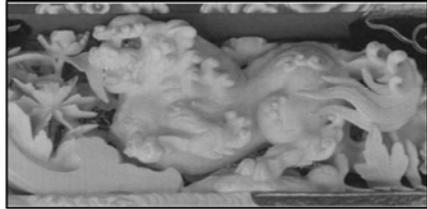
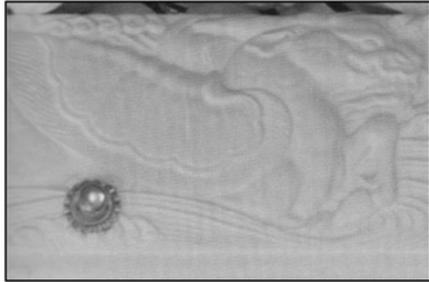
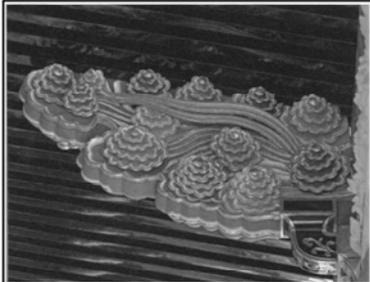
拝殿					
					
写真42	龍	向拝	写真43	息	軒回り
					
写真44	唐獅子と牡丹	向拝	写真45	犀と波	向拝
					
写真46	虎と竹	向拝	写真47	雲	向拝

写真50 日光東照宮拝殿の向拝彫刻写真

近世に完成を果たした装飾建築の最高峰は日光東照宮社殿と言っても過言ではなく、極限に近いまでの装飾が最高位の複数手法によって社殿の豪華絢爛を装っている。また、これより以前の権現造社殿では見られなかった、柱・長押・頭貫などの部材表面に装飾する地紋彫りが採用されたことは画期的であり、古代の彩色文様を祖とした連続性のあるデザインの展開において、その表現方法は木鼻のような一点集中ではなく、材全体で立体感をしなやかに表現するものである。この手法はその後の装飾建築では必須要件ともなり、地紋彫りを施す範囲に許容差があったとしても、丸彫りや籠彫りの装飾彫刻と共に見る者に衝撃と感銘を齎す要素の一つとなった。なお、種別分類と配置にて明らかとなったことは、本殿・石の間・拝殿共に腰組や本体には多種別の彫刻は基本的には配さず、単一か数種に限った彫刻を用いていた傾向が確認される。このため、例えば本殿柱間の外壁面には大嵌彫刻はまだ出現せず、狩野探幽による唐獅子を描いた絵画で華やかさを演出し、それを補うが如く建築本体の煌びやかさを黒漆・漆箔・胡粉塗・極彩色・鍍金仕上げの銚金具とコントラストの強い色調で装い、社殿装飾をバランス良く構成している。このようなことから鑑みても、実際の装飾意匠総括を担ったのは狩野派の奥絵師たちと考えられ、造営の現場総括責任者であった大棟梁高良豊後守宗弘の右腕となり、江戸狩野派を確立した狩野探幽・尚信・安信たちが中心となって調和の取れた美装の外観を創り上げていったものと考えられる。<sup>注 102</sup> なお、これによって江戸初期ではまだ、彫物大工たちは絵師の下にあり、自らが図案を作成するのではなく、絵師たちが描く下絵を基にして木彫り作業を行っていたものと思われる。

腰組・本体に採用された彫刻題材の多くは、果物類・草花類・自然をモチーフとした彫刻が主であったが、軒廻りや軒上となると霊獣・霊鳥・野鳥が取って代わるように増えてくる。これを建物別で見れば、本殿には龍・漢・麒麟が備わり、拝殿には龍・唐獅子・犀・鶴・雀・瑠璃鳥・木菟が備わっている。このうち、龍は殆どの装飾建築においては欠かせない想像上の霊獣であり、深淵や海中に潜んで神秘的な力を有し、その力で雲を起こして雨を呼び、空中を飛翔するという。古代中国においては王権のシンボルであったが、我国では水神として雨乞いの対象に位置付けられると共に、邪悪を追い払う魔除けとしても考えられている。一方、寛永度の日光東照宮社殿は三代将軍徳川家光の命によって建替えられたものであるが、家光はそもそも辰年の生まれでもあった。<sup>注 103</sup> これに肖って権力者の象徴として狩野派絵師たちは龍を多用したものとも考えられ、徳川政権の江戸時代にあつてはその後の装飾建築において龍の採用が定型化して行った要因と推測することができる。

その他、本殿脇障子に関しては唯一人物彫刻となる天人舞楽が備わり、また、拝殿向拝においては霊獣である龍・息・唐獅子・犀と動物の虎が備わっている。虎は初代徳川家康が寅年生まれであったことに因み、神格化した東照大権現に泰平国家の継続を祈願することで採用されたものと推測されるが、社殿のほかには神輿舎・本寺堂・御仮殿・表門と複数に虎の彫刻が備わっている。

日光東照宮社殿の外装彫刻種別は 63 種と、中期・後期の社殿に比べれば決して種別は多くはないが、装飾彫刻を多用する嚙矢と見れば近世装飾建築の原点とも言える。<sup>注 104</sup>

---

注 102 (坂井犀水「日本木彫史」1929年・P488)

注 103 (高藤晴俊「東照宮再発見」1990年・P94)

注 104 (須田慎太郎「日光東照宮」2015年)

## 2-2. 輪王寺大猷院

### (1) 本殿外装彫刻

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
霊獣	龍		○(写真1)	○(写真9)		
	唐獅子		○(写真2)	○(写真10)		
	犀				○(写真無)	
霊鳥	鳳凰		○(写真3)			
	鶴			○(写真11)		
	山鵲		○(写真4)			
樹木・花木類	桐		○(写真5)			
	松		○(写真6)			
	椿		○(写真6)			
草花類	菊		○(写真7)			
	唐花		○(写真8)			
	牡丹		○(写真4)		○(写真無)	
自然をモチーフとした彫刻	流水		○(写真7)			
	波				○(写真無)	

表 29 輪王寺大猷院本殿の外装彫刻種別と配置一覧表

本殿



写真1 龍 本体

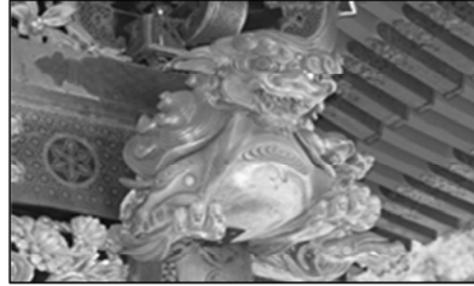


写真2 唐獅子 本体

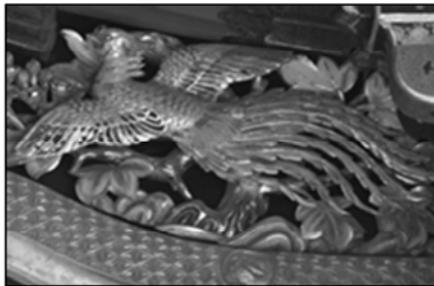


写真3 鳳凰 本体

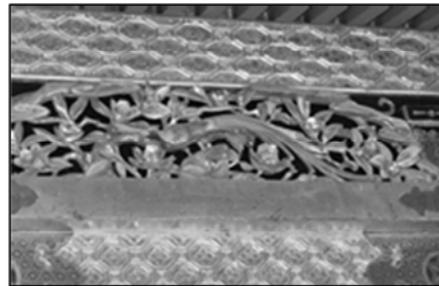


写真4 山鶴と牡丹 本体

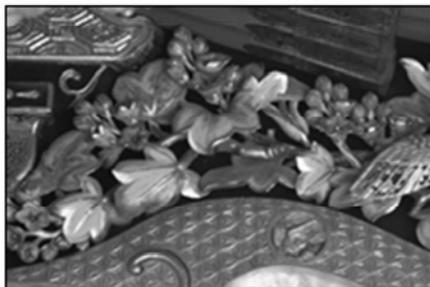


写真5 桐 本体



写真6 松と桐 本体



写真7 菊と流水 本体



写真8 唐花 本体

写真 51 輪王寺大猷院本殿の本体彫刻写真

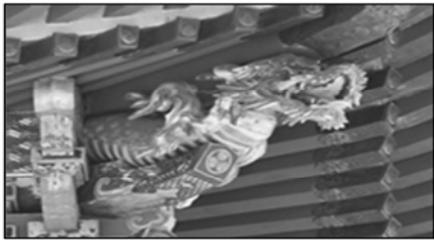
本殿					
					
写真9	龍	軒回り	写真10	唐獅子	軒回り
					
写真11	鶴	軒回り			

写真 52 輪王寺大猷院本殿の軒回り彫刻写真

(2) 相の間外装彫刻

彫刻		相の間				
		腰組	本体	軒回り	軒上	
霊獣	龍		○(写真12)			
	唐獅子		○(写真13)			
霊鳥	鳳凰		○(写真14)	○(写真17)		
	山鵲			○(写真18)		
	鷹			○(写真19)		
野鳥	鶯		○(写真15)			
	懸巢			○(写真20)		
樹木・花木類	桐		○(写真14)			
	松			○(写真19)		
	梅		○(写真15)			
草花類	唐花		○(写真16)			
	牡丹			○(写真17)		
自然をモチーフとした彫刻	波		○(写真13)			

表 30 輪王寺大猷院相の間の外装彫刻種別と配置一覧表

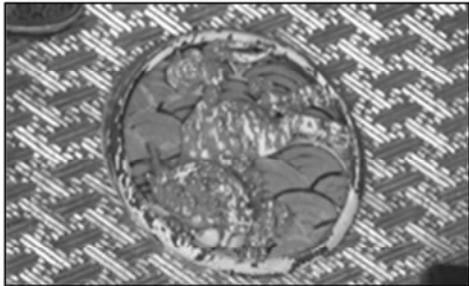
相の間					
					
写真12	龍	本体	写真13	唐獅子と波	本体
					
写真14	鳳凰と桐	本体	写真15	鶯と梅	本体
					
写真16	唐花	本体			

写真 53 輪王寺大猷院相の間の本体彫刻写真

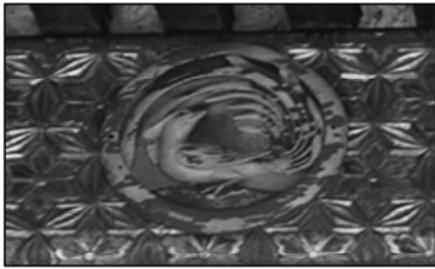
相の間					
					
写真17	鳳凰と牡丹	軒回り	写真18	山鶺鴒	軒回り
					
写真19	鷹と松	軒回り	写真20	懸巢	軒回り

写真 54 輪王寺大猷院相の間の本体彫刻写真

(3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	向拝
霊獣	龍		○(写真21)	○(写真25)		
	唐獅子		○(写真22)		○(写真無)	○(写真30)
霊鳥	鳳凰		○(写真23)			○(写真31)
	山鶺鴒			○(写真26)		
	鷹			○(写真27)		○(写真32)
野鳥	懸巢			○(写真28)		
樹木・花木類	桐		○(写真23)			○(写真31)
	松			○(写真27)		○(写真32)
	梅					○(写真33)
草花類	菊					○(写真34)
	唐花		○(写真24)			
	牡丹			○(写真29)	○(写真無)	

表 31 輪王寺大猷院拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿



写真21

龍

本体



写真22

唐獅子

本体



写真23

鳳凰と桐

本体



写真24

唐花

本体

写真 55 輪王寺大猷院拝殿の本体彫刻写真

拝殿

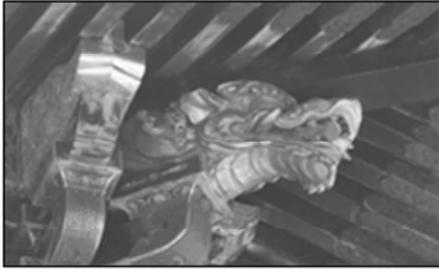


写真25 | 龍 | 軒回り

写真26 | 山鶴 | 軒回り



写真27 | 鷹と松 | 軒回り

写真28 | 懸巢 | 軒回り



写真29 | 牡丹 | 軒回り

写真 56 輪王寺大猷院拝殿の軒回り彫刻写真

拝殿



写真30 唐獅子 向拝



写真31 鳳凰と桐 向拝



写真32 鷹と松 向拝



写真33 梅 向拝

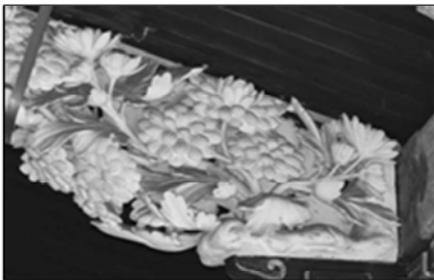


写真34 菊 向拝

写真 57 輪王寺大猷院拝殿の向拝彫刻写真

輪王寺大猷院は三代将軍徳川家光の霊廟であり、この造営総督には大老酒井忠勝が抜擢され、幕府大工頭の木原義久と大棟梁の平内大隅応勝がこれに従って現場を統括した。大猷院は二代将軍徳川秀忠を祀る芝増上寺に所在した台徳院霊廟に倣った仏堂形式の権現造となるが、本殿・相の間・拝殿それぞれの独立性が高く、神社形式の権現造とは一線を画したものとなる。例えば本殿と拝殿を繋ぐ下げ床の石の間形式とはせず、床を下げずに拝殿と同一床高とする相の間とし、廊下のように間口が狭く奥行が長い形態を採っており、御廊下とも称されている。<sup>注 105</sup> この相の間の細長い形状は、江戸時代後期以後の権現造社殿の幣殿形状へと展開するものとなるが、仏堂形式と神社形式の要素は時代が下るに連れて曖昧化していく傾向にあることが明らかである。

大猷院は家光の遺命により、家康公（東照宮社殿）を凌いではならないとことで、外部の装飾彫刻種別は東照宮より若干少なく、また、彫刻数量も少ない。しかし、東照宮社殿の外装と同様に黒漆・漆箔・極彩色・鍔金具が備わり、また、上層・裳階の化粧垂木並びに高欄・花頭窓を赤漆とすることで更に強いコントラストを生み、彫刻数量が東照宮ほど無くとも充分なる威厳を醸し出している。なお、輪王寺大猷院においても東照宮と同様、装飾意匠総括を担ったのは狩野派の奥絵師たちと考えられ、彫刻大工たちが自ら図案を作成するのではなく、絵師たちが描く下絵を基にして木彫り作業が成されたと考えられる。

個別に外部の装飾彫刻を見れば、本殿・相の間・拝殿共に腰組には彫刻は備えず、本体と軒廻りに彫刻が配されている。本殿本体の彫刻題材は霊獣・霊鳥・樹木及び花類・草花類・自然をモチーフとした彫刻と分類が偏ることなく、バランスが採られている。このうち、東照宮本殿には存在した霊獣の麒麟が大猷院には無い。相の間・拝殿本体の彫刻題材も粗本殿と同じく、霊獣・霊鳥・樹木並びに花類・草花類・自然をモチーフとした彫刻が分類を偏ることなく配され、これに相の間では野鳥が加わり、片や拝殿では自然をモチーフとした彫刻が無くなる。このことから、各建物共に目線が届き易い本体部に装飾彫刻が多く備わっていることが判る。次に軒廻りとなるが、本殿では霊獣と霊鳥が備わるものの、その他の分類は確認できない。相の間・拝殿では霊鳥・野鳥・樹木及び花木類・草花類と本殿より種別が増えていることが判る。更に拝殿向拝も野鳥を除けば軒廻りと同じ分類となり、種別を若干違えるのみである。

本殿は仏堂形式の要素を備えた建物であるため、上層軒廻りには詰組斗栱が配されることで相の間や拝殿と比較すれば外装彫刻種別が少ないものと考えられる。大猷院は正面を北東に向けて配置されており、その延長線上には東照宮社殿が凡そ位置している。死後も家康を守護するという家光の強い意志がこのような配置計画を齎したとも考えられるが、家光の魂が包含されるとも思われる龍が本殿上層と拝殿の四方化粧隅木下部の他、各出入口の棧唐戸装飾にも備わっている。外装にある多くの龍が邪悪を追い払い、徳川政権に災いが降り掛からないように睨みを効かしているような鋭さをそれから感じる。

---

注 105 (村上訃一「日本の美術 12・霊廟建築」1990年・P37)

## 2-3. 妙義神社社殿

### (1) 本殿外装彫刻

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
霊獣	龍			○(写真6)		
	唐獅子		○(写真2)			
	犀	○(写真1)				
霊鳥	鳳凰		○(写真3)			
野鳥	小禽			○(写真7)		
水鳥	翡翠			○(写真8)		
	鷓鴣			○(写真9)		
	鴨			○(写真10)		
樹木・花木類	桐		○(写真3)			
草花類	菖蒲			○(写真9)		
穀物・野菜類	粟			○(写真7)		
水草類	水葵			○(写真10)		
	石菖			○(写真8)		
自然をモチーフとした彫刻	波	○(写真1)	○(写真4)	○(写真11)		
	雲			○(写真11)		
その他	扇子		○(写真4)			
	軍配団扇		○(写真5)			

表 32 妙義神社本殿の外装彫刻種別と配置一覧表

本殿					
					
写真1	犀と波	腰組			

写真 58 妙義神社本殿の腰組彫刻写真

本殿

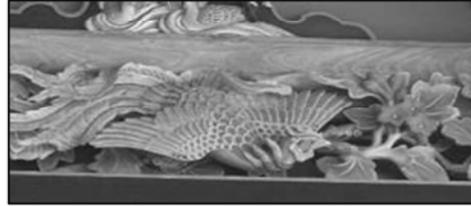


写真2 唐獅子 本体

写真3 鳳凰と桐 本体

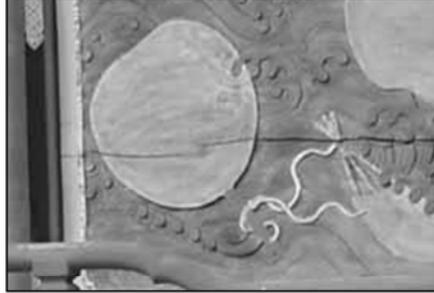
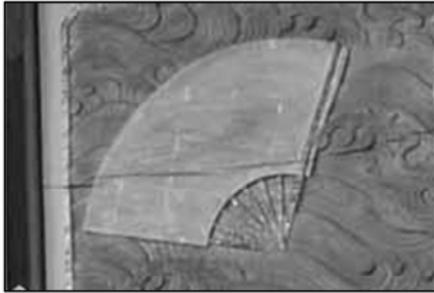


写真4 扇子と波 本体

写真5 軍配団扇 本体

写真 59 妙義神社本殿の本体彫刻写真

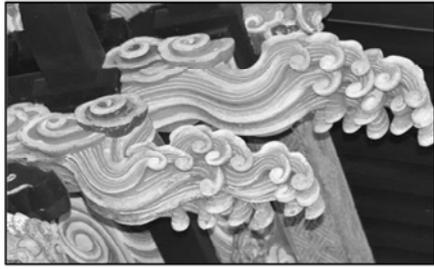
本殿					
					
写真6	龍	軒回り	写真7	小禽と栗	軒回り
					
写真8	翡翠と石菖	軒回り	写真9	鶺鴒と菖蒲	軒回り
					
写真10	鴨と水葵	軒回り	写真11	波と雲	軒回り

写真 60 妙義神社本殿の軒回り彫刻写真

(2) 幣殿外装彫刻

彫刻		幣殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	備考
霊獣	唐獅子		○(写真12)			
動物	兔			○(写真13)		
草花類	菊			○(写真13)		
	牡丹		○(写真12)	○(写真14)		
自然をモチーフとした彫刻	波		○(写真12)	○(写真15)		

表 33 妙義神社幣殿の外装彫刻種別と配置一覧表

幣殿				
				
写真12	唐獅子と牡丹、波	本体		

写真 61 妙義神社幣殿の本体彫刻写真

幣殿				
				
写真13	兎と菊	軒回り	写真14	牡丹 軒回り
				
写真15	波	軒回り		

写真 62 妙義神社幣殿の軒廻り彫刻写真

## (3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿				
		腰組	本体	軒回り	向拝	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他					○(写真31)
霊獣	龍				○(写真23)	
	唐獅子		○(写真16)		○(写真24)	
	獏				○(写真25)	
霊鳥	鶴				○(写真26)	
	山鵲			○(写真18)	○(写真27)	
野鳥	百舌			○(写真19)		
	雉			○(写真20)		
樹木・花木類	紅葉			○(写真19)		
	松				○(写真26)	
	梅			○(写真21)	○(写真28)	
	桜				○(写真27)	
	椿			○(写真18)		
草花類	菊			○(写真22)	○(写真29)	
	牡丹		○(写真17)	○(写真20)		
	竹					○(写真32)
自然をモチーフとした彫刻	波		○(写真16)	○(写真22)		
	雲				○(写真30)	○(写真32)

表 34 妙義神社拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿					
					
写真16	唐獅子と波	本体	写真17	牡丹	本体

写真 63 妙義神社拝殿の本体彫刻写真

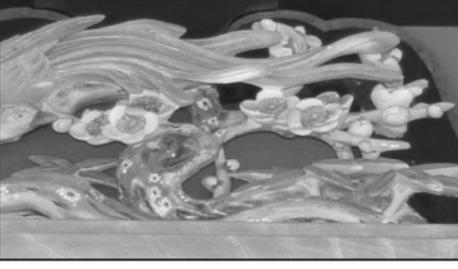
拝殿					
					
写真18	山鶴と椿	軒回り	写真19	百舌と紅葉	軒回り
					
写真20	雉と牡丹	軒回り	写真21	梅	軒回り
					
写真22	菊と波	軒回り			

写真 64 妙義神社拝殿の軒回り彫刻写真

拝殿



写真23 龍 向拝



写真24 唐獅子 向拝

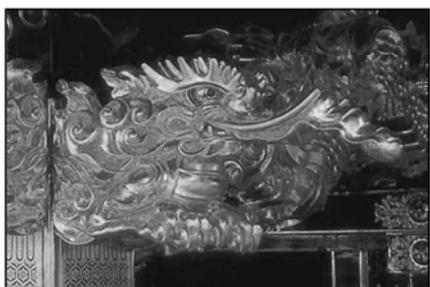


写真25 猿 向拝



写真26 鶴と松 向拝



写真27 山鶴・桜 向拝



写真28 梅 向拝



写真29 菊 向拝



写真30 雲 向拝

写真 65 妙義神社拝殿の向拝彫刻写真

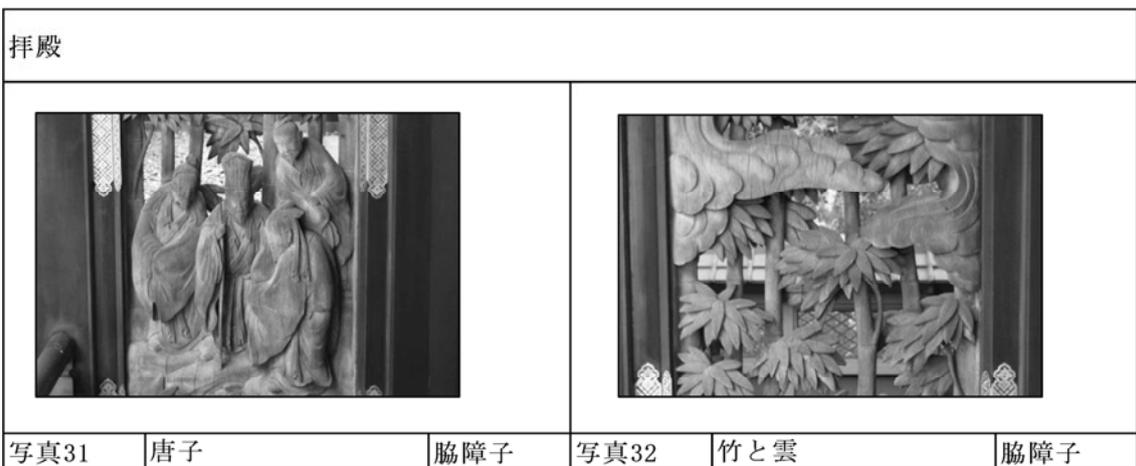


写真 66 妙義神社拝殿の脇障子彫刻写真

妙義神社社殿は宝暦 6 年（1756）に建立された装飾建築で、大工棟梁は飯村木工允久敬が担い、また、彫刻棟梁は安藤利助政成が担当し、これに腕利きの江戸彫刻大工十名が参画していたとされる。折しもその頃は江戸文化が隆盛した時代でもあり、百花繚乱で優秀な人物を多く輩出した時でもあった。妙義神社は古くより波己曾神と呼ばれていたが、この神社を所管していた別当の石塔寺は上野東叡山寛永寺の末寺であったため、恐らく本寺の寛永寺が優れた工匠を推挙したのではないかと推測されている。

装飾手法は定番となる彫刻・金具・漆塗装・彩色塗装・染色の五手法によるが、彫刻はこれ以前のように全てが狩野派などの絵師監修の基に制作された訳ではなく、洗練した技量を持つ彫刻大工自らも構図の下絵を作成し、それを形にしている。<sup>注 106</sup>つまり、それは彫刻大工の職能が確立しつつあったことを意味しており、この妙義神社社殿彫刻を基点に豊富な題材の建築彫刻がこれ以降の装飾建築にお目見えすることになった。なお、彫刻棟梁安藤利助の配下にいた小沢五右衛門常信は後の歓喜院聖天堂造営にも携わっていることが、奥殿側面の海老虹梁上鳳凰彫刻の裏面から発見された小沢名墨書より明らかとなった。

妙義神社社殿の彫刻題材を見ると、本殿腰組には犀が配されており、頭に角・背中に甲羅・脚には蹄を持つ我国独自の霊獣で、実際の犀も水辺に棲むことから火防としての意味合いを持つ題材となる。腰組にはこの後、そのような火防に関するモチーフの彫刻が増えていく傾向が見られるが、特に妙義神社本殿においては水に関係する題材が多い。これは火防の意味合いだけではなく、波己曾神が農耕桑蚕の神でもあったことから境内の湧き水を御神水として信者たちが大切に守ってきた。それに因んで水に関する題材が多いようであるが、本体部壁面の大嵌彫刻も水に因み、当時流行していた琳派の特色を有した「扇面流し」となっている。また、軒回りの波を形採った尾垂木彫刻も独創的であり、日光東照宮や輪王寺大猷院には見られない自由度を持った意匠である。本殿・幣殿・拝殿の彫刻で共通することは、自然界にある野鳥・水鳥・樹木及び花木類・草花・水草類などの彫刻が霊獣や霊鳥などの空想上のものを圧倒している。また、この時代頃から採用されつつあった宗教思想を背景とした題材も拝殿脇障子の「竹林の七賢人」しかなく、まずは民衆に受入易かった直截的なモチーフへの拘りが飯村と安藤にあったものと考えられる。

注 106 （窪寺茂「江戸の装飾建築・近世における建築の解放」1994 年・P43）

## 2-4. 歎喜院聖天堂

### (1) 奥殿外装彫刻

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他	○(写真1)	○(写真17)		○(写真67)	
霊獣	龍	○(写真2)	○(写真18)	○(写真48)		
	飛龍			○(写真49)		
	蜃			○(写真50)		
	唐獅子	○(写真3)	○(写真19)			
	白沢		○(写真20)			
	麒麟		○(写真21)			
	獏			○(写真51)		
	犀	○(写真4)	○(写真22)			
動物	虎		○(写真23)			
	兔		○(写真24)			
	猿	○(写真5)	○(写真25)			
	象			○(写真52)		
	亀		○(写真26)			
	猫	○(写真6)				
	栗鼠	○(写真7)				
	鹿		○(写真27)			
霊鳥	鳳凰		○(写真28)	○(写真53)	○(写真68)	
	鶴		○(写真29)			
	山鵲		○(写真30)	○(写真54)		
	錦鶏		○(写真31)			
	鷲		○(写真25)			
野鳥	燕		○(写真32)	○(写真55)		
	瑠璃鳥			○(写真56)		
	鶺鴒			○(写真57)		
	鶉	○(写真8)				
	鶉			○(写真58)		
	雉					○(写真72)
	鶇			○(写真59)		
	きびたき			○(写真60)		

表 35 歎喜院聖天堂奥殿の外装彫刻種別と配置一覧表 (1/2)

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
水鳥	翡翠			○(写真61)		
	雁		○(写真33)			
	鷺			○(写真62)		
	鶺鴒			○(写真63)		
	鴛鴦	○(写真9)				
昆虫・魚類	蝶	○(写真10)				
	鯉		○(写真17)			
樹木・花木類	柏					○(写真73)
	桐		○(写真34)	○(写真64)		
	蘇鉄	○(写真1)				
	紅葉		○(写真27)			
	梅	○(写真11)	○(写真29)	○(写真54)		
	桜	○(写真1)				
	躑躅	○(写真12)				
	椿	○(写真13)	○(写真31)	○(写真65)		○(写真72)
果物類	蜜柑		○(写真35)			
	桃	○(写真14)				
	葡萄	○(写真7)				
草花類	菊		○(写真36)	○(写真60)	○(写真69)	○(写真74)
	唐花		○(写真37)		○(写真70)	
	芙蓉	○(写真15)		○(写真58)		
	紫陽花			○(写真57)		
	鉄線		○(写真38)	○(写真56)		
	牡丹	○(写真8)	○(写真39)	○(写真66)	○(写真71)	
	竹	○(写真8)	○(写真29)			
	蔦	○(写真16)				
	菖蒲	○(写真12)	○(写真40)	○(写真63)		
	薔薇		○(写真41)			
	朝顔		○(写真42)			
水草類	沢瀉			○(写真62)		
	水葵	○(写真9)	○(写真43)	○(写真59)		
	水仙		○(写真44)	○(写真61)		
	河骨			○(写真59)		
自然をモチーフとした彫刻	雲			○(写真53)		
	流水	○(写真9)	○(写真26)	○(写真59)		○(写真74)
	波	○(写真4)	○(写真24)	○(写真48)		
	滝		○(写真45)			
その他	弁天双六		○(写真46)			
	宝相華		○(写真47)			

表 35 歎喜院聖天堂奥殿の外装彫刻種別と配置一覧表 (2/2)

奥殿



写真1 唐子と蘇鉄、桜 腰組



写真2 龍 腰組



写真3 唐獅子 腰組

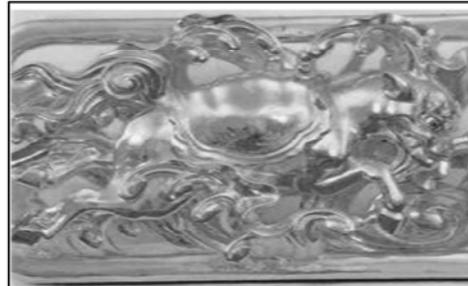


写真4 犀と波 腰組

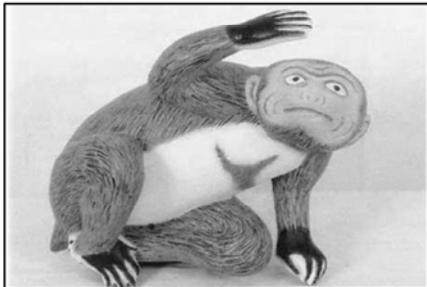


写真5 猿 腰組



写真6 猫 腰組



写真7 栗鼠と葡萄 腰組



写真8 鶏・牡丹・竹 腰組

写真 67 歎喜院聖天堂奥殿の腰組彫刻写真(1/2)

奥殿



写真9 鴛鴦と水葵、流水 腰組



写真10 蝶 腰組



写真11 梅 腰組



写真12 躑躅、菖蒲 腰組



写真13 椿 腰組



写真14 桃と流水 腰組



写真15 芙蓉 腰組



写真16 葛 腰組

写真 67 歎喜院聖天堂奥殿の腰組彫刻写真(2/2)

奥殿



写真17 唐子と鯛 本体

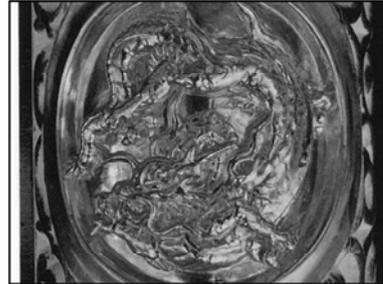


写真18 龍 本体



写真19 唐獅子 本体



写真20 白沢 本体



写真21 麒麟 本体



写真22 犀 本体



写真23 虎 本体



写真24 兎と波 本体

写真 68 歎喜院聖天堂奥殿の本体彫刻写真(1/4)

奥殿



写真25 猿と鶴、海棠 本体



写真26 亀と水 本体



写真27 鹿と紅葉 本体



写真28 鳳凰 本体



写真29 鶴と梅、竹 本体



写真30 山鵲 本体



写真31 錦鶏と椿 本体



写真32 燕 本体

写真 68 歎喜院聖天堂奥殿の本体彫刻写真(2/4)

奥殿



写真33 雁 本体



写真34 桐 本体

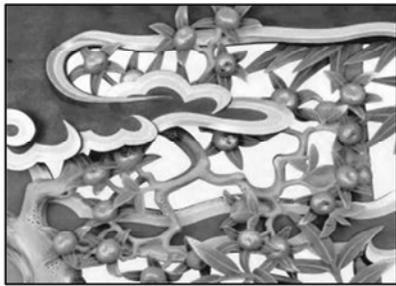


写真35 蜜柑 本体



写真36 菊 本体

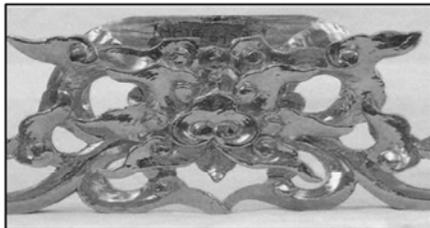


写真37 唐花 本体



写真38 鉄線 本体



写真39 牡丹 本体



写真40 菖蒲 本体

写真 68 歙喜院聖天堂奥殿の本体彫刻写真 (3/4)

奥殿



写真41 薔薇 本体



写真42 朝顔 本体



写真43 水葵 本体



写真44 水仙 本体

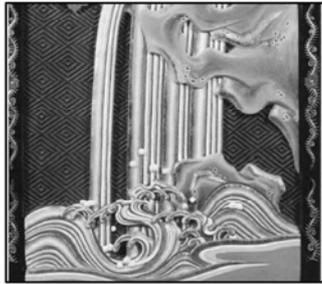


写真45 滝 本体

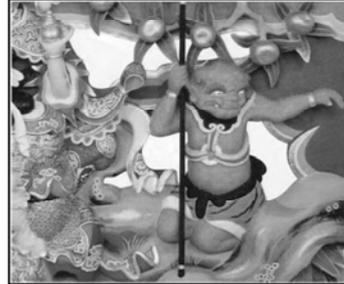


写真46 弁天双六 本体



写真47 宝相華 本体

写真 68 歎喜院聖天堂奥殿の本体彫刻写真 (4/4)

奥殿



写真48 | 龍 | 軒回り

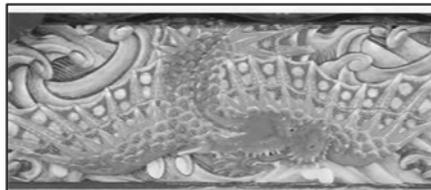


写真49 | 飛龍と波 | 軒回り



写真50 | 蜃 | 軒回り



写真51 | 猿 | 軒回り



写真52 | 象 | 軒回り



写真53 | 鳳凰と雲 | 軒回り



写真54 | 山鵲と梅 | 軒回り



写真55 | 燕 | 軒回り

写真 69 歎喜院聖天堂奥殿の軒回り彫刻写真(1/3)

奥殿

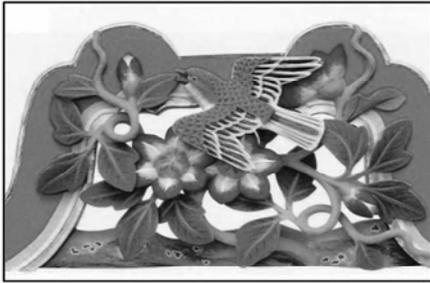


写真56 瑠璃鳥と鉄線 軒回り



写真57 鶴と紫陽花 軒回り

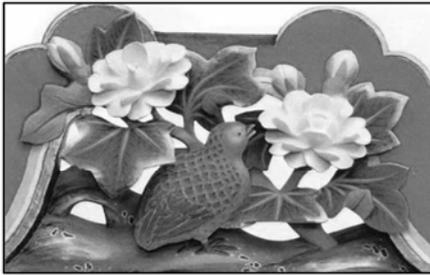


写真58 鶉と芙蓉 軒回り

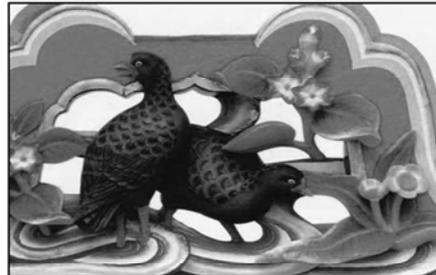


写真59 鶴と水葵、河骨、流水 軒回り

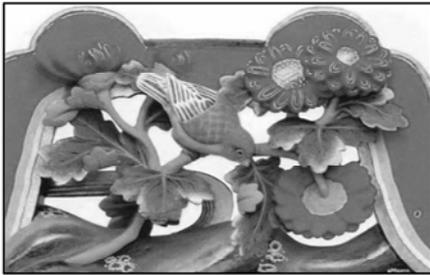


写真60 きびたきと菊 軒回り



写真61 翡翠と水仙 軒回り



写真62 鶯と沢瀉 軒回り

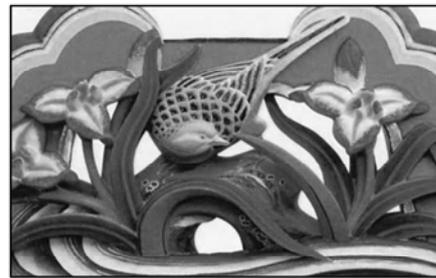


写真63 鶺鴒と菖蒲 軒回り

写真 69 歎喜院聖天堂奥殿の軒回り彫刻写真(2/3)

奥殿



写真64

桐

軒回り



写真65

椿

軒回り



写真66

牡丹

軒回り

写真 69 歎喜院聖天堂奥殿の軒回り彫刻写真(3/3)

奥殿



写真67 | 三聖吸酸図 | 軒上



写真68 | 鳳凰 | 軒上



写真69 | 菊 | 軒上

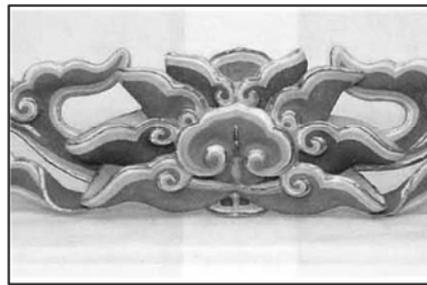


写真70 | 唐花 | 軒上



写真71 | 牡丹 | 軒上

写真 70 歎喜院聖天堂奥殿の軒廻り・軒上彫刻写真

奥殿					
					
写真72	雉と椿	脇障子	写真73	柏	脇障子
					
写真74	菊と流水	脇障子			

写真 71 歎喜院聖天堂奥殿の脇障子彫刻写真

(2) 中殿外装彫刻

彫刻		幣殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	備考
霊獣	龍		○(写真75)			
霊鳥	鳳凰			○(写真76)		
野鳥	尾長雉			○(写真77)		
	鶺鴒			○(写真78)		
樹木・花木類	海棠			○(写真77)		
草花類	菊			○(写真79)		
	蓮			○(写真78)		
自然をモチーフとした彫刻	雲			○(写真80)		
	流水			○(写真79)		
その他	風神			○(写真80)		
	雷神			○(写真81)		

表 36 歎喜院聖天堂中殿の外装彫刻種別と配置一覧表

中殿



写真75

龍

本体

写真 72 歙喜院聖天堂中殿の本体彫刻写真

中殿



写真76

鳳凰

軒回り



写真77

尾長雉と海棠

軒回り



写真78

鶴と蓮

軒回り



写真79

菊と流水

軒回り



写真80

風神と雲

軒回り



写真81

雷神

軒回り

写真 73 歙喜院聖天堂中殿の軒回り彫刻写真

## (3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	向拝
人物彫刻	仙人・唐子他					○(写真100)
霊獣	龍					○(写真101)
	飛龍					○(写真102)
	蜃			○(写真82)		
	唐獅子			○(写真83)		○(写真103)
	獏					○(写真104)
	犀					○(写真105)
	龍龜					○(写真106)
	鯨					○(写真107)
動物	虎					○(写真108)
	猿					○(写真109)
霊鳥	鳳凰					○(写真110)
	山鵲			○(写真84)		○(写真111)
	孔雀			○(写真85)		
野鳥	瑠璃鳥			○(写真86)		
	頬白			○(写真87)		
	目白			○(写真88)		
	鳩			○(写真89)		
	鶉			○(写真90)		
	木菟			○(写真91)		
	小禽			○(写真92)		
	鶺鴒			○(写真93)		
水鳥	翡翠			○(写真94)		
	鴨			○(写真95)		
	雁			○(写真96)		
	鷺			○(写真97)		
	鶺鴒			○(写真98)		
昆虫・魚類	蝶					○(写真112)
	鯉					○(写真113)
樹木・花木類	柏			○(写真91)		
	梅			○(写真87)		○(写真114)
	山茶花			○(写真85)		
	椿			○(写真99)		
果物類	柿			○(写真88)		
	枇杷					○(写真109)
草花類	菊			○(写真92)		○(写真115)
	芙蓉			○(写真90)		
	紫陽花			○(写真84)		
	桔梗			○(写真89)		
	牡丹			○(写真86)		○(写真116)
	菖蒲			○(写真94)		
	緋扇			○(写真93)		
水草類	沢瀉			○(写真96)		
	水葵			○(写真97)		
	水仙			○(写真98)		○(写真117)
	河骨			○(写真95)		
自然をモチーフとした彫刻	流水			○(写真94)		
	波					○(写真102)
その他	鬼					○(写真118)

表 37 歎喜院聖天堂拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿



写真82 | 蜃 | 軒回り



写真83 | 唐獅子 | 軒回り



写真84 | 山鶴と紫陽花 | 軒回り



写真85 | 孔雀と山茶花 | 軒回り



写真86 | 瑠璃鳥と牡丹 | 軒回り

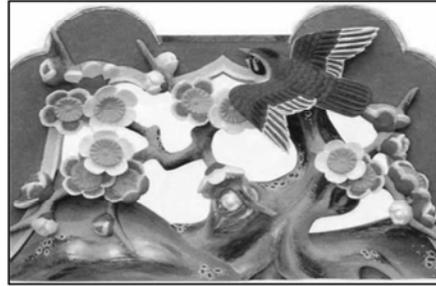


写真87 | 頬白と梅 | 軒回り

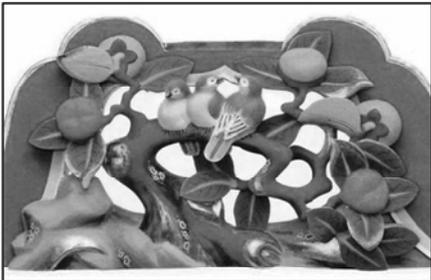


写真88 | 目白と柿 | 軒回り



写真89 | 鳩と桔梗 | 軒回り

写真 74 歎喜院聖天堂拝殿の軒回り彫刻写真(1/3)

拝殿



写真90 鶉と芙蓉 軒回り



写真91 木菟と柏 軒回り



写真92 小禽と菊 軒回り



写真93 鶉と緋扇 軒回り

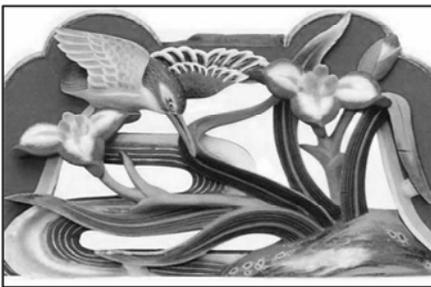


写真94 翡翠と菖蒲、流水 軒回り



写真95 鴨と河骨 軒回り



写真96 雁と沢瀉 軒回り

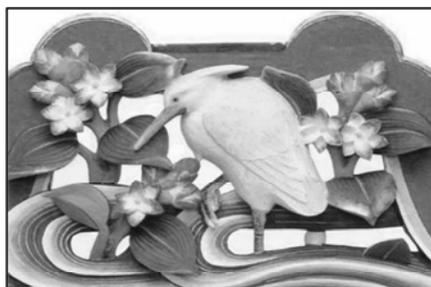


写真97 鶯と水葵 軒回り

写真 74 歎喜院聖天堂拝殿の軒回り彫刻写真 (2/3)

拝殿



写真98

鶴鴿と水仙

軒回り

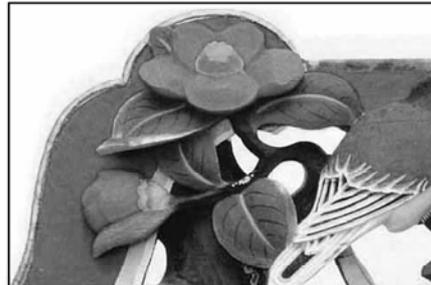


写真99

椿

軒回り

写真 74 歎喜院聖天堂拝殿の軒回り彫刻写真 (3/3)

拝殿

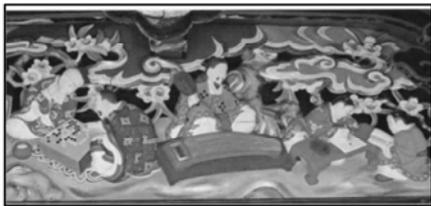


写真100

琴棋書画

向拝

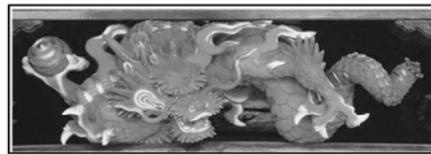


写真101

龍

向拝



写真102

飛龍と波

向拝



写真103

唐獅子

向拝

写真 75 歎喜院聖天堂拝殿の向拝彫刻写真 (1/3)

拝殿

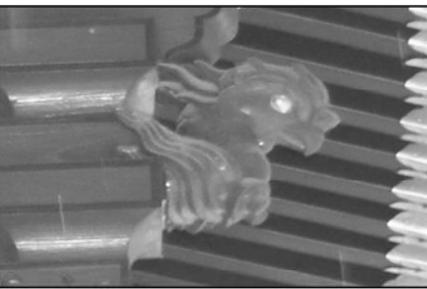
	
<p>写真104   猿   向拝</p>	<p>写真105   犀   向拝</p>
	
<p>写真106   龍亀   向拝</p>	<p>写真107   鯪   向拝</p>
	
<p>写真108   虎   向拝</p>	<p>写真109   猿と枇杷   向拝</p>
	
<p>写真110   鳳凰   向拝</p>	<p>写真111   山鶴   向拝</p>

写真 75 歎喜院聖天堂拝殿の向拝彫刻写真 (2/3)

拝殿



写真112 蝶 向拝



写真113 鯉 向拝



写真114 梅 向拝



写真115 菊 向拝



写真116 牡丹 向拝



写真117 水仙 向拝



写真118 邪鬼獅嘴 向拝

写真 75 歎喜院聖天堂拝殿の向拝彫刻写真 (3/3)

恐らく外装彫刻の種別の多さにおいては、権現造の装飾建築のなかでは歓喜院聖天堂に勝るものは無く、奥殿・中殿・拝殿の外装彫刻種別数は優に百を超える。この社殿の建立は宝暦10年(1760)で江戸文化が降盛した最高潮期であり、大工棟梁であった林兵庫正清は実父で輪王寺大猷院の大棟梁を務めた平内大隅応勝を凌ぐ社殿を造ることを目途に、全身全霊を掛けて行った仕事が聖天堂の再建であったものと考えられる。

聖天堂の再建事業は全てが氏子崇敬者を始めとする庶民の浄財によるもので、幕府や忍藩からの助成金は一切無く、完全な民間事業であった。このため、林正清自らも資金集めのための勧進を行っており、企画立案から建立までと事業の総責任者でもあったことが判る。林正清はいわゆる官僚大工であった実父平内応勝の人脈も通じてか、彫刻大工は徳川御用彫物師であった高松又八邦教の門弟たちに委ねるが、彫刻棟梁は高弟であった石原吟八朗義武が担った。また、又八の孫弟子となる小沢五右衛門常信と後藤茂右衛門正綱も同じく兄弟子の石原吟八朗を支援するため、これに携わっていたことが発見墨書から判明した。このうち、小沢常信は後に諏訪立川流の祖となる和四郎富棟を孫弟子として生み出し、その系譜が信州や東海地方で活躍した。一方、後藤正綱はその後に幕府御用勤めとなる後藤家の元祖となり、その系譜は千葉・茨城・栃木と関東一円で活躍をしている。<sup>注107</sup>この他、彩色と絵画に関しては幕府奥絵師の狩野中橋家十一代当主であった狩野英信を始めとする狩野派門弟絵師たちが腕を振るったとされる。

聖天堂の彫刻種別は多種多彩であるが、この時代は建築工事の請負制度が一般的になった時期でもあり、各専門工事分野において高い技術力が要求されたため、彫刻大工の職能も大方確立した時期とも言える。このため、社殿を装う彫刻類の構図や意匠は絵師たちが主導権を握って采配したのではなく、大工棟梁・絵師・彫刻大工が三位一体のチーム編成をして、渾身の彫刻を創出して行ったものと考えられる。また、彫刻技法も華やかであり、奥殿の大嵌彫刻などにも見られる「透彫り」を始め、奥殿虹梁や破風板などで題材を浮び上らせて見せる「浮彫り」、腰組の持送り彫刻や懸鼻などを立体的に実物に似せて見せる「丸彫り」、拝殿手挟みなどで部材を籠状に彫り抜いて内部までも立体的に見せる「籠彫り」、部材表面の地紋彫文様の主体余白を彫り下げて文様を浮き立たせて見せる「沈め彫り」、奥殿高欄架木の唐草文様などの輪郭を線で彫る「線條彫り」、そして浮彫り材厚をより厚くして立体感を強調して見せる「高肉彫り」となるが、聖天堂外装はこの高肉彫りに透彫りを混用した「高肉透彫り」の装飾彫刻が多い。彫刻師たちは構図を基に、いかに個々の彫刻にリアル感を持たせ、魂を吹き込むかに試行錯誤したかが読み取れる。

彫刻題材を見ると、奥殿には霊獣・霊鳥・動物・野鳥・水鳥・昆虫及び魚類・樹木及び花木類・果物類・草花類・水草類・自然をモチーフとするものなど、多くの分類に分けられ、また、それぞれの種別も豊富である。彫刻数量は減るがこれは中殿・拝殿でも同様である。直前の妙義神社社殿では直截的なモチーフを主としたが、宗教思想などの題材が一気に増え、例えば拝殿向拝に見られる立身出世の「鯉の滝登り」や「琴棋書画」、奥殿軒回りに見られる「三聖吸酸の図」や「司馬温公の瓶割図」など中国故事に纏わるものが多い。

聖天堂の彫刻は彫りも力強く、伸びも表現されているが、最終的には初期同様に塗装下地であったことから細かな細部の写実的表現はされていない。彫刻そのものに更なる細密な線彫りなどを施してこれを完成させるのは、その後に出現する素木造の装飾建築となる。

---

注107 (熊谷市教育委員会「熊谷市史・妻沼聖天山の建築」2016年・P72)

## 2-5. 桐生天満宮

### (1) 本殿外装彫刻

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他	○(写真1)	○(写真16)			
霊獣	龍		○(写真17)			
	飛龍			○(写真31)		
	龍馬	○(写真2)				
	蜃			○(写真32)		
	唐獅子	○(写真3)	○(写真18)	○(写真33)	○(写真47)	
	麒麟		○(写真無)			
	獏		○(写真無)	○(写真34)		
動物	犀	○(写真4)				
	虎		○(写真16)			
	象		○(写真19)	○(写真35)		
霊鳥	栗鼠	○(写真5)				
	鳳凰			○(写真36)		
	山鵲		○(写真20)	○(写真37)		
	錦鶏			○(写真38)		
	銀鶏			○(写真39)		
	吐綬鶏			○(写真40)		
野鳥	鷹		○(写真21)			○(写真51)
	鷄			○(写真41)		
	鳩	○(写真6)	○(写真22)			
	鶉			○(写真42)		
水鳥	木菟				○(写真無)	
	鴨	○(写真7)		○(写真43)		
	鷺			○(写真44)		
	鶺鴒			○(写真45)		
昆虫・魚類	鴛鴦	○(写真8)				
樹木・花木類	鯉	○(写真9)				
	柏		○(写真23)			
	桐			○(写真46)		
	紅葉		○(写真24)			
	松	○(写真10)	○(写真21)	○(写真40)	○(写真49)	○(写真51)
	梅	○(写真6)	○(写真16)	○(写真43)		
	桜	○(写真11)	○(写真22)			
果物類	躑躅			○(写真39)		
	椿			○(写真40)	○(写真無)	
草花類	桃	○(写真12)				
	葡萄	○(写真1)				
	菊	○(写真13)	○(写真25)	○(写真42)	○(写真50)	
	芙蓉		○(写真26)			
	蒲公英	○(写真14)				
	鉄線		○(写真27)	○(写真41)	○(写真無)	
穀物・野菜類	牡丹		○(写真28)	○(写真38)	○(写真47)	
	竹		○(写真29)			
	薔薇		○(写真30)			
	粟			○(写真42)		
水草類	沢瀉	○(写真15)				
	水仙			○(写真45)		
	河骨	○(写真7)		○(写真44)		
自然をモチーフとした彫刻	雲		○(写真22)	○(写真36)	○(写真47)	○(写真52)
	波	○(写真4)	○(写真17)	○(写真31)	○(写真50)	○(写真53)

表 38 桐生天満宮本殿の外装彫刻種別と配置一覧表

本殿



写真1 唐子と葡萄 腰組



写真2 龍馬 腰組



写真3 唐獅子 腰組



写真4 犀と波 腰組

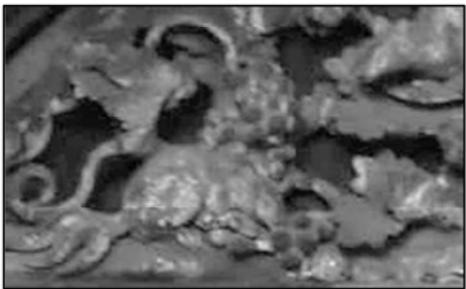


写真5 栗鼠 腰組



写真6 鳩と梅 腰組



写真7 鴨と河骨 腰組



写真8 鶴 腰組

写真 76 桐生天満宮本殿の腰組彫刻写真

本殿

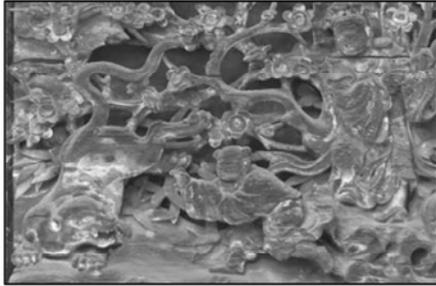


写真16 唐子と虎、梅 本体



写真17 龍と波 本体



写真18 唐獅子 本体



写真18 象 本体



写真20 山鶴 軒回り

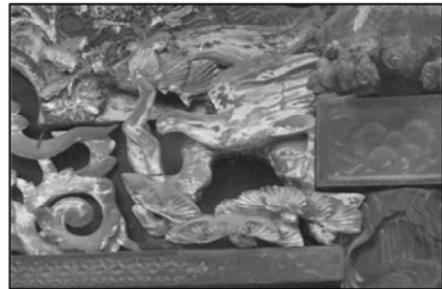


写真21 鷹と松 本体

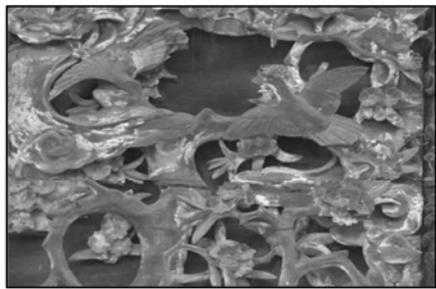


写真22 鳩と桜、雲 本体

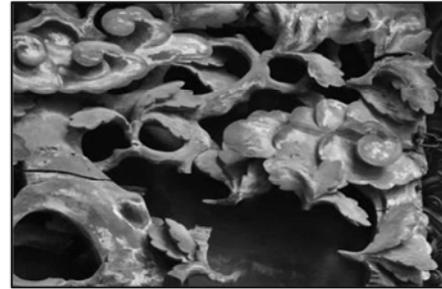


写真23 柏 本体

写真 77 桐生天満宮本殿の本体彫刻写真(1/2)

本殿



写真24 紅葉 本体

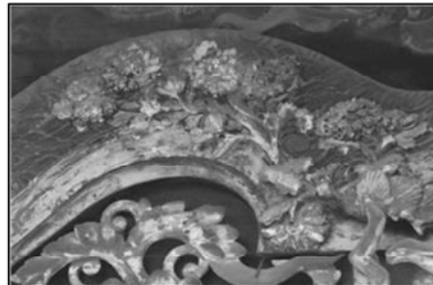


写真25 菊 本体

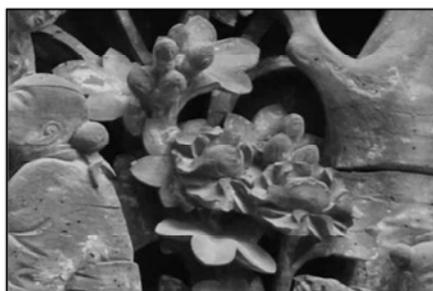


写真26 芙蓉 本体



写真27 鉄線 本体



写真28 牡丹 本体



写真29 竹 本体

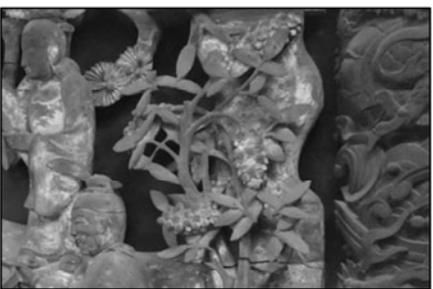


写真30 薔薇 本体

写真 77 桐生天満宮本殿の本体彫刻写真(2/2)

本殿



写真31 飛龍と波 軒回り

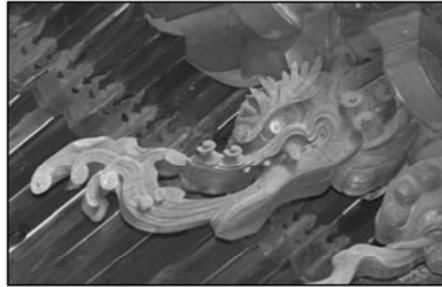


写真32 蜃 軒回り



写真33 唐獅子 軒回り



写真34 猿 軒回り

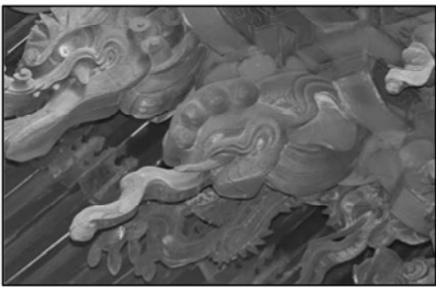


写真35 象 軒回り

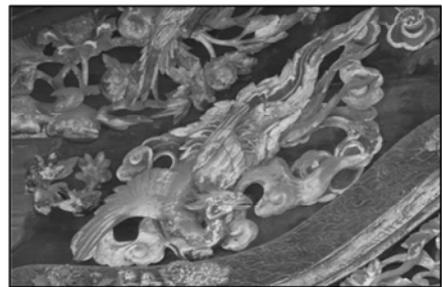


写真36 鳳凰と雲 軒回り



写真37 山鶴 軒上



写真38 錦鶏と牡丹 軒回り

写真 78 桐生天満宮本殿の軒回り彫刻写真(1/2)

本殿

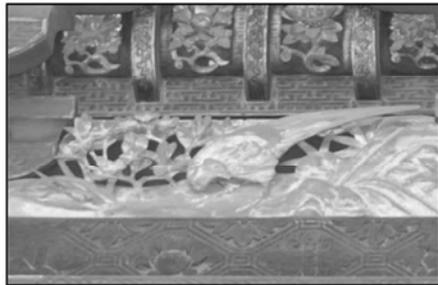


写真39 銀鷄と躑躅 軒回り

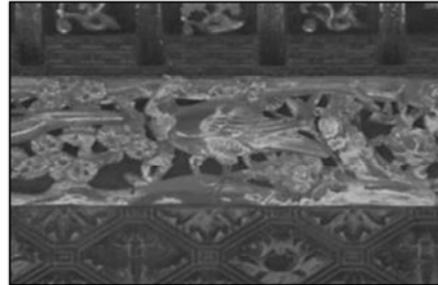


写真40 吐綬鷄と松、椿 軒回り

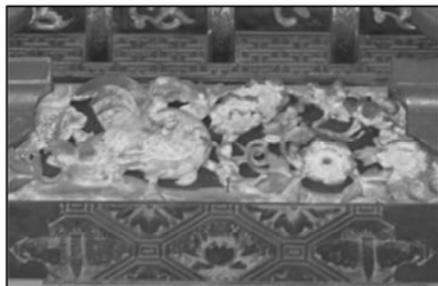


写真41 鷄と鉄線 軒回り



写真42 鷄と菊、栗 軒回り



写真43 鴨と梅 軒回り



写真44 鷺と河骨 軒回り



写真45 鶴と水仙 軒回り



写真46 桐 軒回り

写真 78 桐生天満宮本殿の軒回り彫刻写真 (2/2)

本殿

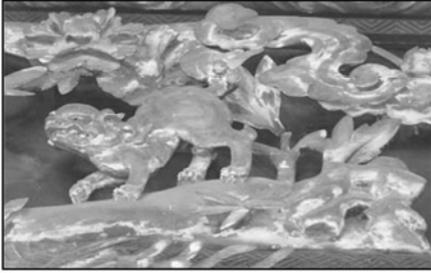


写真47 唐獅子と牡丹、雲 軒上

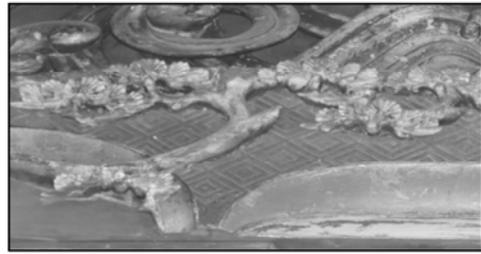


写真49 松 軒上



写真50 菊と波 軒上

写真 79 桐生天満宮本殿の軒上彫刻写真

本殿

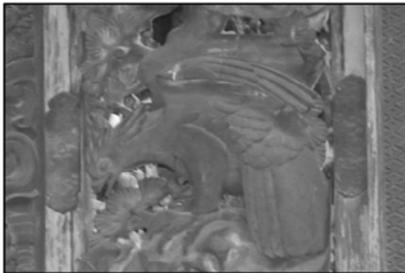


写真51 鷹と松 脇障子

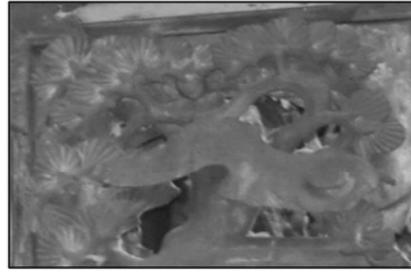


写真52 雲 脇障子

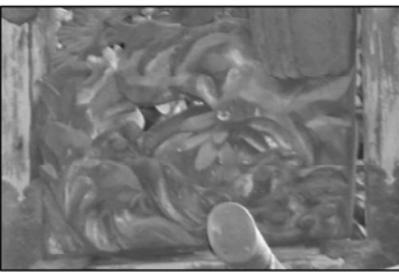


写真53 波 脇障子

写真 80 桐生天満宮本殿の脇障子彫刻写真

## (2) 幣殿外装彫刻

彫刻		幣殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	備考
人物彫刻	仙人・唐子他	○(写真無)				
霊獣	龍		○(写真54)			
	飛龍	○(写真無)				
	唐獅子		○(写真55)			
動物	猫	○(写真無)				
	牛		○(写真56)			
霊鳥	鳳凰			○(写真65)		
	鷹		○(写真57)			
昆虫・魚類	蝶	○(写真無)				
樹木・花木類	松		○(写真57)			
果物類	柿			○(写真66)		
草花類	菊			○(写真67)		
	紫陽花		○(写真58)			
	蒲公英		○(写真59)			
	桔梗		○(写真60)			
	鉄線	○(写真無)				
	牡丹	○(写真無)	○(写真61)			
	笹		○(写真56)			
	甘草		○(写真56)			
	姫射干		○(写真62)			
	撫子		○(写真63)			
水草類	沢瀉		○(写真64)			
自然をモチーフとした彫刻	雲		○(写真58)	○(写真65)		
	波	○(写真無)	○(写真60)	○(写真67)		

表 39 桐生天満宮幣殿の外装彫刻種別と配置一覧表

幣殿

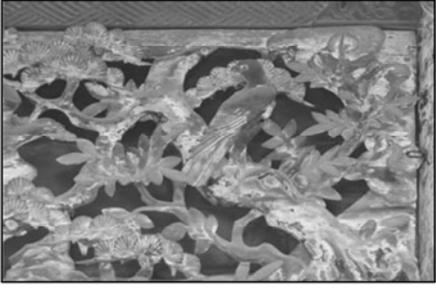
	
<p>写真54   龍   本体</p>	<p>写真55   唐獅子   本体</p>
	
<p>写真56   牛と筐、甘草   本体</p>	<p>写真57   鷹と松   本体</p>
	
<p>写真58   紫陽花と雲   本体</p>	<p>写真59   蒲公英   本体</p>
	
<p>写真60   桔梗と波   本体</p>	<p>写真61   牡丹   本体</p>

写真 81 桐生天満宮幣殿の本体彫刻写真(1/2)

幣殿					
					
写真62	姫射干	本体	写真63	撫子	本体
					
写真64	沢瀉	本体			

写真 81 桐生天満宮幣殿の本体彫刻写真(2/2)

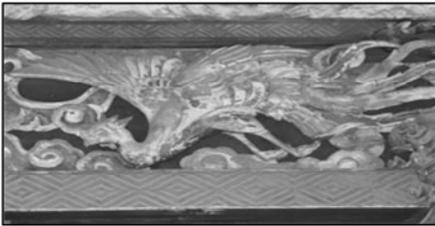
幣殿					
					
写真65	鳳凰と雲	軒回り	写真66	柿	軒回り
					
写真67	菊と波	軒回り			

写真 82 桐生天満宮幣殿の軒回り彫刻写真

(3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	向拝
霊獣	龍		○(写真68)			
霊鳥	鳳凰					○(写真69)
樹木・花木類	梅					○(写真70)

表 40 桐生天満宮拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿					
					
写真68	龍	本体			

写真 83 桐生天満宮拝殿の本体彫刻写真

拝殿					
					
写真69	鳳凰	向拝	写真70	梅	向拝

写真 84 桐生天満宮拝殿の向拝彫刻写真

桐生天満宮は文治 3 年（1187）から当地を支配していた桐生家が代々の守護神として崇敬した社であり、観応年間には京都北野天満宮より菅原道真公の分霊を頂いて合祀し、梅原天神とも称された時代もあった。なお、それより天満宮は桐生領の 54 ヶ村総鎮守となったことで、村民たちの拠所ともなった。

現社殿の造営は二段階形式となり、本殿・幣殿までを寛政 5 年（1793）に一先ず完成させて遷宮と御開帳を行い、その後、享和 2 年（1802）に拝殿を完成させ、権現造社殿が竣工したことになる。造営を担った大工棟梁は町田主膳栄信となるが、主膳が担ったのは本殿と幣殿までとなり、拝殿は嫡男の町田兵部が担当した。また、彫刻棟梁は黒川郷彫物師集団の祖となった石原吟八朗義武の高弟となる関口文治郎有信が担った。この他、彩色・天井絵は江戸狩野派の狩野益広を始めとする狩野派門弟絵師が腕を振るったとされる。

上州の甚五郎とも称された関口文治郎は、優秀な彫刻師を多く輩出した銅山街道沿いにある花輪村から田島峠を一つ挟んだ上田沢村（現桐生市）の出身で、少年時代から石原吟八朗の門人となって研鑽に励んだとされる。文治郎の実践による初鑿は十代の時に吟八朗の仕手となって経験した歎喜院聖天堂奥殿の彫刻制作と言われており、往時としては極めてレベルの高い仕事であった。<sup>注108</sup>この後、聖天堂の造営が一時中断となった延享 3 年（1746）には、同じく吟八朗の名代で小沢五右衛門らと共に江南村（現熊谷市）の諏訪神社本殿の彫刻制作も担っている。文治郎が正式に吟八朗のもとを独立し、上田沢村彫刻師集団なる組織のリーダーとしての初仕事が、再開された歎喜院聖天堂拝殿の彫刻制作であったと考えられており、この彫刻制作を完成させたのは文治郎二九歳の時であった。

天満宮は先述の通り、社殿造営が二段階であったことから、外装の彫刻装飾が多く配されるのは本殿と幣殿であり、拝殿には殆ど彫刻が備わっていない。これからも明らかな通り、彫刻棟梁として文治郎が直接携わったのは本殿・幣殿の彫刻制作のみである。このうち、本殿の外装彫刻は隙間の無いくらいに埋め尽くされており、その彫刻題材を見ると、腰組に霊獣・動物・野鳥・水鳥・昆虫及び魚類・樹木及び花木類・果物類・草花類・水草類・自然をモチーフとした彫刻と広範囲の分類となる。本体も粗同様であるが、軒回りとなると霊獣の種別が増え、飛龍・蜃・唐獅子・漢がお目見えし、また、霊鳥となる鳳凰・錦鶏・銀鶏・吐綬鶏が備わるなど、多種多彩である。なお、本殿本体部の大嵌彫刻八枚は中国故事にある親孝行息子 24 人を題材とした「二四孝」が題材となっているが、石原吟八朗を始めとする上州花輪村出身の彫刻大工たちが好んで用いた構図である。

一方、幣殿腰組には人物彫刻・霊獣・動物・野鳥・昆虫及び魚類・草花類・自然をモチーフとした彫刻と本殿同様に広範囲の分類となる。これは本体も粗同様であるが、特に草花類の種別が増え、紫陽花・蒲公英・桔梗・牡丹・笹・甘草・姫射干・撫子が備わり、地域に密着した天満宮として民衆に受入易かった直截的なモチーフを文治郎は選択したものと考えられる。

現在、外装彫刻は彩色が多く剥落しているため、一見すると素木造のようにも見えるが、創建当初は塗装が施してあったことが明白である。このため、歎喜院聖天堂と同様に彫刻の細密な線彫りなどはその後の素木造の装飾建築よりは少なく感じるが、しかし、序々にはあるが、写実的表現も意識した彫刻制作に成り始めていることも目視で感じられる。

---

注 108 （阿部修治「甦る聖天山本殿と上州彫物師たちの足跡」2011 年・P69）

## 2-6. 榛名神社社殿

### (1) 幣殿外装彫刻

彫刻		幣殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他	○(写真1)	○(写真6)			
霊獣	龍	○(写真2)	○(写真7)			
	飛龍			○(写真無)		
	蜃			○(写真13)		
	唐獅子		○(写真8)			○(写真16)
	猯		○(写真9)			
霊鳥	山鵲			○(写真14)		
	鷹			○(写真15)		
野鳥	雀	○(写真3)				
	鳩	○(写真4)				
樹木・花木類	柏			○(写真15)		
	蘇鉄		○(写真6)			
	松	○(写真4)				
	梅		○(写真10)			
草花類	菊			○(写真無)		○(写真17)
	牡丹		○(写真11)	○(写真無)		○(写真18)
	竹		○(写真12)			
穀物・野菜類	粟	○(写真5)				
水草類	杜若			○(写真14)		
自然をモチーフとした彫刻	波	○(写真1)		○(写真無)		
	雲	○(写真3)	○(写真12)	○(写真無)		

表 41 榛名神社幣殿の外装彫刻種別と配置一覧表

幣殿



写真1 唐子と波 腰組

写真2 龍 腰組



写真3 雀と雲 腰組

写真4 鳩と松 腰組



写真5 栗 腰組

写真 85 榛名神社幣殿の腰組彫刻写真

幣殿

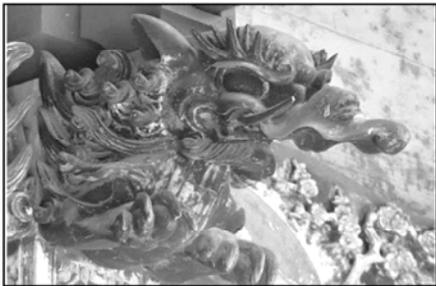
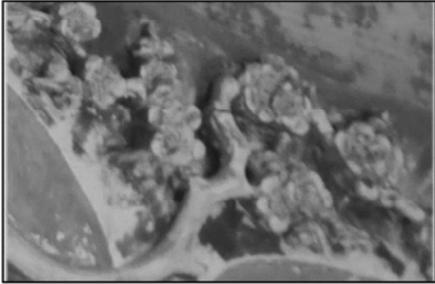
	
<p>写真6 琴棋書画と蘇鉄 本体</p>	<p>写真7 龍 本体</p>
	
<p>写真8 唐獅子 本体</p>	<p>写真9 猿 本体</p>
	
<p>写真10 梅 本体</p>	<p>写真11 牡丹 本体</p>
	
<p>写真12 竹と雲 本体</p>	

写真 86 榛名神社幣殿の本体彫刻写真

幣殿



写真13

蟹

軒回り



写真14

山鵲と杜若

軒回り



写真15

鷹と柏

軒回り

写真 87 榛名神社幣殿の軒回り彫刻写真

幣殿



写真16

唐獅子

脇障子



写真17

菊

脇障子



写真18

牡丹

脇障子

写真 88 榛名神社幣殿の脇障子彫刻写真

## (2) 間殿外装彫刻

彫刻		間殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	
霊獣	龍	○(写真19)	○(写真無)			
	唐獅子		○(写真22)			
	龍龜	○(写真20)				
動物	馬			○(写真無)		
霊鳥	鶴		○(写真23)			
	錦鶏			○(写真24)		
野鳥	雀	○(写真21)		○(写真25)		
	懸巢			○(写真26)		
	雉			○(写真27)		
水鳥	鴨			○(写真28)		
	雁			○(写真無)		
	鶺鴒			○(写真29)		
樹木・花木類	紅葉			○(写真26)		
	松		○(写真23)			
草花類	桔梗			○(写真30)		
	牡丹			○(写真27)		
水草類	沢瀉			○(写真29)		
	河骨			○(写真28)		
自然をモチーフとした彫刻	波	○(写真21)		○(写真25)		
	雲	○(写真21)	○(写真無)			

表 42 榛名神社間殿の外装彫刻種別と配置一覧表

間殿					
					
写真19	龍	腰組	写真20	龍亀	腰組
					
写真21	雀と波、雲	腰組			

写真 89 榛名神社間殿の腰組彫刻写真

間殿					
					
写真22	唐獅子	本体	写真23	鶴と松	本体

写真 90 榛名神社間殿の本体彫刻写真

間殿

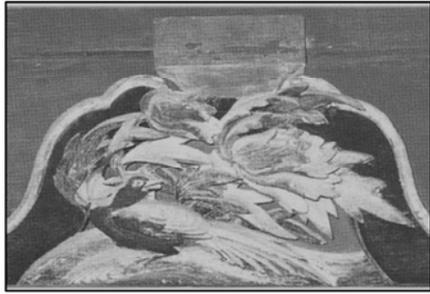


写真24 锦鸡 軒回り



写真25 雀と波 軒回り



写真26 懸巢と紅葉 軒回り



写真27 雉と牡丹 軒回り



写真28 鴨と河骨 軒回り



写真29 鶴と沢瀉 軒回り



写真30 桔梗 軒回り

写真 91 榛名神社間殿の軒回り彫刻写真

## (3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿					
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子	向拝
人物彫刻	仙人・唐子他				○(写真50)	○(写真52)	○(写真55)
霊獣	龍	○(写真31)	○(写真36)				○(写真56)
	蜃			○(写真42)			
	唐獅子		○(写真37)				○(写真57)
	犀	○(写真32)					
	龍亀	○(写真33)			○(写真51)		
動物	猿						○(写真58)
	馬			○(写真43)			
霊鳥	鳳凰						○(写真59)
	鶴		○(写真38)				
	山鶺鴒						○(写真60)
	錦鶏						
	吐綬鶏			○(写真44)			
	鷹			○(写真45)			○(写真61)
野鳥	雀	○(写真34)	○(写真39)				
	鶯						○(写真62)
	懸巢						
	鳩			○(写真46)			
	雉						
水鳥	鴨						
	雁			○(写真47)			
	鵜						
	鷺			○(写真48)			
樹木・花木類	柏						○(写真61)
	紅葉						
	松		○(写真38)	○(写真45)	○(写真50)	○(写真53)	○(写真55)
	梅						○(写真62)
	桜		○(写真39)	○(写真44)			
	椿			○(写真46)			
果物類	桃						○(写真58)
草花類	菊		○(写真40)				○(写真60)
	桔梗						
	牡丹		○(写真41)			○(写真54)	○(写真63)
	九輪草			○(写真49)			
穀物・野菜類	粟	○(写真35)					
水草類	沢瀉						
	水葵			○(写真48)			
	河骨			○(写真47)			
自然をモチーフとした彫刻	波	○(写真34)	○(写真40)	○(写真43)	○(写真51)		
	雲	○(写真34)	○(写真36)		○(写真50)	○(写真53)	○(写真59)

表 43 榛名神社拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿					
					
写真31	龍	腰組	写真32	犀	腰組
					
写真33	龍亀	腰組	写真34	雀と波、雲	腰組
					
写真35	栗	腰組			

写真 92 榛名神社拝殿の腰組彫刻写真

拝殿

	
<p>写真36   龍と雲   本体</p>	<p>写真37   唐獅子   軒回り</p>
	
<p>写真38   鶴と松   本体</p>	<p>写真39   雀と桜   本体</p>
	
<p>写真40   菊と波   本体</p>	<p>写真41   牡丹   本体</p>

写真 93 榛名神社拝殿の本体彫刻写真

拝殿



写真42 | 蜃 | 軒回り

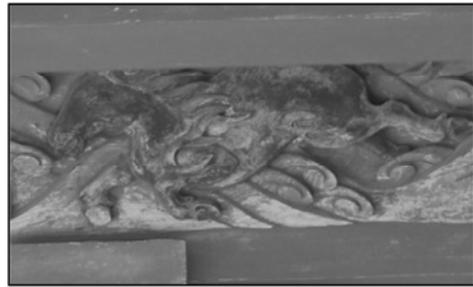


写真43 | 馬と波 | 軒回り



写真44 | 吐綬鶏と桜 | 軒回り



写真45 | 鷹と松 | 軒回り

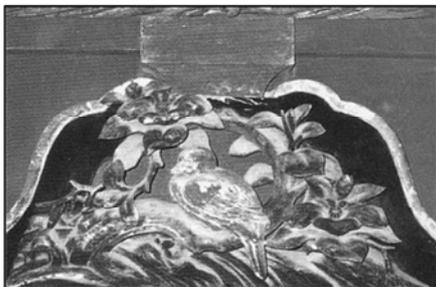


写真46 | 鳩と椿 | 軒回り



写真47 | 雁と河骨 | 軒回り

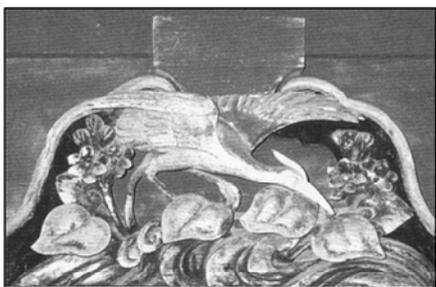


写真48 | 鷺と水葵 | 軒回り



写真49 | 九輪草 | 軒回り

写真 94 榛名神社拝殿の軒回り彫刻写真

拝殿



写真50

唐子と松、雲

軒上

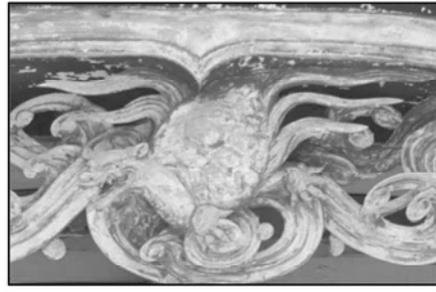


写真51

龍亀と波

軒上

写真 95 榛名神社拝殿の軒上彫刻写真

拝殿



写真52

虎溪三笑

脇障子



写真53

松と雲

脇障子



写真54

牡丹

脇障子

写真 96 榛名神社拝殿の軒上彫刻写真

拝殿

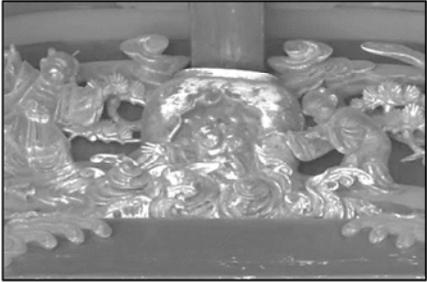
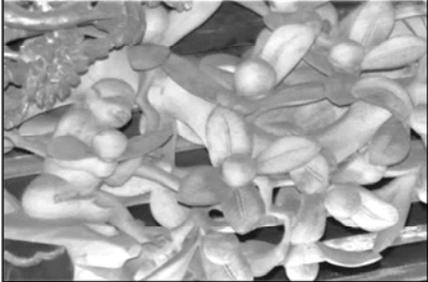
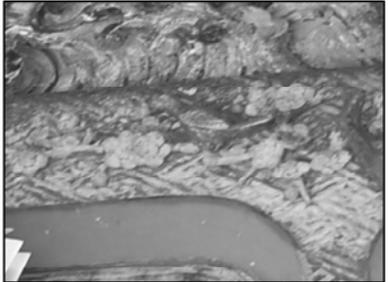
	
<p>写真55 唐子の龜割と松 向拝</p>	<p>写真56 龍 向拝</p>
	
<p>写真57 唐獅子 向拝</p>	<p>写真58 猿と桃 向拝</p>
	
<p>写真59 鳳凰と雲 向拝</p>	<p>写真60 山鵲と菊 向拝</p>
	
<p>写真61 鷹と柏 向拝</p>	<p>写真62 鶯と梅 向拝</p>

写真 97 榛名神社拝殿の向拝彫刻写真(1/2)

拝殿

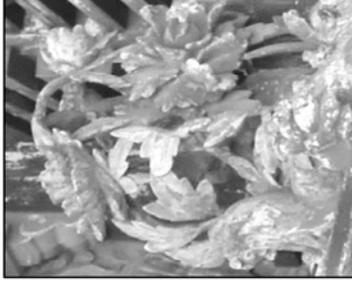


写真63

牡丹

向拝

写真 97 榛名神社拝殿の向拝彫刻写真 (2/2)

榛名神社は上毛三山の一つである榛名山の中腹に位置し、古代から山岳信仰の霊場とされてきた。社伝によれば六世紀後半頃の創建と伝わり、延喜5年(927)編纂の延喜式神明帳にもその名が記される歴史のある古社である。

現社殿の建立は文化3年(1806)のことで、大工棟梁は関根吉右衛門降晶が担い、彫刻棟梁は桐生天満宮の彫刻制作も担った関口文治郎有信が担当した。この社殿彫刻は文治郎最晩年の作でもあり、これに全精力を注いだことで完成の翌年となる文化4年(1807)にその生涯を閉じている。なお、興味深いのは現社殿棟札に大工として箭弓稲荷神社社殿造営棟梁を担った飯田和泉守藤原金軌の父である飯田和泉守藤原安範の名が記されることで、恐らく歓喜院聖天堂造営事業の繋がりでこの工事に協力することになったと考えられる。

この社殿は権現造の建築様式となるが、建築としての本殿は無く、社殿が接続する岩山の洞窟孔が本殿となって御祭神を祀っている。このため、この岩山に接続する建物が幣殿となり、拝殿と幣殿を繋ぐ空間を間殿と称している。榛名神社は近世に入り、天海僧正のもと東叡山寛永寺の管轄化に置かれた。この時点での社殿建築様式は詳らかでは無いが、榛名山雑記(正徳6年<1716>)に記される社殿は権現造の様相で描かれている。なお、社殿棟札には日光山輪王寺の銘も記されることから、天海僧正の仲立ちで徳川幕府作事方と何かしらの繋がりがあったとも考えられ、新たに造替された社殿も前代に倣って権現造の形態を踏襲したものと推測される。

榛名神社社殿を一見すると外装彫刻は各建物にバランス良く配されているが、特に拝殿向拝部回りが華やかであり、水引虹梁上には高肉透彫りの鷹と柏をモチーフとする彫刻や、その上部には歓喜院聖天堂拝殿にもある司馬温公の瓶割透彫り彫刻が配されている。また、向拝柱と本柱を繋ぐ海老虹梁に巻き付く丸彫り彫刻の降龍と昇龍は圧巻で、見る者を釘付けとする生き物のような彫刻である。

彫刻題材を個別に見ると、幣殿腰組には人物彫刻・霊獣・野鳥・樹木及び花木類・自然をモチーフとする彫刻が備わり、また、本体も粗同一の分類による彫刻が配されている。なお、幣殿の大嵌彫刻には中国故事に因んだ琴棋書画の透彫り彫刻が備わっている。軒回りとなるとこれに霊鳥が加わることになるが、種別としては山鵲と鷹となるが、霊獣の飛龍・蜃・唐獅子・漢と共に外装の華やかさを増す要因となっている。次に間殿であるが、いわゆる他の社殿では幣殿に該当する建物となり、彫刻の特徴的としては軒回りに多種多様なモチーフが備わっており、種別数としては歓喜院聖天堂中殿の軒回りを凌ぐ数となる。これは軒の出を三手先で支輪桁となる通肘木を二段で迫出して丸桁を受ける形態とするため、その間に三段の彫刻板支輪を掛渡す必要性が生じ、彫刻種別の増に起因したものと考えられる。このことは連続する拝殿も同様であるが、拝殿は腰組・本体・軒回り・軒上・向拝並びに脇障子とあらゆる部位に多種多様な彫刻が配されているが、拝殿の彫刻種別数は榛名神社社殿が今回検証した権現造社殿のなかでは一番多い。これまでの彫刻配置の傾向から見て、本殿に一番多くの彫刻種別と数量を注ぎやし、拝殿は向拝部を除けば彫刻は限定的となることが多かったが、榛名神社社殿はこれと違っており、外装は拝殿彫刻が一番多い。これは榛名神社社殿特有の建築形態が影響しているとも考えられ、岩山に接続する建物は本殿ではなく幣殿であり、これに接続する間殿も幣殿の延長と位置付けたことで、社殿の荘厳さをアピールするポイントを関口文治郎は拝殿に置いたものと推測される。

## 2-7. 箭弓稻荷神社社殿

### (1) 本殿外装彫刻

彫刻		本殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他		○(写真8)	○(写真12)	○(写真23)	
霊獣	龍	○(写真1)	○(写真9)	○(写真13)	○(写真24)	○(写真30)
	飛龍	○(写真2)		○(写真14)	○(写真25)	
	蜃			○(写真15)		
	唐獅子		○(写真10)			○(写真31)
	猯		○(写真11)	○(写真16)		
	水犀	○(写真3)				
動物	亀	○(写真4)			○(写真26)	
	馬	○(写真5)				
	狐			○(写真17)		
霊鳥	鳳凰			○(写真18)		
	鶴				○(写真27)	
	山鵲			○(写真19)		
野鳥	燕			○(写真20)		
	音呼			○(写真21)		
昆虫・魚類	鯉	○(写真6)				
	山椒魚	○(写真7)				
樹木・花木類	桐			○(写真22)		
	梅			○(写真19)		
果物類	葡萄			○(写真21)		
草花類	菊				○(写真28)	
	蒲公英			○(写真17)		
	牡丹				○(写真29)	○(写真32)
自然をモチーフとした彫刻	波	○(写真2)		○(写真14)	○(写真24)	
	流水				○(写真28)	
	雲		○(写真9)		○(写真27)	○(写真30)

表 44 箭弓稻荷神社本殿の外装彫刻種別と配置一覧表

本殿



写真1 | 龍 | 腰組



写真2 | 飛龍と波 | 腰組



写真3 | 犀と波 | 腰組



写真4 | 亀と波 | 腰組



写真5 | 馬と波 | 腰組



写真6 | 鯉と波 | 腰組



写真7 | 山椒魚と波 | 腰組

写真98 箭弓稻荷神社本殿の向拝彫刻写真

本殿					
					
写真8	仙人の鳥鷲	本体	写真9	龍と雲	本体
					
写真10	唐獅子	本体	写真11	猿	本体

写真 99 箭弓稲荷神社本殿の本体彫刻写真

本殿					
					
写真12	弾琴	軒回り	写真13	龍	軒回り
					
写真14	飛龍と波	軒回り	写真15	蜃	軒回り

写真 100 箭弓稲荷神社本殿の軒回り彫刻写真

本殿



写真16 | 猿 | 軒回り



写真17 | 狐と蒲公英 | 軒回り



写真18 | 鳳凰 | 軒回り



写真19 | 山鵲と梅 | 軒回り



写真20 | 燕と梅 | 軒回り



写真21 | 音呼と葡萄 | 軒回り

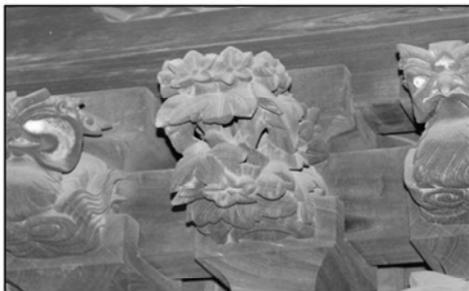


写真22 | 桐 | 軒回り

写真 101 箭弓稻荷神社本殿の軒回り彫刻写真

本殿



写真23 唐子 軒上



写真24 龍と波 軒上



写真25 飛龍と波 軒上



写真26 亀と波 軒上



写真27 鶴と雲 軒上



写真28 菊と流水 軒上



写真29 牡丹 軒上

写真 102 箭弓稲荷神社本殿の軒上彫刻写真

本殿					
					
写真30	龍と雲	脇障子	写真31	唐獅子	脇障子
					
写真32	牡丹	脇障子			

写真 103 箭弓稻荷神社本殿の脇障子彫刻写真

(2) 幣殿外装彫刻

彫刻		幣殿				
		腰組	本体	軒回り	軒上	備考
霊獣	唐獅子		○(写真33)			
野鳥	燕			○(写真34)		
	音呼			○(写真35)		
樹木・花木類	紅葉			○(写真36)		
自然をモチーフとした彫刻	波			○(写真34)		

表 45 箭弓稻荷神社幣殿の外装彫刻種別と配置一覧表

幣殿				
				
写真33	唐獅子	本体		

写真 104 箭弓稲荷神社幣殿の本体彫刻写真

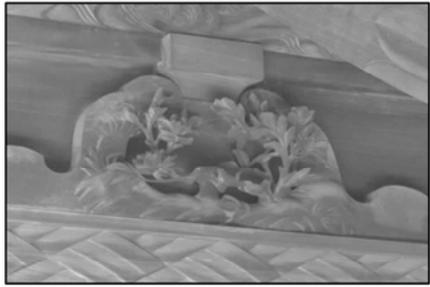
幣殿				
				
写真34	燕と波	軒回り	写真35	音呼 軒回り
				
写真36	紅葉	軒回り		

写真 105 箭弓稲荷神社幣殿の軒回り彫刻写真

(3) 拝殿外装彫刻

彫刻		拝殿				
		腰組	本体	軒回り	向拝	脇障子
人物彫刻	仙人・唐子他				○(写真38)	○(写真51)
霊獣	龍				○(写真39)	
	飛龍				○(写真40)	
	龍馬				○(写真41)	
	唐獅子				○(写真42)	
	獏				○(写真43)	
霊鳥	鳳凰				○(写真44)	○(写真52)
野鳥	瑠璃鳥				○(写真45)	
	鶯					○(写真53)
樹木・花木類	松				○(写真46)	
	梅				○(写真47)	○(写真53)
草花類	菊			○(写真37)	○(写真48)	
	蒲公英				○(写真49)	
	竹				○(写真50)	
自然をモチーフとした彫刻	波				○(写真45)	
	流水			○(写真37)		
	雲				○(写真39)	○(写真52)

表 46 箭弓稻荷神社拝殿の外装彫刻種別と配置一覧表

拝殿					
					
写真37	菊と流水	軒回り			

写真 106 箭弓稻荷神社拝殿の軒回り彫刻写真

拝殿

	
<p>写真38   三条小鍛冶   向拝</p>	<p>写真39   龍と雲   向拝</p>
	
<p>写真40   飛龍   向拝</p>	<p>写真41   龍馬   向拝</p>
	
<p>写真42   唐獅子   向拝</p>	<p>写真43   猿   向拝</p>
	
<p>写真44   鳳凰   向拝</p>	<p>写真45   瑠璃鳥と波   向拝</p>

写真 107 箭弓稻荷神社拝殿の向拝彫刻写真(1/2)

拝殿

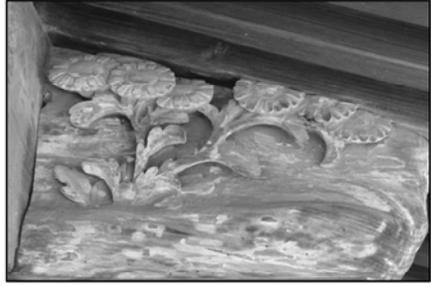
	
<p>写真46   松   向拝</p>	<p>写真47   梅   向拝</p>
	
<p>写真48   菊   向拝</p>	<p>写真49   蒲公英   向拝</p>
	
<p>写真50   竹   向拝</p>	

写真 107 箭弓稻荷神社拝殿の向拝彫刻写真 (2/2)

拜殿					
					
写真51	黄公石と張良	脇障子	写真52	鳳凰と雲	脇障子
					
写真53	鶯と梅	脇障子			

写真 108 箭弓稲荷神社拜殿の脇障子彫刻写真

箭弓稲荷神社社殿の彫刻は大工棟梁であった飯田和泉守藤原金軌の舎弟となる飯田仙之助が彫刻大工棟梁となり、嫡男の岩次郎がこれを支えている。仙之助は石原吟八朗義武の孫弟子として関口文治郎らと共に歓喜院聖天堂の彫刻制作に携わり、その腕を磨いたものと考えられている。箭弓稲荷神社には狩野派絵師は携わっていないことから、彫刻類の構図や意匠は仙之助の監修の基に彫刻大工たちによって下図が作成されたものと思われるが、このため彫刻題材が若干、聖天堂モチーフと重なる部分もある。ただ、建立年代が天保という厳しい時代であったことで聖天堂と相対することも多く、世相を反映して唐子遊びなどの彫刻は箭弓稲荷神社では見当たらない。また、高肉透彫りで正背面を一对とする脇障子嵌彫刻は「獅子と牡丹」の題材とし、突落し這い上がる獅子のみを育てるという厳しさを表現している。一方の聖天堂脇障子では「番の雉と椿」が題材となり、家庭円満と長寿を意味した優しさを表している。更に本殿背面の大嵌彫刻は共に中国故事の「仙人の烏鷺」が採用されているが、日々の慎ましい生活の大切さを戒める本来の意味が聖天堂では希薄となり、仙人を七福神の布袋・恵比寿・大黒天に入替え、庶民が夢見る豊かな生活の探求を想起させるもので、明らかに庶民ブームとなった寺社参りの集客狙いを意図している。

箭弓稲荷神社は外装・彫刻に塗装は施されておらず、素木造の装飾建築である。これ以前の権現造社殿のように彫刻そのものが塗装下地ではないことから、彫刻一つ一つに綿密な線彫りや透彫りなどが施されており、その写実的な鋭さに見る者は圧倒される。従ってこの社殿の完成により、装飾建築が高い完成度に到達したものと示唆される。

### 3. 権現造形式主要社殿の外装彫刻全数と配置

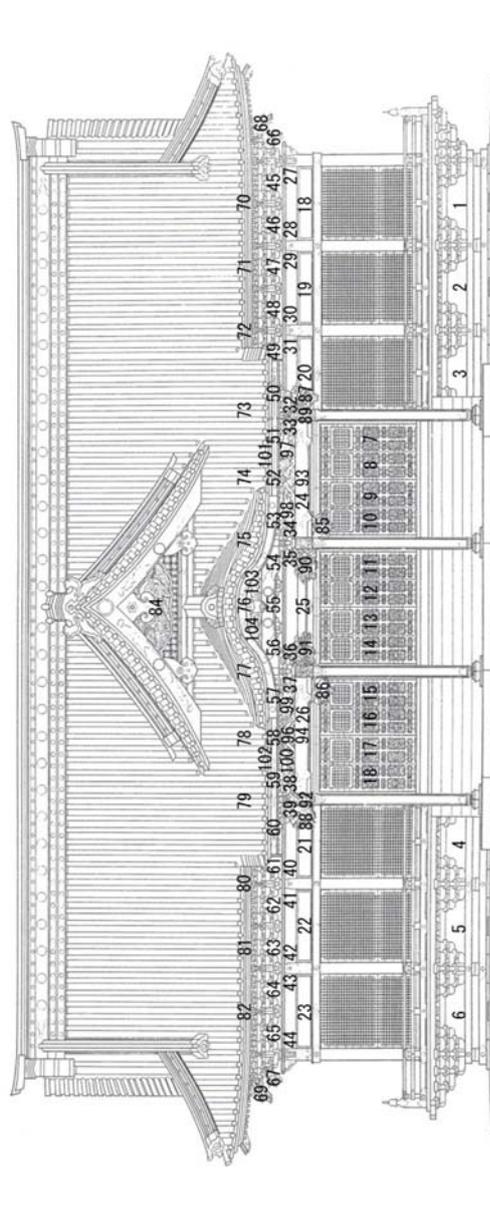
拝殿							
	東照宮	輪王寺	妙義	歓喜院	桐生	榛名	箭弓
腰組	14	0	0	0	0	20	0
本体	158	90	9	0	4	31	0
軒回り	71	56	18	53	0	31	14
軒上	9	11	0	0	0	4	0
向拝	22	21	20	61	3	17	24
脇障子	0	0	2	0	0	2	4
合計	274	178	49	114	7	105	42

幣殿(石の間)							
	東照宮	輪王寺	妙義	歓喜院	桐生	榛名	箭弓
腰組	4	0	0	0	7	14	0
本体	54	66	3	4	26	12	2
軒回り	16	30	6	16	15	24	8
軒上	0	0	0	0	0	0	0
向拝	0	0	0	0	0	0	0
脇障子	0	0	0	0	0	0	0
合計	74	96	9	20	48	50	10

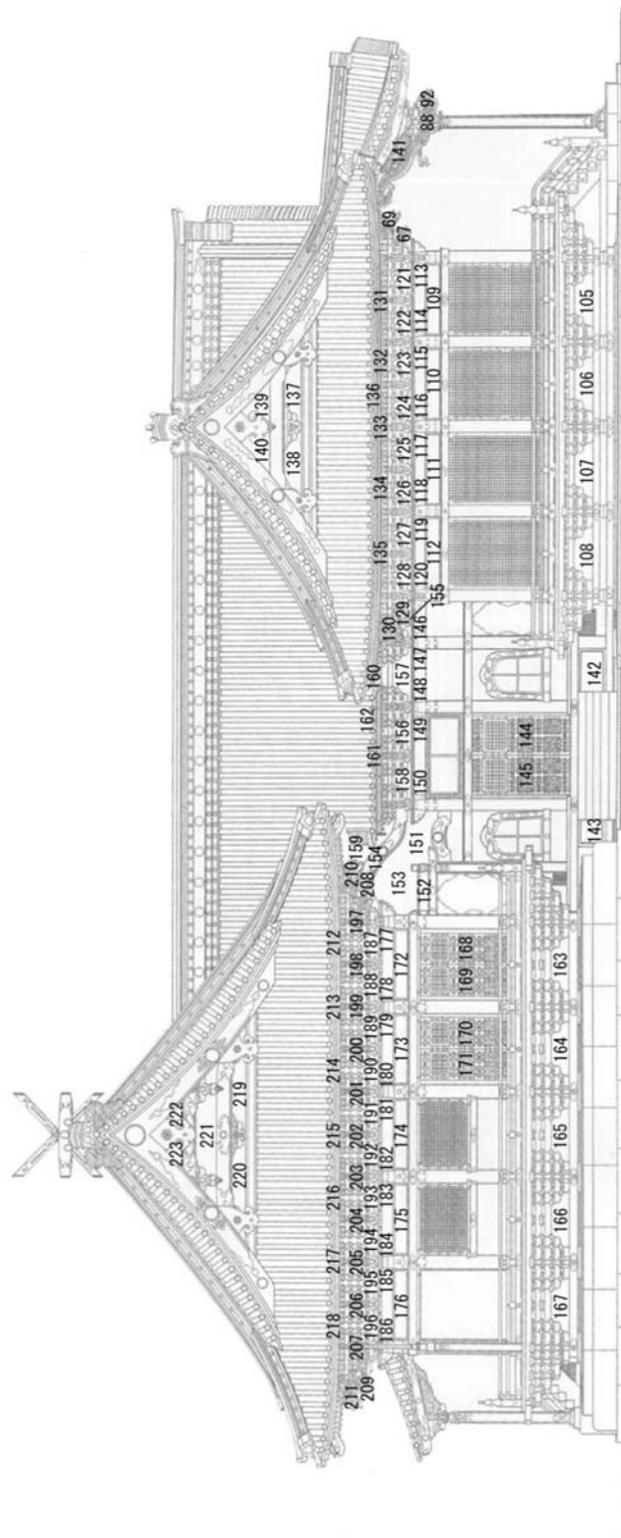
本殿							
	東照宮	輪王寺	妙義	歓喜院	桐生	榛名	箭弓
腰組	14	0	7	53	70	18	16
本体	130	257	22	88	34	18	21
軒回り	100	18	81	88	91	14	84
軒上	14	8	0	11	14	0	26
向拝	0	0	0	0	0	0	0
脇障子	0	0	0	4	2	0	4
合計	258	283	110	244	211	50	151
総合計	606	557	168	378	266	205	203

表 47 権現造主要社殿の外装彫刻全数比較表

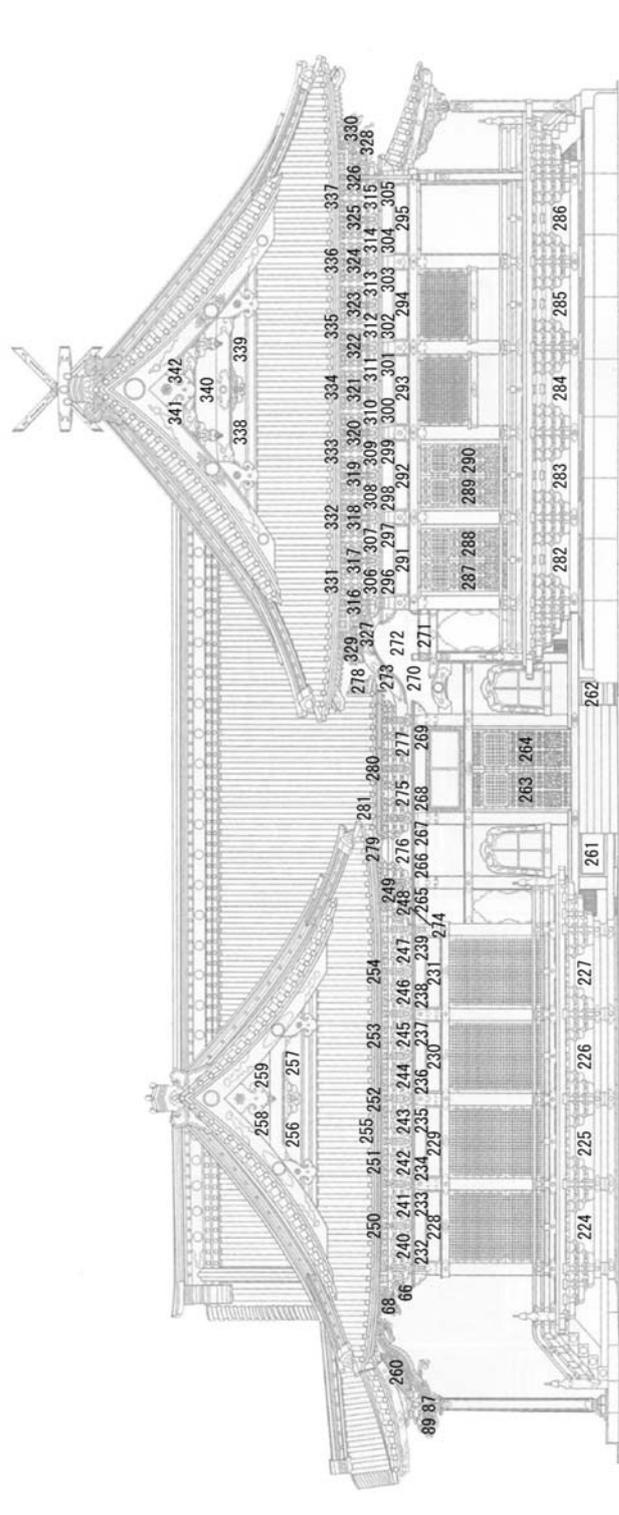
3-1. 日光東照宮社殿



南立面图 (正面)

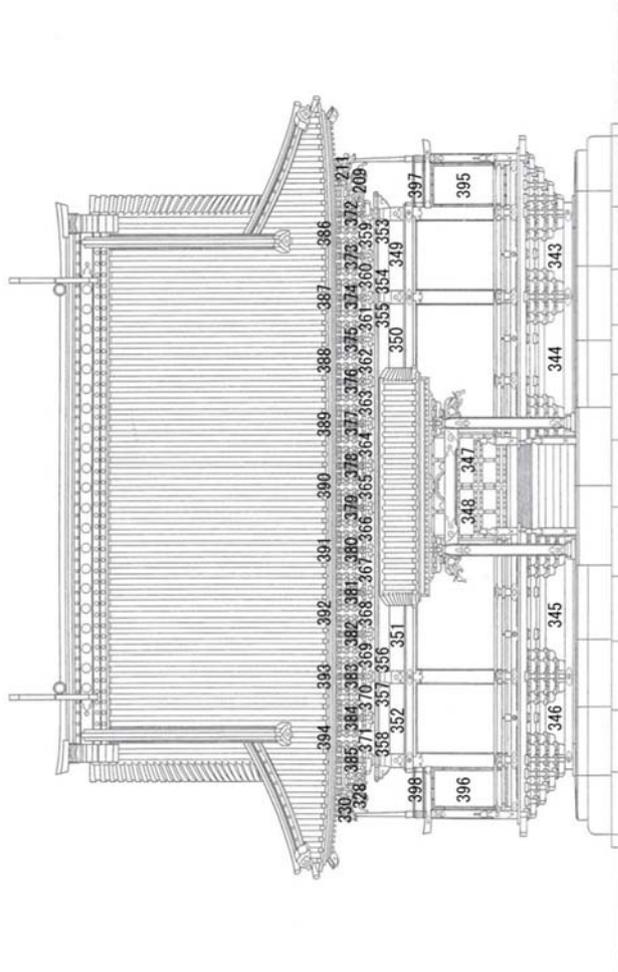


西立面图



※この図面は西立面図を反転  
したものを使用している

東立面図



南立面图

拝殿 南立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	1	菊と流水	
	2	菊と流水	
	3	菊と流水	
	4	菊と流水	
	5	菊と流水	
	6	菊と流水	
本体	7	牡丹	棧唐戸9間
	8	牡丹	棧唐戸9間
	9	牡丹	棧唐戸9間
	10	牡丹	棧唐戸9間
	11	牡丹	棧唐戸9間
	12	牡丹	棧唐戸9間
	13	牡丹	棧唐戸9間
	14	牡丹	棧唐戸9間
	15	牡丹	棧唐戸9間
	16	牡丹	棧唐戸9間
	17	牡丹	棧唐戸9間
	18	牡丹	棧唐戸9間
	19	鳳凰と桐	
	20	鳳凰と桐	
	21	鳳凰と桐	
	22	鳳凰と桐	
	23	鳳凰と桐	
	24	雀と瑠璃鳥、木菟、松、梅	向拝の奥
	25	山鶴と椿	
	26	瑠璃鳥と松、牡丹	向拝の奥
	27	菊	
	28	菊	
	29	菊	

拝殿 南立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	30	菊	
	31	菊	
	32	菊	向拝の奥
	33	菊	向拝の奥
	34	菊	向拝の奥
	35	菊	向拝の奥
	36	菊	向拝の奥
	37	菊	向拝の奥
	38	菊	向拝の奥
	39	菊	向拝の奥
	40	菊	
	41	菊	
	42	菊	
	43	菊	
軒回り	45	菊と流水	
	46	菊と流水	
	47	菊と流水	
	48	菊と流水	
	49	菊と流水	
	50	菊と流水	屋根の奥
	51	菊と流水	屋根の奥
	52	菊と流水	屋根の奥
	53	菊と流水	向拝の奥
	54	菊と流水	向拝の奥
	55	菊と流水	向拝の奥
	56	菊と流水	向拝の奥
	57	菊と流水	向拝の奥
	58	菊と流水	屋根の奥
	59	菊と流水	屋根の奥
	60	菊と流水	屋根の奥

拝殿 南立面図(正面)				拝殿 南立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
軒回り	61	菊と流水		向拝	91	龍	
	62	菊と流水			92	龍	
	63	菊と流水			93	犀と波	
	64	菊と流水			94	犀と波	
	65	菊と流水			95	唐獅子	
	66	息			96	唐獅子	
	67	息			97	唐獅子と牡丹	
	68	龍			98	唐獅子と牡丹	
	69	龍			99	唐獅子と牡丹	
	70	唐獅子	屋根の奥		100	唐獅子と牡丹	
	71	唐獅子	屋根の奥		101	龍と雲	屋根の奥
	72	唐獅子	屋根の奥		102	龍と雲	屋根の奥
	73	唐獅子	屋根の奥		103	虎と竹	
	74	唐獅子	屋根の奥		104	虎と竹	
	75	唐獅子	屋根の奥				
	76	唐獅子	屋根の奥				
	77	唐獅子	屋根の奥				
	78	唐獅子	屋根の奥				
	79	唐獅子	屋根の奥				
	80	唐獅子	屋根の奥				
	81	唐獅子	屋根の奥				
	82	唐獅子	屋根の奥				
	83	唐花	屋根の奥 桁の唐花すべて				
軒上	84	鶴と松					
向拝	85	息					
	86	息					
	87	息					
	88	息					
	89	龍					
	90	龍					

拝殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	105	菊と流水	
	106	菊と流水	
	107	菊と流水	
	108	菊と流水	
本体	109	鳳凰と桐	
	110	鳳凰と桐	
	111	鳳凰と桐	
	112	鳳凰と桐	
	113	菊	
	114	菊	
	115	菊	
	116	菊	
	117	菊	
	118	菊	
	119	菊	
	120	菊	
軒回り	121	菊と流水	
	122	菊と流水	
	123	菊と流水	
	124	菊と流水	
	125	菊と流水	
	126	菊と流水	
	127	菊と流水	
	128	菊と流水	
	129	息	
	130	龍	
	131	唐獅子	屋根の奥
	132	唐獅子	屋根の奥
	133	唐獅子	屋根の奥
	134	唐獅子	屋根の奥
	135	唐獅子	屋根の奥
	136	唐花	屋根の奥 梁の唐花すべて

拝殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒上	137	犀と波	
	138	犀と波	
	139	菊と流水	
	140	菊と流水	
向拝	141	雲	

幣殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	142	菊と流水	
	143	菊と流水	
本体	144	牡丹	棧唐戸9間
	145	牡丹	棧唐戸9間
	146	菊	
	147	菊	
	148	菊	
	149	菊	
	150	菊	
	151	唐獅子	
	152	葡萄	
	153	牡丹	
	154	唐花	海老虹梁の唐花すべて
軒回り	155	菊と流水	129の奥
	156	菊と流水	
	157	牡丹	
	158	牡丹	
	159	牡丹	
	160	唐獅子	屋根の奥
	161	唐獅子	屋根の奥
	162	唐花	屋根の奥 桁の唐花すべて

本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	163	菊と流水	
	164	菊と流水	
	165	菊と流水	
	166	菊と流水	
	167	菊と流水	
本体	168	牡丹	棧唐戸9間
	169	牡丹	棧唐戸9間
	170	牡丹	棧唐戸9間
	171	牡丹	棧唐戸9間
	172	梅と松	
	173	梅と松	
	174	梅と松	
	175	梅と松	
	176	梅と松	
	177	牡丹	
	178	牡丹	
	179	牡丹	
	180	牡丹	
	181	牡丹	
182	牡丹		
183	牡丹		
184	牡丹		
185	牡丹		
186	牡丹		
軒回り	187	牡丹	
	188	牡丹	
	189	牡丹	
	190	牡丹	
	191	牡丹	
	192	牡丹	
	193	牡丹	
	194	牡丹	

本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	195	牡丹	
	196	牡丹	
	197	獏	
	198	獏	
	199	獏	
	200	獏	
	201	獏	
	202	獏	
	203	獏	
	204	獏	
	205	獏	
	206	獏	
	207	獏	
	208	獏	
	209	獏	
	210	龍	
	211	龍	
	212	鳳凰	屋根の奥
213	鳳凰	屋根の奥	
214	鳳凰	屋根の奥	
215	鳳凰	屋根の奥	
216	鳳凰	屋根の奥	
217	鳳凰	屋根の奥	
218	鳳凰	屋根の奥	
軒上	219	麒麟と雲	
	220	麒麟と雲	
	221	鳳凰と桐	
	222	菊	
	223	菊	

拝殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	224	菊と流水	
	225	菊と流水	
	226	菊と流水	
	227	菊と流水	
本体	228	鳳凰と桐	
	229	鳳凰と桐	
	230	鳳凰と桐	
	231	鳳凰と桐	
	232	菊	
	233	菊	
	234	菊	
	235	菊	
	236	菊	
	237	菊	
	238	菊	
	239	菊	
軒回り	240	菊と流水	
	241	菊と流水	
	242	菊と流水	
	243	菊と流水	
	244	菊と流水	
	245	菊と流水	
	246	菊と流水	
	247	菊と流水	
	248	息	
	249	龍	
	250	唐獅子	屋根の奥
	251	唐獅子	屋根の奥
	252	唐獅子	屋根の奥
	253	唐獅子	屋根の奥
	254	唐獅子	屋根の奥
255	唐花	屋根の奥 梁の唐花すべて	

拝殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒上	256	犀と波	
	257	犀と波	
	258	菊と流水	
	259	菊と流水	
向拝	260	雲	

幣殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	261	菊と流水	
	262	菊と流水	
本体	263	牡丹	棧唐戸9間
	264	牡丹	棧唐戸9間
	265	菊	
	266	菊	
	267	菊	
	268	菊	
	269	菊	
	270	唐獅子	
	271	葡萄	
	272	牡丹	
	273	唐花	海老虹梁の唐花すべて
軒回り	274	菊と流水	248の奥
	275	菊と流水	
	276	牡丹	
	277	牡丹	
	278	牡丹	
	279	唐獅子	屋根の奥
	280	唐獅子	屋根の奥
	281	唐花	屋根の奥 桁の唐花すべて

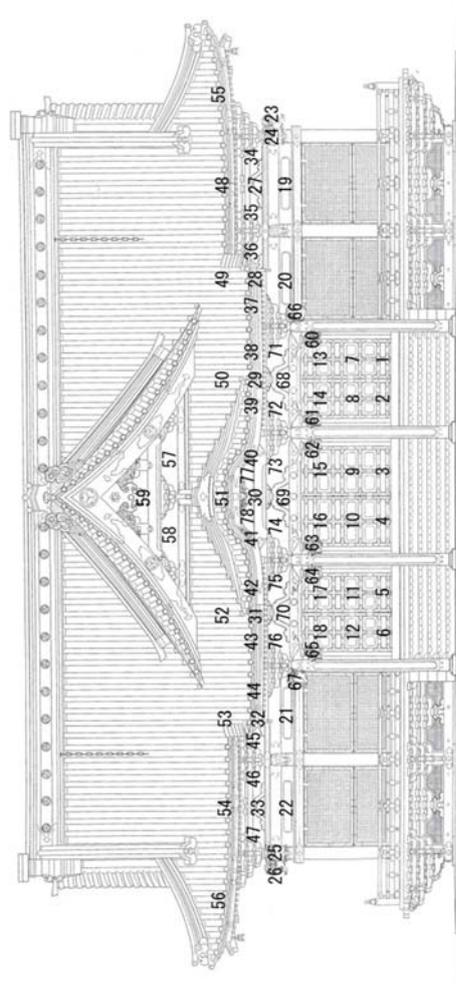
本殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	282	菊と流水	
	283	菊と流水	
	284	菊と流水	
	285	菊と流水	
	286	菊と流水	
本体	287	牡丹	棧唐戸9間
	288	牡丹	棧唐戸9間
	289	牡丹	棧唐戸9間
	290	牡丹	棧唐戸9間
	291	梅と松	
	292	梅と松	
	293	梅と松	
	294	梅と松	
	295	梅と松	
	296	牡丹	
	297	牡丹	
	298	牡丹	
	299	牡丹	
	300	牡丹	
	301	牡丹	
	302	牡丹	
	303	牡丹	
	304	牡丹	
305	牡丹		
軒回り	306	牡丹	
	307	牡丹	
	308	牡丹	
	309	牡丹	
	310	牡丹	
	311	牡丹	
	312	牡丹	
	313	牡丹	

本殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	314	牡丹	
	315	牡丹	
	316	獏	
	317	獏	
	318	獏	
	319	獏	
	320	獏	
	321	獏	
	322	獏	
	323	獏	
	324	獏	
	325	獏	
	326	獏	
	327	獏	
	328	獏	
	329	龍	
	330	龍	
	331	鳳凰	屋根の奥
	332	鳳凰	屋根の奥
333	鳳凰	屋根の奥	
334	鳳凰	屋根の奥	
335	鳳凰	屋根の奥	
336	鳳凰	屋根の奥	
337	鳳凰	屋根の奥	
軒上	338	麒麟と雲	
	339	麒麟と雲	
	340	鳳凰と桐	
	341	菊	
	342	菊	

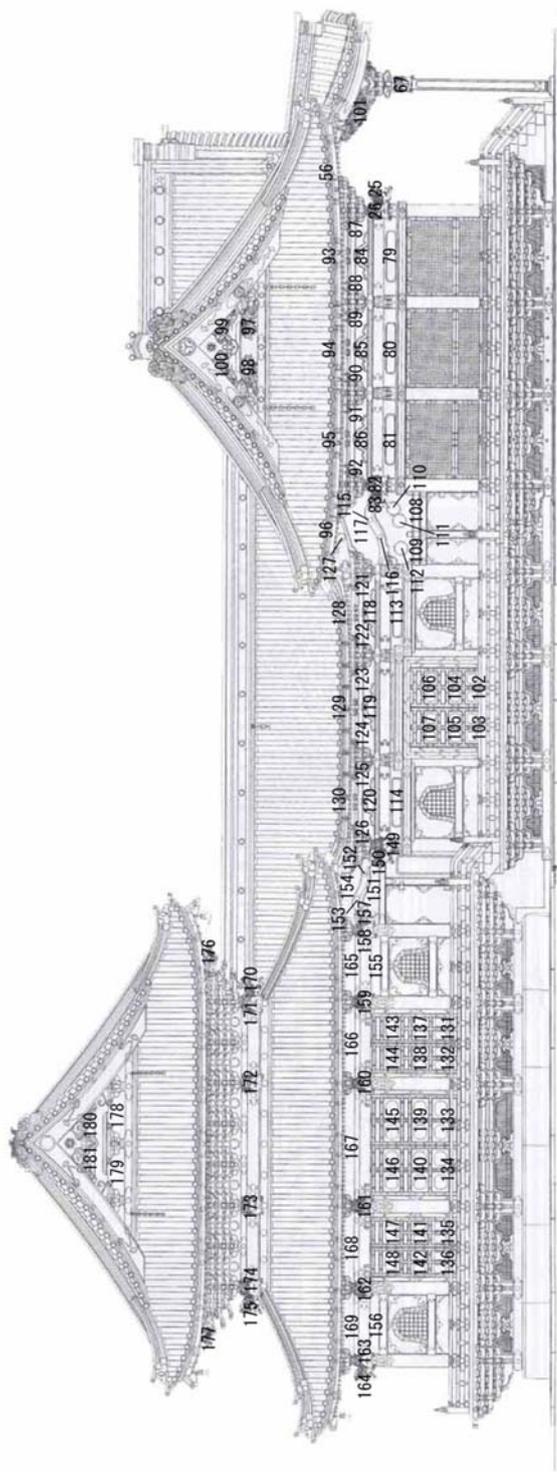
本殿 北立面図				本殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
腰組	343	菊と流水		軒回り	375	獏	
	344	菊と流水			376	獏	
	345	菊と流水			377	獏	
	346	菊と流水			378	獏	
本体	347	牡丹	棧唐戸9間		379	獏	
	348	牡丹	棧唐戸9間		380	獏	
	349	菊と流水			381	獏	
	350	菊と流水			382	獏	
	351	牡丹			383	獏	
	352	牡丹			384	獏	
	353	牡丹			385	獏	
	354	牡丹			386	鳳凰	屋根の奥
	355	牡丹			387	鳳凰	屋根の奥
	356	牡丹			388	鳳凰	屋根の奥
	357	牡丹			389	鳳凰	屋根の奥
	358	牡丹			390	鳳凰	屋根の奥
軒回り	359	牡丹			391	鳳凰	屋根の奥
	360	牡丹			392	鳳凰	屋根の奥
	361	牡丹			393	鳳凰	屋根の奥
	362	牡丹		394	鳳凰	屋根の奥	
	363	牡丹		脇障子	395	唐子と松	
	364	牡丹			396	唐子と松	
	365	牡丹			397	松と牡丹	
	366	牡丹			398	松と牡丹	
	367	牡丹					
	368	牡丹					
	369	牡丹					
	370	牡丹					
	371	牡丹					
	372	獏					
	373	獏					
	374	獏					

表 48 日光東照宮の外装彫刻全数と配置一覧表

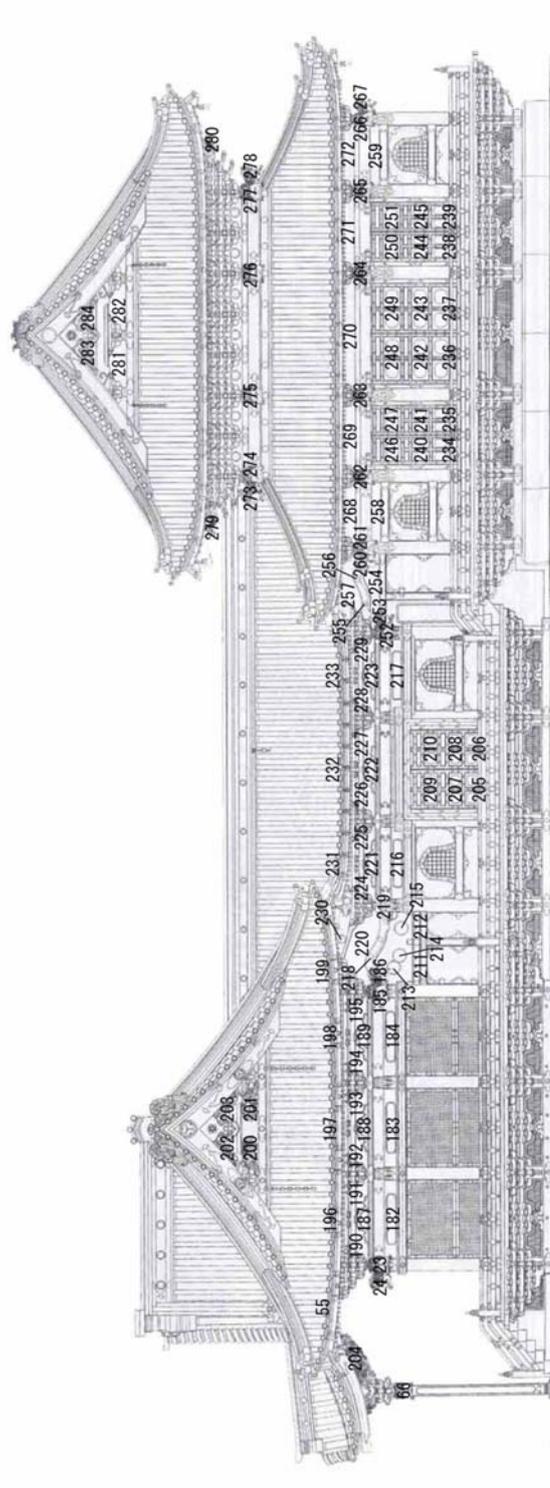
3-2. 輪王寺大猷院



東立面図(正面)

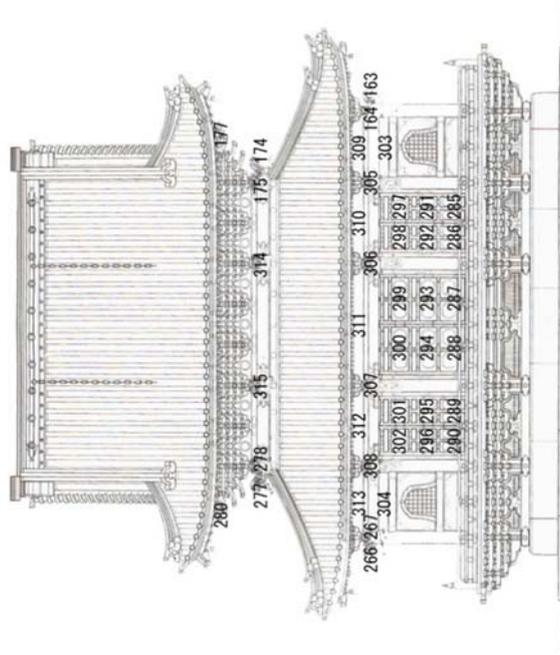


南立面图



※この図面は南立面図を反転  
したものを使用している

北立面图



西立面图

拝殿 東立面図(正面)				拝殿 東立面図(正面)				
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考	
本体	1	唐花	棧唐戸6間	軒回り	33	鷹と松		
	2	唐花	棧唐戸6間		34	牡丹		
	3	唐花	棧唐戸6間		35	牡丹		
	4	唐花	棧唐戸6間		36	牡丹		
	5	唐花	棧唐戸6間		37	牡丹	屋根の奥	
	6	唐花	棧唐戸6間		38	牡丹	屋根の奥	
	7	唐獅子	棧唐戸4間		39	牡丹	屋根の奥	
	8	唐獅子	棧唐戸4間		40	牡丹	向拝の奥	
	9	唐獅子	棧唐戸4間		41	牡丹	向拝の奥	
	10	唐獅子	棧唐戸4間		42	牡丹	屋根の奥	
	11	唐獅子	棧唐戸4間		43	牡丹	屋根の奥	
	12	唐獅子	棧唐戸4間		44	牡丹	屋根の奥	
	13	龍	棧唐戸2間		45	牡丹		
	14	龍	棧唐戸2間		46	牡丹		
	15	龍	棧唐戸2間		47	牡丹		
	16	龍	棧唐戸2間		48	山鵲	屋根の奥	
	17	龍	棧唐戸2間		49	山鵲	屋根の奥	
	18	龍	棧唐戸2間		50	山鵲	屋根の奥	
	19	鳳凰と桐			51	山鵲	向拝の奥	
	20	鳳凰と桐			52	山鵲	屋根の奥	
	21	鳳凰と桐			53	山鵲	屋根の奥	
	22	鳳凰と桐			54	山鵲	屋根の奥	
	23	唐獅子			55	龍	屋根の奥	
	24	唐獅子			56	龍	屋根の奥	
	25	唐獅子			軒上	57	唐獅子と牡丹	
	26	唐獅子				58	唐獅子と牡丹	
27	鷹と松		59	唐獅子と牡丹				
軒回り	28	鷹と松	屋根の奥	向拝	60	唐獅子		
	29	鷹と松	屋根の奥		61	唐獅子		
	30	鷹と松	向拝の奥		62	唐獅子		
	31	鷹と松	屋根の奥		63	唐獅子		
	32	鷹と松	屋根の奥		64	唐獅子		

拝殿 東立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考
向拝	65	唐獅子	
	66	唐獅子	
	67	唐獅子	
	68	鷹と松	
	69	鷹と松	
	70	鷹と松	
	71	松と梅	
	72	松と梅	
	73	松と梅	
	74	松と梅	
	75	松と梅	
	76	松と梅	
	77	鳳凰と桐	
	78	鳳凰と桐	

拜殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	79	鳳凰と桐	
	80	鳳凰と桐	
	81	鳳凰と桐	
	82	唐獅子	
	83	唐獅子	
軒回り	84	懸巢と松	
	85	懸巢と松	
	86	懸巢と松	
	87	牡丹	
	88	牡丹	
	89	牡丹	
	90	牡丹	
	91	牡丹	
	92	牡丹	
	93	山鵲	屋根の奥
94	山鵲	屋根の奥	
95	山鵲	屋根の奥	
96	龍	屋根の奥	
軒上	97	唐獅子と牡丹	
	98	唐獅子と牡丹	
	99	牡丹	
	100	牡丹	
向拝	101	菊	

幣殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	102	唐花	棧唐戸6間
	103	唐花	棧唐戸6間
	104	唐獅子	棧唐戸4間
	105	唐獅子	棧唐戸4間
	106	龍	棧唐戸2間
	107	龍	棧唐戸2間
	108	鶯と梅	
	109	鶯と梅	
	110	鳳凰	
	111	鳳凰	
	112	唐獅子と波	
	113	鳳凰と桐	
	114	鳳凰と桐	
	115	鳳凰	
	116	鳳凰	
	軒回り	117	鳳凰と牡丹
118		鷹と松	
119		鷹と松	
120		懸巢と松	
121		牡丹	
122		牡丹	
123		牡丹	
124		牡丹	
125		牡丹	
126		牡丹	
127		山鵲	
128		山鵲	屋根の奥
129		山鵲	屋根の奥
130		山鵲	屋根の奥

本殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	131	唐花	棧唐戸6間
	132	唐花	棧唐戸6間
	133	唐花	棧唐戸6間
	134	唐花	棧唐戸6間
	135	唐花	棧唐戸6間
	136	唐花	棧唐戸6間
	137	唐獅子	棧唐戸4間
	138	唐獅子	棧唐戸4間
	139	唐獅子	棧唐戸4間
	140	唐獅子	棧唐戸4間
	141	唐獅子	棧唐戸4間
	142	唐獅子	棧唐戸4間
	143	龍	
	144	龍	
	145	龍	棧唐戸2間
	146	龍	棧唐戸2間
	147	龍	
	148	龍	
	149	唐獅子	
	150	唐獅子	
	151	桐	
	152	鳳凰	
	153	鳳凰	
	154	鳳凰と桐	
	155	菊と流水	
	156	菊と流水	
	157	唐獅子	
	158	唐獅子	
	159	唐獅子	
	160	唐獅子	
	161	唐獅子	
	162	唐獅子	

本殿 南立面図				
	番号	彫刻の種類	備考	
本体	163	唐獅子		
	164	唐獅子		
	165	山鵲と牡丹		
	166	山鵲と牡丹		
	167	山鵲と牡丹		
	168	山鵲と牡丹		
	169	山鵲と牡丹		
	軒回り	170	唐獅子	
		171	唐獅子	
172		唐獅子		
173		唐獅子		
174		唐獅子		
175		唐獅子		
176		龍		
177		龍		
軒上	178	犀と波		
	179	犀と波		
	180	牡丹		
	181	牡丹		

拝殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	182	鳳凰と桐	
	183	鳳凰と桐	
	184	鳳凰と桐	
	185	唐獅子	
	186	唐獅子	
軒回り	187	懸巢と松	
	188	懸巢と松	
	189	懸巢と松	
	190	牡丹	
	191	牡丹	
	192	牡丹	
	193	牡丹	
	194	牡丹	
	195	牡丹	
	196	山鵲	屋根の奥
197	山鵲	屋根の奥	
198	山鵲	屋根の奥	
199	龍	屋根の奥	
軒上	200	唐獅子と牡丹	
	201	唐獅子と牡丹	
	202	牡丹	
	203	牡丹	
向拝	204	菊	

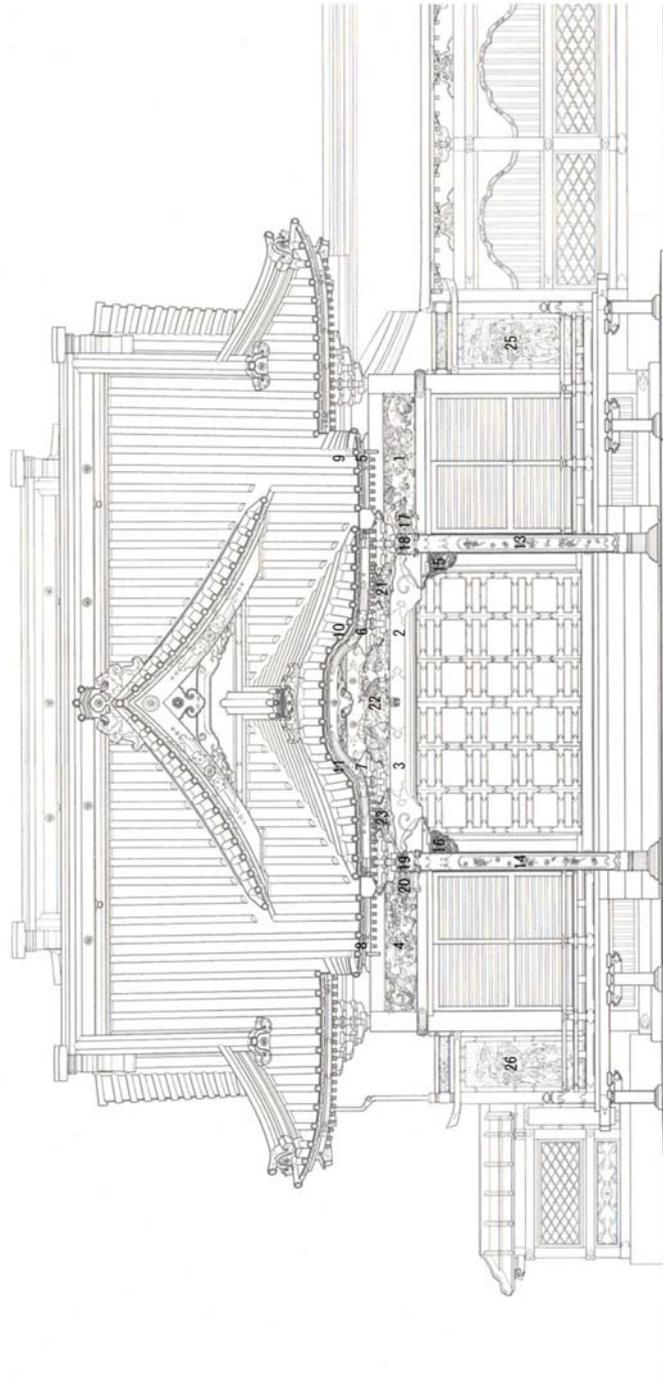
幣殿 北立面図				
	番号	彫刻の種類	備考	
本体	205	唐花	棧唐戸6間	
	206	唐花	棧唐戸6間	
	207	唐獅子	棧唐戸4間	
	208	唐獅子	棧唐戸4間	
	209	龍	棧唐戸2間	
	210	龍	棧唐戸2間	
	211	鶯と梅		
	212	鶯と梅		
	213	鳳凰		
	214	鳳凰		
	215	唐獅子と波		
	216	鳳凰と桐		
	217	鳳凰と桐		
	218	鳳凰		
	219	鳳凰		
	軒回り	220	鳳凰と牡丹	鳳凰2体まとめて
		221	鷹と松	
		222	鷹と松	
		223	懸巢と松	
224		牡丹		
225		牡丹		
226		牡丹		
227		牡丹		
228		牡丹		
229		牡丹		
230		山鵲		
231		山鵲	屋根の奥	
232		山鵲	屋根の奥	
233		山鵲	屋根の奥	

本殿 北立面図				幣殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
本体	234	唐花	棧唐戸6間	本体	266	唐獅子	
	235	唐花	棧唐戸6間		267	唐獅子	
	236	唐花	棧唐戸6間		268	山鵲と牡丹	
	237	唐花	棧唐戸6間		269	山鵲と牡丹	
	238	唐花	棧唐戸6間		270	山鵲と牡丹	
	239	唐花	棧唐戸6間		271	山鵲と牡丹	
	240	唐獅子	棧唐戸4間		272	山鵲と牡丹	
	241	唐獅子	棧唐戸4間		軒回り	273	唐獅子
	242	唐獅子	棧唐戸4間	274		唐獅子	
	243	唐獅子	棧唐戸4間	275		唐獅子	
	244	唐獅子	棧唐戸4間	276		唐獅子	
	245	唐獅子	棧唐戸4間	277		唐獅子	
	246	龍		278		唐獅子	
	247	龍		279		龍	
	248	龍	棧唐戸2間	280		龍	
	249	龍	棧唐戸2間	軒上	281	犀と波	
	250	龍			282	犀と波	
	251	龍			283	牡丹	
	252	唐獅子			284	牡丹	
	253	唐獅子					
	254	桐					
	255	鳳凰					
	256	鳳凰					
	257	鳳凰と桐					
	258	菊と流水					
	259	菊と流水					
	260	唐獅子					
	261	唐獅子					
	262	唐獅子					
	263	唐獅子					
	264	唐獅子					
	265	唐獅子					

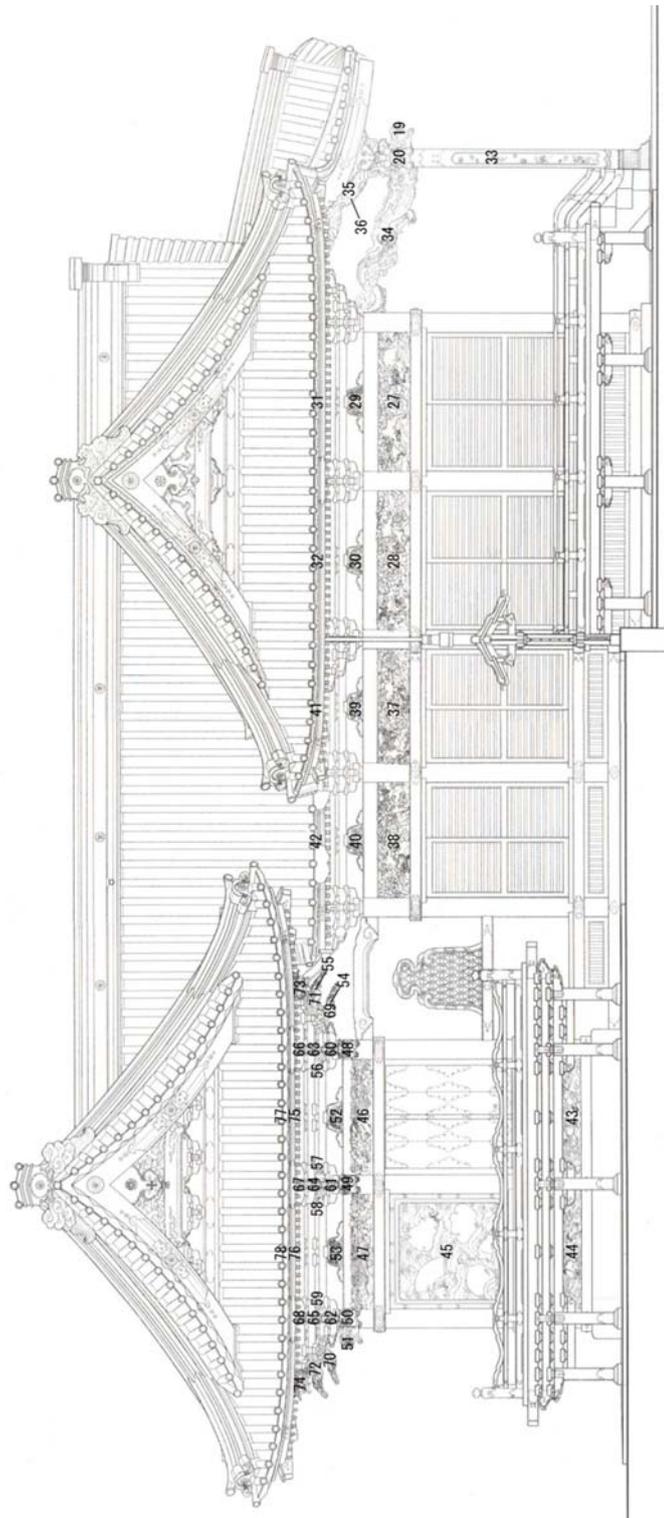
本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	285	唐花	棧唐戸6間
	286	唐花	棧唐戸6間
	287	唐花	棧唐戸6間
	288	唐花	棧唐戸6間
	289	唐花	棧唐戸6間
	290	唐花	棧唐戸6間
	291	唐獅子	棧唐戸4間
	292	唐獅子	棧唐戸4間
	293	唐獅子	棧唐戸4間
	294	唐獅子	棧唐戸4間
	295	唐獅子	棧唐戸4間
	296	唐獅子	棧唐戸4間
	297	龍	
	298	龍	
	299	龍	棧唐戸2間
	300	龍	棧唐戸2間
	301	龍	
	302	龍	
	303	菊と流水	
	304	菊と流水	
	305	唐獅子	
	306	唐獅子	
	307	唐獅子	
	308	唐獅子	
	309	山鶴と牡丹	
	310	山鶴と牡丹	
311	山鶴と牡丹		
312	山鶴と牡丹		
313	山鶴と牡丹		
軒回り	314	唐獅子	
	315	唐獅子	

表 49 輪王寺大猷院の外装彫刻全数と配置一覧表

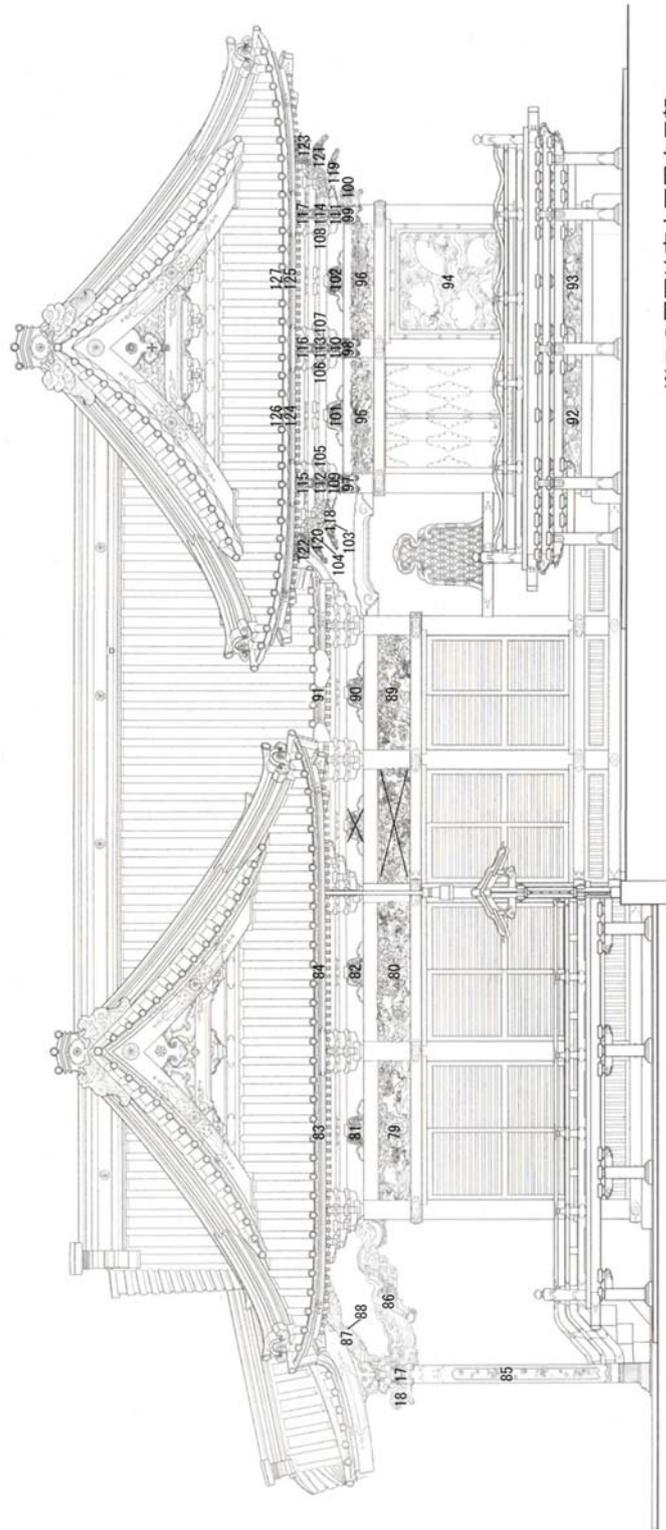
### 3-2. 妙義神社社殿



東立面图(正面)

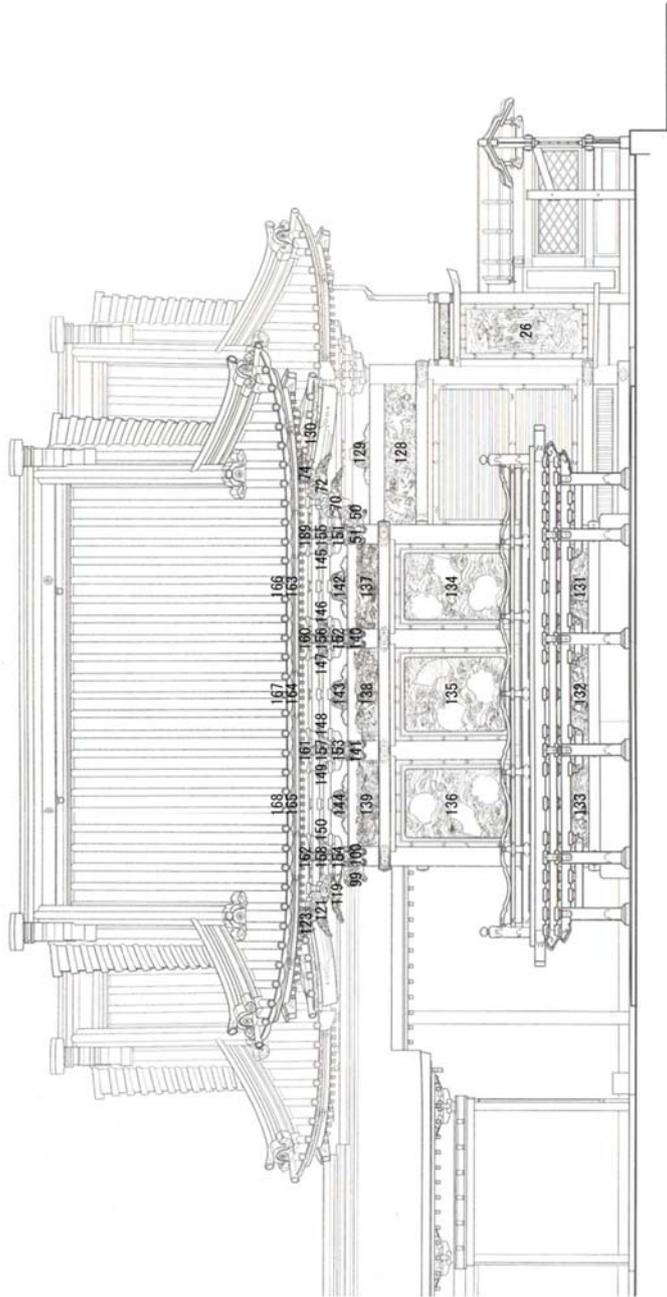


南立面图



※この図面は南立面図を反転  
したものを使用している

北立面図



西立面图

拝殿 東立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	1	唐獅子と牡丹、波	
	2	唐獅子と牡丹、波	向拝の奥
	3	唐獅子と牡丹、波	向拝の奥
	4	唐獅子と牡丹、波	
軒回り	5	山鵲と椿	屋根の奥
	6	百舌と梅	向拝の奥
	7	山鵲と梅	向拝の奥
	8	雉と牡丹	屋根の奥
	9	菊と波	屋根の奥
	10	菊と波	向拝の奥
	11	菊と波	向拝の奥
向拝	12	菊と波	屋根の奥
	13	梅	柱の梅すべて
	14	梅	柱の梅すべて
	15	菊	
	16	菊	
	17	猿	
	18	唐獅子	
	19	猿	
	20	唐獅子	
	21	鶴と松	
	22	鶴と松	
	23	鶴と松	
脇障子	24	鶴と松	屋根の奥
	25	唐子と竹、雲	
	26	唐子と竹、雲	

拝殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	27	唐獅子と牡丹、波	
	28	唐獅子と牡丹、波	
軒回り	29	山鵲と梅	
	30	百舌と紅葉	
	31	菊と波	
	32	菊と波	
向拝	33	松	柱の梅すべて
	34	龍	
	35	雲	
	36	山鵲と桜	33の奥

幣殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	37	唐獅子と牡丹、波	
	38	唐獅子と牡丹、波	
軒回り	39	兔と菊	牡丹
	40	兔と菊	
	41	菊と波	屋根の奥
	42	菊と波	屋根の奥

本殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	43	犀と波	
	44	犀と波	
本体	45	波と扇子、 軍配団扇	
	46	鳳凰と桐	
	47	鳳凰と桐	
	48	唐獅子	
	49	唐獅子	
	50	唐獅子	
	51	唐獅子	
軒回り	52	小禽と粟、波	
	53	鸚鵡と菖蒲、波	
	54	波	67の奥
	55	波	69の奥
	56	波	
	57	波	
	58	波	
	59	波	
	60	波と雲	
	61	波と雲	
	62	波と雲	
	63	波と雲	
	64	波と雲	
	65	波と雲	
	66	雲	
	67	雲	
	68	雲	
69	雲		
70	雲		
71	雲		
72	雲		
73	龍		

本殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	74	龍	
	75	波と雲	屋根の奥
	76	波と雲	屋根の奥
	77	波と雲	屋根の奥
78	波と雲	屋根の奥	

拝殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	79	唐獅子と牡丹、波	
	80	唐獅子と牡丹、波	
軒回り	81	山鵲と梅	
	82	百舌と紅葉	
	83	菊と波	
	84	菊と波	
向拝	85	松	柱の梅すべて
	86	龍	
	87	雲	
	88	山鵲と桜	87の奥

幣殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	89	唐獅子と牡丹、波	
軒回り	90	兎と牡丹	
	91	菊と波	屋根の奥

本殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	92	犀と波	
	93	犀と波	
本体	94	波と扇子、 軍配団扇	
	95	鳳凰と桐	
	96	鳳凰と桐	
	97	唐獅子	
	98	唐獅子	
	99	唐獅子	
	100	唐獅子	
	軒回り	101	小禽と粟、波
102		鴨と水葵、波	
103		波	121の奥
104		波	123の奥
105		波	
106		波	
107		波	
108		波	
109		波と雲	
110		波と雲	
111		波と雲	
112		波と雲	
113		波と雲	
114		波と雲	
115		雲	
116		雲	
117		雲	
118		雲	
119		雲	
120		雲	
121	雲		
122	龍		

本殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	123	龍	
	124	波と雲	屋根の奥
	125	波と雲	屋根の奥
	126	波と雲	屋根の奥
	127	波と雲	屋根の奥

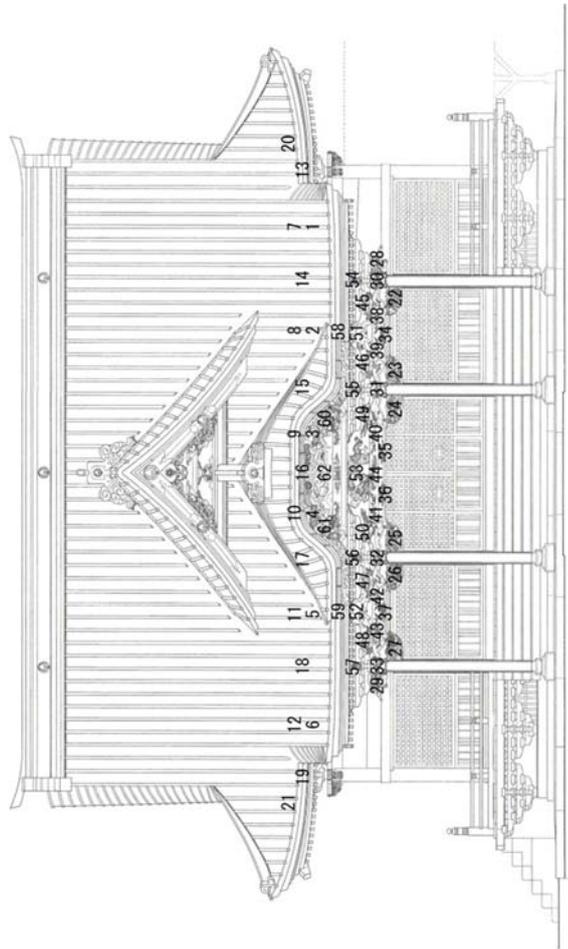
拜殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	128	唐獅子と牡丹、波	
		百舌と梅	
軒回り	130	菊と波	

本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	131	犀と波	
	132	犀と波	
	133	犀と波	
本体	134	波と扇子、軍配団扇	
	135	波と扇子、軍配団扇	
	136	波と扇子、軍配団扇	
	137	鳳凰と桐	
	138	鳳凰と桐	
	139	鳳凰と桐	
	140	唐獅子	
	141	唐獅子	
軒回り	142	翡翠と石菖、波	
	143	翡翠と石菖、波	
	144	翡翠と石菖、波	
	145	波	
	146	波	
	147	波	
	148	波	
	149	波	
	150	波	
	151	波と雲	
	152	波と雲	
	153	波と雲	
	154	波と雲	
	155	波と雲	
	156	波と雲	
	157	波と雲	
	158	波と雲	
	159	雲	

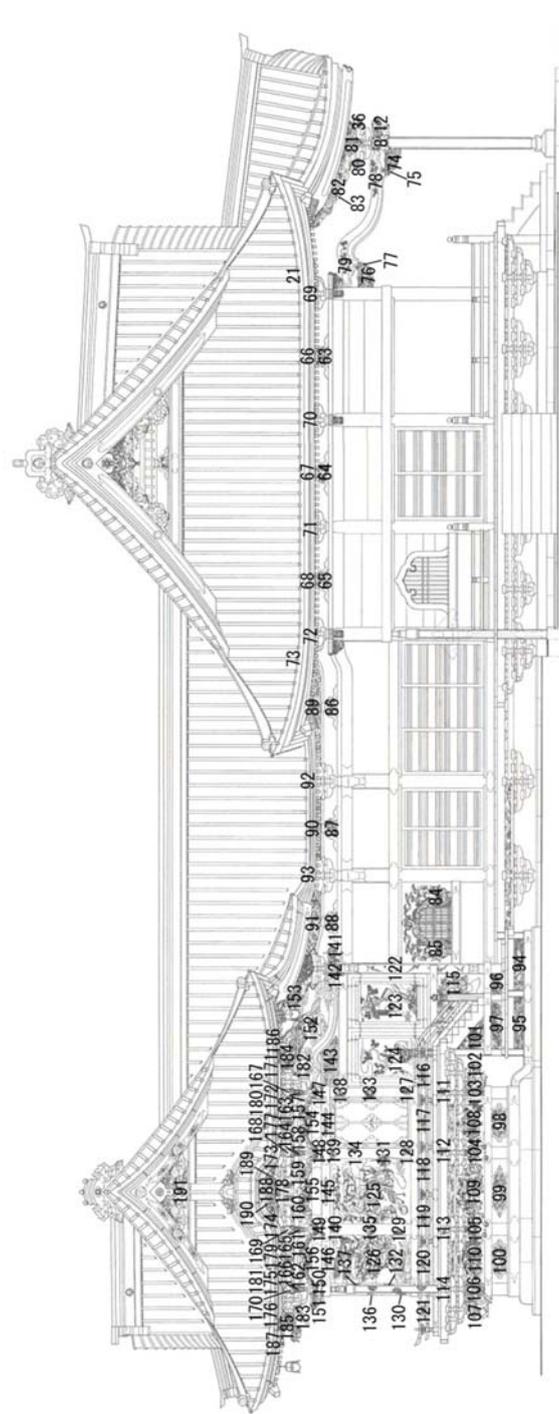
本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	160	雲	
	161	雲	
	162	雲	
	163	波と雲	
	164	波と雲	
	165	波と雲	
	166	波と雲	
	167	波と雲	
	168	波と雲	

表 50 妙義神社社殿の外装彫刻全数と配置一覧表

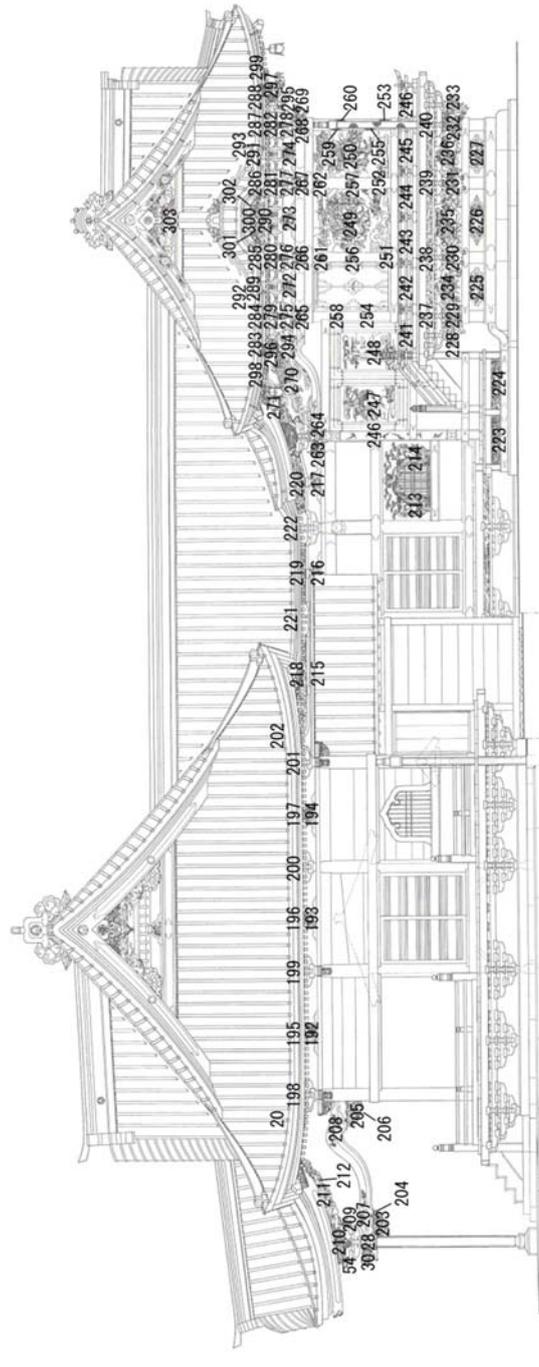
### 3-3. 歡喜院聖天堂



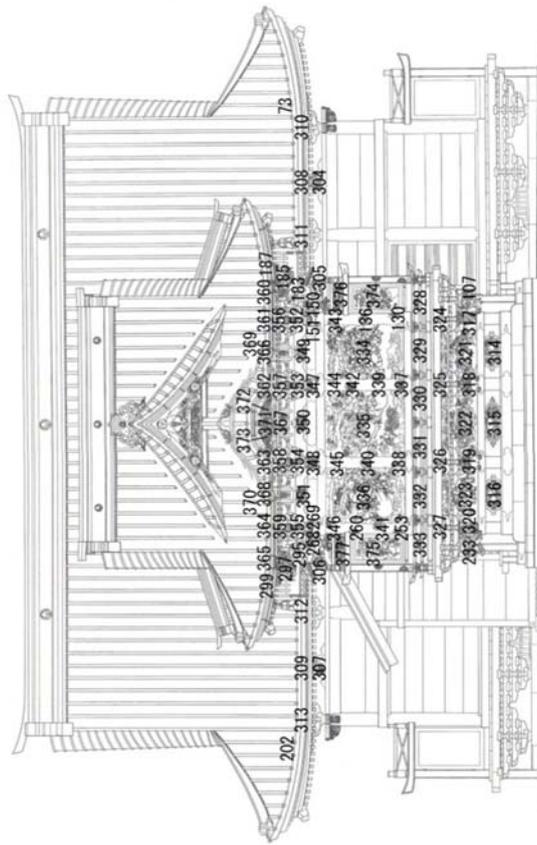
東立面図(正面)



南立面图



北立面图



西立面图

拝殿 東立面図(正面)				拝殿 東立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
軒回り	1	鶯と水葵	屋根の奥	向拝	34	水仙	
	2	山鵲と紫陽花	屋根の奥		35	水仙	
	3	頬白と梅	向拝の奥		36	水仙	
	4	瑠璃鳥と牡丹	向拝の奥		37	水仙	
	5	小禽と菊	屋根の奥		38	梅	
	6	鳩と椿	屋根の奥		39	梅	
	7	菊と流水	屋根の奥		40	梅	
	8	菊と流水	屋根の奥		41	梅	
	9	菊と流水	向拝の奥		42	梅	
	10	菊と流水	向拝の奥		43	梅	
	11	菊と流水	屋根の奥		44	山鵲	
	12	菊と流水	屋根の奥		45	邪鬼獅嚙	
	13	唐獅子	屋根の奥		46	邪鬼獅嚙	
	14	唐獅子	屋根の奥		47	邪鬼獅嚙	
	15	唐獅子	屋根の奥		48	邪鬼獅嚙	
	16	唐獅子	向拝の奥		49	龍亀	
	17	唐獅子	屋根の奥		50	龍亀	
	18	唐獅子	屋根の奥		51	虎	
	19	唐獅子	屋根の奥		52	虎	
	20	蜃	屋根の奥		53	龍	
	21	蜃	屋根の奥		54	鳳凰	
向拝	22	飛龍と波		向拝	55	鳳凰	
	23	鯨と波			56	鳳凰	
	24	鯉と波			57	鳳凰	
	25	鯉と波			58	蝶	屋根の奥 桁の蝶すべて
	26	鯨と波			59	蝶	屋根の奥 桁の蝶すべて
	27	飛龍と波			60	龍	
	28	猿			61	龍	
	29	猿			62	琴棋書画	
	30	唐獅子					
	31	唐獅子					
	32	唐獅子					
	33	唐獅子					

拜殿 南立面図				中殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
軒回り	63	翡翠と菖蒲、 流水		本体	84	龍	
	64	鶉と芙蓉			85	龍	
	65	鴨と河骨		軒回り	86	尾長雉と海棠	
	66	菊と流水	屋根の奥		87	雷神	
	67	菊と流水	屋根の奥		88	雷神	
	68	菊と流水	屋根の奥		89	菊と流水	
	69	唐獅子	屋根の奥		90	菊と流水	
	70	唐獅子	屋根の奥		91	菊と流水	
	71	唐獅子	屋根の奥		92	鳳凰	屋根の奥
	72	唐獅子	屋根の奥		93	鳳凰	屋根の奥
	73	蜃	屋根の奥				
向拝	74	菊					
	75	牡丹	74の奥				
	76	龍龜と波					
	77	犀と波	76の奥				
	78	梅					
	79	梅					
	80	鳳凰					
	81	鳳凰					
	82	猿と枇杷					
83	唐獅子と牡丹	82の奥					

奥殿 南立面図				奥殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
腰組	94	鴛鴦と水葵、流水		本体	123	猿と鷺、海棠、流水	
	95	鴛鴦と水葵、流水			124	猿と海棠	
	96	牡丹			125	唐子と鹿、鶴、梅、流水	
	97	猫と蝶、牡丹			126	唐子と亀、鶴、梅、竹、流水	
	98	犀と波			127	水葵	
	99	犀と波			128	菖蒲	
	100	犀と波			129	菊	
	101	栗鼠と葡萄			130	椿	
	102	龍			131	椿	
	103	波			132	菖蒲	
	104	唐獅子			133	麒麟	
	105	唐獅子			134	梅	
	106	波			135	犀と波	
	107	龍			136	兎と波	
108	唐子と蘇鉄、桜		137	牡丹			
109	唐子と梅		138	梅			
本体	110	唐子と鶏、牡丹、竹		139	鉄線		
	111	猿		140	水仙		
	112	猿		141	白沢		
	113	猿		142	麒麟		
	114	猿		143	菊		
	115	錦鶏と椿		144	鉄線		
	116	唐花		145	鉄線		
	117	唐花		146	鉄線		
	118	唐花		147	唐獅子		
	119	唐花		148	唐獅子		
	120	唐花		149	唐獅子		
	121	唐花		150	唐獅子		
	122	梅	柱の梅をすべて	151	唐獅子		

奥殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	152	鳳凰と雲	
	153	山鵲と梅、椿	
	154	鷗と水葵、 河骨、流水	
	155	鶺鴒と菖蒲、 流水	
	156	鷺と面高と流水	
	157	牡丹	
	158	牡丹	
	159	牡丹	
	160	牡丹	
	161	牡丹	
	162	牡丹	
	163	獏	
	164	獏	
	165	獏	
	166	獏	
	167	龍	
	168	龍	
	169	龍	
	170	龍	
	171	鳳凰	屋根の奥
	172	鳳凰	屋根の奥
	173	桐	屋根の奥
	174	桐	屋根の奥
	175	鳳凰	屋根の奥
	176	鳳凰	屋根の奥
	177	飛龍と波	屋根の奥
	178	飛龍と波	屋根の奥
	179	飛龍と波	屋根の奥
	180	龍	屋根の奥
	181	龍	屋根の奥

奥殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	182	象	
	183	象	
	184	蟹	
	185	蟹	
	186	龍	屋根の奥
	187	龍	屋根の奥
軒上	188	牡丹	
	189	唐花	188の奥
	190	唐子	189の奥
	191	鳳凰	

拜殿 北立面図				中殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
軒回り	192	孔雀と山茶花		本体	213	龍	
	193	鶴鴿と水仙			214	龍	
	194	目白と柿		軒回り	215	鷗と蓮	屋根の奥
	195	菊と流水	屋根の奥		216	雷神	
	196	菊と流水	屋根の奥		217	風神	
	197	菊と流水	屋根の奥		218	菊と流水	
	198	唐獅子	屋根の奥		219	菊と流水	
	199	唐獅子	屋根の奥		220	菊と流水	
	200	唐獅子	屋根の奥		221	鳳凰	屋根の奥
	201	唐獅子	屋根の奥		222	鳳凰	屋根の奥
	202	蜃	屋根の奥				
向拝	203	菊					
	204	牡丹	204の奥				
	205	龍龜と波					
	206	犀と波	206の奥				
	207	梅					
	208	梅					
	209	鳳凰					
	210	鳳凰					
	211	猿と枇杷					
	212	唐獅子と牡丹	211の奥				

奥殿 北立面図				奥殿 北立面図				
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考	
腰組	223	鴛鴦と水葵、 流水		本体	251	海棠		
	224	鴛鴦と水葵、 流水			252	牡丹		
	225	犀と波			253	竹		
	226	犀と波			254	虎		
	227	犀と波			255	鳳凰		
	228	龍			256	鹿と紅葉		
	229	波			257	唐獅子		
	230	唐獅子			258	雁		
	231	唐獅子			259	菖蒲		
	232	波			260	薔薇		
	233	龍			261	桐		
	234	唐子と椿			262	山鵲		
	235	唐子と梅、竹			263	白沢		
	236	唐子と芙蓉			264	麒麟		
	237	猿			265	唐獅子		
	238	猿			266	唐獅子		
	239	猿			267	唐獅子		
	240	猿			268	唐獅子		
	本体	241	唐花			269	唐獅子	
		242	唐花			270	鳳凰と雲	
243		唐花		271	山鵲と梅、椿			
244		唐花		272	翡翠と水仙			
245		唐花		273	鶉と芙蓉			
246		唐花		274	鶉と紫陽花			
246		梅	柱の梅をすべて	275	獺			
247		鶯と流水		276	獺			
248		滝		277	獺			
249		唐子と椿、 蜜柑、流水、 弁天双六		278	獺			
250	唐子と蜜柑、竹		279	龍				
			280	龍				
			281	龍				
			282	龍				

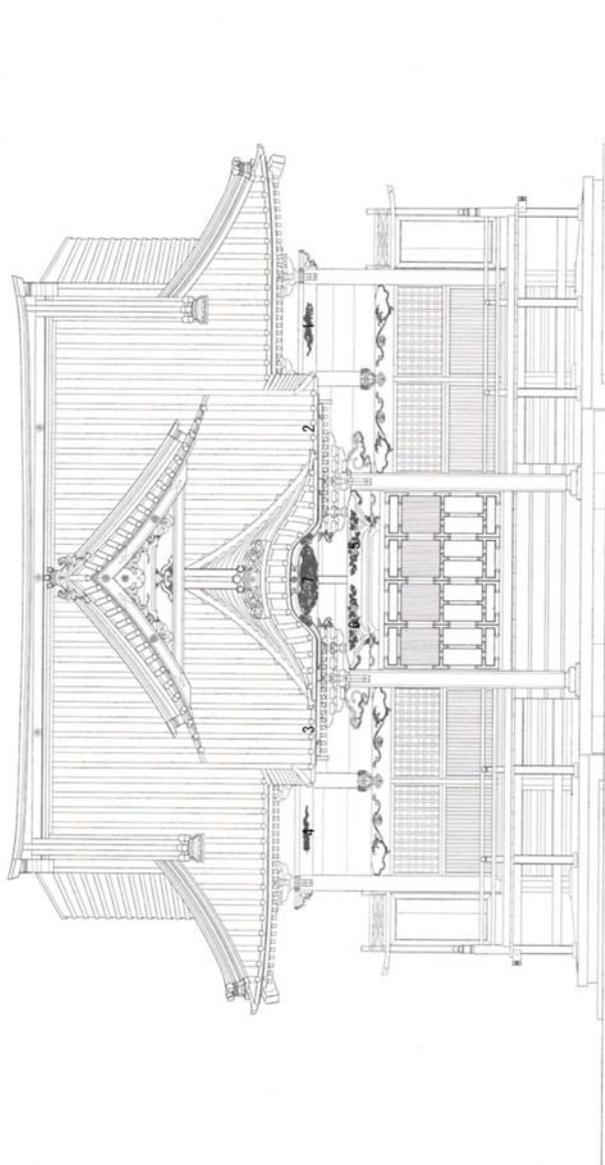
奥殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	283	鳳凰	屋根の奥
	284	鳳凰	屋根の奥
	285	桐	屋根の奥
	286	桐	屋根の奥
	287	鳳凰	屋根の奥
	288	鳳凰	屋根の奥
	289	飛龍と波	屋根の奥
	290	飛龍と波	屋根の奥
	291	飛龍と波	屋根の奥
	292	龍	屋根の奥
	293	龍	屋根の奥
	294	象	
	295	象	
	296	蜃	
	297	蜃	
	298	龍	屋根の奥
299	龍	屋根の奥	
軒上	300	牡丹	
	301	唐花	300の奥
	302	唐子	300の奥
	303	鳳凰	

拜殿 西立面図				奥殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
軒回り	304	木菟と柏		腰組	314	犀と波	
	305	雁と面高			315	犀と波	
	306	鳩と桔梗			316	犀と波	
	307	鶺鴒と緋扇			317	波	
	308	菊と流水	屋根の奥		318	唐獅子	
	309	菊と流水	屋根の奥		319	唐獅子	
	310	唐獅子	屋根の奥		320	波	
	311	唐獅子	屋根の奥		321	唐子と躑躅、 菖蒲	
	312	唐獅子	屋根の奥		322	唐子と桃、 水葵、流水	
	313	唐獅子	屋根の奥		323	唐子と鳶	
本体				324	猿		
				325	猿		
				326	猿		
				327	猿		
				328	唐花		
				329	唐花		
				330	唐花		
				331	唐花		
				332	唐花		
				333	唐花		
			334	唐子と鯛、 桐、梅、流水			
			335	唐子と桐、牡丹			
			336	唐子と桐			
			337	宝相華			
			338	鉄線			
			339	燕と波			
			340	唐獅子			
			341	菊			
			342	龍			

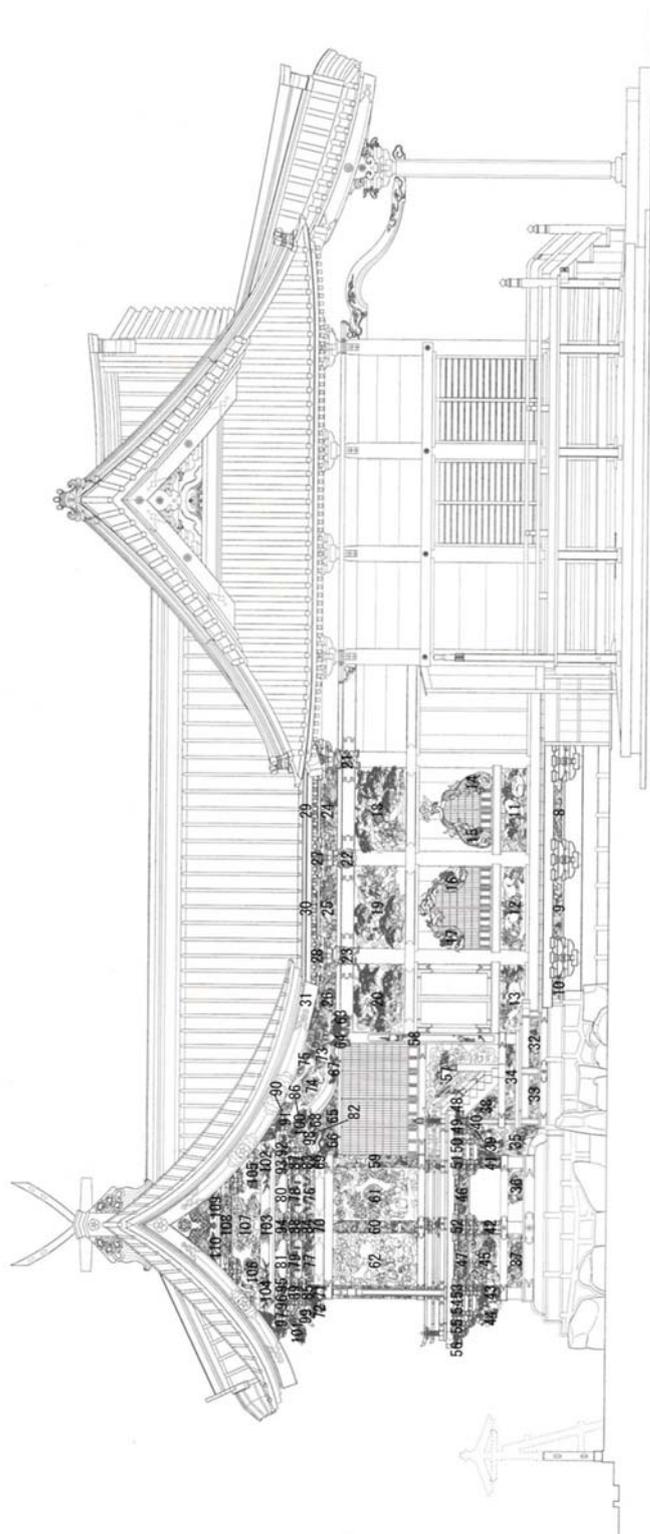
奥殿 西立面図				奥殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
本体	343	朝顔		脇障子	375	雉と柏	
	344	菊			376	菊と流水	
	345	牡丹			377	菊と流水	
	346	桐					
	347	唐獅子					
	348	唐獅子					
	軒回り	349	燕と波				
350		瑠璃鳥と鉄線					
351		きびたきと菊					
352		猿					
353		猿					
354		猿					
355		猿					
356		龍					
357		龍					
358		龍					
359		龍					
360		鳳凰	屋根の奥				
361		鳳凰	屋根の奥				
362		桐	屋根の奥				
363	桐	屋根の奥					
364	鳳凰	屋根の奥					
365	鳳凰	屋根の奥					
366	飛龍と波	屋根の奥					
367	飛龍と波	屋根の奥					
368	飛龍と波	屋根の奥					
369	龍	屋根の奥					
370	龍	屋根の奥					
軒上	371	菊					
	372	牡丹	371の奥				
	373	唐子	371の奥				
脇障子	374	雉と椿					

表 51 歙喜院聖天堂の外装彫刻全数と配置一覧表

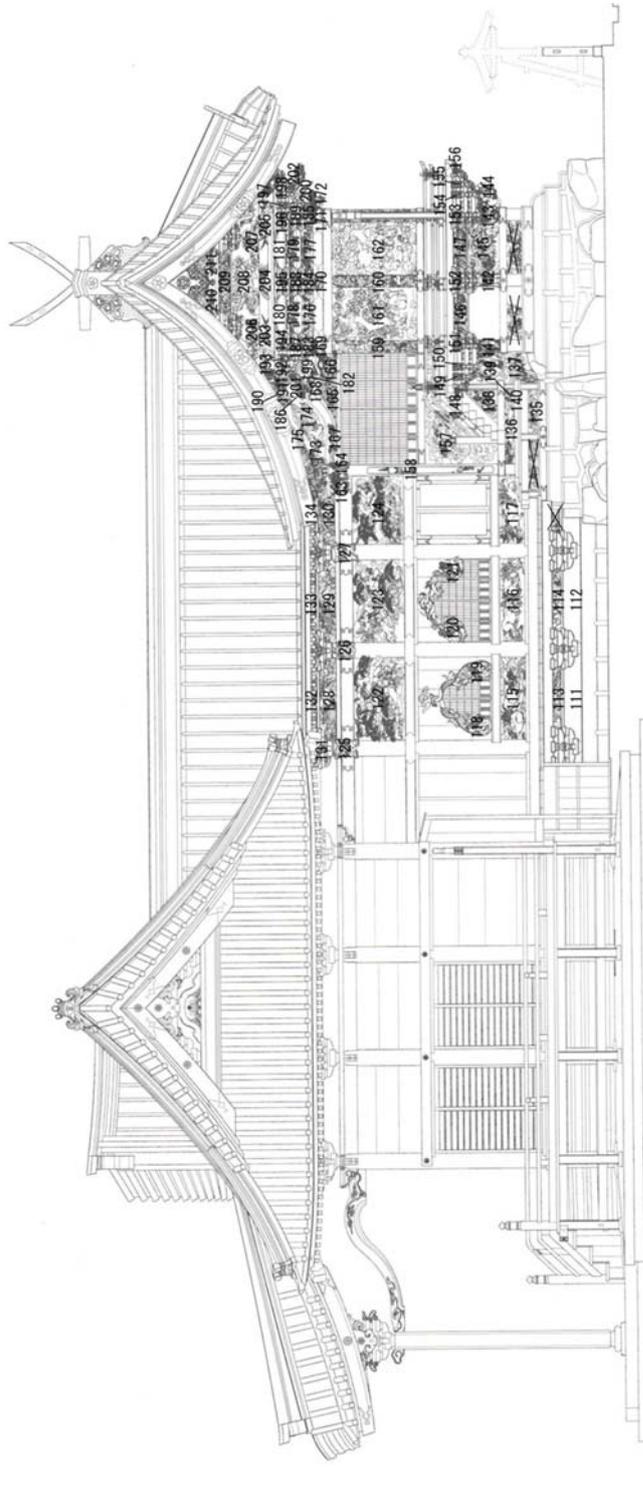
3-4. 桐生天満宮



南立面图(正面)

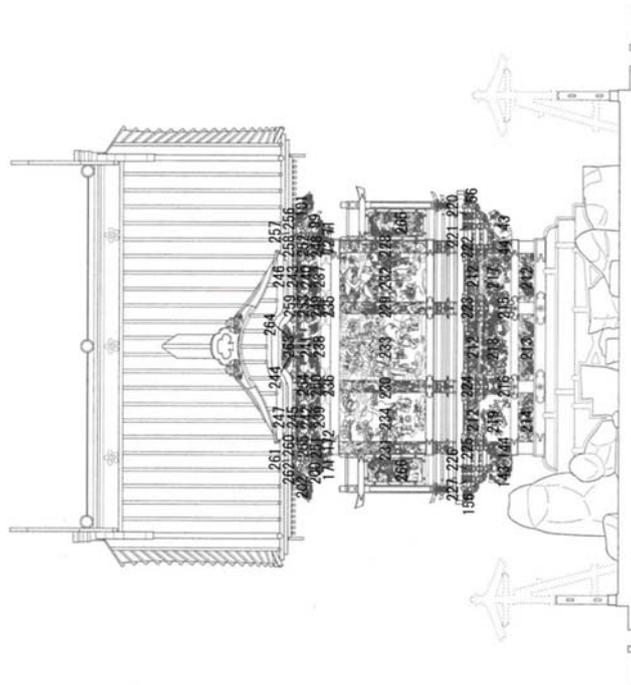


西立面图



※この図面は西立面図を反転  
したものを使用している

東立面図



北立面图

拝殿 南立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	1	龍	
	2	龍	屋根の奥
	3	龍	屋根の奥
	4	龍	
向拝	5	梅	
	6	梅	
	7	鳳凰	

幣殿 西立面図				本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
腰組	8	唐子と波		腰組	32	鴨と沢瀉、波	
	9	波			33	鴨と沢瀉、波	
	10	雲と波			34	鴨と河骨	
本体	11	牛と蒲公英、 姫射干			35	鯉と波	
	12	牛と笹、甘草			36	犀と波	
	13	牛と撫子			37	犀と波	
	14	龍			38	栗鼠と葡萄	
	15	龍			腰組	39	鳩と梅
	16	龍		40		鳩と松	39の奥
	17	龍		41		鳩と松	
	18	鷹と松		42		龍馬	
	19	鷹と松		43		鳩と松	
	20	鷹と松		44		鳩と松	
	21	唐獅子		45		唐子と葡萄	
	22	牡丹		46		桜と波	
	23	唐獅子		47		桜と波	
軒回り	24	鳳凰と雲		48		唐獅子	
	25	鳳凰と雲		49		桃	
	26	鳳凰と雲		50		桃	
	27	柿		51		桃	
	28	柿		52	桃		
	29	菊と波		53	桃		
	30	菊と波		54	桃		
	31	菊と波		55	桃		
本体	57	麒麟と雲		56	唐獅子		
	58	山鵲と梅	柱の山鵲と梅すべて	本体	57	麒麟と雲	
	59	龍と波			58	山鵲と梅	柱の山鵲と梅すべて
	60	龍と波			59	龍と波	
	61	唐子と紅葉、雲			60	龍と波	
	62	唐子と柏、菊			61	唐子と紅葉、雲	
	63	唐獅子			62	唐子と柏、菊	
				63	唐獅子		

本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	64	猿	
	65	鉄線	
	66	鷹と松	
	67	菊	
	68	菊	
	69	唐獅子	
	70	牡丹	
	71	唐獅子	
	72	唐獅子	
軒回り	73	桐	
	74	鳳凰と雲	
	75	錦鶏と牡丹	
	76	鷺と河骨	
	77	鶴鴿と椿、水仙	
	78	菊と鉄線、牡丹	
	79	菊と鉄線、牡丹	
	80	飛龍と波	
	81	飛龍と波	
	82	猿	98の奥
	83	猿	
	84	猿	
	85	猿	
	86	蟹	100の奥
	87	蟹	
	88	蟹	
	89	蟹	
	90	唐獅子	91の奥
	91	牡丹	
	92	牡丹	
	93	唐獅子	
	94	牡丹	
	95	唐獅子	

本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	96	牡丹	
	97	唐獅子	
	98	象	
	99	象	
	100	蟹	
	101	蟹	
	102	梅	
	103	山鵲	
軒上	104	梅	
	105	唐獅子	
	106	唐獅子	
	107	牡丹	
	108	菊と波	
	109	松	
	110	松	

幣殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	111	猫と蝶、牡丹	
	112	猫と蝶、牡丹	
	113	波	
	114	波	
本体	115	牛と桔梗、河骨	
	116	牛と紫陽花	
	117	牛と沢瀉、波	
	118	龍	
	119	龍	
	120	龍	
	121	龍	
	122	鷹と松	
	123	鷹と松	
	124	鷹と松	
	125	唐獅子	
軒回り	126	牡丹	
	127	唐獅子	
	128	鳳凰と雲	
	129	鳳凰と雲	
	130	鳳凰と雲	
	131	柿	
	132	菊と波	
133	菊と波		
134	菊と波		

本殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	135	鴨と河骨、波	
	136	鴛鴦と蒲公英、河骨、波	
	137	鯉と波	
	138	栗鼠と葡萄	
	139	鳩と梅	
	140	鳩と松	139の奥
腰組	141	鳩と松	
	142	龍馬	
	143	鳩と松	
	144	鳩と松	
	145	唐子と葡萄	
	146	桜と波	
	147	桜と波	
	148	唐獅子	
	149	桃	
	150	桃	
	151	桃	
	152	桃	
	153	桃	
	154	桃	
	155	桃	
	156	唐獅子	
	157	麒麟と雲	
	158	山鵲と梅	柱の山鵲と梅すべて
	159	龍と波	
	160	龍と波	
161	唐子と象、鳩、桜、雲		
162	唐子と虎、梅、雲		
163	唐獅子		

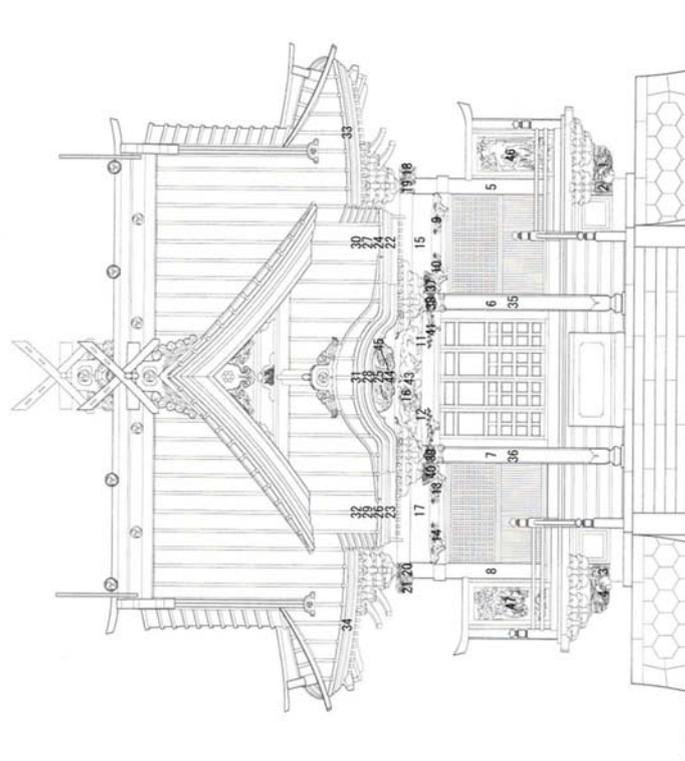
本殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	164	猿	
	165	鉄線	
	166	鷹と松	
	167	菊	
	168	菊	
	169	唐獅子	
	170	牡丹	
	171	唐獅子	
	172	唐獅子	
軒回り	173	桐	
	174	鳳凰と雲	
	175	錦鶏と牡丹	
	176	鴨と梅	
	177	銀鶏と躑躅	
	178	菊と鉄線、牡丹	
	179	菊と鉄線、牡丹	
	180	飛龍と波	
	181	飛龍と波	
	182	猿	199の奥
	183	猿	
	184	猿	
	185	猿	
	186	蟹	201の奥
	187	蟹	
	188	蟹	
	189	蟹	
190	唐獅子	91の奥	
191	牡丹		
192	唐獅子		
193	牡丹		
194	唐獅子		
195	牡丹		

本殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	196	唐獅子	
	197	牡丹	
	198	唐獅子	
	199	象	
	200	象	
	201	蟹	
	202	蟹	
	203	梅	
	204	山鵲	
205	梅		
軒上	206	唐獅子と牡丹	
	207	唐獅子	
	208	唐獅子と牡丹、雲	
	209	菊と波	
	210	松	
	211	松	

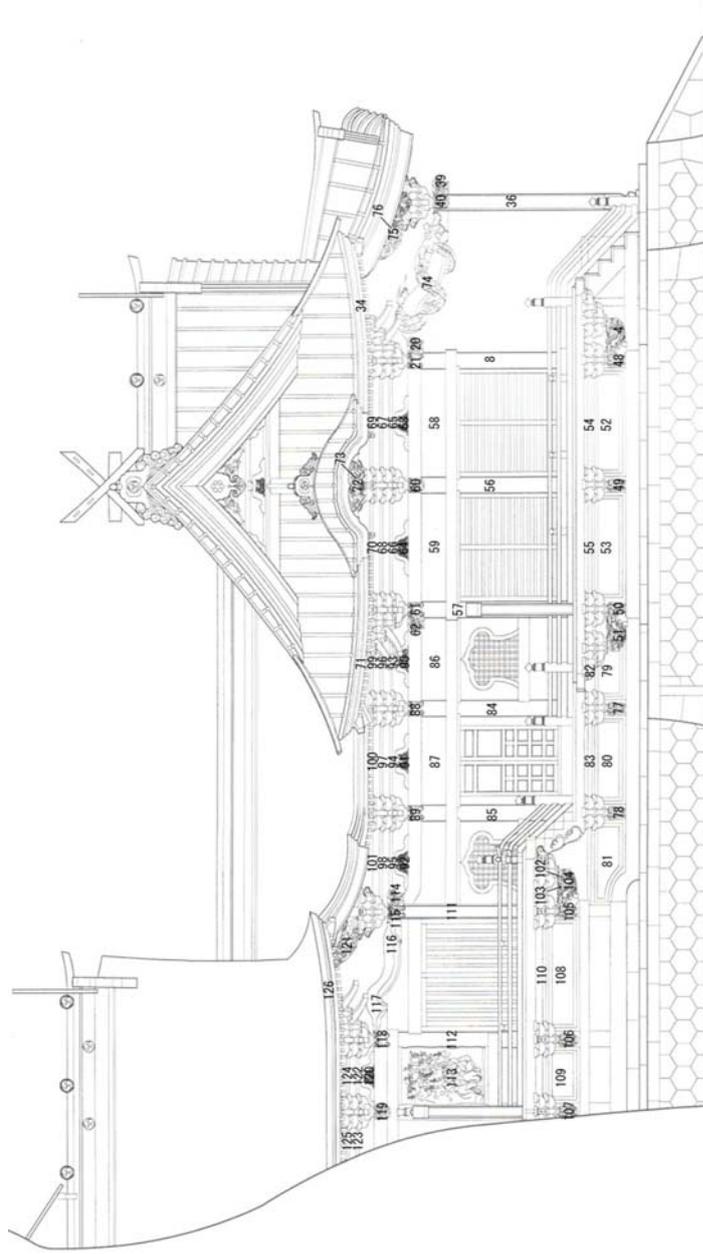
本殿 北立面図				本殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
腰組	212	犀と波		軒回り	243	飛龍と波	屋根の奥
	213	犀と波			244	飛龍と波	263の奥
	214	犀と波			245	飛龍と波	屋根の奥
	215	龍馬			246	鉄線	屋根の奥
	216	龍馬			247	鉄線	屋根の奥
	217	唐子と桜、雲			248	獺	
	218	唐子と松、雲			249	獺	
	219	唐子と松、雲			250	獺	
	220	桃			251	獺	
	221	桃			252	蜃	
	222	桃			253	蜃	
	223	桃			254	蜃	
	224	桃			255	蜃	
	225	桃			256	唐獅子	屋根の奥
本体	226	桃		257	牡丹	屋根の奥	
	227	桃		258	唐獅子	屋根の奥	
	228	龍と波		259	唐獅子	屋根の奥	
	229	龍と波		260	唐獅子	屋根の奥	
	230	龍と波		261	牡丹	屋根の奥	
	231	龍と波		262	唐獅子	屋根の奥	
	232	唐子と松、 薔薇、雲		軒上	263	菊	
	233	唐子と竹、雲			264	木菟と椿	263の奥
	234	唐子と松、雲		脇障子	265	鷹と松、波、雲	
	235	唐獅子			266	鷹と松、波、雲	
236	唐獅子						
軒回り	237	鶉と菊、粟					
	238	吐綬鶏と松、椿					
	239	鶏と鉄線					
	240	菊と鉄線、牡丹					
	241	菊と鉄線、牡丹					
	242	菊と鉄線、牡丹					

表 52 桐生天満宮の外装彫刻全数と配置一覧表

### 3-5. 榛名神社社殿

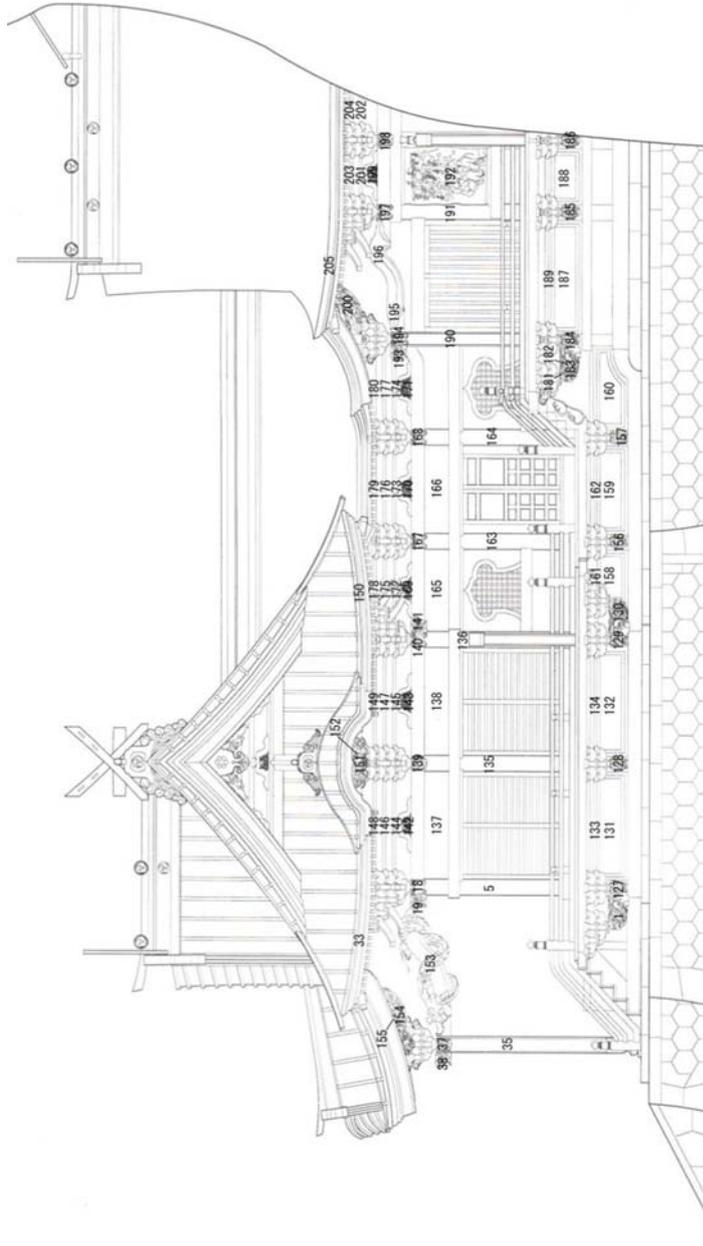


南立面图(正面)



※この図面は東立面図を反転  
したものを使用している

西立面图



東立面图

拝殿 南立面図(正面)				拝殿 南立面図(正面)				
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考	
腰組	1	犀と波		軒回り	33	蟹	屋根の奥	
	2	龍龜と波			34	蟹	屋根の奥	
	3	龍龜と波			向拝	35	梅	柱の梅すべて
	4	犀と波				36	梅	柱の梅すべて
本体	5	龍と波、雲		37		牡丹		
	6	波	向拝の奥	38		唐獅子		
	7	波	向拝の奥	39		唐獅子		
	8	龍と波、雲		40		牡丹		
	9	菊と波		41		鶯と梅		
	10	菊と波		42		鶯と梅		
	11	菊と波	向拝の奥	43		鷹と柏、波		
	12	菊と波	向拝の奥	44		鳳凰と雲		
	13	菊と波		45		唐子と松	44の奥	
	14	菊と波		脇障子	46	唐子と牡丹、 波、雲		
	15	雀と桜			47	唐子と松、 波、雲		
	16	雀と桜	向拝の奥					
	17	雀と桜						
	18	唐獅子						
	19	唐獅子						
	20	唐獅子						
	21	唐獅子						
軒回り	22	鳩と松	屋根の奥					
	23	鷹と松	屋根の奥					
	24	馬と波	屋根の奥					
	25	馬と波	向拝の奥					
	26	馬と波	屋根の奥					
	27	鳩と波	屋根の奥					
	28	鳩と波	向拝の奥					
	29	鳩と波	屋根の奥					
	30	鳩と波	屋根の奥					
	31	鳩と波	向拝の奥					
	32	鳩と波	屋根の奥					

拝殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	48	龍龜と波	
	49	犀と波	
	50	龍龜と波	
	51	犀と波	
	52	雀と波、雲	
	53	雀と栗、波、雲	
	54	龍と波	
	55	龍と波	
本体	56	龍と波、雲	
	57	龍と波、雲	
	58	鶴と松	
	59	鶴と松	
	60	牡丹	
	61	唐獅子	
	62	唐獅子	
軒回り	63	雁と波	
	64	吐綬鶏と桜	
	65	馬と波	
	66	馬と波	
	67	鳩と波	
	68	鳩と波	
	69	鳩と波	
	70	鳩と波	
	71	蜃	屋根の奥
軒上	72	龍龜と波	
	73	唐子と松、雲	72の奥
向拝	74	龍	
	75	猿と桃	
	76	山鵲と菊	75の奥

間殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	77	龍龜と波	
	78	龍龜と波	
	79	雀と波、雲	
	80	雀と波、雲	
	81	雀と波、雲	
	82	龍と波	
	83	龍と波	
本体	84	龍と波、雲	
	85	龍と波、雲	
	86	鶴と松	
	87	鶴と松	
	88	唐獅子	
	89	唐獅子	
軒回り	90	鶉と沢瀉	
	91	錦鶏	
	92	鴨と河骨	
	93	馬と波	
	94	馬と波	
	95	馬と波	
	96	鳩と波	
	97	鳩と波	
	98	鳩と波	
	99	鳩と波	
	100	鳩と波	
	101	鳩と波	

幣殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	102	鳩と松	103の奥
	103	鳩と松	104の奥
	104	鳩と松	
	105	鳩と松	
	106	松	
	107	鳩と松	
	108	唐子と雀、 粟、波、雲	
	109	粟と雲	
	110	龍と波	
本体	111	梅	柱の梅すべて
	112	龍と波、雲	
	113	唐子と蘇鉄、 竹、雲	
	114	唐獅子	
	115	獏	
	116	梅	
	117	梅	
	118	牡丹	
	119	唐獅子	
軒回り	120	山鵲と杜若	
	121	牡丹	
	122	飛龍と波	
	123	飛龍と波	
	124	波と雲	
	125	波と雲	
	126	蜃	

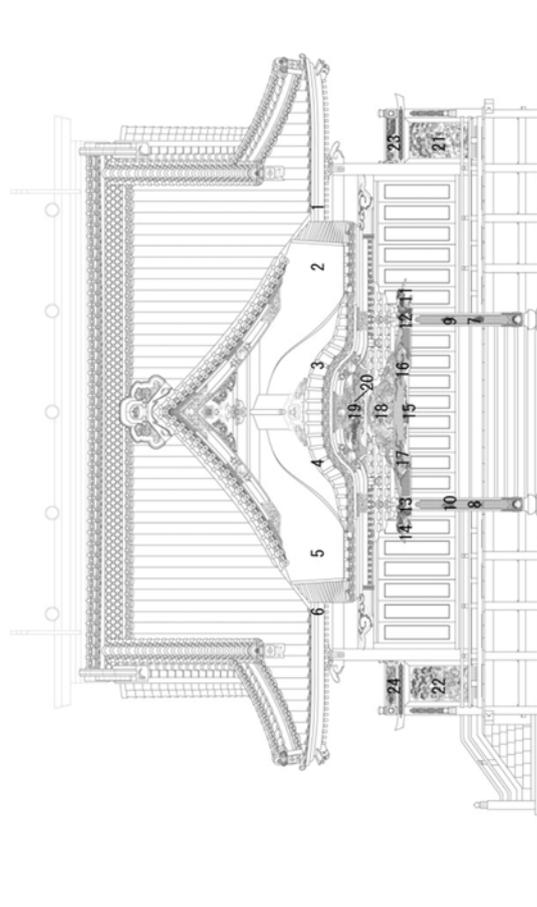
拝殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	127	龍龜と波	
	128	犀と波	
	129	龍龜と波	
	130	犀と波	
	131	雀と波、雲	
	132	雀と粟、波、雲	
	133	龍と波	
	134	龍と波	
本体	135	龍と波、雲	
	136	龍と波、雲	
	137	鶴と松	
	138	鶴と松	
	139	牡丹	
	140	唐獅子	
	141	唐獅子	
軒回り	142	九輪草	
	143	鷺と水葵	
	144	馬と波	
	145	馬と波	
	146	鳩と波	
	147	鳩と波	
	148	鳩と波	
	149	鳩と波	
	150	蜃	屋根の奥
軒上	151	龍龜と波	
	152	唐子と松、雲	151の奥
向拝	153	龍	
	154	猿と桃	
	155	山鵲と菊	154の奥

間殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	156	龍龜と波	
	157	龍龜と波	
	158	雀と波、雲	
	159	雀と波、雲	
	160	雀と波、雲	
	161	龍と波	
	162	龍と波	
	本体	163	龍と波、雲
164		龍と波、雲	
165		鶴と松	
166		鶴と松	
167		唐獅子	
168		唐獅子	
軒回り	169	懸巢と紅葉	
	170	雉と桔梗	
	171	雉と牡丹	
	172	馬と波	
	173	馬と波	
	174	馬と波	
	175	鳩と波	
	176	鳩と波	
	177	鳩と波	
	178	鳩と波	
	179	鳩と波	
	180	鳩と波	

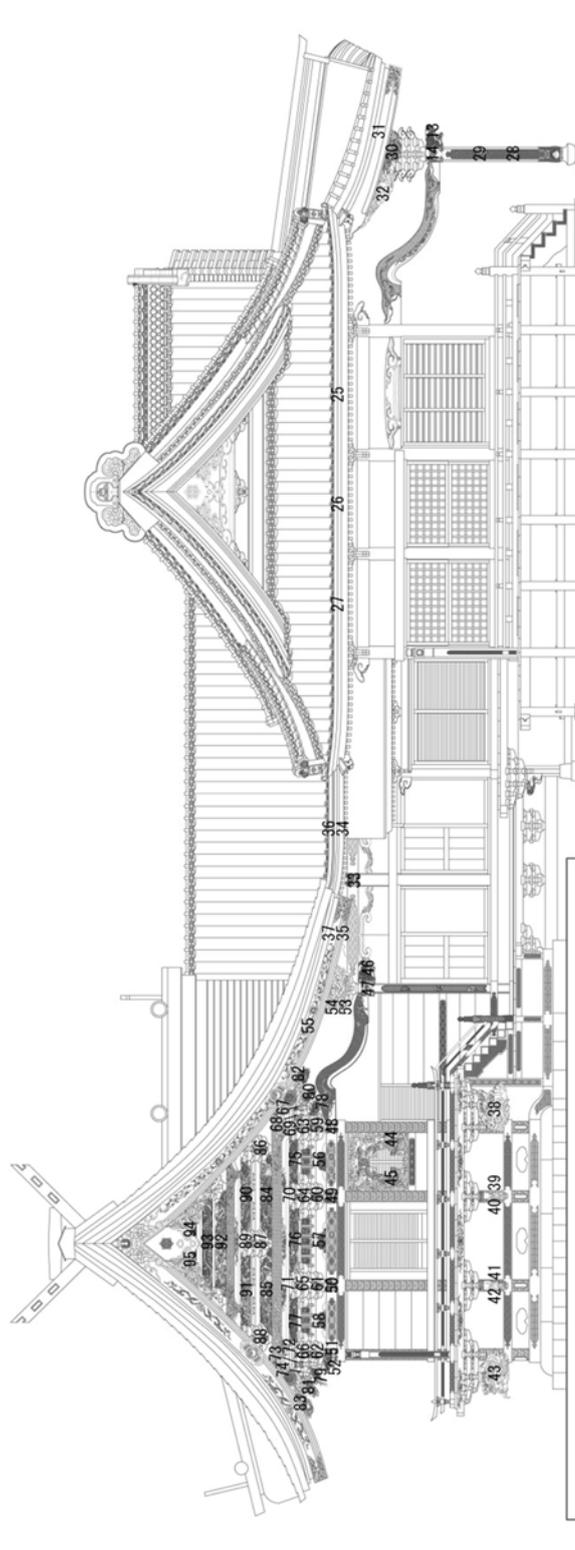
幣殿 東立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	181	鳩と松	182の奥
	182	鳩と松	183の奥
	183	鳩と松	
	184	鳩と松	
	185	松	
	186	鳩と松	
	187	唐子と雀、 粟、波、雲	
	188	粟と雲	
	189	龍と波	
本体	190	梅	柱の梅すべて
	191	龍と波、雲	
	192	唐子と蘇鉄、 竹、雲	
	193	唐獅子	
	194	獏	
	195	梅	
	196	梅	
	197	牡丹	
	198	唐獅子	
軒回り	199	鷹と柏	
	200	牡丹	
	201	飛龍と波	
	202	飛龍と波	
	203	波と雲	
	204	波と雲	
	205	唇	

表 53 榛名神社社殿の外装彫刻全数と配置一覧表

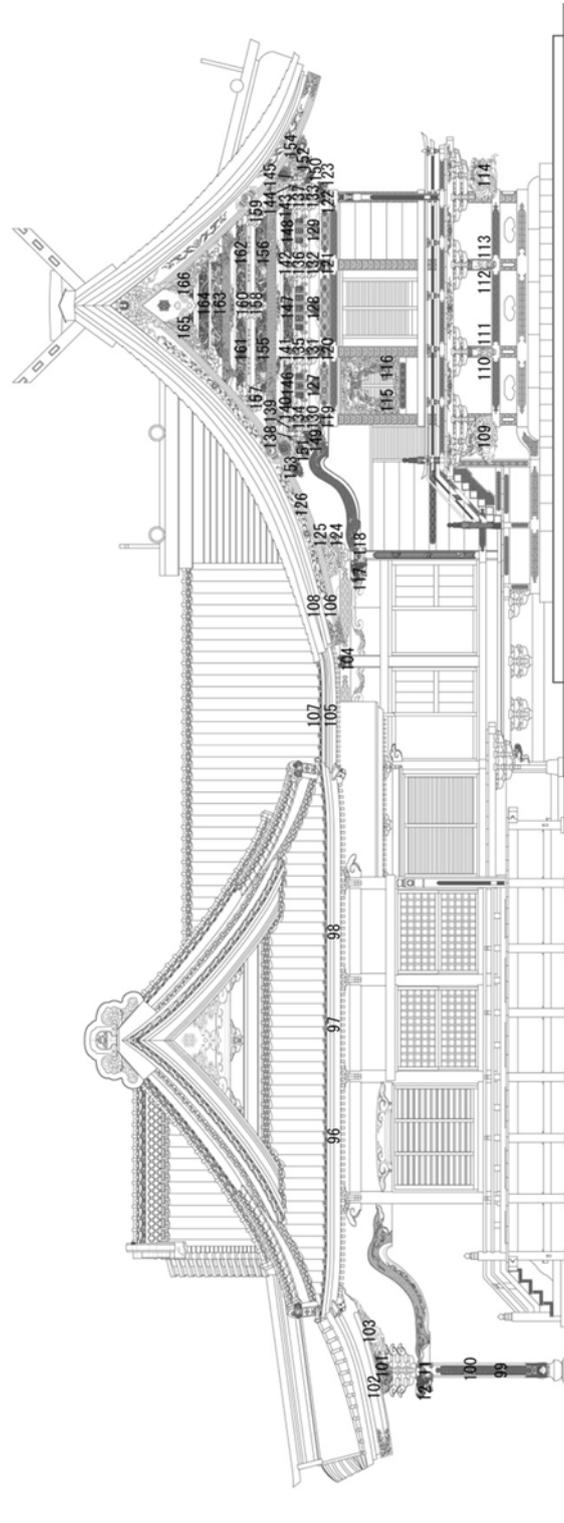
### 3-6. 箭弓稻荷神社社殿



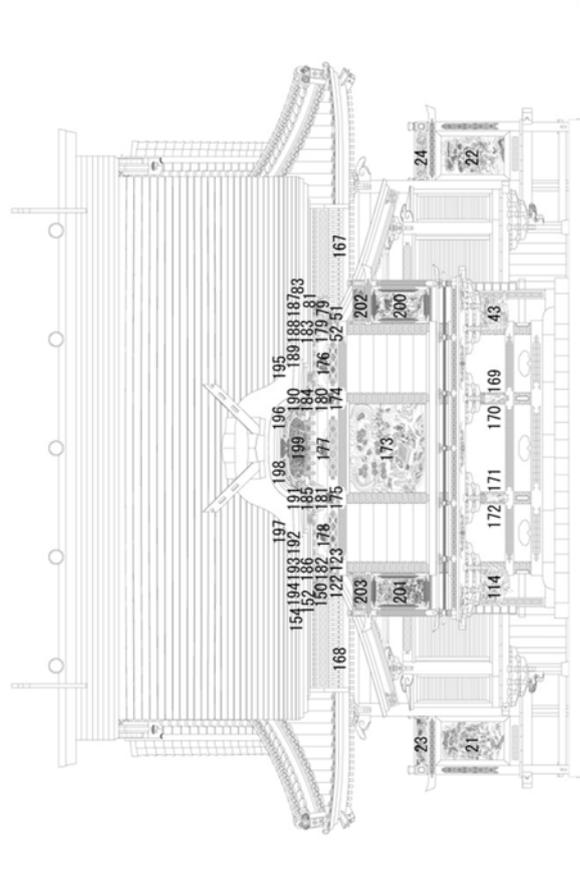
東立面图(正面)



南立面图



北立面图



西立面图

拝殿 東立面図(正面)			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	1	菊と流水	屋根の奥
	2	菊と流水	屋根の奥
	3	菊と流水	屋根の奥
	4	菊と流水	屋根の奥
	5	菊と流水	屋根の奥
	6	菊と流水	屋根の奥
向拝	7	龍	
	8	龍	
	9	龍	
	10	龍	
	11	獏	
	12	唐獅子	
	13	唐獅子	
	14	獏	
	15	龍馬	
	16	瑠璃鳥と波	
	17	瑠璃鳥と波	
	18	龍と雲	
	19	鳳凰	
20	唐子と松	19の奥	
脇障子	21	唐子と松	
	22	唐子と松	
	23	鳳凰と雲	
	24	鳳凰と雲	

拝殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	25	菊と流水	屋根の奥
	26	菊と流水	屋根の奥
	27	菊と流水	屋根の奥
向拝	28	松	
	29	梅	
	30	鳳凰	
	31	蒲公英	屋根の奥
	32	菊	

幣殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	33	唐獅子	
軒回り	34	紅葉	屋根の奥
	35	音呼	屋根の奥
	36	燕と波	屋根の奥
	37	燕と波	屋根の奥

本殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	38	龍	
	39	馬	
	40	犀と波	
	41	犀と波	
	42	犀と波	
	43	龍	
本体	44	龍	
	45	龍	
	46	唐獅子	
	47	獏	
	48	唐獅子	
	49	唐獅子	
	50	唐獅子	
	51	唐獅子	
	52	唐獅子	
軒回り	53	唐獅子	
	54	唐獅子	屋根の奥
	55	鳳凰と牡丹	屋根の奥
	56	山鵲と梅	
	57	唐子	
	58	燕と梅	
	59	獏	
	60	獏	
	61	獏	
	62	獏	
	63	龍	
	64	龍	
	65	龍	
	66	龍	
	67	鳳凰	
	68	桐	
	69	鳳凰	

本殿 南立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	70	鳳凰	
	71	鳳凰	
	72	鳳凰	
	73	桐	
	74	鳳凰	
	75	飛龍と波	
	76	燕と波	
	77	飛龍と波	
	78	獏	
	79	獏	
	80	龍	
	81	龍	
	82	蟹	
83	蟹		
軒上	84	龍と波	
	85	龍と波	
	86	龍	
	87	波	
	88	龍	
	89	牡丹	
	90	菊と流水	
	91	菊と流水	
	92	龍と雲	
	93	亀と波	
	94	鳳凰と雲	屋根の奥
	95	鳳凰と雲	屋根の奥

拝殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	96	菊と流水	屋根の奥
	97	菊と流水	屋根の奥
	98	菊と流水	屋根の奥
向拝	99	松	
	100	梅	
	101	鳳凰	
	102	蒲公英	屋根の奥
	103	菊	

幣殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
本体	104	唐獅子	
軒回り	105	紅葉	屋根の奥
	106	音呼	屋根の奥
	107	燕と波	屋根の奥
	108	燕と波	屋根の奥

本殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
腰組	109	龍	
	110	馬	
	111	犀と波	
	112	犀と波	
	113	犀と波	
	114	龍	
本体	115	龍	
	116	龍	
	117	唐獅子	
	118	獏	
	119	唐獅子	
	120	唐獅子	
	121	唐獅子	
	122	唐獅子	
	123	唐獅子	
軒回り	124	唐獅子	
	125	唐獅子	屋根の奥
	126	鳳凰と牡丹	屋根の奥
	127	山鵲と梅	
	128	唐子	
	129	燕と梅	
	130	獏	
	131	獏	
	132	獏	
	133	獏	
	134	龍	
	135	龍	
	136	龍	
	137	龍	
	138	鳳凰	
	139	桐	
	140	鳳凰	

本殿 北立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
軒回り	141	鳳凰	
	142	鳳凰	
	143	鳳凰	
	144	桐	
	145	鳳凰	
	146	飛龍と波	
	147	燕と波	
	148	飛龍と波	
	149	獏	
	150	獏	
	151	龍	
	152	龍	
	153	蟹	
	154	蟹	
軒上	155	龍と波	
	156	龍と波	
	157	龍	
	158	波	
	159	龍	
	160	牡丹	
	161	菊と流水	
	162	菊と流水	
	163	龍と雲	
	164	亀と波	
	165	鳳凰と雲	屋根の奥
	166	鳳凰と雲	屋根の奥

拜殿 西立面図				本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考		番号	彫刻の種類	備考
軒回り	167	菊と流水	屋根の奥	腰組	169	亀と波	
	168	菊と流水	屋根の奥		170	亀と波	
					171	亀と波	
					172	亀と波	
				本体	173	唐子	
					174	唐獅子	
					175	唐獅子	
				軒回り	176	狐と蒲公英	
					177	唐子	
					178	音呼と葡萄	
					179	獺	
					180	獺	
					181	獺	
					182	獺	
					183	龍	屋根の奥
					184	龍	屋根の奥
					185	龍	屋根の奥
					186	龍	屋根の奥
					187	鳳凰	屋根の奥
					188	桐	屋根の奥
					189	鳳凰	屋根の奥
					190	鳳凰	屋根の奥
					191	鳳凰	屋根の奥
					192	鳳凰	屋根の奥
				193	桐	屋根の奥	
				194	鳳凰	屋根の奥	
				195	飛龍と波	屋根の奥	
				196	燕と波	199の奥	
				197	飛龍と波	屋根の奥	
軒上				198	唐子	199の奥	
				199	飛龍と波		

本殿 西立面図			
	番号	彫刻の種類	備考
脇障子	200	唐獅子と牡丹	
	201	唐獅子と牡丹	
	202	龍と雲	
	203	龍と雲	

表 54 箭弓稻荷神社社殿の外装彫刻全数と配置一覧表

4. 箭弓稻荷神社社殿写真・図面資料  
4-1. 現状写真



航空写真 1



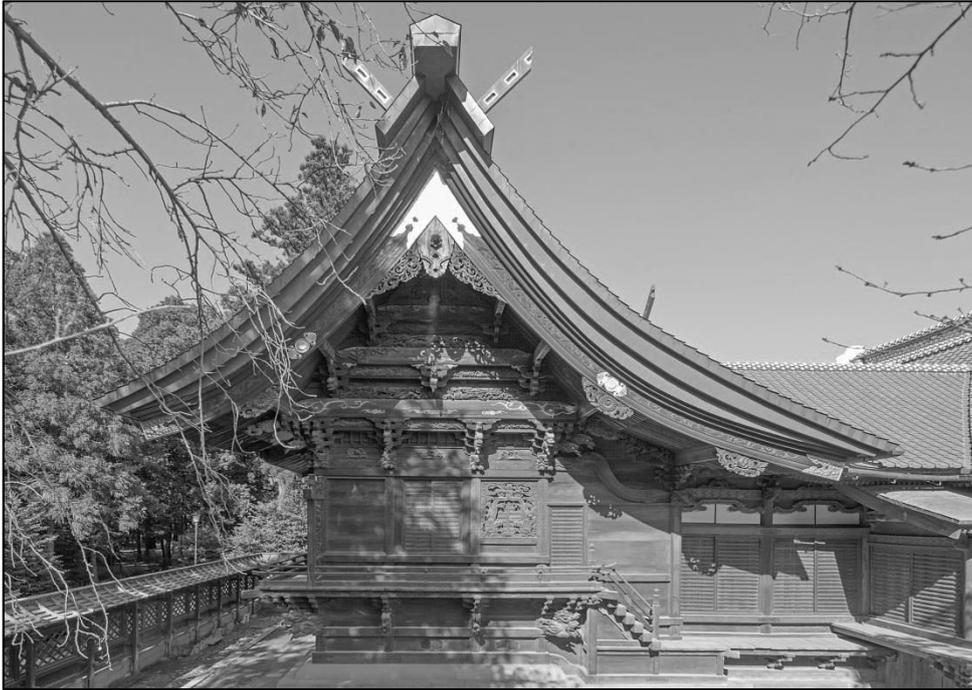
航空写真 2



拝殿・幣殿・本殿 南側側面



拝殿・幣殿・本殿 南西側背側面



本殿 南側側面



拝殿 正面俯瞰



拝殿 東側正面



拝殿 南東側正側面



拝殿 向拝部軒廻り詳細



拝殿 向拝部彫刻詳細



本殿 南西側背側面見上げ詳細



本殿 西側背面



本殿 北西側背側面



本殿 北西側背側面見上げ詳細



本殿 南側螭羽虹梁彫刻詳細



拝殿 内部 1



拜殿 内部 2



拜殿 内部 3



拝殿 内部下拝鏡天井



幣殿 内部



本殿 内陣 1



本殿 内陣 2



本殿 内陣 3



本殿 内陣 4



本殿西側軒唐破風琵琶板彫刻



本殿西側軒唐破風兎毛通し彫刻



本殿腰組持送り霊獣彫刻(龍)



本殿腰組持送り霊獣彫刻(犀)



本殿腰組持送り霊獣彫刻(亀)



本殿腰組持送り霊獣彫刻(山椒魚)



本殿南側花頭窓彫刻(龍)



本殿西側背面大羽目彫刻(仙人の烏鷺)



本殿西側北端部斗拱詳細



本殿西側南端部斗拱詳細



本殿三手先靈獸彫刻



本殿内陣南側面墓股彫刻 1



本殿内陣南側面墓股彫刻 2



本殿内陣東側面墓股彫刻 1



本殿内陣東側面墓股彫刻 2



本殿内陣東側面墓股彫刻 3

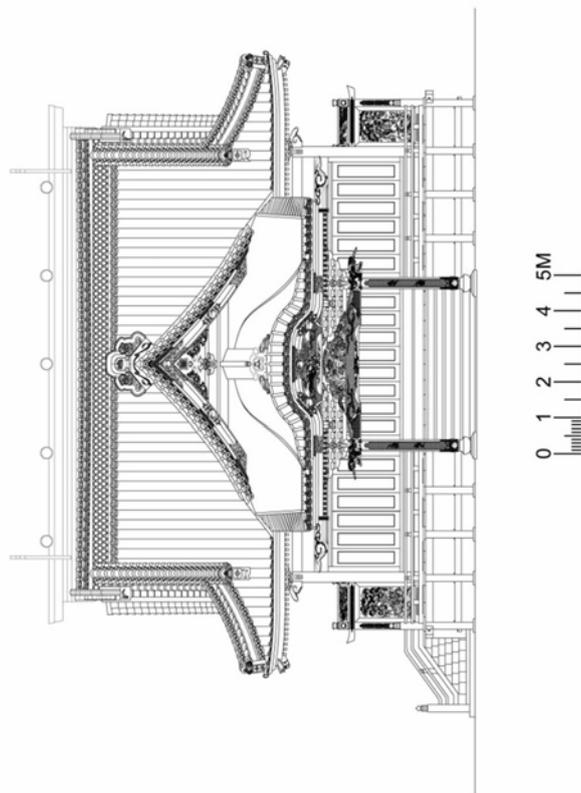


本殿内陣北側面墓股彫刻 1

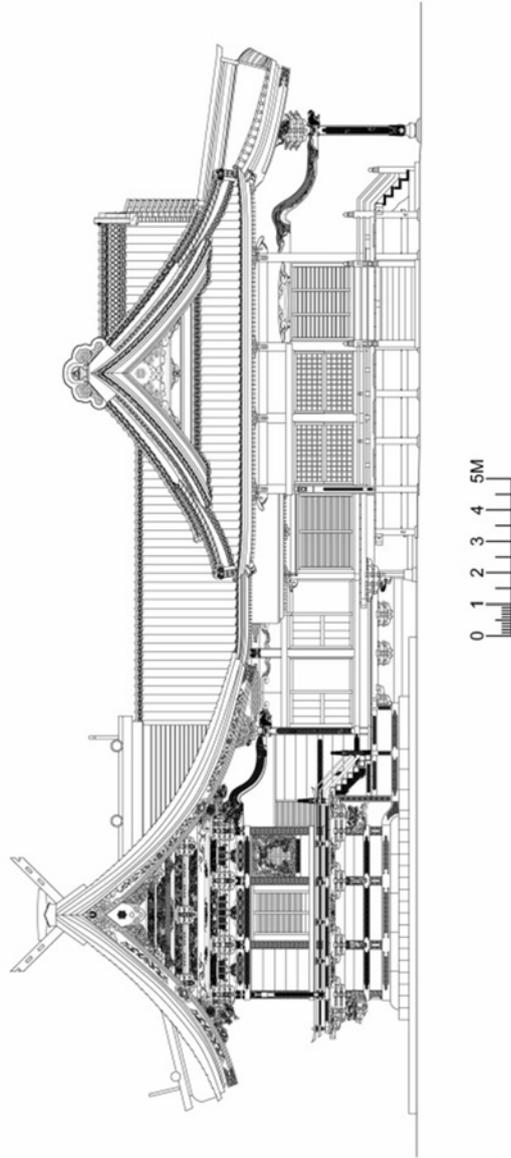


本殿内陣北側面基股彫刻 2

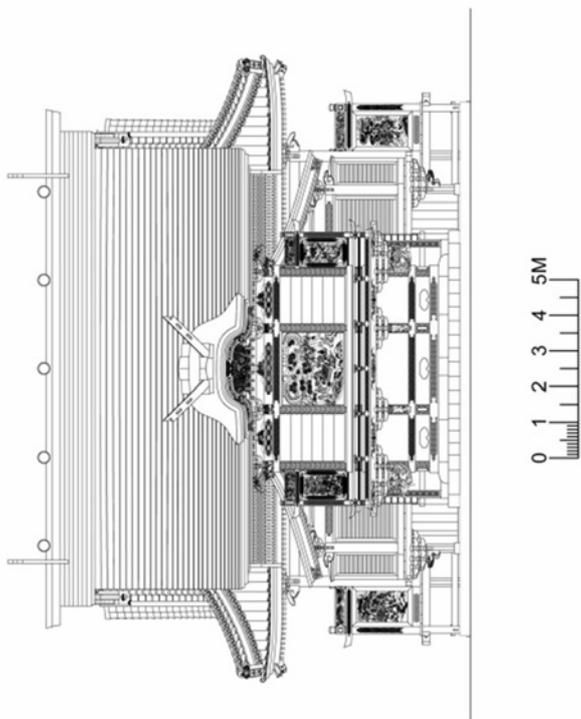




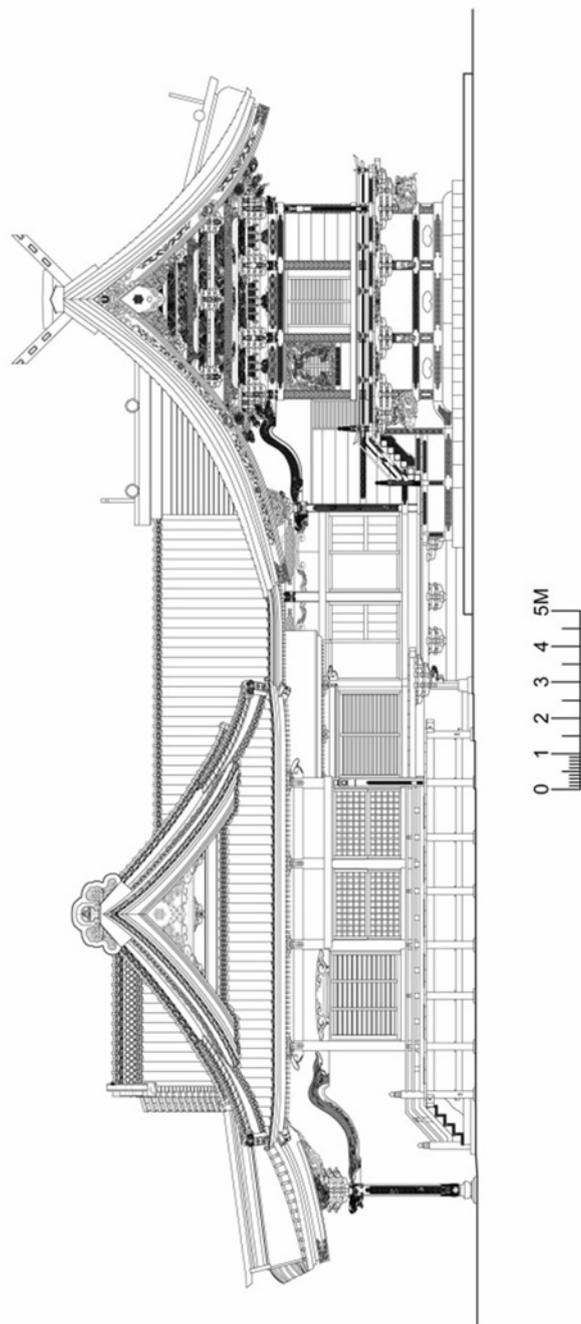
现状東立面图



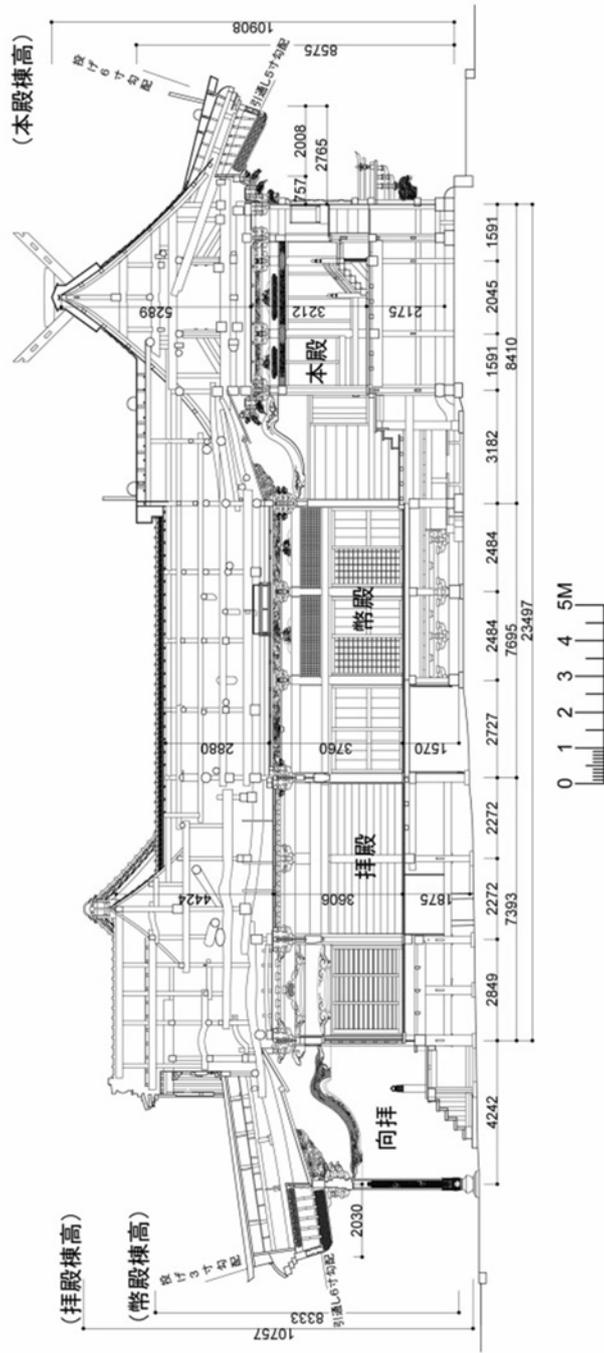
现状南立面图



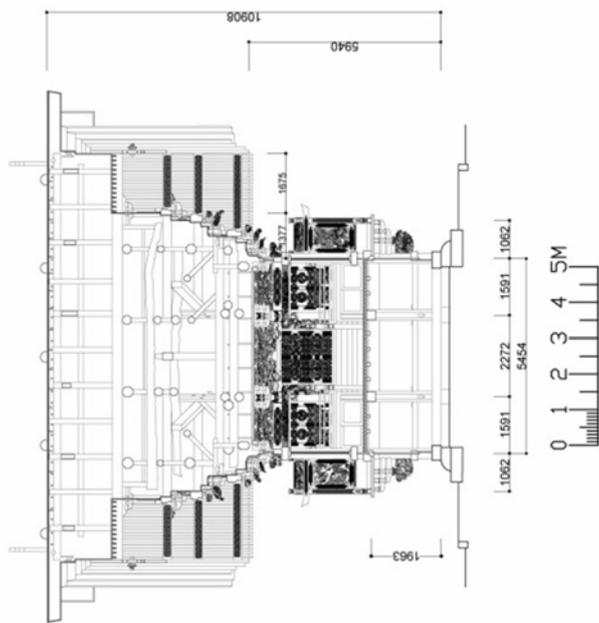
现状西立面图



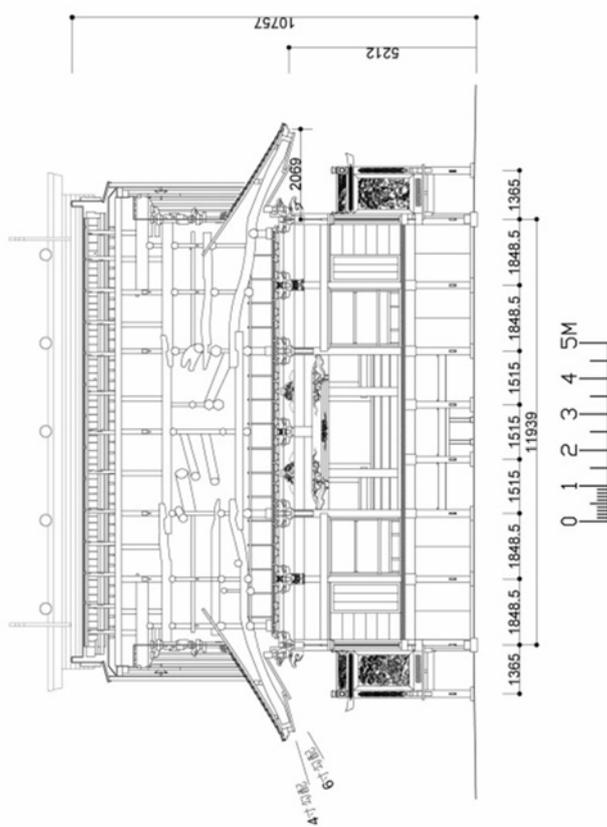
现状北立面图



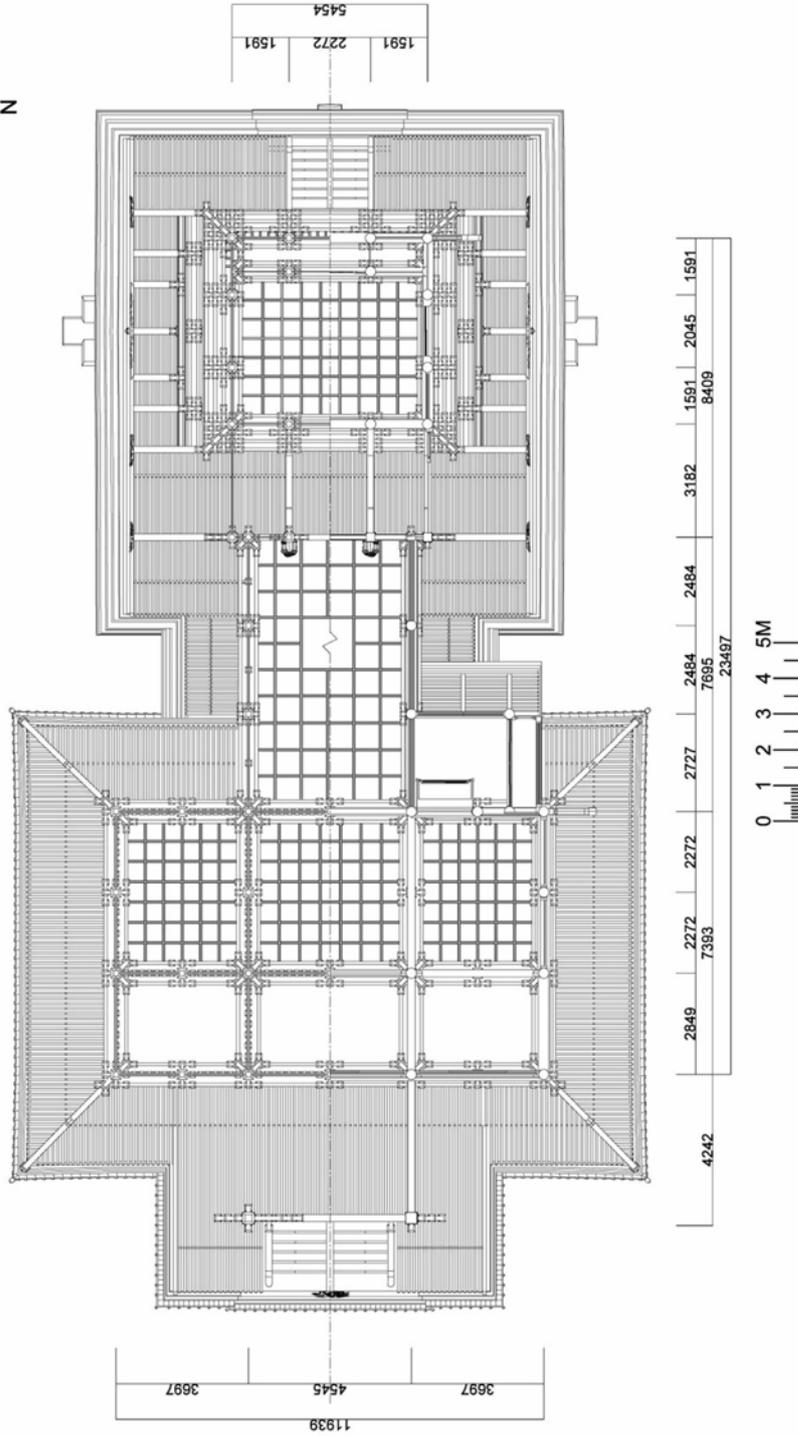
現状梁間断面図



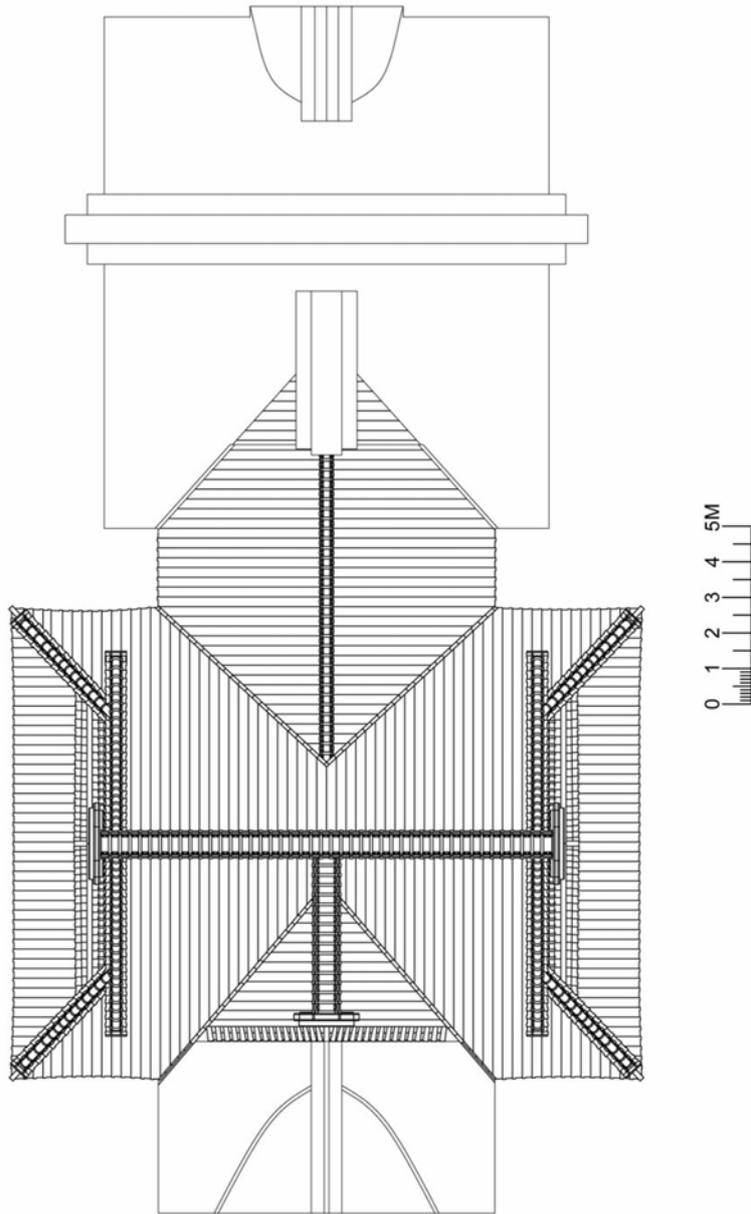
现状本殿桁行断面图



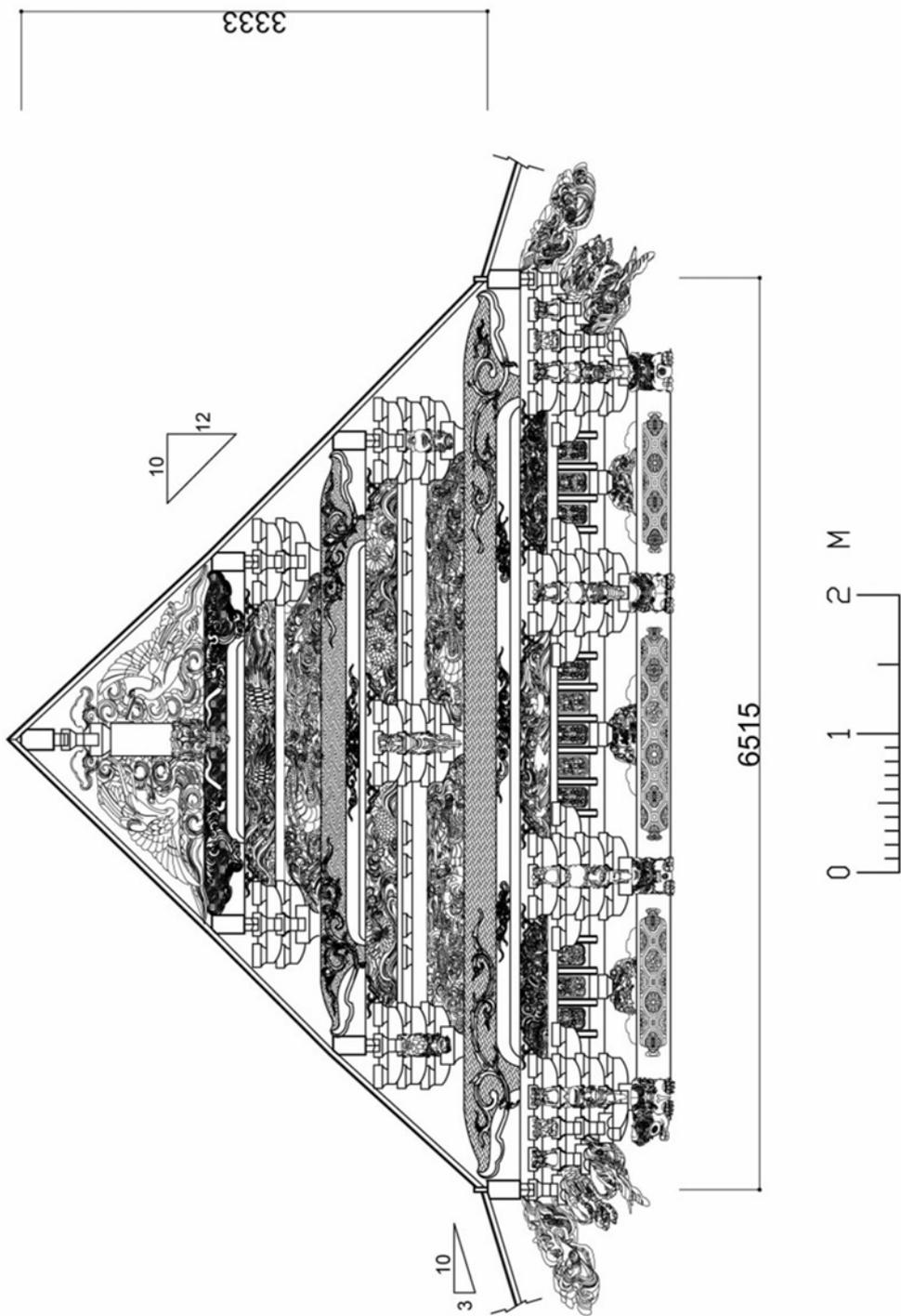
现状拜殿桁行断面图



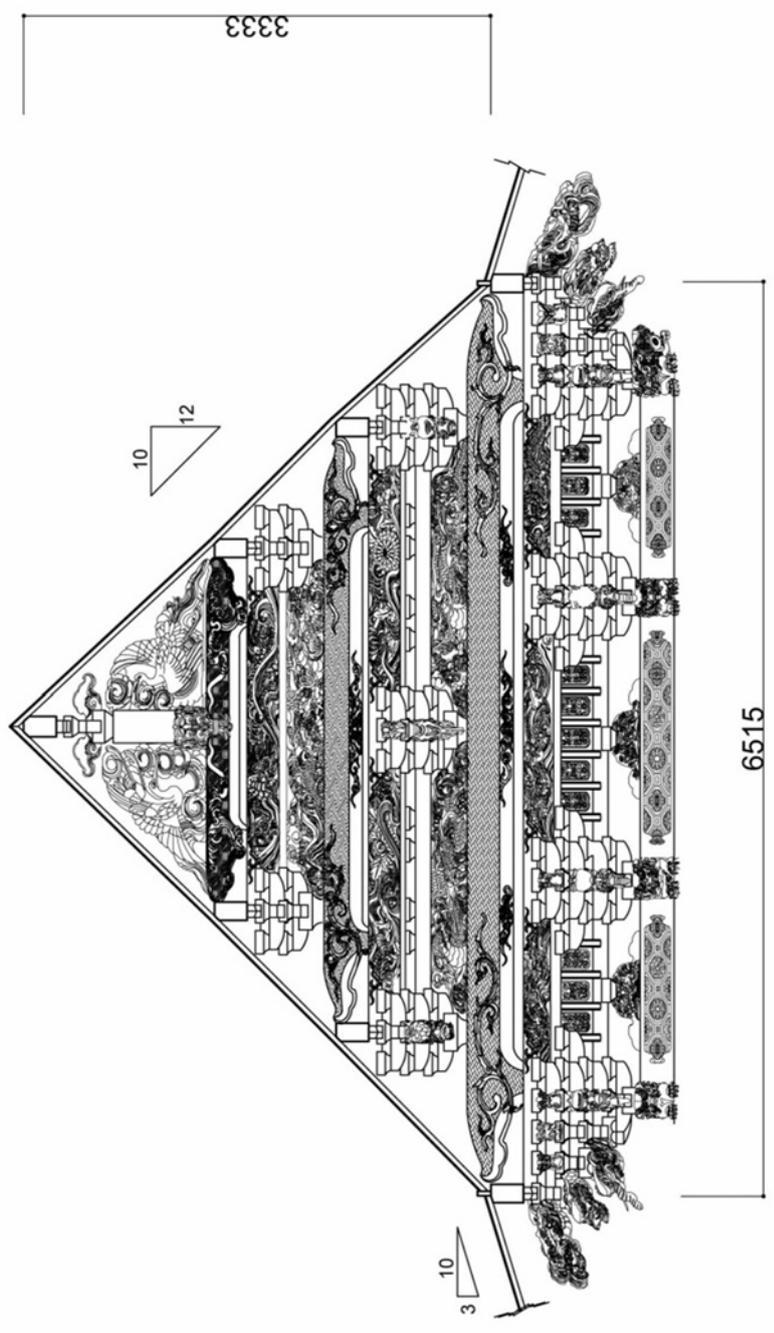
現状天井見上図



现状屋根伏图

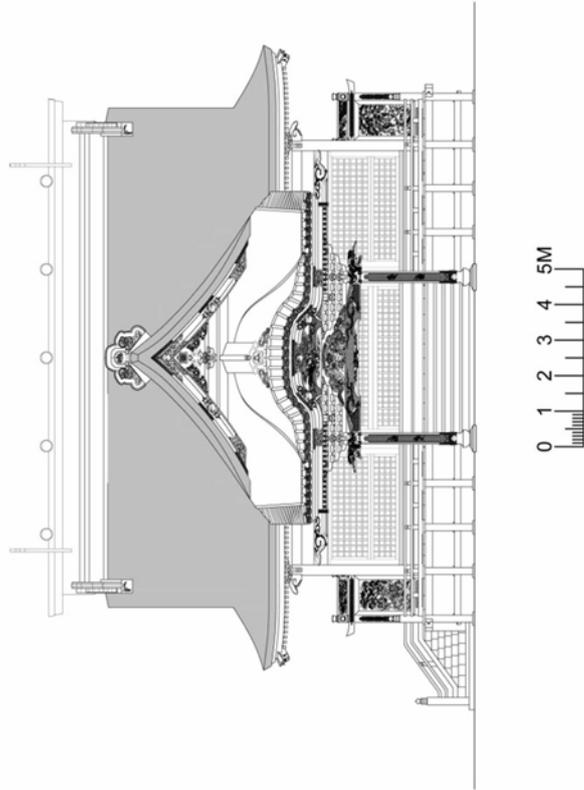


现状本殿南妻壁详细图

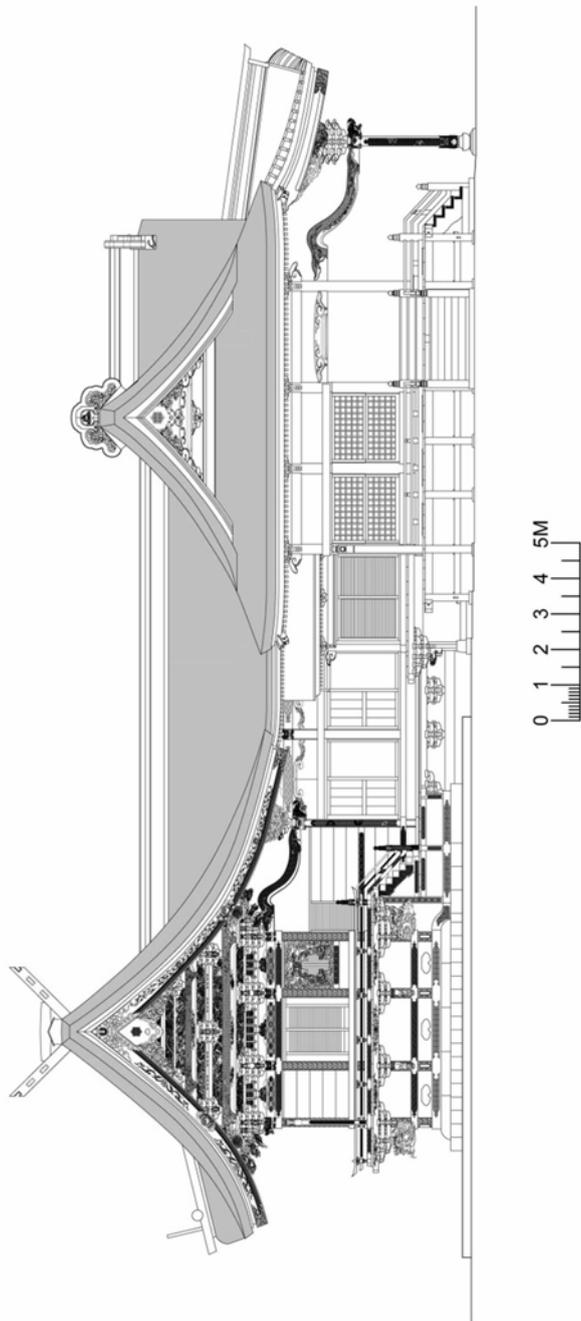


現状本殿北妻壁詳細図

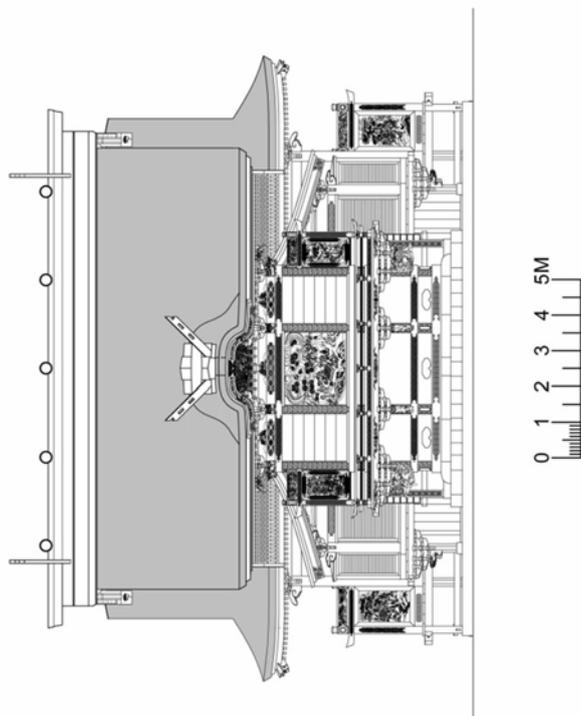




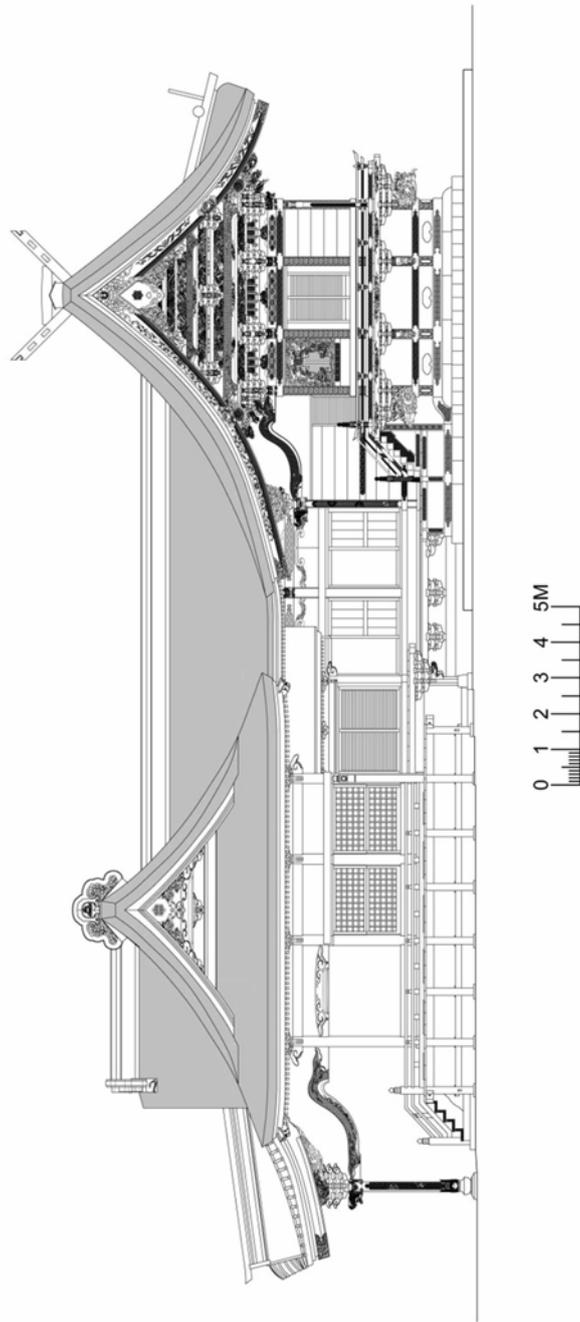
復原東立面圖



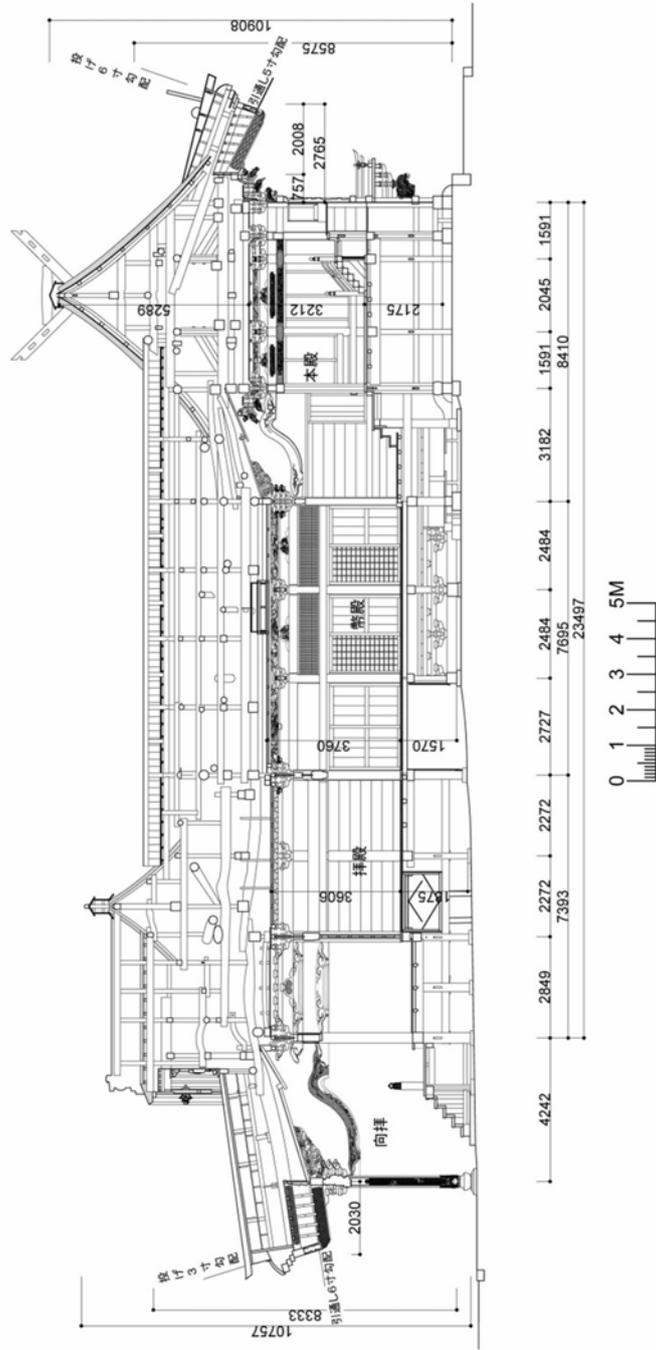
復原南立面圖



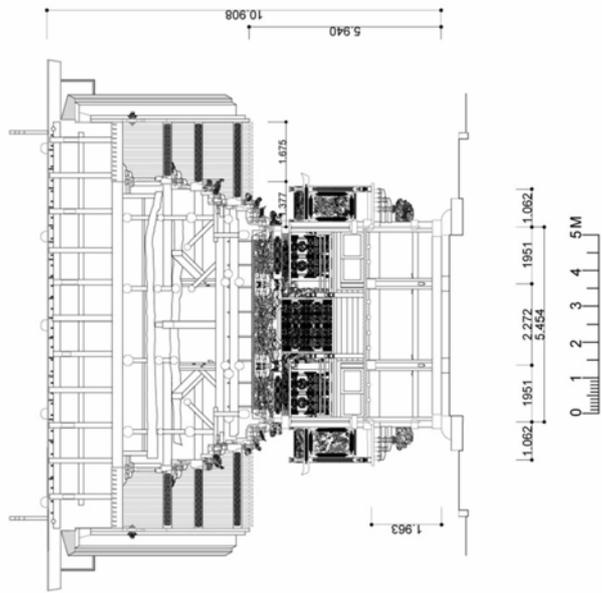
復原西立面圖



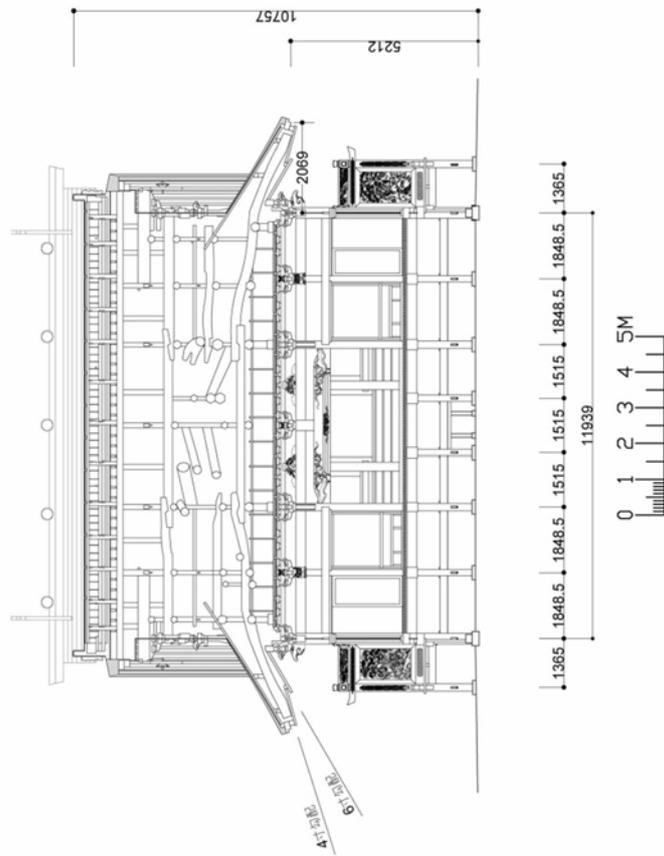
復原北立面圖



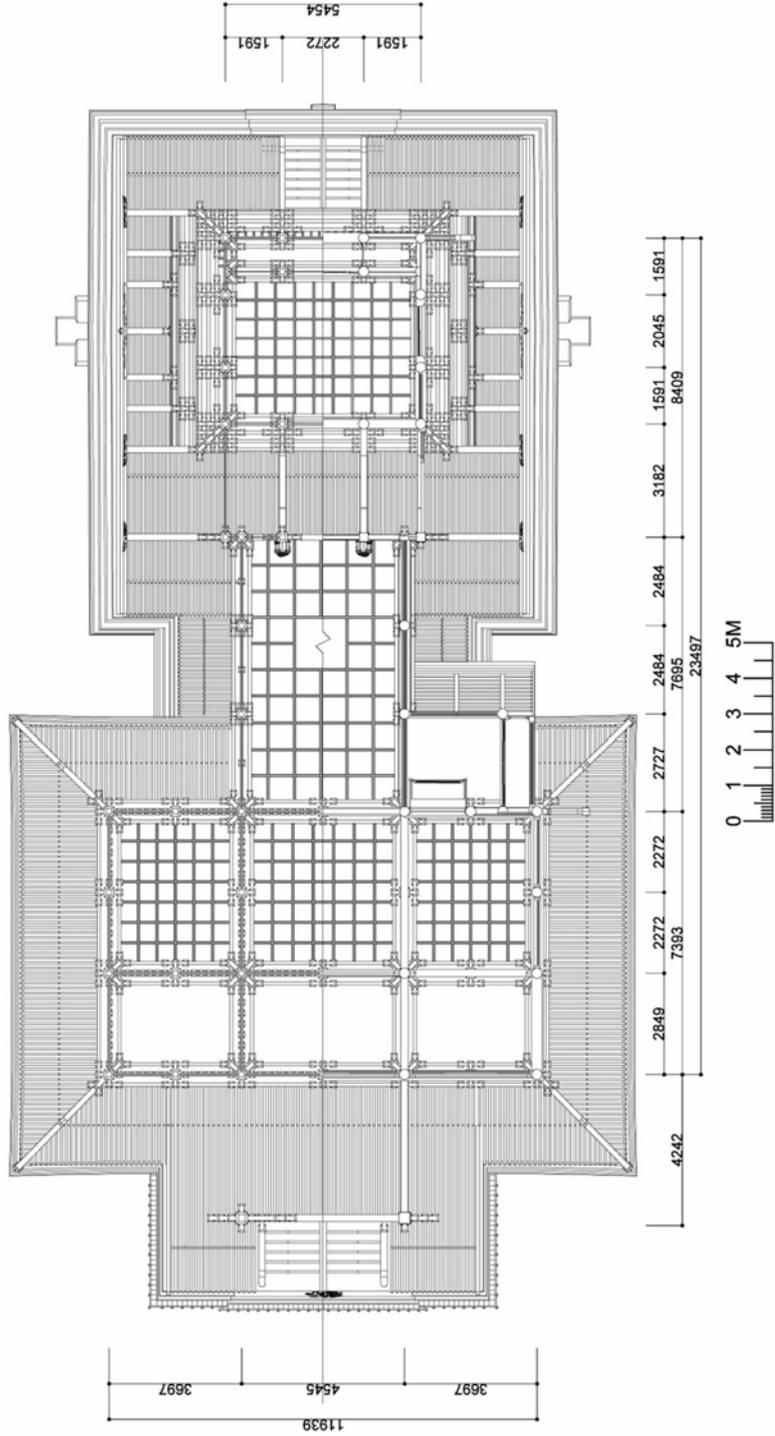
復原梁間断面図



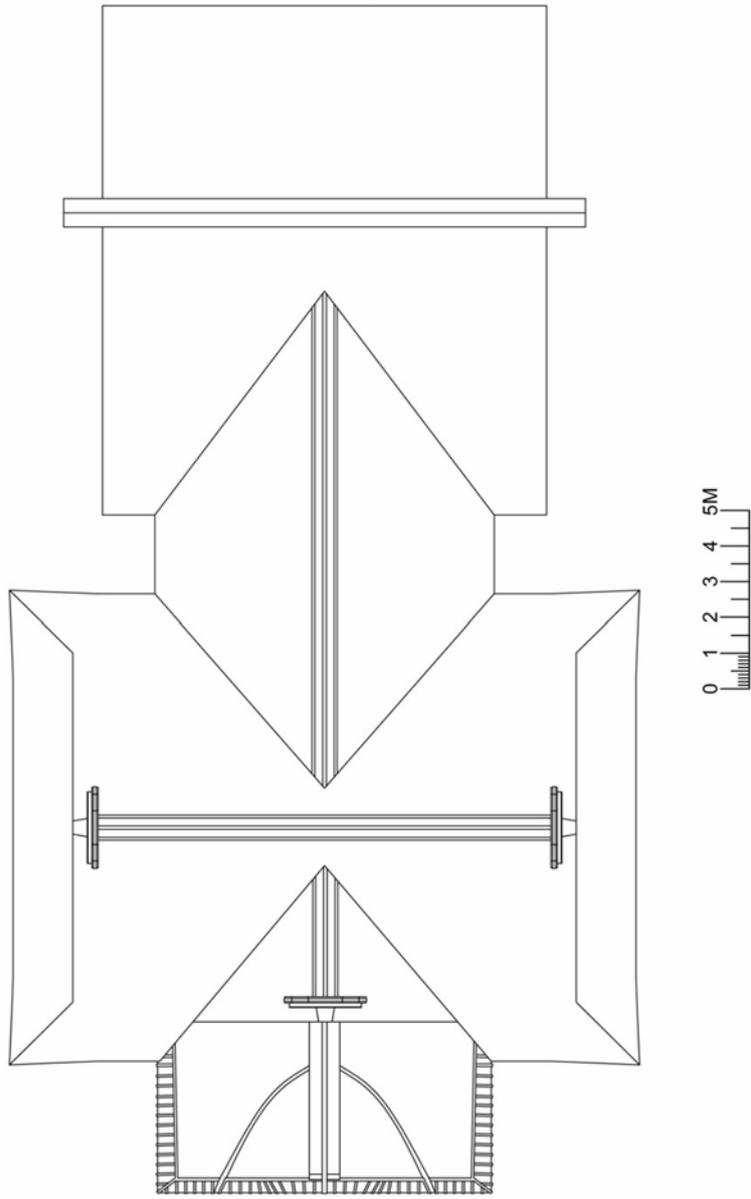
復原本殿桁行斷面圖



復原拜殿桁行斷面圖



復原天井見上図



復原屋根伏圖

